市道松寄下小山線改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

白枝荒神遺跡

1997年3月

出雲市教育委員会

白枝荒神遺跡報告書　正誤表

ページ	正誤箇所　　誤　→　正
例　言	6.　本書はの執筆→本書の執筆
P.33	SD01文章1行め　幅25～30cm→幅110～120cm SD04文章1行め　幅18～45cm→幅60～130cm SD05文章1行め　幅5cm→幅20cm
P.34	SD06文章7行め　幅10～45cm→幅25～160cm 8行め　深さ3～13cm→深さ3～24cm
P.35	SD07文章1行め　幅4～6cm→幅12～25cm
P.37	SD08文章2行め　幅10～21cm→幅45～85cm SD09文章2行め　幅10cm→幅40cm
P.44	第50図1の土器説明に吉備周辺からの搬入品ではと記述したが、その後、大型品土は在地のものではあるが同様なプロポーションで同様な文様構成を持つ壷を2個野遺跡出土資料の中で見つけた。報告はされてないという。
P.68	文章16行め　にぶい橙褐色→にぶい黄橙褐色
P.75	土器群16（第89～91図）→（第88～91図）
P.82	文章4行め　95－7～10→95－6～10
P.14	29－5形態・手法の特徴2行め　沈線文→擬凹線文
P.14	37－1形態・手法の特徴3行め　以下ケズリ→以下ハケ目
P.15	70－2①胎土　角閃→角閃石
P.15	93－8形態・手法の特徴2行め　凹線文→擬凹線文
P.16	119－7出土地点　SK44→SK45
P.17	142－5形態・手法の特徴2行め　による擬凹線文→による8条の擬凹線文
P.20 ～20	第2図　遺構置図→遺構配置図 土層説明　2.灰褐色土層（耕作土）→2.灰褐色土層
P.20	文章下から2行め　低径→底径
P.21	SK01（第13・14）→（第12・13）
P.22	文章6行め　内寄→内湾
P.24	SX02文章3行め　6端黄灰褐色→6淡黄灰褐色
P.25	44－1手法の特徴　内面：ハデ→内面：ハケ
P.25	44－22形態・文様の特徴　下方にと出する→下方に突出する
P.25	45－22器種　分胴形→分銅形

白枝荒神遺跡出土弥生土器

平成5年度調査区土器群18出土状況

平成5年度調査区出土絵画土器

平成5年度調査区出土搬入土器

序

このたび、市道松寄下小山線改良工事に伴う白枝荒神遺跡を調査した結果、全国的にも類例が少ない、サメが描かれたと思われる絵画土器をはじめとし、多数の弥生土器が出土しました。『出雲国風土記』には、周囲が18kmもある「神門水海」があったことが示されていますが、白枝荒神遺跡はこの潟湖の付近に位置していました。こうした位置関係から他地域との交流も盛んであったのでしょうか、今回の発掘調査でそれを裏付ける弥生土器が何点か出土したことは、貴重な成果と言えます。

今後も、地元の皆様の熱意により、後世にこの遺跡を伝え、また、この成果が広く活用されることを期待するとともに、発掘調査にあたり、ご指導、ご協力を賜りました関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

平成9年3月

出雲市教育委員会
教育長　多久　博

例　言

1．本書は、出雲市道路河川課の委託を受けて、出雲市教育委員会が、平成５年度から平成８年度にかけて実施した、市道松寄下小山線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2．本書で扱う遺跡は、白枝荒神遺跡（出雲市遺跡地図H01）である。

3．発掘調査を行った地番は、次のとおりである。

平成５年度　島根県出雲市渡橋町1093番地1外
平成６年度　島根県出雲市白枝町1071番地1外
平成７年度　島根県出雲市天神町112番地3外
平成８年度　島根県出雲市白枝町983番地4外

4．発掘調査を行った期間は、次のとおりである。

平成５年度　平成5年6月1日から平成5年11月30日まで
平成６年度　平成6年12月1日から平成6年12月28日まで
平成７年度　平成7年11月2日から平成8年3月8日まで
平成８年度　平成8年6月11日から平成8年8月8日まで

5．調査組織は、次の通りである。

調査主体	出雲市教育委員会	
事務局	平成５年度	下垣　晴司（文化・スポーツ課長）
	平成６・７年度	野津　建一（文化・スポーツ課長）
	平成８年度	後藤　政司（文化振興課長）
調査指導	平成５～８年度	田中　義昭（島根大学　法文学部　教授）
		広江　耕史（島根県教育委員会　文化財課　主事）
調査担当者	平成５年度	湯村　　功（文化・スポーツ課　主事）
		米田美江子（文化・スポーツ課　調査補助臨時職員）
	平成６・７年度	三原　一将（文化・スポーツ課　主事）
	平成８年度	〃　（文化振興課　主事）

6．本書はの執筆・編集は次のとおりである。

平成５年度調査分　米田美江子（文化振興課　嘱託員）
平成6～8年度調査分　三原　一将（文化振興課　主事）

また、調査全般について、田中義昭（島根大学教授）先生からは、終始、温かいご指導を賜った。

また、川崎地質株式会社　渡邊正巳氏からは玉稿を賜った。記して謝意を表します。

7．発掘調査にあたっては、地元の隣接する土地所有者の方々に、協力を賜った。

8．遺構の略称記号は次のとおりである。

ＳＫ：土坑　　Ｐ：柱穴　　ＳＤ：溝状遺構　　ＳＸ：性格不明遺構

9．本書に使用した方位は、平成５年度調査では磁北、平成６～８年度調査では真北を示す。

10. 石器などの石材鑑定については、山本順三（出雲市教育委員会　文化振興課　副主任学芸員）が行った。

11. 発掘調査及び遺物整理にあたり次の方々に御指導、御協力を賜った。

橋本裕行（橿原考古学研究所）　山口考古学談話会　内田律雄（島根県埋蔵文化財調査センター）
中村唯史（島根大学）

12. 発掘調査、遺物実測、トレース、整理等については、次の方々の協力を得た。

発掘調査　　吾郷　栄、吾郷要子、安食清子、安食　勉、有田松生、岡　省吉、奥田広信、片山　修、嘉藤春江、鐘推蔵吉、川上　茂、小玉　勇、児玉喜美子、佐藤保信、島田幸雄、新森加一、陶山　潤、曽田茂子、竹田登美子、竹田美代子、土江花子、長島忠良、錦織央典、浜村富江、平尾俊幸、藤原光雄、前島正喜、安井賢一郎、矢田たづ子、吉川善美、吉田　進、米山清司

遺物実測　　遠藤正樹、川上　稔、岸　遁三、高橋智也、藤永照隆、松山智弘、石橋弥生、園山　薫、富田裕子、藤江美奈子、渡邊真二、佐藤三鈴、浅田智子、井上喜代女、島根大学大学生：岩田亜希子、片倉愛美、宮崎克美、村田理恵、山内英樹

遺物整理等　　飯國陽子、石川桂子、鵜口令子、遠藤恭子、太田和子、小村睦子、河井栄子、川谷真弓、永田節子、吹野初子、矢田愛子

目　次

序
目次
挿図目次
写真図版目次

第１章　位置と環境 …… （三原　一将） …… 1
第２章　調査の概要 …… （三原　一将） …… 3
第３章　平成５年度調査　（米田美江子）
１．平成５年度の調査概要 …… 5
２．Ⅰ区検出遺構及び出土遺物 …… 19
３．Ⅱ区検出遺構及び出土遺物 …… 84
４．Ⅰ区・Ⅱ区遺構にともなわない出土遺物 …… 112
５．遺物観察表、その他・石器一覧表 …… 139
６．平成５年度調査のまとめ …… 184
７．一考察 …… 191
第４章　平成６年度調査　（三原　一将）
１．平成６年度調査の概要 …… 202
２．遺構と遺物 …… 205
３．遺構外の出土遺物 …… 208
第５章　平成７年度調査　（三原　一将）
１．平成７年度調査の概要 …… 211
２．１区の遺構と遺物 …… 217
３．１区遺構外の出土遺物 …… 220
４．２区の遺構と遺物 …… 221
５．２区遺構外の出土遺物 …… 229
第６章　平成８年度調査　（三原　一将）
１．平成８年度調査の概要 …… 234
２．遺構と遺物 …… 237
３．遺構外の出土遺物 …… 248
平成６～８年度土器観察表 …… 254
平成６～８年度石器観察表 …… 264
第７章　白枝荒神遺跡における花粉、プラント・オパール分析 …… （渡邉　正巳） …… 265
第８章　平成６～８年度調査のまとめ …… （三原　一将） …… 269
図　版

挿 図 目 次

第1図　白枝荒神遺跡と周辺の主要遺跡　2
第2図　調査区配置図　4
平成5年度調査
表1　各杭上の座標一覧表　5
第3図　Ⅰ区遺構配置図　6～8
第4図　Ⅰ区土層断面図　9～10
第5図　Ⅱ区遺構配置図　11～14
第6図　Ⅱ区西土層断面図　15～16
第7図　Ⅱ区東土層断面図　17～18
第8図　ＳＫ01実測図　19
第9図　ＳＫ09実測図　19
第10図　ＳＫ10実測図　20
第11図　ＳＫ10出土遺物実測図　20
第12図　ＳＫ11～16、18、19、21～24実測図　22
第13図　ＳＫ12～15、18出土遺物実測図　23
第14図　ＳＫ19、22、24出土遺物実測図　24
第15図　ＳＫ17実測図　25
第16図　ＳＫ17遺物出土状況図　25
第17図　ＳＫ17出土遺物実測図　26
第18図　ＳＫ20実測図　27
第19図　ＳＫ20出土遺物実測図　27
第20図　ＳＫ25、26、28、31実測図　27
第21図　ＳＫ26出土遺物実測図　28
第22図　ＳＫ28出土遺物実測図　28
第23図　ＳＫ27実測図　28
第24図　ＳＫ27出土遺物実測図　29
第25図　ＳＫ29実測図　30
第26図　ＳＫ29出土遺物実測図　30
第27図　ＳＫ30実測図　31
第28図　ＳＫ30遺物出土状況図　31
第29図　ＳＫ30出土遺物実測図　32
第30図　ＳＤ01実測図　33
第31図　ＳＤ04出土遺物実測図　33
第32図　ＳＤ04実測図　34
第33図　ＳＤ05実測図　34
第34図　ＳＤ06実測図　35
第35図　ＳＤ07実測図　35
第36図　ＳＤ06出土遺物実測図　36
第37図　ＳＤ08出土遺物実測図　37
第38図　ＳＤ08実測図　37
第39図　ＳＤ09実測図　37
第40図　ＳＤ10実測図　38
第41図　ＳＤ10出土石鏃実測図　39
第42図　ＳＤ10遺物出土状況図　39
第43図　ＳＤ10出土遺物実測図1　40
第44図　ＳＤ10出土遺物実測図2　41
第45図　土器群1出土状況図　42
第46図　土器群1出土遺物実測図　42
第47図　土器群2出土状況図　43
第48図　土器群2出土遺物実測図　43
第49図　土器群3出土状況図　43
第50図　土器群3出土遺物実測図1　44
第51図　土器群3出土遺物実測図2　45
第52図　土器群4出土状況図　46
第53図　土器群4出土遺物実測図　46
第54図　土器群5出土状況図1　47
第55図　土器群5出土状況図2　47
第56図　土器群5出土遺物実測図1　48
第57図　土器群5出土遺物実測図2　49
第58図　土器群6出土状況図　50
第59図　土器群6出土遺物実測図　50
第60図　土器群7出土状況図　51
第61図　土器群7出土遺物実測図1　52
第62図　土器群7出土遺物実測図2　53
第63図　土器群8出土状況図　53
第64図　土器群8出土遺物実測図1　54

第65図　土器群 8出土遺物実測図 2　55
第66図　土器群 9出土状況図　56
第67図　土器群 9出土遺物実測図 1　57
第68図　土器群 9出土遺物実測図 2　58
第69図　土器群 9出土遺物実測図 3　59
第70図　土器群 9出土遺物実測図 4　60
第71図　土器群10出土状況図　61
第72図　土器群10出土遺物実測図 1　62
第73図　土器群10出土遺物実測図 2　63
第74図　土器群11出土状況図　64
第75図　土器群11出土遺物実測図　64
第76図　土器群12出土状況図　65
第77図　土器群12出土遺物実測図 1　65
第78図　土器群12出土遺物実測図 2　66
第79図　土器群12出土遺物実測図 3　67
第80図　土器群12出土遺物実測図 4　68
第81図　土器群13出土状況図　69
第82図　土器群13出土遺物実測図　70
第83図　土器群14出土状況図　71
第84図　土器群14出土遺物実測図 1　72
第85図　土器群14出土遺物実測図 2　73
第86図　土器群15出土状況図　74
第87図　土器群15出土遺物実測図　74
第88図　土器群16出土状況図　75
第89図　土器群16出土黒曜石実測図　75
第90図　土器群16出土遺物実測図 1　76
第91図　土器群16出土遺物実測図 2　77
第92図　土器群17出土状況図　78
第93図　土器群17出土遺物実測図 1　79
第94図　土器群17出土遺物実測図 2　80
第95図　土器群17出土遺物実測図 3　81
第96図　土器群17出土遺物実測図 4　82
第97図　土器群17出土遺物実測図 5　83
第98図　ＳＫ05出土古銭拓影　84
第99図　ＳＫ32実測図及び遺物出土状況図　85
第100図　ＳＫ32出土遺物実測図　85
第101図　ＳＫ33実測図及び遺物出土状況図　86
第102図　ＳＫ33出土遺物実測図　87
第103図　ＳＫ34、35遺物出土状況実測図　88
第104図　ＳＫ36実測図　89
第105図　ＳＫ37遺物出土状況実測図　89
第106図　ＳＫ34～37出土遺物実測図　90
第107図　ＳＫ38実測図　91
第108図　ＳＫ38遺物出土状況図　91
第109図　ＳＫ38出土遺物実測図　92
第110図　ＳＫ39遺物出土状況実測図　93
第111図　ＳＫ40遺物出土状況実測図　93
第112図　ＳＫ39、40出土遺物実測図　94
第113図　ＳＫ41、42、49実測図　95
第114図　ＳＫ43遺物出土状況実測図　95
第115図　ＳＫ44実測図及び遺物出土状況図　96
第116図　ＳＫ45遺物出土状況実測図　96
第117図　ＳＫ46遺物出土状況実測図　97
第118図　ＳＫ47実測図　97
第119図　ＳＫ41～48出土遺物実測図　98
第120図　ＳＫ48実測図　99
第121図　ＳＤ02出土遺物実測図及び拓影　99
第122図　ＳＤ11遺物出土状況実測図　100
第123図　ＳＤ12、13実測図　101
第124図　ＳＤ14、15遺物出土状況実測図　102
第125図　ＳＤ14出土遺物実測図　103
第126図　ＳＤ11、13、14、16出土遺物実測図　104
第127図　ＳＤ16遺物出土状況実測図　105
第128図　ＳＤ17実測図　106

第129図　土器群18出土状況図　106
第130図　土器群18出土遺物実測図1　107
第131図　土器群18出土遺物実測図2　108
第132図　土器群18出土遺物実測図3　109
第133図　土器群18出土遺物実測図4　110
第134図　I区遺構外出土遺物実測図1　113
第135図　I区遺構外出土遺物実測図2　114
第136図　I区遺構外出土遺物実測図3　115
第137図　I区遺構外出土遺物実測図4　116
第138図　I区遺構外出土遺物実測図5　117
第139図　I区遺構外出土遺物実測図6　118
第140図　I区遺構外出土遺物実測図7　119
第141図　I区遺構外出土遺物実測図8　120
第142図　I区遺構外出土遺物実測図9　121
第143図　I区遺構外出土遺物実測図10　122
第144図　I区遺構外出土遺物実測図11　123
第145図　I区遺構外出土遺物実測図12　124
第146図　I区遺構外出土遺物実測図13　125
第147図　I区遺構外出土遺物実測図14　126
第148図　I区遺構外出土遺物実測図15　127
第149図　I区遺構外出土遺物実測図16　128
第150図　I区遺構外出土遺物実測図17　129
第151図　I区遺構外出土遺物実測図18　130
第152図　I区遺構外出土遺物実測図19　131
第153図　I区遺構外出土遺物実測図20　132
第154図　I区遺構外出土遺物実測図及び拓影21　133
第155図　土器群20出土遺物実測図　133
第156図　土器群20、21出土遺物実測図　134
第157図　II区遺構外出土遺物実測図1　135
第158図　II区遺構外出土遺物実測図2　136
第159図　II区遺構外出土遺物実測図3　137
第160図　II区遺構外出土遺物実測図4　138
第161図　II区遺構外出土遺物実測図及び拓影5　139
第162図　白枝荒神遺跡遺物変遷図1　187
第163図　白枝荒神遺跡遺物変遷図2　188
第164図　白枝荒神遺跡遺物変遷図3　189
第165図　白枝荒神遺跡出土絵画土器　191
第166図　白枝荒神遺跡出土スタンプ文土器　193
第167図　スタンプ文土器出土分布図　193
第168図　白枝荒神遺跡、西谷3号墓、矢野遺跡出土特殊土器　195
表2　編年対応表　196
第169図　西部瀬戸内系複合口縁壺、北部九州系壺出土分布図　197～198

平成6年度調査

第1図　平成6年度調査区位置図　202
第2図　平成6年度調査区遺構配置図　203～204
第3図　SK01実測図　205
第4図　SK02・03・04実測図　206
第5図　SD04実測図　207
第6図　第3層出土弥生土器実測図　209
第7図　第3層出土須恵器実測図　210
第8図　第2層，第3層出土石器実測図　210

平成7年度調査

第9図　平成7年度調査区位置図　211
第10図　平成7年度1区遺構配置図　213～214
第11図　平成7年度2区遺構配置図　215～216
第12図　1区SK01実測図　217
第13図　1区SK01出土弥生土器実測図　217
第14図　1区SK02・03実測図　217
第15図　1区SD01実測図　218
第16図　1区SD01出土弥生土器実測図　218
第17図　1区P7・9実測図　219
第18図　1区P14・15実測図　219
第19図　1区P14出土弥生土器実測図　219
第20図　1区遺構外出土弥生土器実測図　220

第21図　2区SK01実測図　221
第22図　2区SK02実測図　221
第23図　2区SK02出土弥生土器実測図　222
第24図　2区SK04実測図　223
第25図　2区SK04出土弥生土器実測図　223
第26図　2区SK05実測図　224
第27図　2区SK05出土弥生土器実測図　224
第28図　2区SK05出土土師器実測図　225
第29図　2区SK06実測図　225
第30図　2区SK06出土弥生土器実測図　225
第31図　2区SK07実測図　225
第32図　2区SK07出土弥生土器実測図　225
第33図　2区SK07出土石器実測図　226
第34図　2区SK08実測図　227
第35図　2区SK08出土弥生土器実測図　227
第36図　2区SK09実測図　227
第37図　2区SK09出土弥生土器実測図　227
第38図　2区SK10出土弥生土器実測図　228
第39図　2区P 3出土弥生土器実測図　228
第40図　2区P 5出土弥生土器実測図　228
第41図　2区P 8出土弥生土器実測図　228
第42図　2区P15出土弥生土器実測図　228
第43図　2区遺構外出土弥生土器実測図1　230
第44図　2区遺構外出土弥生土器実測図2　231
第45図　2区遺構外出土弥生土器実測図3　232
第46図　2区遺構外出土土師器・陶磁器実測図　233
第47図　2区遺構外出土石器実測図　233

平成8年度調査

第48図　平成8年度調査区位置図　234
第49図　平成8年度調査区遺構配置図　235～236
第50図　SK01出土弥生土器実測図　237
第51図　SK02平面プラン実測図　237
第52図　SK02実測図　237
第53図　SK02出土弥生土器実測図　238
第54図　SK02出土石器実測図　238
第55図　SK03出土弥生土器実測図　239
第56図　SK04・05実測図　239
第57図　SX02実測図　240
第58図　SX02出土弥生土器実測図　241
第59図　P3実測図　241
第60図　P3出土弥生土器実測図　242
第61図　SD01・02実測図　243
第62図　SD02出土弥生土器実測図　243
第63図　SD03～06実測図　244
第64図　SD03～06断面実測図　245
第65図　SD04出土弥生土器実測図　245
第66図　SD05出土弥生土器実測図　245
第67図　SD06出土弥生土器実測図　246
第68図　SD06出土石器実測図　246
第69図　P1出土石器実測図　247
第70図　遺構外出土弥生土器実測図1　249
第71図　遺構外出土弥生土器実測図2　250
第72図　遺構外出土弥生土器実測図3　251
第73図　遺構外出土須恵器実測図　251
第74図　遺構外出土石器実測図1　252
第75図　遺構外出土石器実測図2　253

写真図版 目 次

平成5年度調査区

図版1－1　I区検出遺構
　　－2　土器群1出土状況
　　－3　土器群5出土状況
図版2－1　土器群5上位出土状況
　　－2　土器群5下位出土状況
　　－3　土器群7出土状況
図版3－1　土器群7出土状況（近景）
　　－2　土器群7出土状況（近景）
　　－3　土器群9出土状況
図版4－1　土器群9出土状況
　　－2　土器群9出土状況（近景）
　　－3　土器群10出土状況
図版5－1　土器群12出土状況
　　－2　土器群17出土状況
　　－3　土器群17出土状況（近景）
図版6－1　土器群20出土状況
　　－2　土器群21出土状況
　　－3　II区調査風景
図版7－1　SK32
　　－2　SK33
　　－3　SK38
図版8－1　土器群18
　　－2　土器群18（近景）
　　－3　SD14・15
図版9－1　SK10出土遺物
　　－2　SK18・19出土遺物
図版10－1　SK12～15出土遺物
　　－2　SK22・24出土遺物
図版11－1　SK17出土遺物（1）
　　－2　SK17出土遺物（2）
　　－3　SK17出土遺物（3）
図版12－1　SK27出土遺物（1）
図版12－2　SK27出土遺物（2）
　　－3　SK27出土遺物（3）
図版13－1　SK27出土遺物（4）
　　－2　SK20・26・28出土遺物
図版14－1　SK29出土遺物
　　－2　SK30出土遺物（1）
　　－3　SK30出土遺物（2）
図版15－1　SD04・06出土遺物
　　－2　SD06出土遺物
図版16－1　SD08・10出土遺物（1）
　　－2　SD10出土遺物（2）
　　－3　SD10出土遺物（3）
　　－4　SD10出土遺物（4）
　　－5　SD10出土遺物（5）
図版17－1　SD10出土遺物（6）
　　－2　SD10出土遺物（7）
図版18－1　土器群1出土遺物（1）
　　－2　土器群1出土遺物（2）
　　－3　土器群1・2出土遺物（3）
　　－4　土器群3出土遺物（1）
図版19－1　土器群3出土遺物（2）
　　－2　土器群3出土遺物（3）
　　－3　土器群3出土遺物（4）
　　－4　土器群4出土遺物（1）
　　－5　土器群4出土遺物（2）
図版20－1　土器群5出土遺物（1）
　　－2　土器群5出土遺物（2）
　　－3　土器群5出土遺物（3）
　　－4　土器群5出土遺物（4）
　　－5　土器群5出土遺物（5）
図版21－1　土器群5出土遺物（6）
　　－2　土器群6出土遺物（1）
　　－3　土器群6出土遺物（2）

図版22－1　土器群6出土遺物（3）
－2　土器群7出土遺物（1）
－3　土器群7出土遺物（2）
図版23－1　土器群7出土遺物（3）
－2　土器群7出土遺物（4）
－3　土器群7出土遺物（5）
図版24－1　土器群8出土遺物（1）
－2　土器群8出土遺物（2）
－3　土器群8出土遺物（3）
図版25－1　土器群8出土遺物（4）
－2　土器群9出土遺物（1）
図版26－1　土器群9出土遺物（2）
－2　土器群9出土遺物（3）
－3　土器群9出土遺物（4）
－4　土器群9出土遺物（5）
－5　土器群9出土遺物（6）
図版27－1　土器群9出土遺物（7）
－2　土器群9出土遺物（8）
－3　土器群9出土遺物（9）
図版28－1　土器群9出土遺物（10）
－2　土器群9出土遺物（11）
－3　土器群9出土遺物（12）
図版29－1　土器群10出土遺物（1）
－2　土器群10出土遺物（2）
－3　土器群10出土遺物（3）
－4　土器群10出土遺物（4）
－5　土器群10出土遺物（5）
図版30－1　土器群11出土遺物（1）
－2　土器群11出土遺物（2）
図版31－1　土器群12出土遺物（1）
－2　土器群12出土遺物（2）
図版32－1　土器群12出土遺物（3）
－2　土器群12出土遺物（4）
－3　土器群12出土遺物（5）
－4　土器群12出土遺物（6）
図版33－1　土器群12出土遺物（7）
図版33－2　土器群12出土遺物（8）
－3　土器群13出土遺物（1）
図版34－1　土器群13出土遺物（2）
－2　土器群13出土遺物（3）
－3　土器群14出土遺物（1）
図版35－1　土器群14出土遺物（2）
－2　土器群14出土遺物（3）
図版36－1　土器群14出土遺物（4）
－2　土器群14出土遺物（5）
図版37－1　土器群15出土遺物（1）
－2　土器群15出土遺物（2）
－3　土器群16出土遺物（1）
－4　土器群16出土遺物（2）
図版38－1　土器群16出土遺物（3）
－2　土器群16出土遺物（4）
図版39－1　土器群16出土遺物（5）
－2　土器群16出土遺物（6）
－3　土器群17出土遺物（1）
－4　土器群17出土遺物（2）
図版40－1　土器群17出土遺物（3）
－2　土器群17出土遺物（4）
－3　土器群17出土遺物（5）
図版41－1　土器群17出土遺物（6）
－2　土器群17出土遺物（7）
－3　土器群17出土遺物（8）
図版42－1　土器群17出土遺物（9）
－2　土器群17出土遺物（10）
－3　土器群17出土遺物（11）
図版43－1　土器群17出土遺物（12）
－2　土器群17出土遺物（13）
－3　土器群17出土遺物（14）
－4　土器群17出土遺物（15）
図版44－1　ＳＫ05出土古銭
－2　ＳＫ32出土遺物
－3　ＳＫ33出土遺物（1）
－4　ＳＫ33出土遺物（2）

図版45－1　ＳＫ33出土遺物（３）
－２　ＳＫ33出土遺物（４）
－３　ＳＫ34～37出土遺物
図版46－1　ＳＫ38出土遺物（１）
－２　ＳＫ38出土遺物（２）
－３　ＳＫ38出土遺物（３）
－４　ＳＫ38出土遺物（４）
－５　ＳＫ39出土遺物（１）
－６　ＳＫ39出土遺物（２）
図版47－1　ＳＫ40出土遺物
－２　ＳＫ41～45出土遺物
図版48－1　ＳＫ44出土遺物
－２　ＳＫ48出土遺物
－３　ＳＫ46～48出土遺物
－４　ＳＤ02出土古銭
－５　ＳＤ02出土遺物
－６　ＳＤ11出土遺物
図版49－1　ＳＤ14出土遺物（１）
－２　ＳＤ14出土遺物（２）
－３　ＳＤ14出土遺物（３）
図版50－1　ＳＤ13・14・16出土遺物
－２　土器群18出土遺物（１）
－３　土器群18出土遺物（２）
－４　土器群18出土遺物（３）
図版51－1　土器群18出土遺物（４）
－２　土器群18出土遺物（５）
－３　土器群18出土遺物（６）
－４　土器群18出土遺物（７）
図版52－1　土器群18出土遺物（８）
－２　土器群18出土遺物（９）
－３　土器群18出土遺物（10）
－４　土器群18出土遺物（11）
図版53－1　Ⅰ区遺構外出土遺物（１）
－２　Ⅰ区遺構外出土遺物（２）
図版54－1　Ⅰ区遺構外出土遺物（３）
図版54－２　Ⅰ区遺構外出土遺物（４）
－３　Ⅰ区遺構外出土遺物（５）
図版55－1　Ⅰ区遺構外出土遺物（６）
－２　Ⅰ区遺構外出土遺物（７）
－３　Ⅰ区遺構外出土遺物（８）
－４　Ⅰ区遺構外出土遺物（９）
図版56－1　Ⅰ区遺構外出土遺物（10）
－２　Ⅰ区遺構外出土遺物（11）
－３　Ⅰ区遺構外出土遺物（12）
図版57－1　Ⅰ区遺構外出土遺物（13）
－２　Ⅰ区遺構外出土遺物（14）
図版58－1　Ⅰ区遺構外出土遺物（15）
－２　Ⅰ区遺構外出土遺物（16）
－３　Ⅰ区遺構外出土遺物（17）
－４　Ⅰ区遺構外出土遺物（18）
図版59－1　Ⅰ区遺構外出土遺物（19）
－２　Ⅰ区遺構外出土遺物（20）
－３　Ⅰ区遺構外出土遺物（21）
図版60－1　Ⅰ区遺構外出土遺物（22）
－２　Ⅰ区遺構外出土遺物（23）
－３　Ⅰ区遺構外出土遺物（24）
図版61－1　Ⅰ区遺構外出土遺物（25）
－２　Ⅰ区遺構外出土遺物（26）
－３　Ⅰ区遺構外出土遺物（27）
図版62－1　Ⅰ区遺構外出土遺物（28）
－２　Ⅰ区遺構外出土遺物（29）
－３　Ⅰ区遺構外出土遺物（30）
図版63－1　Ⅰ区遺構外出土遺物（31）
－２　Ⅰ区遺構外出土遺物（32）
－３　Ⅰ区遺構外出土遺物（33）
－４　Ⅰ区遺構外出土遺物（34）
－５　Ⅰ区遺構外出土遺物（35）
図版64－1　Ⅰ区遺構外出土遺物（36）
図版65－1　Ⅰ区遺構外出土遺物（37）
－２　Ⅰ区遺構外出土遺物（38）

図版65－3　Ⅰ区遺構外出土遺物（39）
－4　Ⅰ区遺構外出土遺物（40）
－5　Ⅰ区遺構外出土遺物（41）
－6　Ⅰ区遺構外出土遺物（42）
図版66－1　Ⅰ区遺構外出土遺物（43）
－2　Ⅰ区遺構外出土遺物（44）
－3　Ⅰ区遺構外出土遺物（45）
－4　Ⅰ区遺構外出土遺物（46）
図版67－1　Ⅰ区遺構外出土遺物（47）
－2　Ⅰ区遺構外出土遺物（48）
－3　Ⅰ区遺構外出土遺物（49）
－4　Ⅰ区遺構外出土遺物（50）
図版68－1　Ⅰ区遺構外出土遺物（51）
－2　Ⅰ区遺構外出土遺物（52）
－3　Ⅰ区遺構外出土古銭
－4　Ⅰ区遺構外出土遺物（53）
－5　土器群20出土遺物（1）
－6　土器群20・21出土遺物（2）
－7　土器群21出土遺物（3）
図版69－1　土器群20出土遺物（4）
－2　土器群21出土遺物（5）
－3　Ⅱ区遺構外出土遺物（1）
－4　Ⅱ区遺構外出土遺物（2）
図版70－1　Ⅱ区遺構外出土遺物（3）
－2　Ⅱ区遺構外出土遺物（4）
－3　Ⅱ区遺構外出土遺物（5）
図版71－1　Ⅱ区遺構外出土遺物（6）
－2　Ⅱ区遺構外出土遺物（7）
－3　Ⅱ区遺構外出土遺物（8）
－4　Ⅱ区遺構外出土遺物（9）
－5　Ⅱ区遺構外出土遺物（10）
－6　Ⅱ区遺構外出土遺物（11）
図版72－1　Ⅱ区遺構外出土遺物（12）
－2　Ⅱ区遺構外出土遺物（13）
－3　Ⅱ区遺構外出土遺物（14）
図版72－4　Ⅱ区遺構外出土遺物（15）
－5　Ⅱ区遺構外出土古銭
－6　白枝荒神遺跡出土古銭一括

平成6年度調査区

図版73－1　調査風景(南西から)
－2　SK01検出状況（北西から）
－3　SK01完掘状況（北西から）
図版74－1　SK02検出状況（北西から）
－2　SK03・04, SD04・06検出状況（南東から）
－3　SK02, SD01～03完掘状況（北東から）
図版75－1　第3層出土弥生土器
－2　第3層出土弥生土器
－3　第3層出土須恵器, 第2層・第3層出土石器

平成7年度調査1区

図版76－1　調査風景（南西から）
－2　SK01遺物出土状況（北東から）
－3　SK02・03, SD01検出状況（南東から）
図版77－1　SK02・03, SD01完掘状況（南東から）
－2　P7～13完掘状況（南東から）
－3　P14検出状況（北西から）
図版78－1　P15検出状況（南西から）
－2　土層堆積状況（西から）
－3　出土弥生土器

平成7年度調査2区

図版79－1　遺構完掘状況全景（北東から）
－2　SK01土層堆積状況（南西から）
－3　SK02遺物出土状況（北西から）
図版80－1　SK01・02完掘状況（北西から）
－2　SK04～09配置状況（南から）
－3　SK04遺物出土状況（北西から）

図版81－1　ＳＫ04完掘状況（北西から）
－2　ＳＫ05検出状況（南東から）
－3　ＳＫ05完掘状況（東から）
図版82－1　ＳＫ07検出状況（南西から）
－2　ＳＫ07遺物出土状況（南西から）
－3　ＳＫ07完掘状況（南西から）
図版83－1　ＳＫ08調査状況（東から）
－2　ＳＫ09完掘状況（南から）
－3　土師器出土状況（南西から）
図版84－1　土層堆積状況（西から）
－2　土層堆積状況（北西から）
図版85－1　ＳＫ02出土弥生土器
－2　ＳＫ04出土弥生土器
－3　ＳＫ05出土弥生土器，土師器
図版86－1　ＳＫ06～10出土弥生土器
－2　ＳＫ07出土石器
－3　Ｐ3・5・8・15出土弥生土器
図版87－1　遺構外出土弥生土器
－2　遺構外出土弥生土器
－3　遺構外出土弥生土器
図版88－1　遺構外出土土師器，陶磁器
－2　遺構外出土土師器
－3　遺構外出土石器
平成８年度調査区
図版89－1　調査風景（南西から）
－2　遺構配置状況（南西から）
－3　ＳＫ01検出状況（南から）
図版90－1　ＳＫ01完掘状況（南から）
－2　ＳＫ02検出状況（北東から）
－3　ＳＫ02遺物出土状況（北東から）
図版91－1　ＳＫ02遺物出土状況近景
（北東から）
－2　ＳＸ02検出状況（南西から）
－3　ＳＸ02遺物出土状況（北東から）
図版92－1　Ｐ3土層堆積状況（東から）
図版92－2　Ｐ3遺物出土状況（南西から）
－3　Ｐ1石器出土状況（南東から）
図版93－1　ＳＤ01・02検出状況（南東から）
－2　ＳＤ01・02完掘状況（南東から）
図版94－1　ＳＤ04～06検出状況（南東から）
－2　ＳＤ04～06完掘状況（南東から）
－3　弥生土器出土状況（南西から）
図版95－1　ＳＫ01・02出土弥生土器，ＳＫ02
出土石器
－2　ＳＫ02出土弥生土器
－3　ＳＫ02出土弥生土器
図版96－1　ＳＫ03出土弥生土器
－2　ＳＸ02出土弥生土器
－3　Ｐ3出土弥生土器
図版97－1　ＳＤ02・04・05出土弥生土器
－2　ＳＤ06出土弥生土器，石器
－3　Ｐ1出土石器
図版98－1　遺構外出土弥生土器
－2　遺構外出土弥生土器
－3　遺構外出土弥生土器
図版99－1　遺構外出土弥生土器
－2　遺構外出土須恵器
－3　遺構外出土石器
図版100－1　遺構外出土分銅形土製品
－2　出雲市内出土分銅形土製品

第1章 位 置 と 環 境

白枝荒神遺跡は出雲市街地の北西4.5kmに所在する。出雲平野のほぼ中央やや北寄りの微高地上に占地している。南を中国山地、北を島根半島に挟まれた出雲平野は、中国山地から北流してきた斐伊川・神戸川の沖積作用により形成された平野である。斐伊川は出雲平野で東に流れを変え宍道湖に注ぎ、神戸川は西流し日本海に注いでいる。出雲平野が現在のような景観になったのは江戸時代以降で、それ以前は異なった景観であった。奈良時代に編纂された『出雲国風土記』によると、出雲平野西部には、周囲が約18kmに及ぶ「神門水海」という湖沼が存在していたことが記載されており、広範囲を汽水域が占め、斐伊川・神戸川はともに出雲平野で西流しそれに注いでいたようである。「神門水海」は後の両河川の沖積作用により縮小し、現在では神西湖としてその姿を残している。弥生時代の入り海が若干縮小して後の「神門水海」になったと考えられるため、白枝荒神遺跡はその汀線付近の遺跡と考えられる。弥生時代のこの地は、日本海に開けた入り海とともに広大な平野からの恩恵により、生活や生業を営むうえでは適地であったことが推測される。

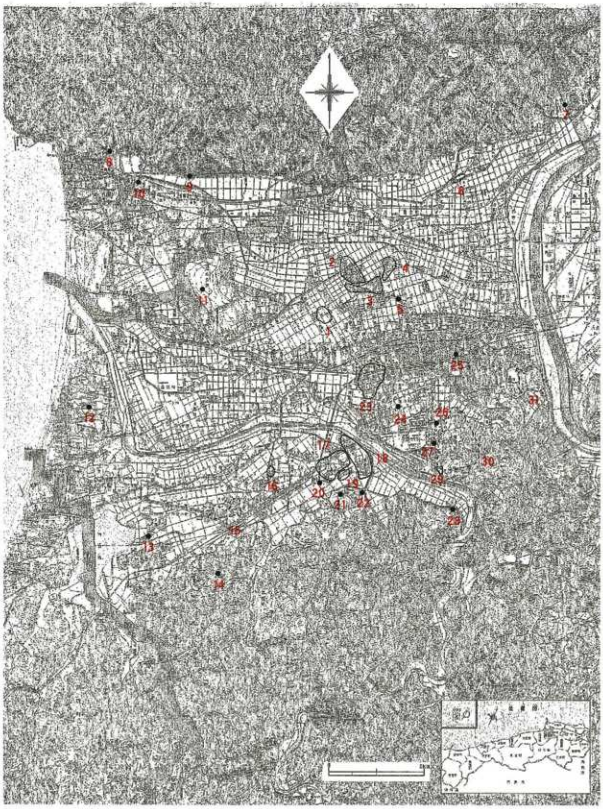
縄文時代前半期は、出雲平野から宍道湖の一帯は西の日本海へ開いた古宍道湖湾であったため、人が生活する場となり得なかった。したがって、遺跡の存在する箇所は出雲砂丘や北山山麓に限定され、縄文時代早期末の遺跡として、現在は、上長浜貝塚、菱根遺跡が確認されているのにとどまる。

縄文時代後・晩期には、平野もある程度安定してきたのであろうか、若干の人の進出が矢野遺跡にみられる。この時期の平野縁辺の遺跡としては大社境内遺跡、三田谷遺跡が挙げられる。

弥生時代までには、中国山地から拡張してきた出雲平野は島根半島まで達していたと考えられるが、まだ、目立った平野部への人の進出はみられない。弥生時代前期の遺跡として平野部の矢野遺跡に加え、縁辺部で原山遺跡が出現するにとどまる。しかし、弥生時代中期になると出雲平野は稲作を行ううえで適地になったとみられ、遺跡の数は飛躍的に増加する。白枝荒神遺跡もこの過程で出現した遺跡と考えられる。また、入り海周辺に天神遺跡、正蓮寺周辺遺跡、古志本郷遺跡などの大規模な環濠集落が出現する。この時期は他地域との交流が盛んに行われていたとみられ、白枝荒神遺跡、矢野遺跡、正蓮寺周辺遺跡からは吉備系の土器が出土している。これらの遺跡を背景に弥生時代後期にはこの地の首長を葬ったと思われる四隅突出型墳丘墓の西谷3号墓をはじめ西谷墳墓群が築造されるに至る。

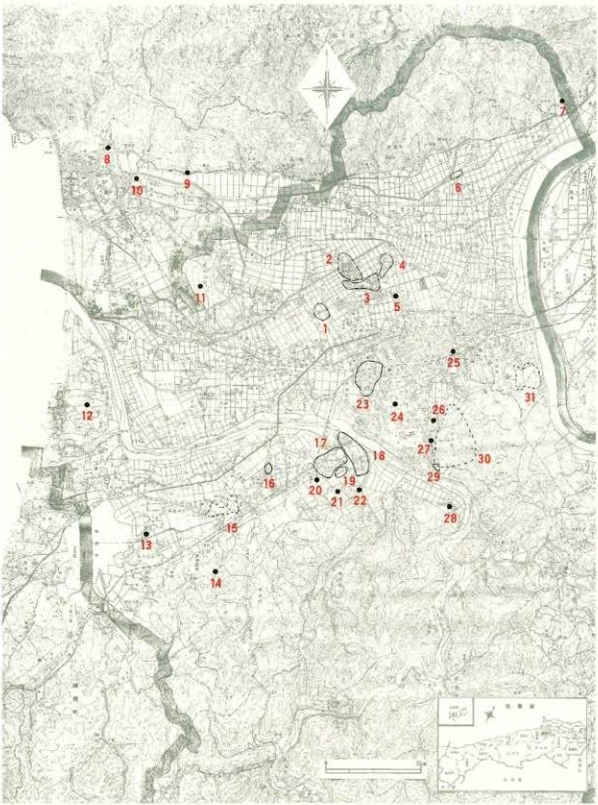
西谷墳墓群の出現で栄華を迎えるかと思われた出雲平野であるが、古墳時代前期後半から中期までの良好な遺跡は現在確認されていない。前期後半の古墳としては島根半島の大寺古墳、神西湖沿岸の山地古墳が挙げられ、中期の古墳としては北光寺古墳が知られるのみである。後期後半には古墳の数はにわかに増える。島根県内では最大級の石室を有する今市大念寺古墳、上塩冶築山古墳を筆頭に多くの古墳が築造され、横穴式石室が盛行し、上塩冶横穴墓群に代表される横穴墓が飛躍的に増える。

奈良時代にはいると、733年に『出雲国風土記』が編纂されており、出雲平野については比較的詳細に知ることができる。白枝荒神遺跡付近は「神門郡八野郷」に比定される。白枝荒神遺跡ではこの時代の遺構は後世の耕作などにより削平されているが、若干の須恵器や土師器は検出されている。北東2.5kmの小山遺跡からは平成6年度の出雲市教育委員会による発掘調査で墨書土器などが出土し、付近に「八野郷」の中心的施設があったことを窺わせている。



1.白枝荒神遺跡　2.矢野遺跡　3.小山遺跡　4.大塚遺跡　5.姫原西遺跡　6.山持川川岸遺跡　7.大寺古墳　8.出雲大社境内遺跡
9.菱根遺跡　10.原山遺跡　11.馬見塚跡　12.上長浜貝塚　13.山地古墳（消滅）　14.北光寺古墳　15.神門横穴墓群
16.知井宮多聞院遺跡　17.正蓮寺周辺遺跡　18.古志本郷遺跡　19.田畑遺跡　20.宝塚古墳　21.妙蓮寺山古墳
22.放レ山古墳　23.天神遺跡　24.神門寺境内廃寺　25.今市大念寺古墳　26.上塩冶築山古墳　27.地蔵山古墳　28.小坂古墳
29.三田谷遺跡　30.上塩冶横穴墓群　31.西谷墳墓群

第1図　白枝荒神遺跡と周辺の主要遺跡



1.白枝荒神遺跡　2.矢野遺跡　3.小山遺跡　4.大塚遺跡　5.姫原西遺跡　6.山持川川岸遺跡　7.大寺古墳　8.出雲大社境内遺跡
9.姿横遺跡　10.原山遺跡　11.馬見塚跡　12.上長浜貝塚　13.山地古墳（消滅）　14.北光寺古墳　15.神門横穴墓群
16.知井宮多聞院遺跡　17.正蓮寺周辺遺跡　18.古志本郷遺跡　19.田畑遺跡　20.宝塚古墳　21.妙蓮寺山古墳
22.放レ山古墳　23.天神遺跡　24.神門寺境内廃寺　25.今市大念寺古墳　26.上塩冶築山古墳　27.地蔵山古墳　28.小坂古墳
29.三田谷遺跡　30.上塩冶横穴墓群　31.西谷墳墓群

第1図　白枝荒神遺跡と周辺の主要遺跡

第2章 調 査 の 概 要

白枝荒神遺跡は、1938年の圃場整備の際地元の郷土史家新宮一世紀氏によって発見され、白枝荒神屋敷遺跡と呼ばれ、弥生時代の遺物散布地として知られていた。その後、出雲平野集落遺跡研究会の分布調査においても、弥生時代後期の甕の口縁部が確認されていた。この遺跡のほぼ中央を東西に横断する形で市道松寄下小山線が延びていたが、交通量の増加に伴い道路幅員の狭さが問題となっていた。出雲市道路河川課はこの問題に対処するため道路改良工事を計画し、出雲市教育委員会と協議の結果、平成5年度に発掘調査を実施するに至った。

発掘調査は平成5年度から平成8年度にかけて断続的に実施され、市道改良工事という性格上、白枝荒神遺跡の東端から西端までの270m間にわたり、細長いトレンチを入れる形となった。

平成5年度調査では、1000㎡の調査地からコンテナ80箱という多量の土器が出土し、なかでも、出土例が全国的にも少ない魚の線刻弥生土器片の出土があり、注目を集めた。調査地以西の工事予定地の試掘調査の結果、約100mにわたり遺跡の広がりが確認されたため、平成6年度には、平成5年度調査地より西へ80m離れた白枝荒神遺跡の西端にあたる300㎡について調査を実施し、溝状遺構、土坑などの遺構が確認され、弥生土器片、須恵器片などコンテナ1箱程度の遺物が出土した。また、平成5年度調査地と平成6年度調査地の間に位置し、当時まだ民家があったため未調査であった900㎡のうち600㎡を平成7年度調査として実施しており、弥生土器片などがコンテナ6箱出土した。残りの300㎡の調査を平成8年度に実施し、弥生土器片などがコンテナ8箱出土した。

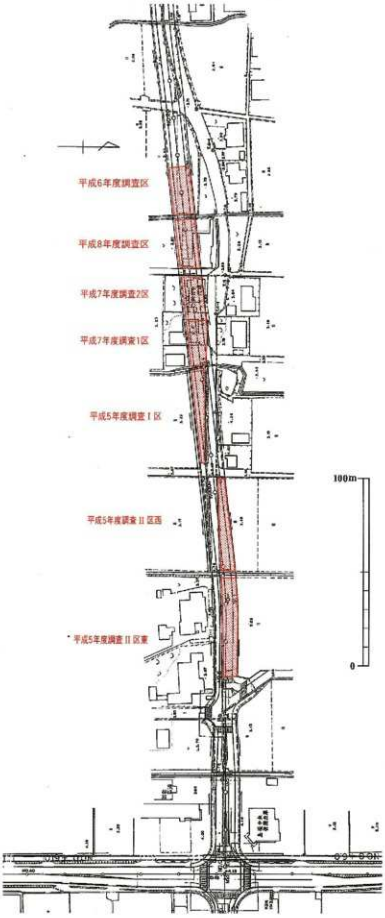
平成5年度調査は、平成5年6月1日から平成5年11月30日まで実施した。調査地は市道により南北に二分されており、南側をⅠ区、北側をⅡ区と命名した。それぞれの長軸方向に中心線を設け、その線を基準として5mグリッドを設定し、北側をAグリッド、南側をBグリッドとし、西から1、2、3、とグリッド番号を付した。このため各グリッドはⅠ区A1グリッド、Ⅱ区B2グリッドなどと呼称される。調査地は水田として使用されていたため、耕作土を重機により除去しその下位から手掘りにより掘り下げた。掘削は上層から堆積土層ごとに1層ずつ剝ぎ取り、各層上面で精査を行い遺構の確認に努めた。

平成6年度調査は、平成6年12月1日から平成6年12月28日まで実施した。調査地は白枝荒神遺跡の西端にあたる、東西25m×南北12mの区間である。東西軸に平行にA、B、Cラインを4m間隔で設け、南北軸に平行に4m間隔に西から順次第1ラインから第7ラインを設定し、直交点をそれぞれ、A1、B2などと呼称し、その南東のグリッド名とした。この調査地も水田として利用されており、約40cm程度の耕作土を重機により除去し、その下位から手掘により掘削し、堆積土層ごとに精査を行い遺構の検出に努めた。

平成7年度調査は、平成7年11月2日から平成8年3月8日まで実施した。調査地は平成5年度調査地の西端から西へ50mまでの区間である。調査地を調査後埋め戻す必要があったため、東西50m×南北12mの調査地の東側23m区間を1区、西側27m区間を2区とし、一方調査時に他方を調査で生ずる排土の仮置き場とした。調査地の長軸方向に中心線Bラインを設け、5m間隔で平行に北にCライン、南にAラインを想定し、また、南北軸に平行して調査地東端から5m間隔で第1ラインか

ら順次設定し、直交点をA1、B2などと呼び、その北西のグリッド名とした。この調査地は、宅地として利用されていたため、約60cmの造成土を重機により除去し、その下位から手堀による掘削を行い、堆積土層ごとに精査を実施した。調査地の南壁に沿って1区、2区それぞれ3ヶ所で深堀を行い、標高60cmあたりで、旧神戸川の沖積作用による石英安山岩の砂層の上面を確認した。

平成8年度調査は、平成8年6月11日から平成8年8月8日まで実施した。調査地は平成7年度調査地と平成6年度調査地の間の区間であり、東西30m×南北12mを測る。当初平成7年度調査予定であったが民家の立ち退きが遅れたため、平成7年度に調査が繰り越された。グリッドの設定については、平成7年度調査のBラインを基準にして同様にグリッドを設定した。よって南北ラインは平成7年度調査と通し番号になっている。この調査地も宅地であったため、約80cmの造成土を重機により掘削し、その下位より手堀により調査を実施した。また、調査地南壁に沿って1ヶ所深堀を標高120cmまで行ったが、周囲が崩壊したためそれ以上の掘削は不可能になり、旧神戸川の沖積作用による石英安山岩の砂層の確認には至らなかった。



第2図　調査区配置図

第3章　平成5年度調査

1．平成5年度調査の概要

平成5年度の調査区間は現在田圃地である。またこの近辺は周囲と比べると標高が微妙に高位置を占めているため当遺跡の該当時期以降かなり削平されているので、耕作土から遺構確認面までわずか20cmである。そのため遺構確認面も当時より削平されていると思われるので、遺構の最大径及び最大深さは不確実であることを明記し、各々の計測値は現存状況としておく。

当概地は、自然堤防である微高地と低湿地が交互に現れる地形を呈し、Ⅰ区の西端から東約13m付近で砂質土の地山が東へ傾斜して落ち込み粘質土の低湿地となる。Ⅱ区西端でその地山が傾斜し上り、そのまま東方向へ安定した砂質土の地山が続くが、再びⅡ区東11m付近から傾斜し落ち込んでいく。しかしⅡ区東端付近で粘土の下に地山らしき砂質土を確認できたので再び微高地へと傾斜していくようである。今回確認した2ヶ所の低湿地は旧河川跡の可能性もある。

Ⅰ・Ⅱ区共にこの微高地上の安定した地山の上に弥生時代中期から古墳時代初頭の土坑、溝状遺構などの遺構を築いている。またⅡ区東では低湿地が埋没しある程度安定するとそこにも遺構を築いている。そこでは、近世の遺構が検出された。

またⅠ区とⅡ区西端の粘質土の低湿地は、弥生時代中期から古墳時代初頭の土器捨て場と思われるような土器の集中出土箇所が多数検出され、それぞれ土器群として扱った。

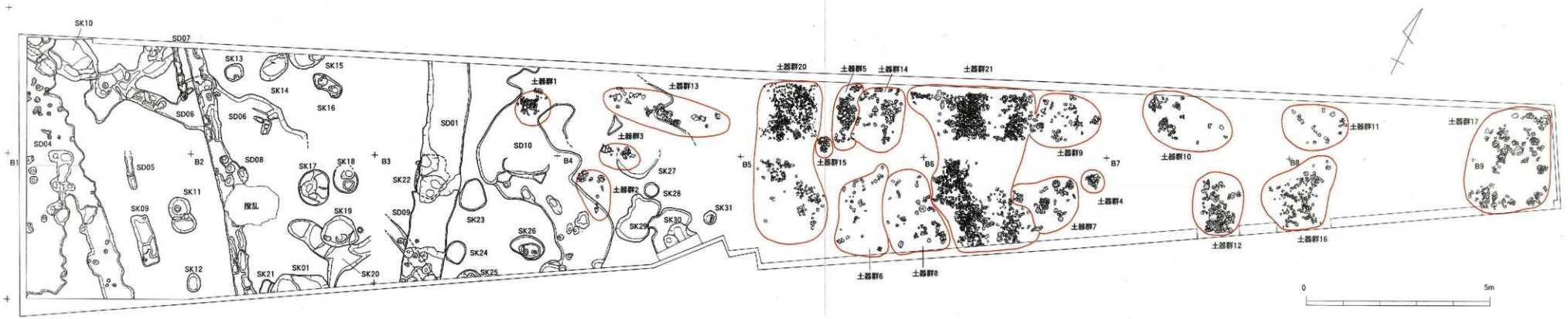
またⅡ区西A・B－4グリッド内で検出した溝は、数十年前まで小河川として利用されていたものであり、当然弥生時代などの遺構は破壊されている。Ⅱ区西A10グリッド内にも後世に掘り込まれたと思われる撹乱溝があり、弥生土器小片が廃棄されたように多数出土しているので、Ⅱ区西と東の境にある現在の用水路の初代を掘削した時に掘り込まれ廃棄されたものではないかと思われる。

当概地の座標は、表1に示してある。

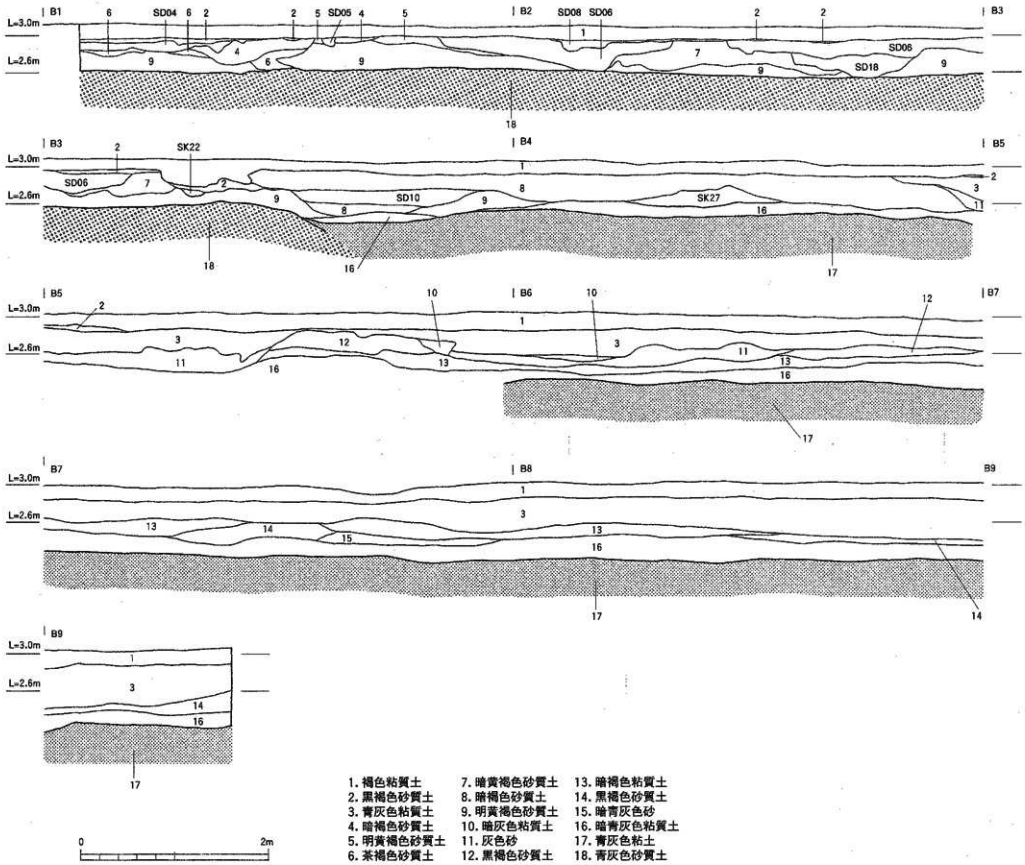
表1　各杭上の座標一覧表

	杭番号	X	Y
Ⅰ区	B 1	-70042.292	51810.374
	B 5	-70031.067	51826.935
	B 9	-70019.847	51843.487

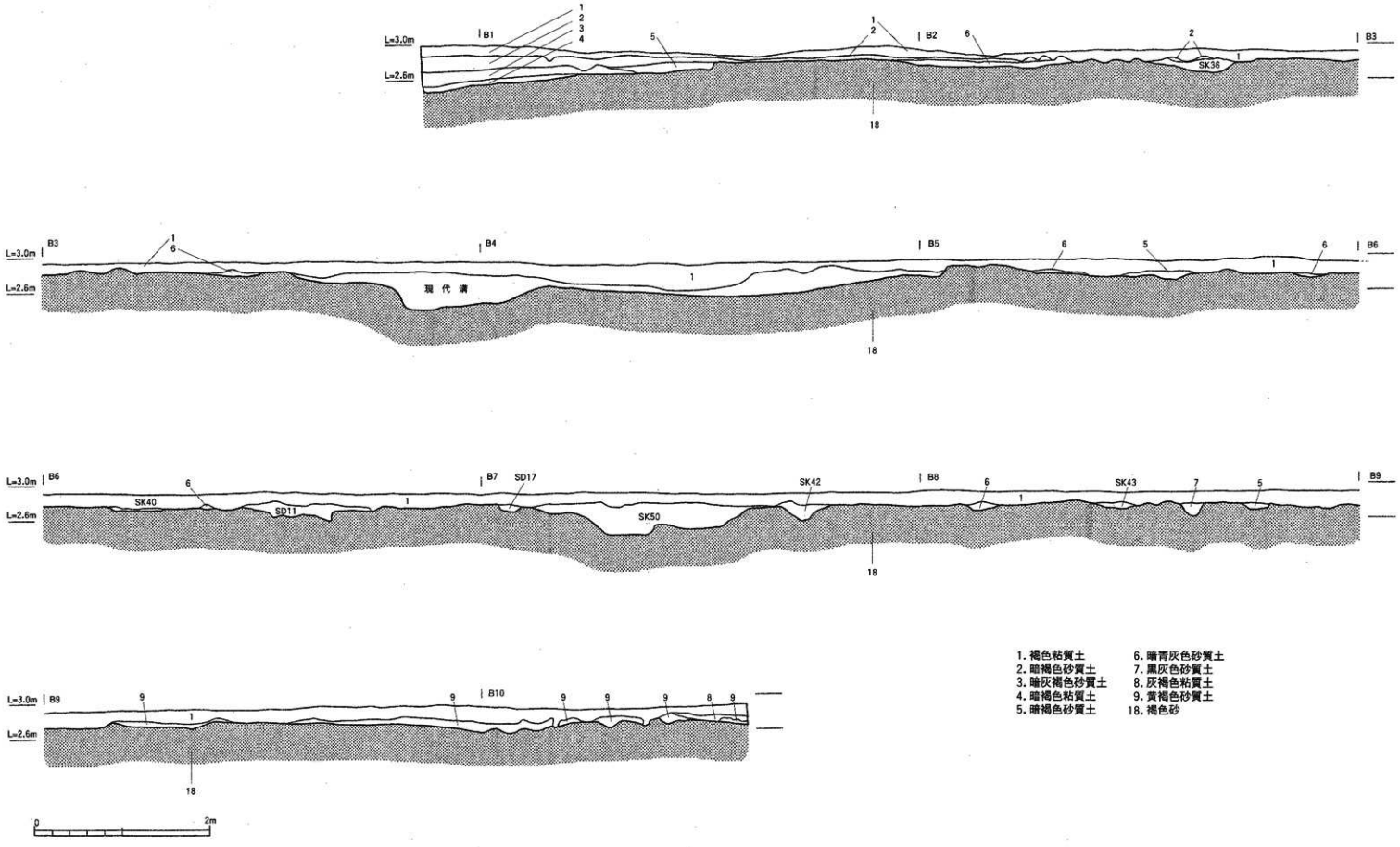
	杭番号	X	Y
Ⅱ区	B 1	-70005.302	51846.933
	B 6	-69990.655	51868.225
	B12	-69973.604	51892.923
	B19	-69953.720	51921.724



第3図　I区遺構配置図（S=1/80）

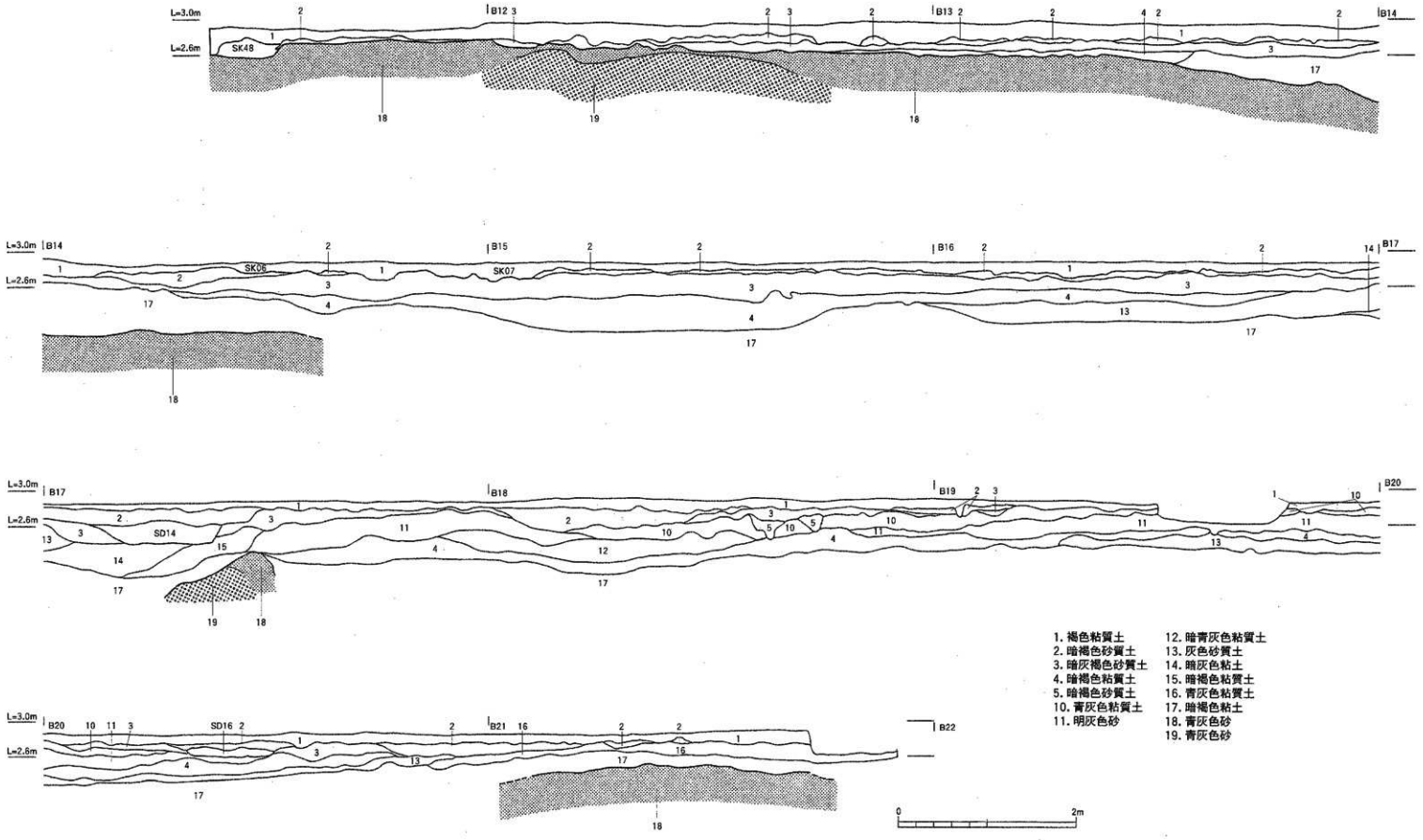


第4図　Ⅰ区土層断面図 (S=1/40)



1. 褐色粘質土
2. 暗褐色砂質土
3. 暗灰褐色砂質土
4. 暗褐色粘質土
5. 暗褐色砂質土
6. 暗青灰色砂質土
7. 黒灰色砂質土
8. 灰褐色粘質土
9. 黄褐色砂質土
18. 褐色砂

第6図　II区西土層断面図 (S=1/40)



第7図　II区東土層断面図（S=1/40）

2．Ⅰ区検出遺構及び出土遺物

Ⅰ区からは、低湿地から土器群として捉えた遺物集中箇所以外、大きく7層と9層を、一部8層を掘り込み面とした土坑、溝状遺構、柱穴跡などが検出された。

出土遺物は、図化しうるものを図化したので他にも同時期の破片が出土している[註1]。

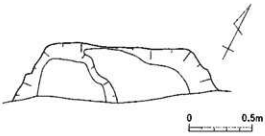
土坑

Ⅰ区内では土坑を24基検出した。

SK01（第8図）

B2グリッド内より検出した土坑である。大部分が調査区外へと延びており形態及び規模は不明である。

出土遺物は弥生土器片が主であるが、素焼きの小片、唐津焼きと思われる小片が1点ずつ出土しているため近世以降のものであろう。

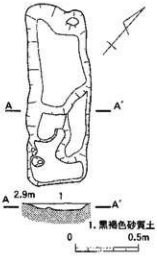


第8図　SK01実測図（S=1/30）

SK09（第9図）

B1グリッド内より検出した。長辺140cm、短辺50cmの長方形の土坑である。深さは50cmと浅く性格は不明である。

出土遺物は弥生土器片と須恵器の小片が1点出土しているので、弥生期よりは新しいと思われる。



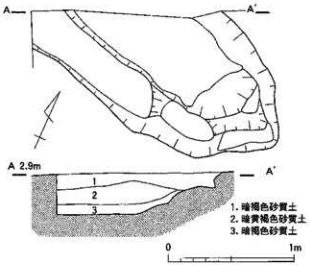
第9図　SK09実測図
（S=1/30）

SK10（第10・11図）

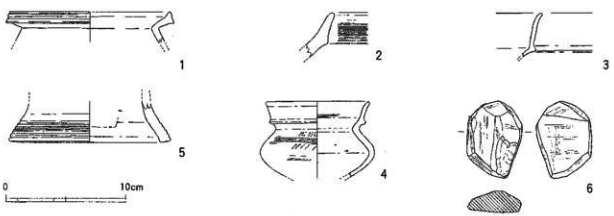
A1グリッド内より検出した。SD04に切られ調査区外に延びているため規模は不明であるが現状では長辺215cm、短辺114cm以上、深さ38cmで、長軸がN－75°－W方向の長楕円形と思われる土坑である。後述するがミニチュア土器が出土しているので土壙墓の可能性がある。

註1　各遺構からは後世の混入品、または該当遺構より古い遺構及び包含層からの逆の混入品などが含まれているが、出土状況、混入度合いなどより、何が混入品であるのかを判断した。混入品は図示する場がないので、取り上げた遺構での出土品として図示した。

1～3は弥生甕口縁部である。1は頸部から「く」の字に屈曲し口縁部は矩形の端部が上下に肥厚し始めたものである。2は口縁部がでっぷりとし沈線文を8条施したものである。3は極薄手の複合口縁をもつものである。4は器高約7cmのミニチュアの弥生甕で、3を踏襲したものである。かなり胴張りで胴部最大径以上に列点文及び平行沈線文が施されている。5は高坏の脚裾部である。5条の凹線文が施され、端部はわずかにそり上がり平坦面をもっている。6は凝灰岩製の多角形の砥石である。約14面ありそれぞれの面は丁寧に研磨されており単なる砥石ではないかもしれない。



第10図　SK10実測図（S=1/30）



第11図　SK10出土遺物実測図（S=1/3）

SK11（第12図）

B1グリッド内より検出した。土層断面図より観察すると2基の土坑が重複し北側が南側を切った状況である。北側は径55×60cm、深さ17cm、南側は径45×65cm、深さ20cmで2基を合わせた長さは100cmを測る。出土遺物なし。

SK12（第12・13図）

B1グリッド内より検出した。径50×38cmで深さ13cmの楕円形の土坑である。性格は不明。

1・2は弥生土器である。1は頸部に指頭圧痕文帯の残った破片である。2は平底の底部で内外面ともミガキ調整である。

SK 13（第12・13図）

A 2グリッド内より検出した。径54×46cmで深さ13cmのほぼ円形の土坑である。SK 12と規模が近似しているが出土土器の時期に差があり、同系統のものと判断しがたい。

3・4は弥生土器である。3は器壁が厚手の時期の複合口縁の甕である。口縁部には浅い沈線が施されている。4は壺または甕の注口部である。淡黄褐色を呈し注口部先端が薄作りのため胴部は薄手のものと思われる。

SK 14（第12・13図）

A 2グリッド内より検出した。径95×60cmで深さ20cmの楕円形の土坑である。

5～8は弥生土器である。5は厚手の口縁部に沈線がみえる。6・7は共に薄手の複合口縁の甕の一部である。8は平底の底部である。底部外面には板目が残っている。調整は内外面ともミガキである。

SK 15（第12・13図）

A 2グリッド内より検出した。調査区外へ延びているが現状で径97×38cm以上、深さ25cmの長楕円形の土坑である。

9～11は弥生土器である。9は複合口縁になり始めの断面「T」字状の口縁部で3条の凹線文が施されている。10は薄手の複合口縁甕の口縁部である。11は低脚坏である。胎土から古てのものと思われる。

SK 16（第12図）

A 2グリッド内より検出した。長軸90cm、短軸44cmの細身で深さ6～14cmの楕円形の土坑である。中央の小さな落ち込みは土層断面図より後世の撹乱であるかもしれない。

弥生土器が数点出土したのみである。

SK 18（第12・13図）

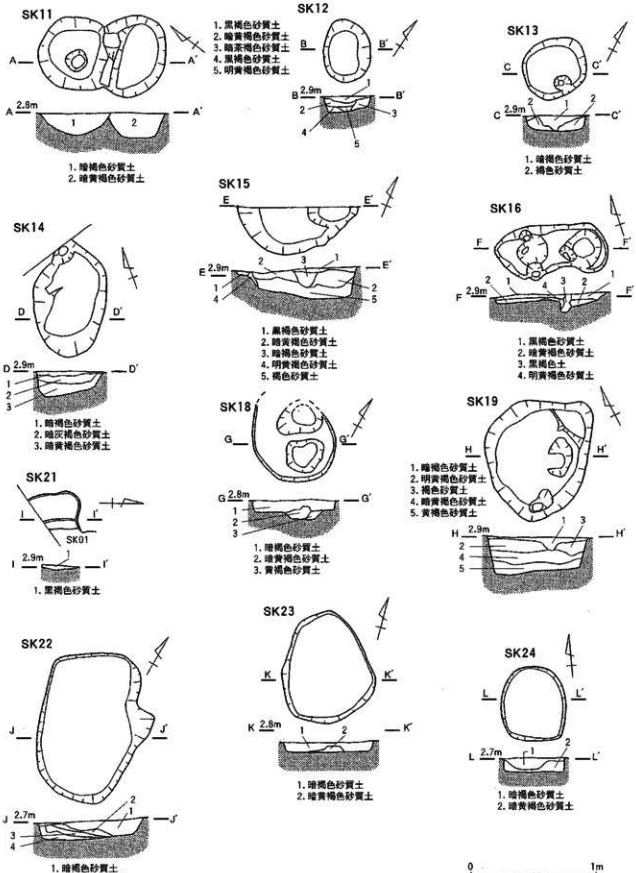
B 2グリッド内より検出した。サブトレンチのために北側を削ってしまったが径60cm以上×68cm、深さ16cmの楕円形の土坑である。

12は弥生土器のしっかりした上げ底の底部である。13・14は石製品である。13は凝灰岩製の片面に研磨のちほぼ同方向に多くの刃痕をつけた石器で、のちには右側縁に両面からの剥離痕が認められる。砥石の一種であろう。14は凝灰岩製の砥石で全面使用している。

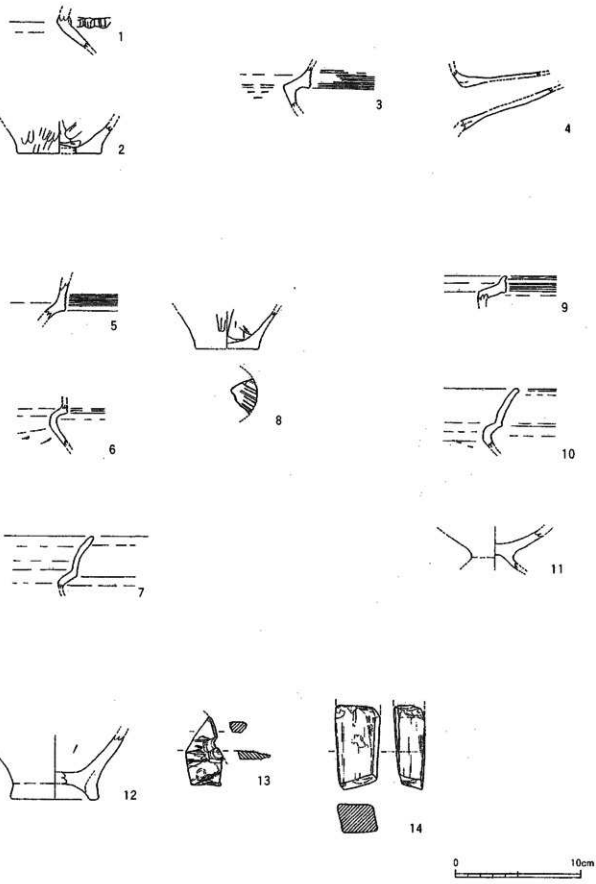
SK 19（第12・14図）

B 2グリッド内より検出した。径98×83cm、深さ30cmの楕円形の土坑である。

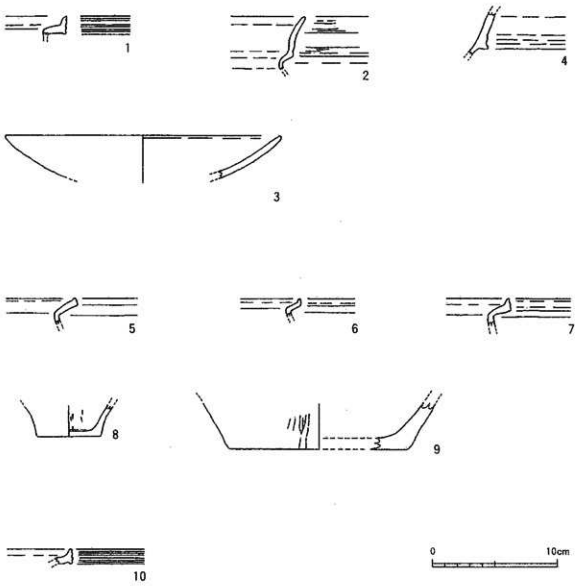
1～4は弥生土器である。1は口縁部が上に肥厚し3条のなりそこないの凹線文が施してある甕の口縁部である。2は薄手の複合口縁甕の口縁部である。口縁部外面には煤の付着が観察される。3は高坏の坏部である。立ち上がり直線的で端部をわずかに内側におさめている。胎土は在地の弥生土である。4は鼓形器台の受部である。内面はミガキ調整されている。



第12図　SK11~16、18、19、21~24実測図 (S=1/30)



第13図　SK12(1・2)、13(3・4)、14(5~8)、15(9~11)、18(12~14)出土遺物実測図 (S=1/3)



第14図　SK19（1～4）、22（5～9）、24（10）出土遺物実測図（S=1/3）

SK21（第12図）

B2グリッド内より検出した。SK01に切られて詳細は不明であるが、径40×30cm以上、深さ3cmの楕円形の土坑である。出土遺物なし。

SK22（第12・14図）

B3グリッド内より検出した。SD01に切られておりSD01検出後に確認した。径120×80cm、深さ15cmの長楕円形の土坑である。

5～9は弥生土器である。5は口縁端部が断面矩形からわずかに肥厚を意識し始めた段階の甕の口縁部である。6・7は5の段階から口縁端部を上に肥厚させた甕の口縁部である。8・9は平底の底部である。8は底部から胴部へシャープな立ち上がりをみせるが、9は胎土に1～2mm大の砂粒子を

多く含み、内面は荒い調整が施してあり、外面の立ち上がりも鈍い感じである。

SK23（第12図）

B3グリッド内より検出した。径90×75cmで、深さ10cmの楕円形の土坑である。出土遺物なし。

SK24（第12・14図）

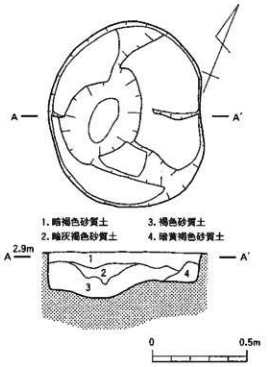
B3グリッド内より検出した。径60×52cmで深さ12cmの楕円形の土坑である。SK23と遺構の規模・形態が酷似しているので同じ性格を有すると思われる。

10は弥生土器。口縁端部を上下に肥厚させた断面「T」の字状の甕の口縁部で、3条の凹線状の沈線を施している。

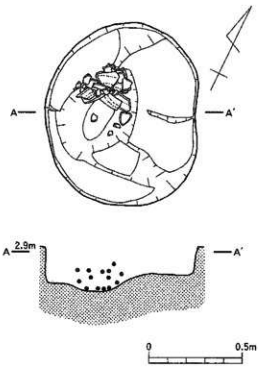
SK17（第15～17図）

B2グリッド内より検出した。径98×80cm、深さ22cmの楕円形の土坑である。中央の落ち込んだ部分に土器が集中して出土している。

1～8は弥生土器である。1～3は甕で、1・2とも頸部が「く」の字状に曲がり、1は端部を丸くおさめ、2は端部わずかに肥厚気味の口縁部である。3は倒卵形の薄手複合口縁甕で突出部は横に突出し端部は外方向に引きのばし折り曲げている。底部はわずかに平底の痕跡をとどめる。肩部には平行沈線文、波状文が施してある。外面には煤の付着がかなりみられ特に胴の張り出し部分によくみ

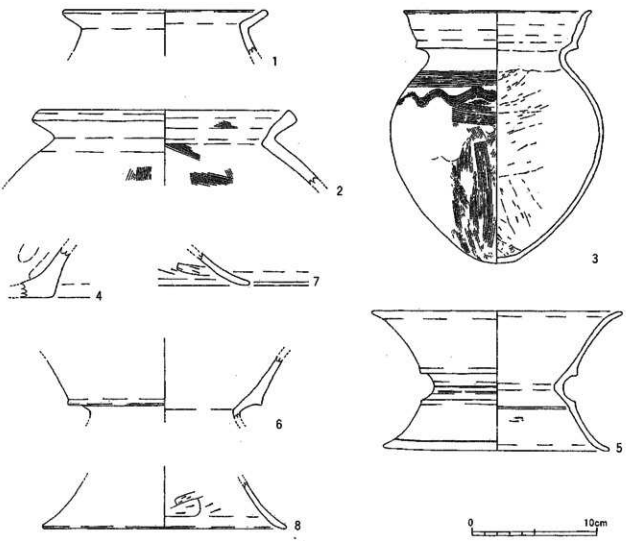


第15図　SK17実測図（S=1/20）



第16図　SK17遺物出土状況図（S=1/20）

られる。4は平底の底部である。5～8は鼓形器台である。薄手で筒部がかなり縮約され受部と脚部も器高が短くなりつつあるタイプである。6は受部、7・8は脚裾部である。

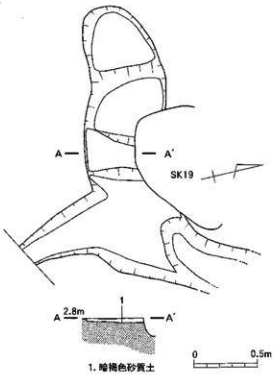


第17図　SK17出土遺物実測図（S=1/3）

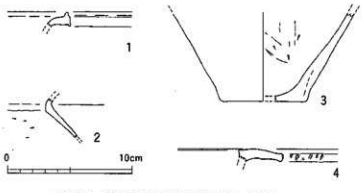
SK20（第18・19図）

B2グリッド内より検出した。SK01・19に切られている。南北180cm以上、東西210cmで、南側調査区外へ溝状遺構のように延びているが一応不整形の土坑としておく。

1～4は弥生土器である。1は口縁部が上下に肥厚し凹線状の段を外面に施した甕の口縁部である。2は内面頸部までケズリ調整が施してあるので、薄手の複合口縁甕の屑部と思われる。3は平底の底部である。底面にナデ調整時の布痕が観察される。4は水平口縁をもつ高坏の口縁部破片である。外縁端部はわずかに垂下し、折曲部の上端は突出部をつくっている。



第18図　SK20実測図（S=1/30）



第19図　SK20出土遺物実測図（S=1/3）

SK25（第20図）

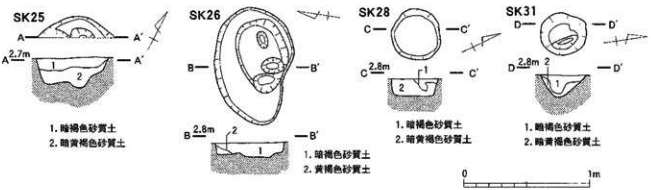
B3グリッド内より検出した。調査区外へ延びているが現状で径62×17cm以上、深さ24cmの楕円形の土坑である。

弥生土器片が数点出土しているのみである。

SK26（第20・21図）

B3グリッド内より検出した。径94×63cmで深さ12cmの楕円形の土坑である。

1・2は弥生土器の甕の口縁部である。1は口縁端部がわずかに上下に肥厚したもの、2は頸部から膨らみをもち端部は上に肥厚させたものである。ともに口縁部面に1条の沈線文が施されている。

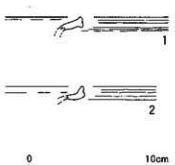


第20図　SK25、26、28、31実測図（S=1/30）

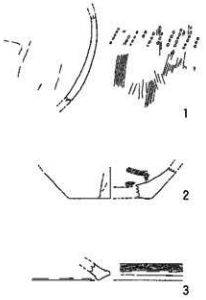
SK 28（第20・22図）

B4グリッド内より検出した。径40cm、深さ14cmでほぼ円形の土坑である。

1～3は弥生土器である。1は胴部破片で連続の列点文を施している。2は平底の底部破片である。3は高坏の脚裾部である。端部は肥厚して面をもち、脚部には何条もの凹線文を施す。



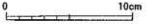
第21図　SK26出土遺物実測図（S=1/3）



SK 31（第20図）

B4グリッド内より検出した。径35cm、深さ18cmでほぼ円形の土坑である。I区内では最小規模の土坑である。断面も逆三角形で他のものとは違い、あるいは柱穴であるかもしれない。しかし付近に同様な遺構が存在しないので詳細は不明である。

出土遺物は、弥生土器数点のみであった。

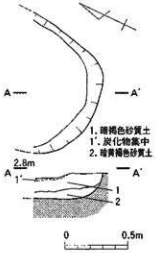


第22図　SK28出土遺物実測図（S=1/3）

SK 27（第23・24図）

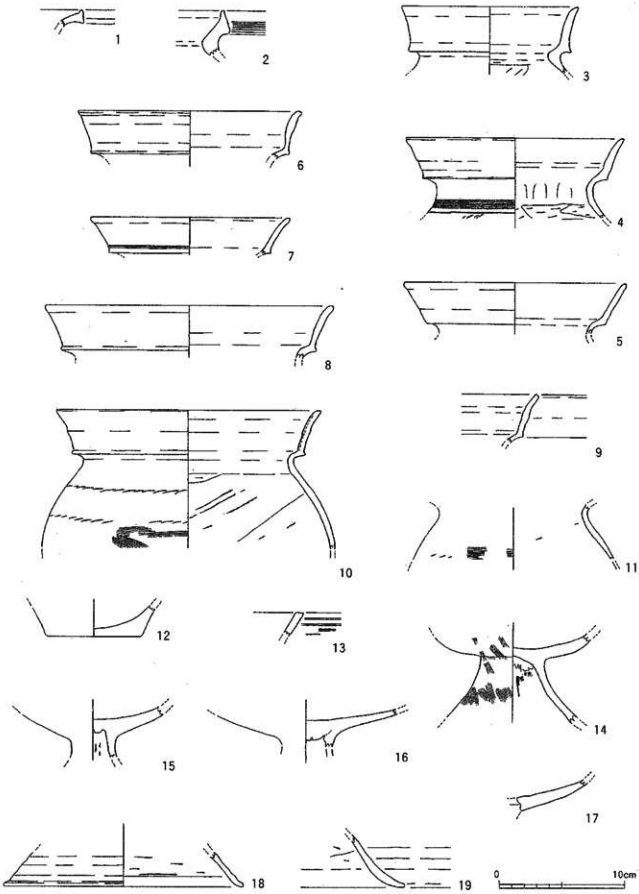
B4グリッド内より検出した。サブトレンチを入れたため北側を壊してしまい原形は不明であるが、径75×100cm以上で深さ20cmの楕円形の土坑である。

SK27の北側には、SK27を検出したのちに検出した土器群3がある。この土器群3は弥生中期の土器群であるが弥生終末期の土器が数点出土しており、これらは弥生終末期であるこのSK27のものである可能性が高い。またその逆にSK27には土器群3と同じ弥生中期の土器が混入しておりまた特徴的な胎土である赤褐色の50－1（広口壺）の同一個体と思われる破片が出土しているので、この2基内出土の遺物は交互に混入していると思われる。



第23図　SK27実測図（S=1/30）

1・2・12・13は弥生中期の土器で、それ以外は弥生土器から古式土師器へと移り変わった土器である。1は口縁部をわずかに肥厚させたもの、2はもう少し口縁部がのびて複合口縁化しつつある段階のものである。3～10は器壁の薄い複合口縁の甕である。3・4は口縁端部をまっすぐに引きのばし、突出部はまだ出ない。5～8は端部を丸くおさめたり、わずかに外へ折り平坦面をつくってい



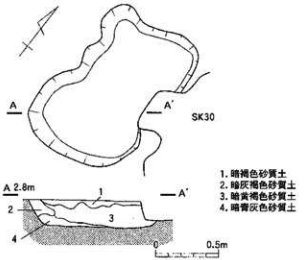
第24図　SK27出土遺物実測図（S=1/3）

る。また突出部も意識して横へ出し始める。9・10は端部を肥厚させ平坦面をつくり、突出部も強く横へ引きだす。12はしっかりした平底の底部である。13は無頸の鉢で、端部に平坦面をつくり胴部には多条の凹線文を施す。14～17は高坏である。接合方法は、14は脚部を絞って坏部の底部に貼り付け、他は円盤充塡法である。18・19は、器壁の薄い鼓形器台の脚部である。

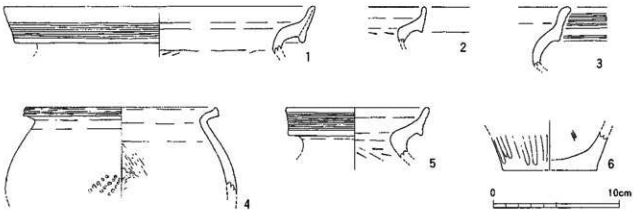
SK29（第25・26図）

B4グリッド内より検出した。SK30に一部を切られているが、長辺125cm、短辺90cm、深さ21cmの不整形な長方形の土坑である。

1～6は弥生土器である。1～3は壺で、ともに複合口縁化し厚手で端部をわずかに肥厚させ丸ぼったくし突出部を下に引き出している。4・5は甕で5は前記の壺の同系統のものである。4は口縁端部をわずかに肥厚させた面に2条の沈線を施し、列点文を胴部最大径に施している。6はしっかりした平底の底部である。また図化していないが黒曜石の剝片が1点出土している。



第25図　SK29実測図（S=1/30）

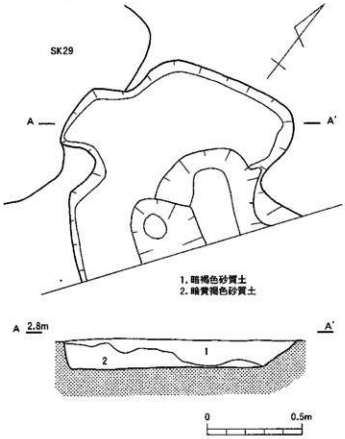


第26図　SK29出土遺物実測図（S=1/3）

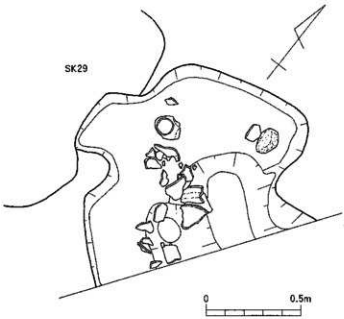
SK30（第27～29図）

B4グリッド内より検出した。調査区外へと延びるが、現状では径100×120cm以上、深さ15cmで不整形の土坑である。

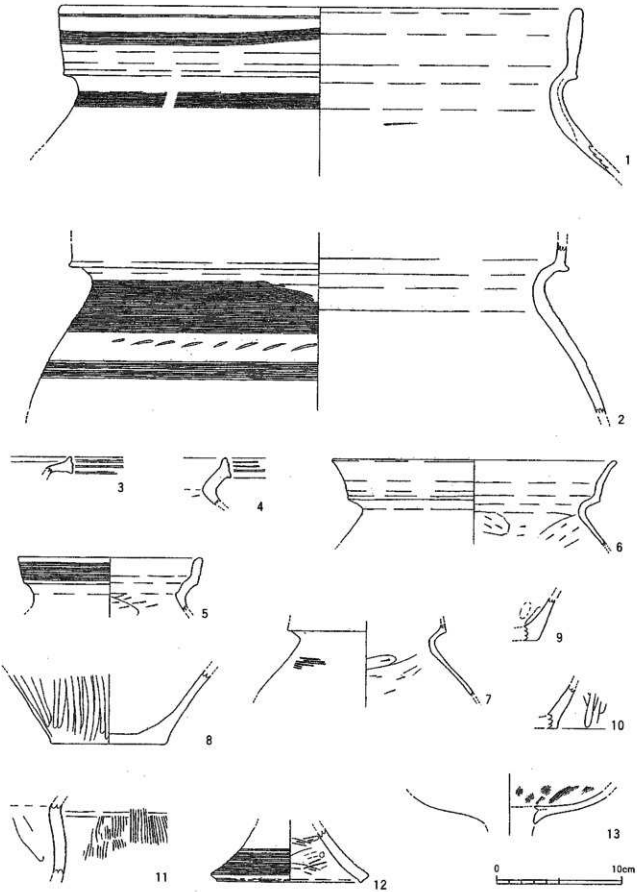
1～13は弥生土器である。1・2は大型の複合口縁を有する壺で、口縁端部は水平の平坦面をもち突出部はわずかに横へ出る。口縁部及び頸部には多条の沈線が施され、2は頸部の沈線の下に「ノ」の字の連続刺突文が施され、その下にも多条の沈線が施されている。1・2とも酷似しているが細部で相違が認められるので別個体とした。3～7は甕である。3は口縁部が上下に肥厚しつくった面に2条の沈線を施す。4は更に厚ぼったくなった頸部から口縁部を上下に肥厚し複合口縁化したもので内面頸部以下はケズリ調整である。5は複合口縁の厚ぼったいタイプである。内面頸部以下のケズリは強く入り器壁を薄くつくっている。また内面口縁部は丁寧なナデ調整である。6・7は薄手の複合口縁の甕で口縁端部は引きのばし、突出部はあまり出ない。7は6の範疇であろう。8～10は底部である。それぞれ平底で、外面に縦方向のミガキ調整が顕著である。11は一応鉢としておく。分厚いつくりで内外面とも調整が荒く、日常的な食器類ではなく、何か生産に関わる容器ではないかと思われる。12・13は高坏で、12は脚裾部が平坦面を有し上向きに反り脚部に8条の強い沈線を施す。



第27図　SK30実測図（S=1/20）



第28図　SK30遺物出土状況図（S=1/20）



第29図　SK30出土遺物実測図（S=1/3）

溝状遺構

Ⅰ区内では溝状遺構を8条検出した。

SD01（第30図）

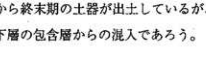
3グリッド内より検出した。幅25～30cm、深さ7cmでN－20°－Wの方向に延びている。覆土は褐色粘質土で耕作土からの落ち込み状を呈している。

出土遺物は弥生土器が中心であるが、中期から終末期の土器が混合しているのと、直下にSK22を検出しているので弥生期の遺構を破壊しており、これらの弥生土器はすべて混入品である。他に灰橙褐色の胎土緻密な土師器の小片と黒曜石の砕片が1点ずつ出土している。

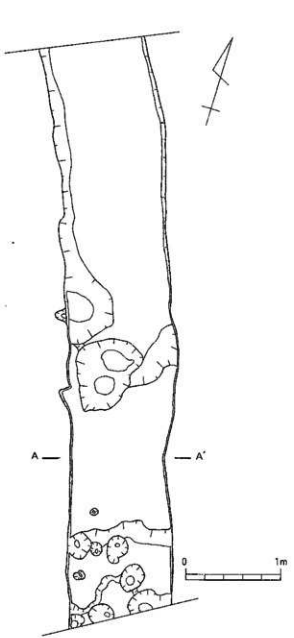
SD04（第31・32図）

1グリッド内より検出した。幅18～45cm以上、深さ5cmでN－43°－Wの方向に延びている。南では二股に分かれ西側のものは収束したような状況を呈している。

1は須恵器の蓋坏の坏身である。小ぶりでかえりが長めの小破片である。この他、弥生中期から終末期の土器が出土しているが、これらは下層の包含層からの混入であろう。



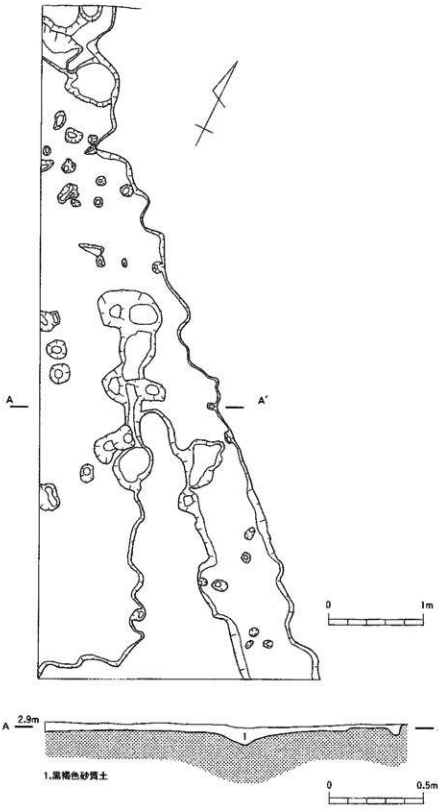
第31図 SD04出土遺物実測図（S=1/3）



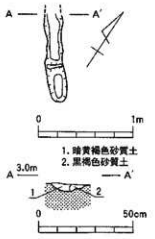
第30図 SD01実測図（平面図S=1/40、土層断面図S=1/20）

SD05（第33図）

B1グリッド内より検出した。幅5cm、深さ4cmでN－38°－Wの方向に延びている。A1グリッド内では、浅いために掘り下げてしまい検出できなかったので詳細は不明である。出土遺物なし。



第32図　SD04実測図（平面図S=1/40、土層断面図S=1/20）

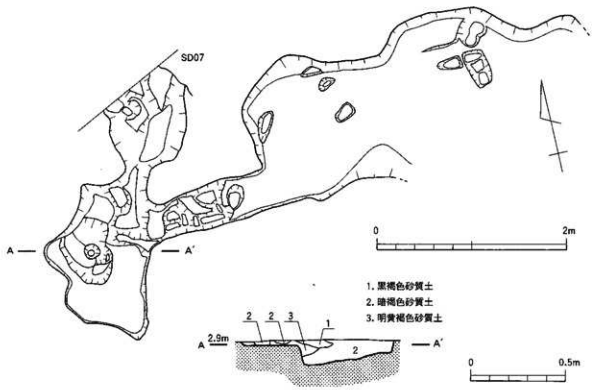


第33図　SD05実測図
（平面図S=1/40
土層断面図S=1/20）

SD06（第34・36図）

B2グリッド内で検出した。SK10とSD07・08に切られている掘り込みがあるので、あるがままに検出すると図のような検出状況となった。幅10～45cm以上、深さ3～13cmでN－20°－Eの方向に延び屈曲してW－4°－Sの方向に延びている。B2グリッド内では、浅いために掘り下げてしまい立ち上がりを検出できなかった。

1～23は弥生土器である。1は口縁部がわずかに肥厚し面をもち頸部の短い短頸壺である。2・3は頸部が「く」の字状に屈曲し口縁部がわずかに肥厚した甕である。3は指頭圧痕文帯がめぐっているが、この段階から出現する文様である。4・5は口縁端部が上下に肥厚してきた面に沈線及び凹線文を施す。6～10は口縁部が突出部をつくって上に肥厚し複合口縁と



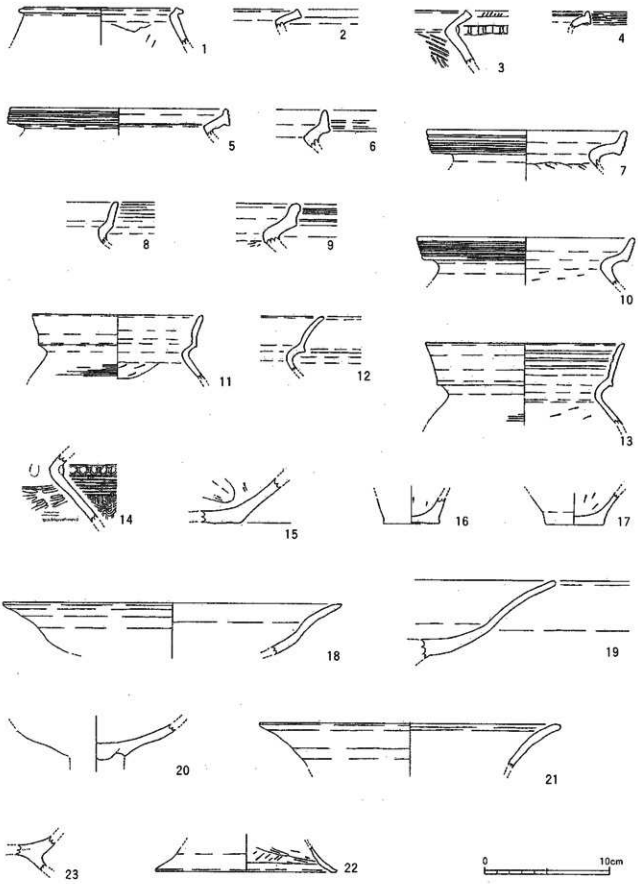
第34図　SD06実測図（平面図S=1/40、土層断面図S=1/20）

なった甕である。端部を肥厚させて丸くおさめ数条の沈線または凹線文を施す。この段階から内面頸部以下はケズリ調整（ケズリっぱなし）となる。11～13は薄手の複合口縁の甕で端部を引きのばし、突出部は横あるいは斜め下方へ引き出す。13のように内面口縁部を強いナデにより沈線状にするものもある。15～17は底部破片でともに平底で内面にケズリ調整を用いている。18～20は高坏の坏部片である。18は体部と口縁部境に段の名残りで屈曲させているが、19になると一段と屈曲も残らなくなる。21・22は薄手の甕形器台で、特に22は小ぶりのものである。23は一応低脚坏としておくが、台付の脚である可能性も考慮しておきたい。

SD07（第35図）

A1グリッド内で検出した。調査区外へ延びるが、幅4～6cmでN－40°－Wの方向に延びている。SD05と規模も方角も似ているので何らかの関連があると思われる。出土遺物なし。

第35図　SD07実測図
(S=1/40)



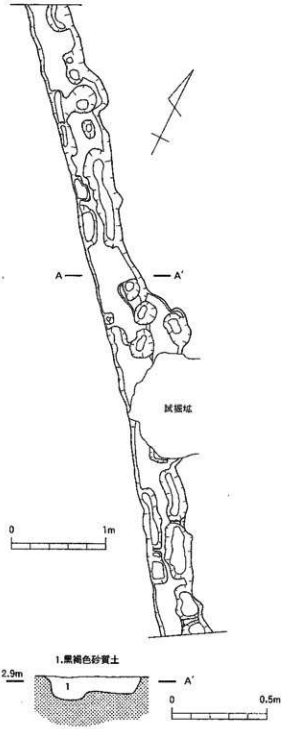
第36図　SD06出土遺物実測図（S=1/3）

第37図　SD08出土遺物実測図（S=1/3）

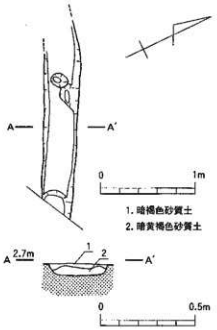
SD08（第37・38図）

2グリッド内で検出した。調査区外へ延びるが、幅10～21cm、深さ12cmでN－35°－Wの方向に延びている。SD05・07とほぼ平行する。

1は弥生土器の複合口縁の甕である。本来なら薄手のものとなるはずだが、口縁部は薄手でも頸部以下は薄手にするためのケズリ調整ではない。他に弥生中期から終末の土器破片及び須恵器片1点、黒曜石・玉髄の砕片が出土している。



第38図　SD08実測図
（平面図S=1/40、土層断面図S=1/20）



第39図　SD09実測図
（平面図S=1/40、土層断面図S=1/20）

SD09（第39図）

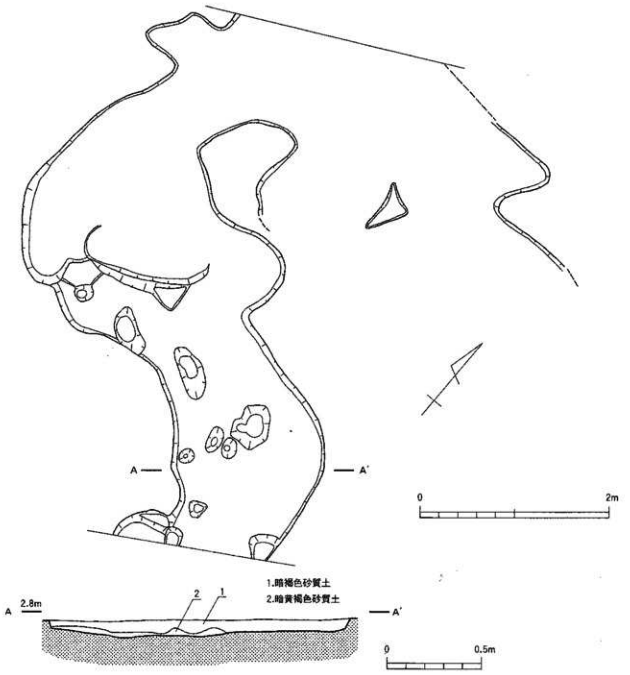
B3グリッド内で検出した。SD01に切られている。調査区外へ延びる方向と西側は不明になるが、幅10cm、深さ6cmでN－65°－Wの方向に延びている。

SD10 (第40～44図)

3・4グリッド内で検出した。西壁の立ち上がりは明確であったが、東壁は3層に切られており不明瞭である。幅160～400cm以上、深さ10cmで、ほぼN－36°－Wの方向に延びているが蛇行する。

41－1は安山岩製の石鏃である。半分は欠損しているが、薄手で縁辺部が鋭利になっている。

43－1～21、44－1～19は弥生土器である。43－1・2は広口壺である。1は立ち上がりまっすぐで長い頸部から口縁部が外反し、厚みのある端部は平坦面をつくり貼り付け浮文を1ヶ付ける。

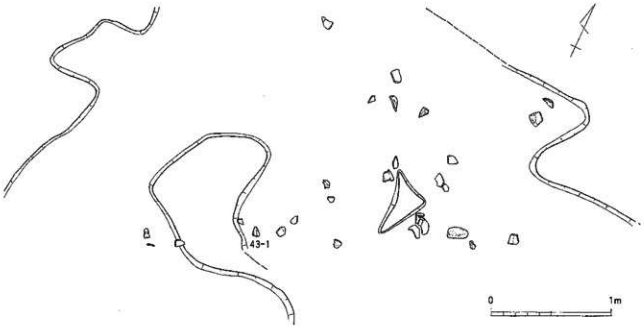


第40図 SD10実測図 (平面図S=1/40、土層断面図S=1/20)

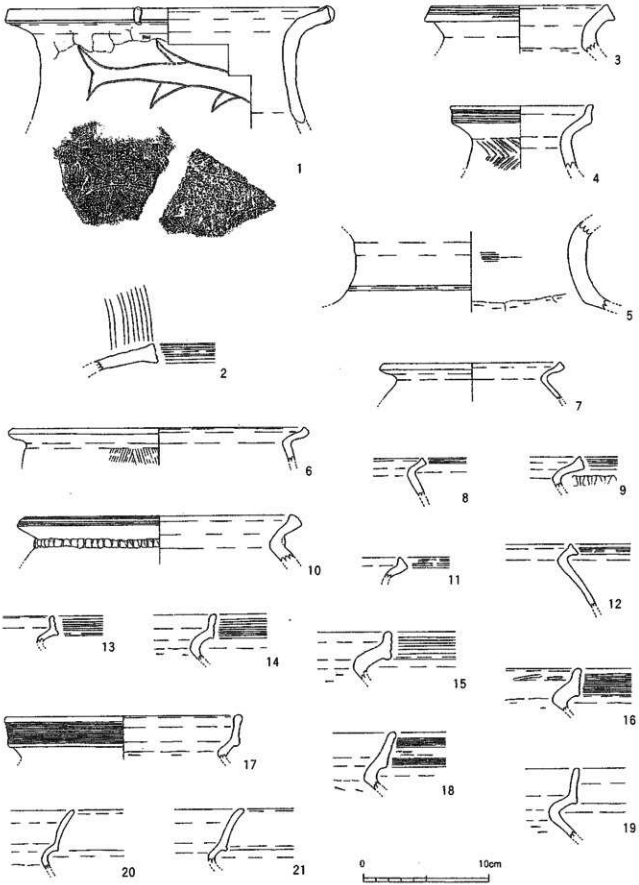
まっすぐに延びた頸部はまるでキャンバスのようで、そこへシャープな出で立ちのサメと思われる魚類がヘラ状工具により一匹描かれている。43－3・4は、口縁部が肥厚して面をもちそれぞれ3条の沈線文を施す。4は長めの頸部に貝殻原体による羽状文を施す。43－6～44－2までは甕である。43－6～8のようにあまり張りのない胴部から頸部が「く」の字状に屈曲し口縁部に移行し端部はわずかに肥厚し始めるものから、43－20・21、44－1・2のように薄手の複合口縁で、端部は外へ引きのばし突出部は斜め下方及び横へ引き出すようになる段階のものまで、順次変遷をおえるものが出土しているので、古手のものから並べてある。44－3は6×5cmの小破片であるが、ヘラ状工具により描かれたような木葉状の線刻が施されている。44－4～8は底部である。しっかりした平底から、極小さい平底まで出土している。7は底部中央に焼成前に穿孔された幅4～5mmの穴が穿たれている。44－9～12は高坏で、9と10はともに凹線文を施している。11は体部から口縁部にかけての段が緩くなりまだ稜線として残る段階のものである。また内面口縁部に焦げたような部分があるので、転用として甕の蓋として使用されたのではないかと思われる。44－13・14は鼓形器台で筒部が縮約されたものである。44－15は低脚坏である。脚部の小さいものであるがつくりは精緻である。44－16～19は小型の鉢及び甕で17以外は内面にミガキ調整を施している点に共通性があるため祭祀用の器ではないかと思われる。

以上SD10からの出土遺物は、時期幅が広いので古い時期の遺物は下層の包含層からの混入品と思われる。

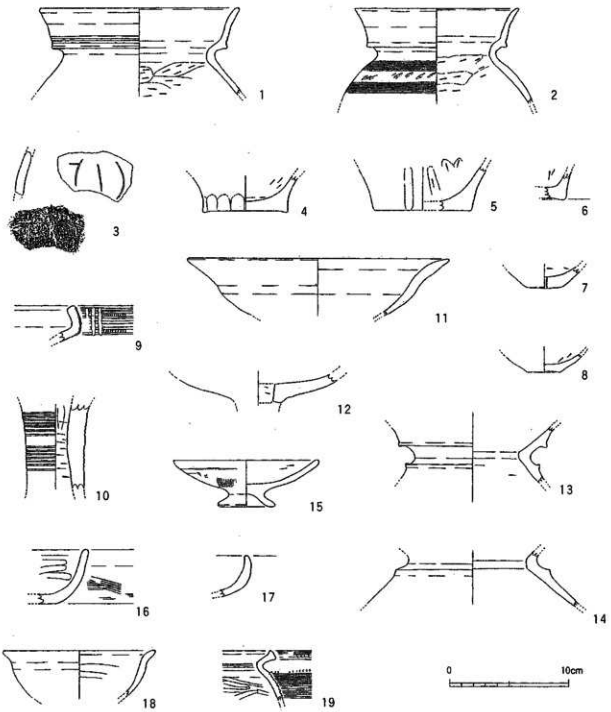
第41図　SD10出土石器実測図
(S=1/2)



第42図　SD10遺物出土状況図 (S=1/30)



第43図　SD10出土遺物実測図1（S=1/3）



第44図　SD10出土遺物実測図2 (S=1/3)

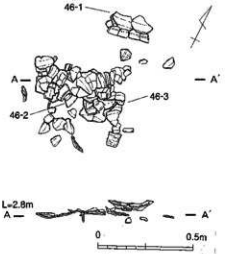
土器群

Ⅰ区では土器群1～17まで捉えることができた。当概地の土器群は、同一土層内で土器のある程度の視覚的なまとまりをひとまとめにして取り上げたものである。

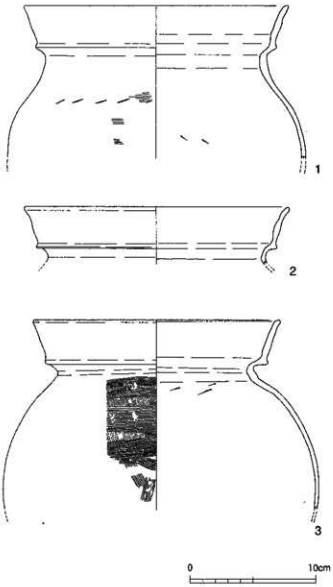
土器群1（第45・46図）

A3グリッド内、8層中で検出した。平面80×75cm、深さ15cm範囲内での出土土器を一括したもので、甕数個体を一度に投げ捨てたような状況である。

1～3は弥生土器の複合口縁甕である。ともに口縁突出部を横に引き出している。端部は1から3にかけて徐々に外に曲げ平坦面をつくっている。



第45図　土器群1出土状況図（S=1/20）



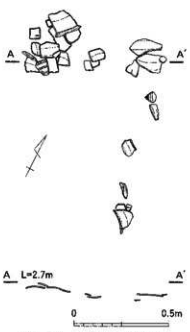
第46図　土器群1出土遺物実測図（S=1/3）

土器群2（第47・48図）

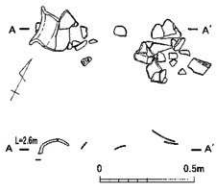
B4グリッド内、8層中で検出した。平面75×120cm、深さ10cm範囲内での出土土器を一括したものである。ほぼ同時期の土器片の集中である。

1～7は弥生土器である。1～5は甕で、頸部が「く」の字状に屈曲して口縁部に移行し、口縁端部が肥厚し始めたものであり、2は口縁面に2条の間に左から刻目文を施し、他は1～3条の沈線文

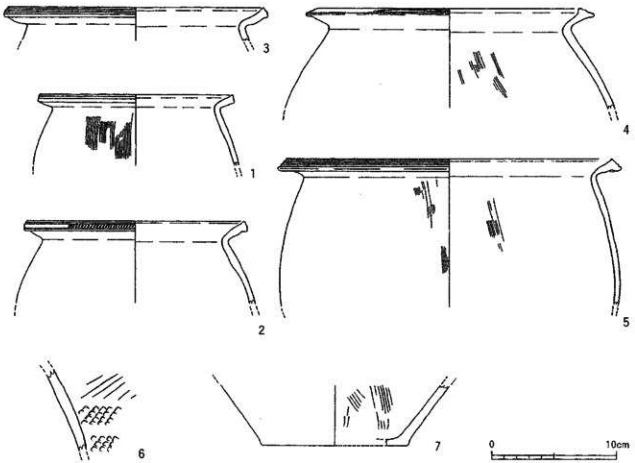
を施している。胴部はまだ張りの少ないタイプである。6は胴部破片で、ヘラ描文、4点単位の列点文を2段施している。7の底部は、底面が薄いつくりのもので胴部のほうに厚みがある。



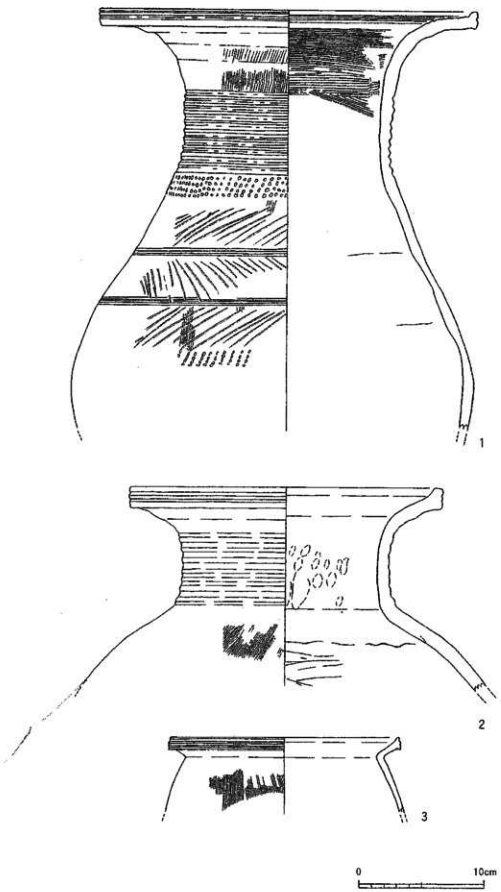
第47図　土器群2出土状況図
(S=1/20)



第49図　土器群3出土状況図(S=1/20)



第48図　土器群2出土遺物実測図(S=1/3)



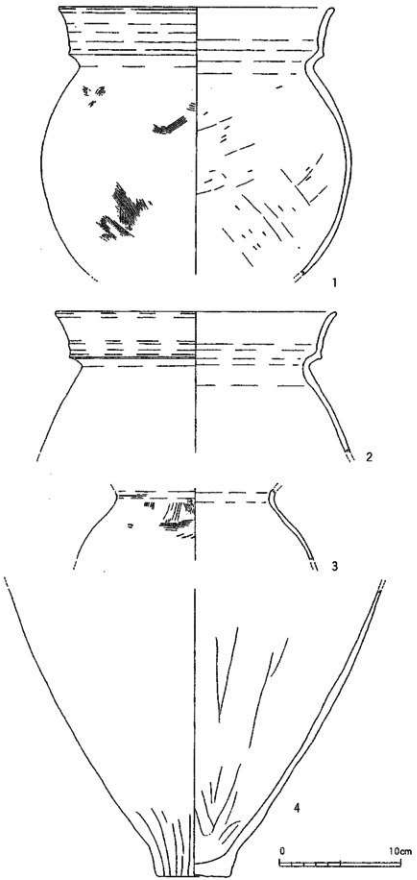
第50図　土器群3出土遺物実測図1（S=1/3）

土器群3（第49～51図）

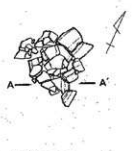
A4グリッド内、8層中で検出した。平面95×40cm、深さ15cm範囲内での出土土器を一括したものである。東寄りの土器集中は、SK27の北半分不明瞭となっている場所からの出土であり、SK27でも注記しているように相互に混入していると思われる。

50－1・2は壺である。1はなだらかな胴部に頸部がすぼまって立ち上がり口縁部は外へ広がる。頸部以下の文様構成は凹線文、列点文、その下に平行沈線文が2段ありそれぞれの間に線の長いヘラ描き文を施している。胎土も赤黒い色調をしているので在地のものではなく、吉備周辺からの搬入品ではないかと思われる。2は頸部に凹線文を施文している点、直立ぎみの頸部から口縁部は外に広がり端部を肥厚させて凹線文を施す点などから、1の類似品とは思われるが2の胎土は在地のものである。

50−3~51−1~3までは甕である。50−3は頸部「く」の字に屈曲し、口縁端部は上下に肥厚して3条の沈線文を施している。51−1~3は複合口縁の甕である。口縁端部はわずかに外に曲げ平坦面をつくり、突出部は横へ出す。1は胴張りだが、2はなだらかな胴である。51−4は胴部から底部にかけて残存するもので、胴部の割に底部径が小さい。



第51図　土器群3出土遺物実測図2（S=1/3）

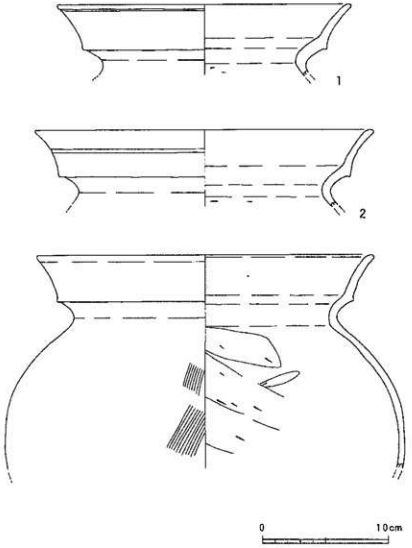


第52図　土器群4
出土状況図(S=1/20)

土器群4（第52・53図）

B6グリッド内、3層中で検出した。平面43×42cm、深さ6cm範囲内での出土土器を一括したものである。当遺跡の土器群で最も新しく、最後に廃棄されたものである。

1～3は弥生土器の甕である。3個体ともこの時期の複合口縁の甕としては少々厚手のため重量感があり、胎土も1～2mm大の砂粒子を多く含んでいるため、いわゆる当該期の土器胎土とは異なり後期前半までの胎土と似通っているようである。またこの3個体は同一個体である可能性も否めない。もし同一個体であるならば、図化していない土器破片も同様の破片がほとんどであるので、一個体の甕が意識的に埋められたかまたは廃棄されたものと思われる。

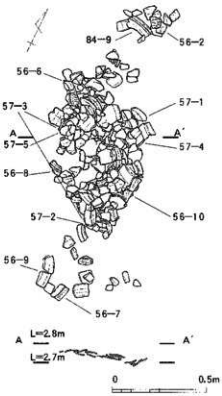


第53図　土器群4出土遺物実測図(S=1/3)

土器群5（第54～57図）

A5グリッド内、12層中で検出した。平面75×155cm、深さ10cm範囲内での出土土器を一括したものである。土器がかなり密集して重なり合って出土している。

56－1～10、57－1～7は弥生土器から古墳初頭の土器である。56－1は大型の壺で、厚手でどっしりとした感触のものである。垂下した口縁面には4条の凹線文が施され、その上に斜格子文の痕跡が観察される。頸部内面はハケ目調整である。56－2～10までは厚手の複合口縁の甕である。口縁突出部はほとんど出ないもので、口縁端部を膨らませて丸くおさめたポッテリタイプに3・5、単に丸くおさめたものに2・4・6・7がある。8～10は端部を引きのばし始めたタイプである。口縁面の無文のものに2・10、貝殻腹縁による擬凹線文を多条に施すものに3・4、5～9は浅い擬凹線文を施したのちに撫消すものである。10は肩部に波状文を施している。9・10のように胴部はあまり張ることはない。57－1～4は次の段階の複合口縁の甕で、口縁突出部を横に引き出し始め、特に3・4はかなり強く横に引き出している。またこの2個体は口縁部中央から外に屈曲させている。口縁端部はまっすぐに引き出すもの1と丸くおさめるもの2～4とがある。胴部は1・4のように球形に張りだすようである。57－5は底部破片である。小さめの平底で56－5以降の甕類のものではないかと思われる。57－6・7は高坏で6は口縁部に凹線文を施すタイプのもの、7は厚手の荒い感じの脚である。57－8は複合口縁状の鼓形器台の脚部分で、外面に朱塗りの痕跡が残っている。

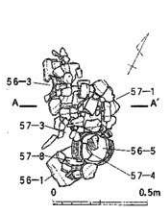


第54図　土器群5出土状況図1(S=1/20)

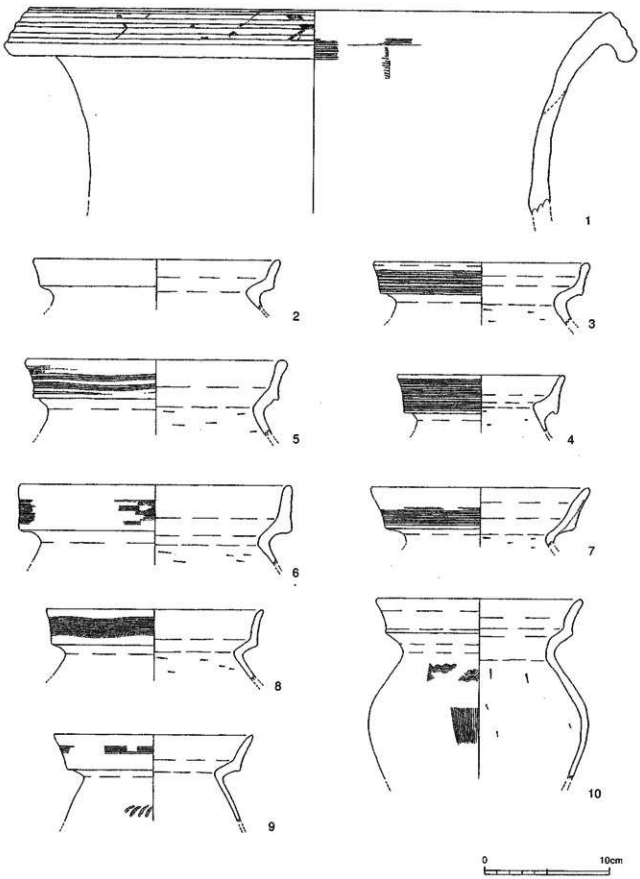
土器群6（第58・59図）

B5グリッド内、12層中で検出した。平面125×235cm、深さ21cm範囲内での出土土器を一括したものである。平面でみる限り散発的であるが、大きな破片がある程度まとまっていたので一括で取り上げた。

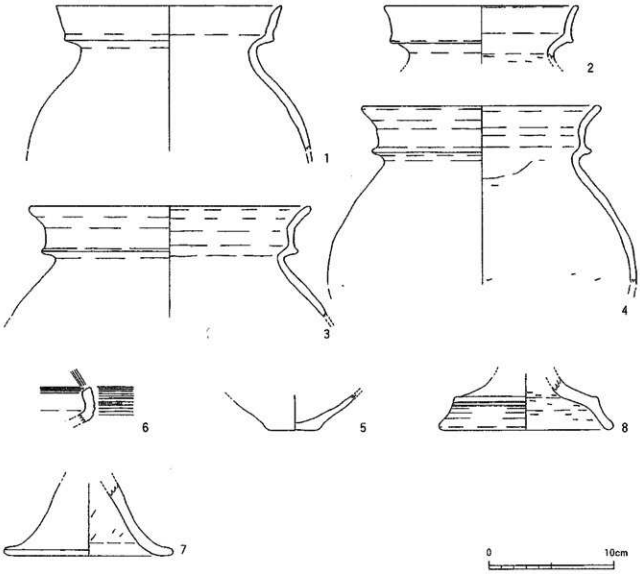
1～14は弥生土器である。1は頸部が長く直立し複合口縁となる。端部は引きのばし、突出部は横へ引き出す。頸部と胴部の境には口縁突出部と対比させたような突帯文がめぐる。胴部は球状に張る。2～8は複合口縁の甕である。2・3は口縁部がまだ短く、2は4条の凹線文を施すが、3は無文である。4～8は複合口縁部がのび始め、端部を引きのばし、突出部は出ない。口縁面は数条の浅い擬凹線文を施し撫消している。4は口縁部が不格好で胎土も在地のものとは異なり茶褐色で堅固な感じがするため、山間部からの搬入品と



第55図　土器群5出土状況図2
(S=1/20)



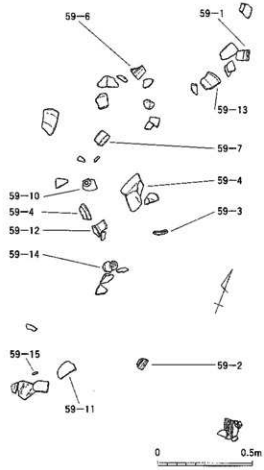
第56図　土器群5出土遺物実測図1（S=1/3）



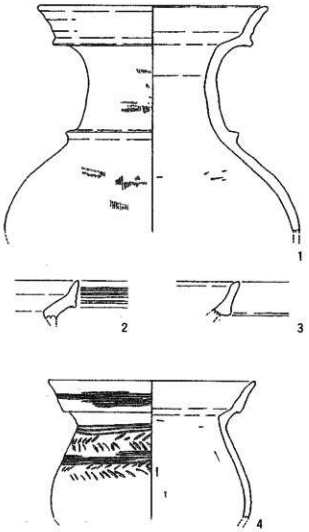
第57図　土器群5出土遺物実測図2（S=1/3）

思われる。10～12は高坏で、坏部の2個体は円盤充填法である。12の脚部は内面ケズリ上げて絞っている。13は鼓形器台の受部である。器高が高く筒部も長いタイプで、口縁端部は外に曲げ平坦面をつくる。14は低脚坏で小さく反った脚部に坏が立ち上がる。

15は凝灰岩製の管玉である。片端が欠損しているが現状で長さ2.5cm、幅0.9cmある。風化著しく精製品ではない。



第58図　土器群6出土状況図（S=1/20）

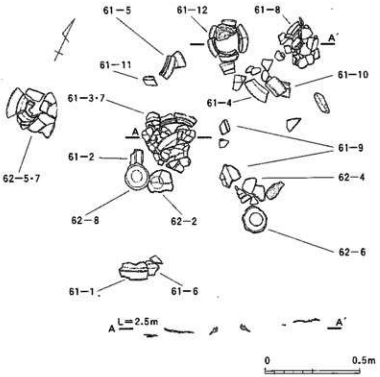


第59図　土器群6出土遺物実測図（S=1/3）

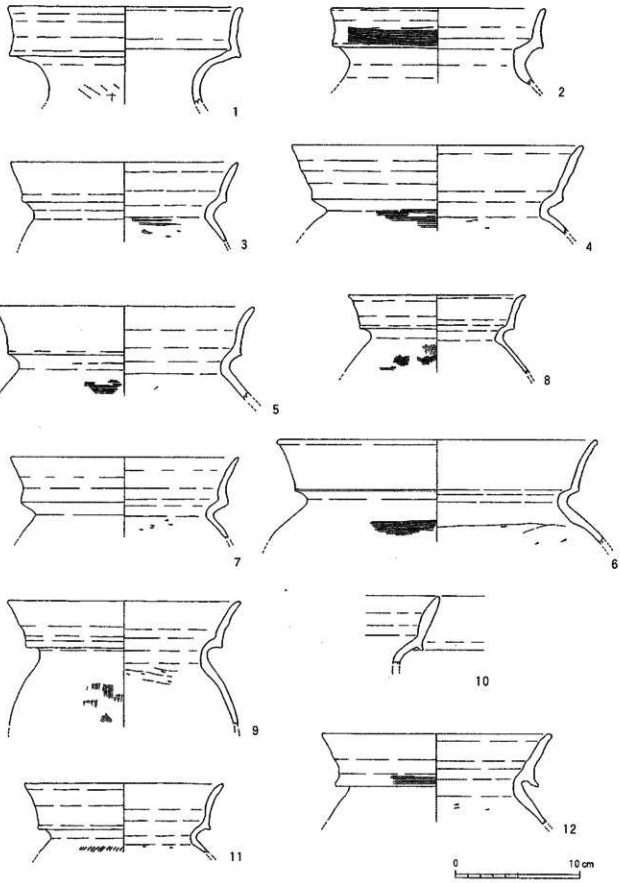
土器群7（第60～62図）

B6グリッド内、12層中で検出した。平面170×140cm、深さ10cm範囲内での出土土器を一括したものである。各かたまりは、ほぼ一個体の廃棄状況である。

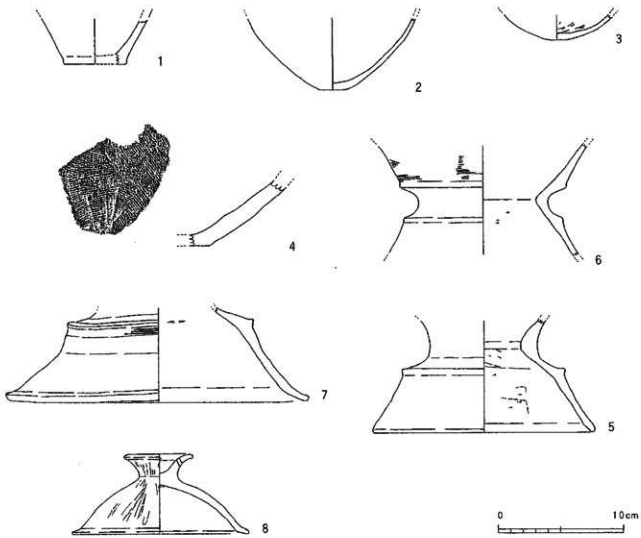
61－1～62－8は弥生土器である。61－1は内傾ぎみに立ち上がる複合口縁で、頸部には貝殻腹縁による刺突文が施されている。61－2～12は複合口縁の甕である。口縁端部はほとんどがまっすぐに引きのばしているが、2・6・12は丸くおさめている。また9はわずかに外に曲げ平坦面をつくっている。突出部はわずかに斜め下に出ているものがほとんどであるが、10・11、特に12はかなり強く引き出している。胴部は4・6のように張り出すものと、3・9のようにあまり張らないものとがある。また2は口縁部下半に貝殻腹縁による8条の擬凹線文を施し、上半はそれを撫消している。62－1～3は底部破片である。1は小型であるが平底で外面ミガキ調整が施してある。2は一応稜線の明瞭な小さな平底で、3はそれから稜線が不明瞭となり平底の痕跡を残したものである。62－4はごつごつした感じの破片で、わずかに底部が残っている。外面は荒いナデ調整、内面には単位は大きいが規則的なハケ目調整が施されている。単なる器としてではなく、何か生産に関わる容器として使用されていたと思われる。62－5～7は鼓形器台である。5は無文で短めの脚部から太くはあるが直立ぎみの筒部へと移行している。6は筒部も短くなったものであるが上下の台はまだ少々直立ぎみで器壁の長いタイプである。7はそれから脚部が裾広がりとなるもので、6・7ともに外面に沈線の痕跡が観察される。62－8は蓋である。2コ一対の孔が穿ってあるつまみに、丸い体部で裾広がりとなる。



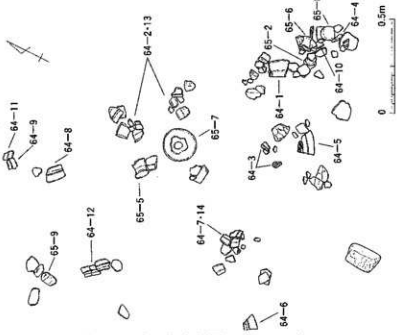
第60図　土器群7出土状況図（S=1/20）



第61図　土器群7出土遺物実測図1（S=1/3）



第62図　土器群7出土遺物実測図2（S=1/3）

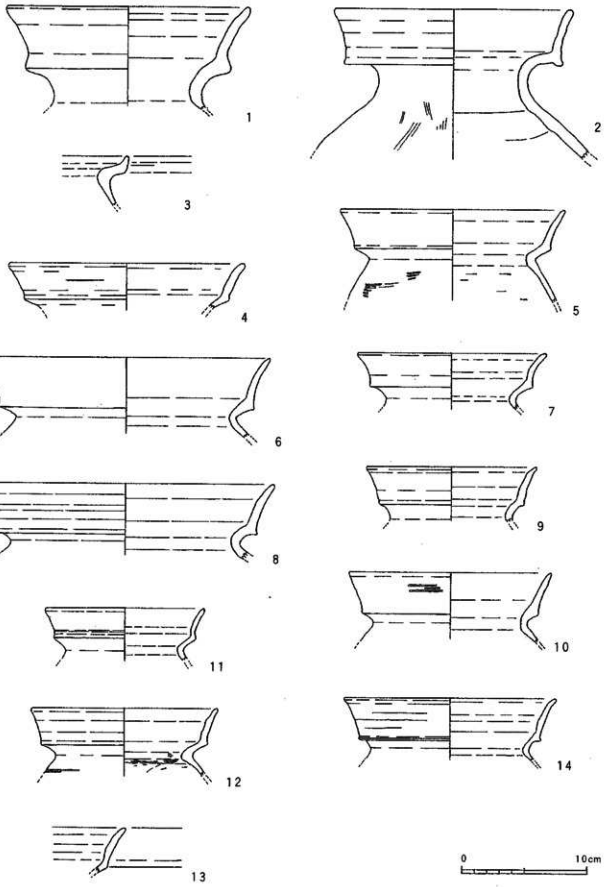


第63図　土器群8出土状況図（S=1/20）

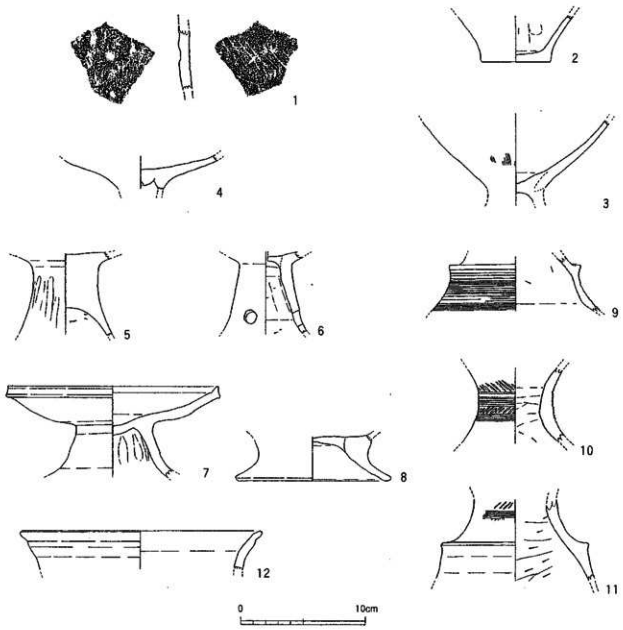
土器群8（第63～65図）

B5グリッド内、13層中で検出した。平面165×190cm、深さ13cm範囲内での出土土器を一括したものである。平面でみる限り散発的であるが、大きな破片がある程度まとまっていたので一括で取り上げた。

64－1～14、65－1～12は弥生土器である。64－1・2は複合口

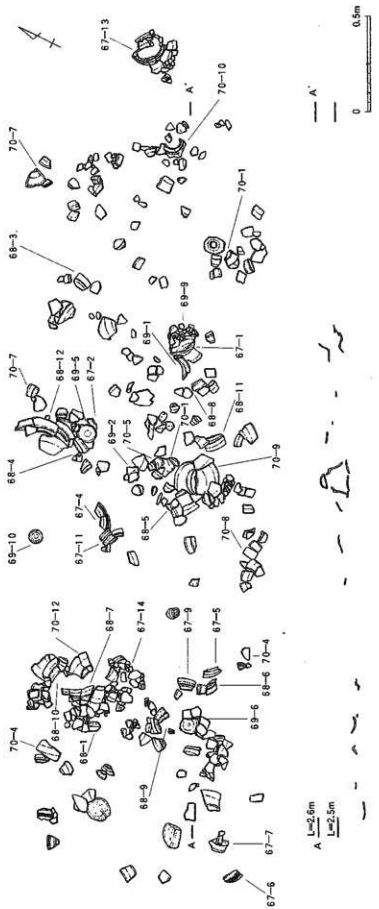


第64図　土器群8出土遺物実測図1（S=1/3）



第65図　土器群8出土遺物実測図2（S=1/3）

縁の痕で、1は厚手のもの、2は口縁部を直立ぎみに突出部を強く引き出し、胴部が張り出すものである。64－3～14は複合口縁の甕である。3は厚手で短い口縁部に3条の沈線文が観察されるものである。他のものは口縁部無文のもので、ほとんどの端部をまっすぐに引きのばすが、4・7・11は丸くおさめるものである。突出部はまだあまく少しだけ斜め下に出すものや、14のように横に引き出すものもある。また胴部はあまり張らないようである。65－2は薄手の平底である。65－3～7は高坏で3は細めの接合部から急激な立ち上がりをみせる深い坏部で外面ハケ目調整、内面丁寧なナデ調整を施す。5は接合部にかなり厚く粘土を詰め込み重量感を出している。6は脚部が裾広がりになる手前の位置に3個の孔を穿っている。7は口縁端部がわずかに肥厚して凹面をつくり広くて浅い坏部をもつ高坏で脚部も太くてしっかりしている。65－9～11は鼓形器台で、脚部がまだ直立ぎみで



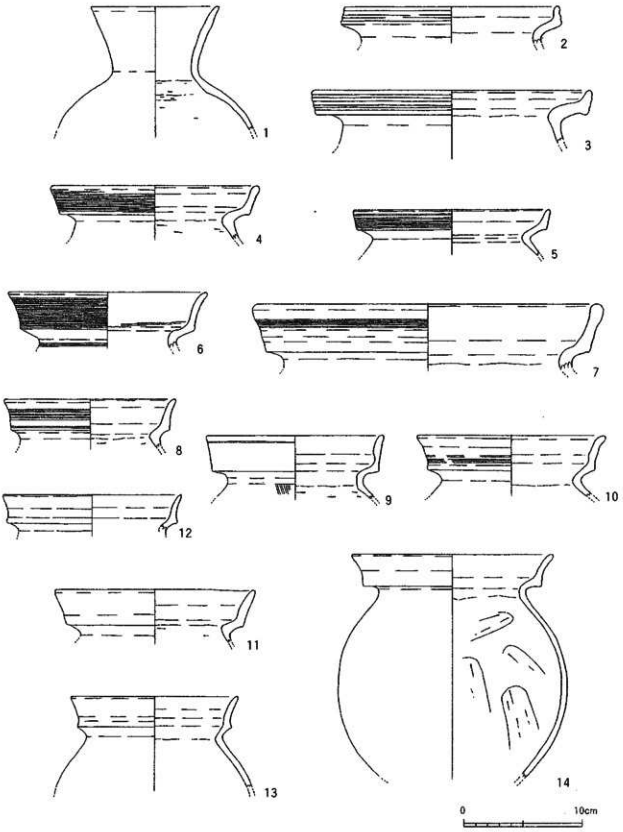
第66図　土器群9出土状況図（S=1/20）

筒部のあまり縮約されていないものである。9は脚部に貝殻腹縁による多条の沈線が施されている。10・11の筒部には連続刺突文、凹線文を施す。胎土は緻密である。12は鉢と思われるが口縁部破片なので器形は不明である。

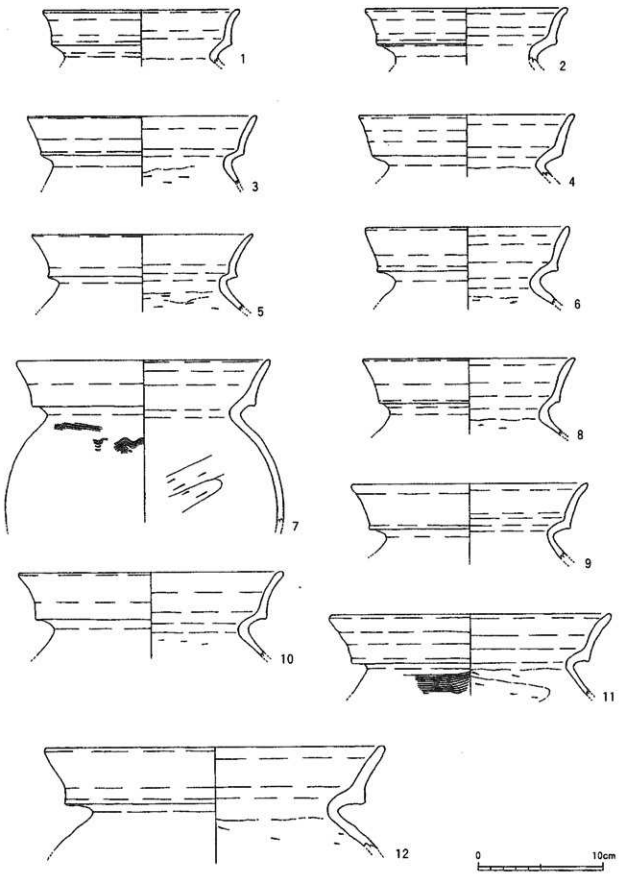
土器群9（第66～70図）

A6グリッド内、13層中で検出した。平面450×135cm、深さ25cm範囲内での出土土器を一括したものである。1m以上離れて土器が接合しているので、ほぼ同時期に廃棄されたものであろう。

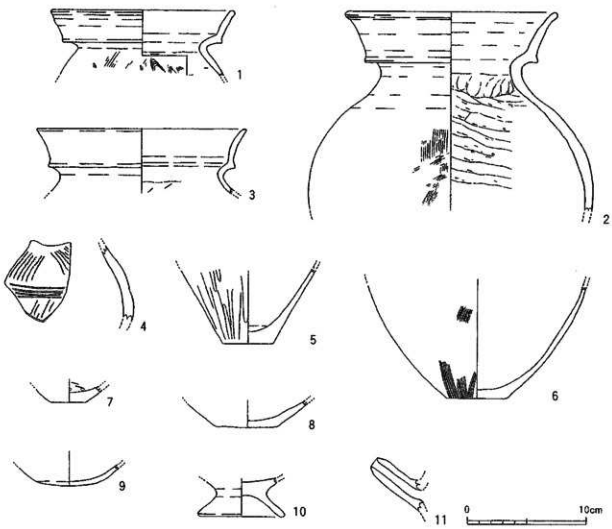
67－1～14、68－1～12、69－1～11、70－1～12は弥生土器である。67－1は薄手の長径壺である。外傾してのびる口縁部に、丸く膨らむ胴部がつく。胴部内面はケズリ調整によりかなり薄手の器壁とする。またこの上半部には、器壁の薄さ、胎土が酷似しているのと出土状況より、69－9が底部であろう。67－2～14、68－1～12、69－1～3は複合口縁の甕である。67－2～8は口縁部に凹線文、擬凹線文、沈線文を施したもので、徐々に口縁部ものびて条数も増し、それとともに施文具も変化していくようである。7・8は沈線を施したのちに撫消しを行っている。口縁突出部は下に出るか、出ないで断面逆「L」字状を呈している。5は口縁部の沈線が、他のものは貝殻によ



第67図　土器群9出土遺物実測図1（S=1/3）

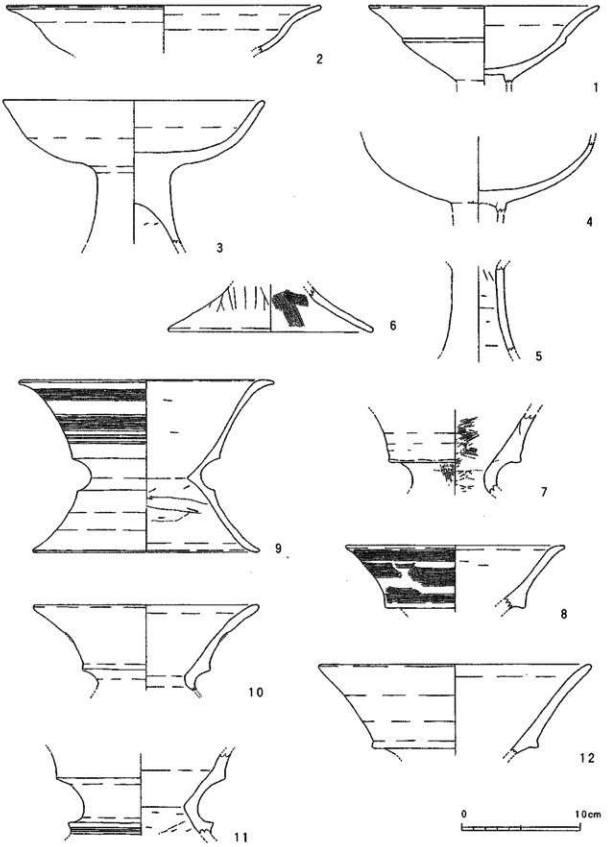


第68図　土器群9出土遺物実測図2 (S=1/3)



第69図　土器群9出土遺物実測図3（S=1/3）

って施されているのに比べ、クシ状工具によっているのと、胎土に2mm大の砂粒子が含まれ橙色の強い色調を呈している点が、在地のものとは異なっていると思われる。67－9からは口縁部が無文となる。67－9・11・12はまだ直立ぎみの口縁部をもつもので、10は口縁面に強いナデ調整によりできたと思われる沈線が観察される。67－13以降は、口縁部を外傾させ端部を引きのばし突出部は斜め下方に少しずつ引き出す。67－14のようになで肩であまり胴部は張らない。調整方法もほぼ同じく口縁部はナデ調整。内面頸部以下はケズリ調整、外面胴部はナデまたはハケ目調整が施されている。69－2は内面頸部に指押さえによって引きのばしているので壺として扱った方がよいのかもしれない。69－3は口縁端部をわずかに外に曲げ平坦面をつくり、突出部も強く出している。69－4は胴部破片である。貝殻により柳が垂れ下がったような文様が平行沈線文を境に2段施してある。胎土が緻密で2mm大の砂粒子を含むのが特徴である。69－5～9は底部破片である。小型だけれどしっかりした平底5・6、底辺の稜線があまくなってきたもの7～9がある。9は前述したがおそらく67－1の底部であろう。また7は平底の最小径のものと思われる。69－10は低脚坏、69－11は注口部で



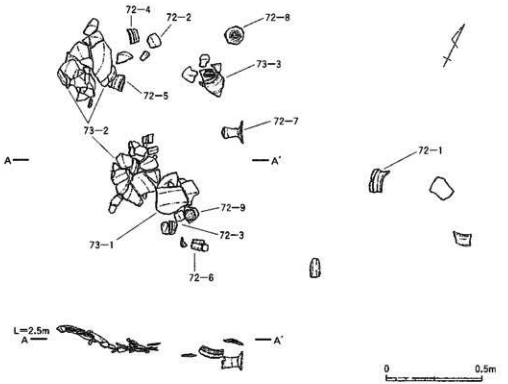
第70図　土器群9出土遺物実測図4（S=1/3）

ある。荒い粘土で大きさに対して太めにつくっている。しっかり焼成されているせいか黒褐色を呈している。70－1～6は高坏である。1は坏部が複合口縁状になって口縁部と体部の境に段をつくるもので、2はその段が不明瞭になったものである。3は1～3mm大の砂粒子を多く含み荒い胎土で色調も灰白色を呈している。接合方法は、1は充填法であろうが底に刺突孔があいてない。3は粘土塊を詰めて重量感のあるものとしている。4はいわゆる円盤充填法である。70－7～12は鼓形器台で、7は厚手でかなり重量感ある仕上げとしている。筒部は短く太くなる前の中間のもので受部は直立ぎみに立ち上がり、外反している。8・9は受部外面に多条の沈線文を施し、内面にはケズリのち丁寧なナデ調整を行っている。9はシャープなつくりで内面の稜線は鋭い。

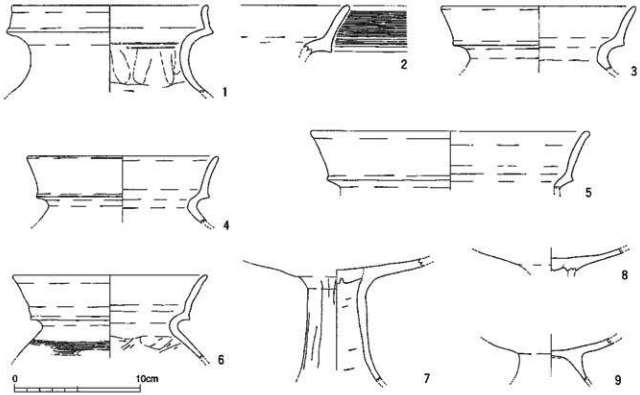
土器群10（第71～73図）

A7グリッド内、13層中で検出した。平面210×130cm、深さ25cm範囲内での出土土器を一括したものである。

72－1～9、73－1～3は弥生土器である。72－1は内傾した複合口縁をもつ壺である。頸部内面には頸をのばすための指押さえ調整が施してある。72－2～6は複合口縁の甕である。2は口縁面に貝殻腹縁による13条の擬凹線文を施したのちに撫消しにより浅くしている。口縁端部は丸くおさめ突出部は膨らまし斜め下へ出す。3・4は口縁端部を引きのばし、突出部は斜め下から横へ引き出す。5・6になると口縁端部は外に曲げて平坦面をわずかにつくり始める。突出部は横に引き出すようになる。例外なく調整は、外面及び内面頸部以上ナデ、頸部以下ケズリ調整を施している。7・8は高坏で、円盤充填法にて坏部と脚部を接合している。9は低脚坏で、幅のある脚部を有する。73－



第71図　土器群10出土状況図（S=1/20）



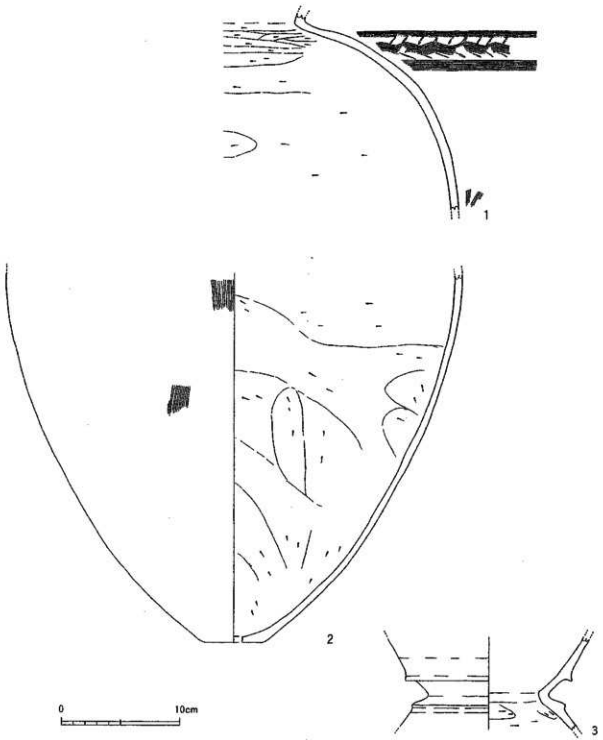
第72図　土器群10出土遺物実測図1（S=1/3）

1・2は大型の壺または甕の胴部から底部である。それぞれ直接接合はしないが、出土状況、土器胎土及び調整方法などが酷似しているため同一個体の可能性あり。肩部には平行沈線文により区画し、羽状文の中央に波状文を施している。またこの文様は、平行沈線文と波状文の条数、羽状文の1本の長さと条数の長さがほぼ一致するので、すべて同一の原体である貝殻で施工していると思われる。また1・2の出土状況であるが、2の方は大きく2ヶ所に集中しており、1と近接して出土しているのは底部と胴部下位、1と離れている方が胴部上位であった。この不自然な出土状況と焼成後の底部穿孔土器であることから人為的なものがあるように思われる。73－3は鍔形器台である。受部の突出部が鋭いの比して脚部のそれは丸みのあるゆるやかなものである。

土器群11（第74・75図）

A8グリッド内、13層中で検出した。平面150×100cm、深さ17cm範囲内での出土土器を一括したものである。

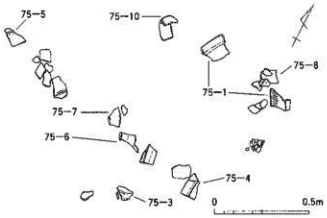
1～10は弥生土器である。1は内傾した複合口縁をもつ壺で、頸部にはヘラ書きの綾杉文が描かれている。2は頸部が「く」の字に屈曲し、口縁部が上下に肥厚して2条の凹線文を施す甕である。頸部には、押し下げる部分が狭いので指頭ではない工具による圧痕文帯をめぐらす。3～5は複合口縁の甕で、5は大型品と思われ口縁端部は外に曲げしっかりした平坦面ができている。突出部は斜め下



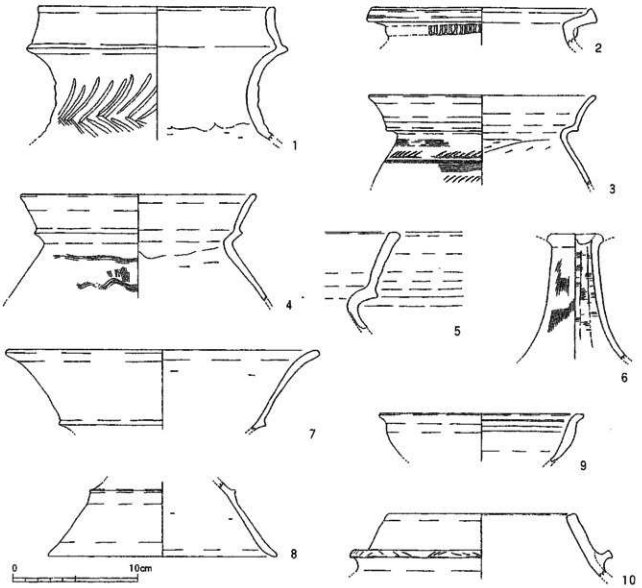
第73図　土器群10出土遺物実測図2（S=1/3）

に引き出す。3・4は口縁端部をのばしわずかながら平坦面をつくり、突出部は横へ出す。特に3は全体にシャープなつくりで、肩部にはヘラ状工具による連続「ノ」の字の刺突文を2段施す。外面胴部には平行沈線のようなヨコハケ目調整が施される。4の肩部には平行沈線文、波状文が観察される。6は高坏の脚部である。円盤充填法にて接合してあり、細身のシャープな脚柱部から裾広がりとなる。

内面には脚部を絞り込む際の絞り痕が観察される。7・8は鼓形器台で受部と脚部である。それぞれ体部の器壁は薄いが端部は厚くしっかりとしたつくりである。9・10は鉢とした。9は口縁部を屈曲させ端部を丸くおさめたもので、浅い形状となりそうである。10は刻目を施した鍔状の貼付突帯文がめぐるもので、口縁端部は平坦である。これの上下を逆にすると甕形土器ともみえるが、内外面ともナデ調整であるため鉢とした。



第74図　土器群11出土状況図（S=1/20）

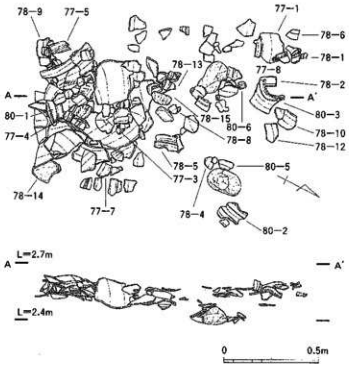


第75図　土器群11出土遺物実測図（S=1/3）

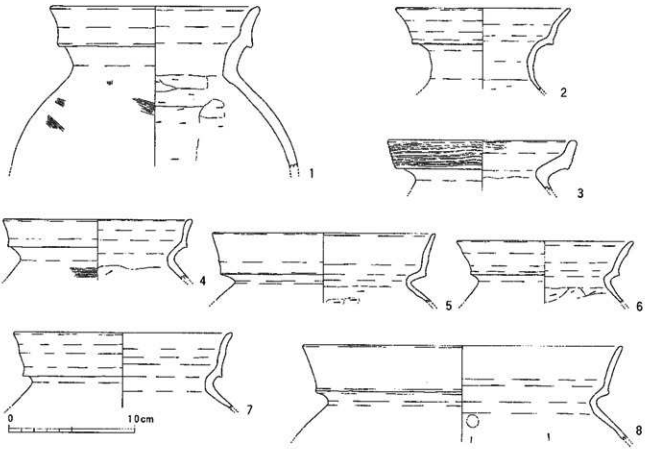
土器群12（第76～80図）

Ｂ７グリッド内、14層中で検出した。平面150×110cm、深さ25cm範囲内での出土土器を一括したものである。大きなひと固まりは79－２の大型甕でその東南には厚手の79－１がひとまとまりに出土している。２個体とも折り重なるように出土した。

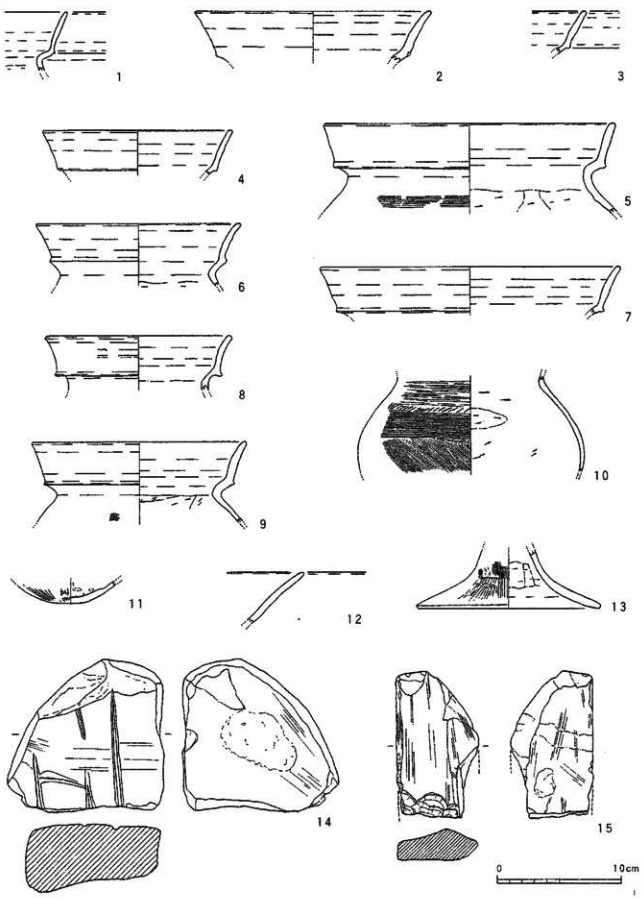
77－１～８、78－１～13、79－１・２、80－１～６は弥生土器である。77－１・２は複合口縁の壺で、１は厚手のもので、口縁部は全体の大きさからみると小さく、端部は丸くおさめ突出部は丸味を帯びて斜め下に出、内面胴部のケズリ調整は荒い。なだらかな肩部であ



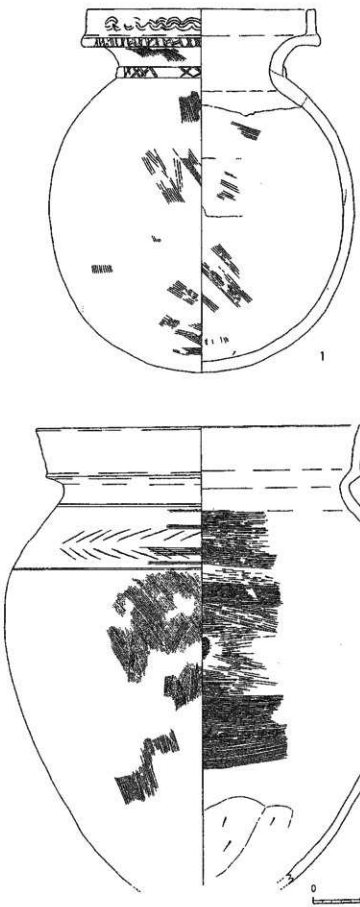
第76図　土器群12出土状況図（S=1／20）



第77図　土器群12出土遺物実測図1（S=1／3）

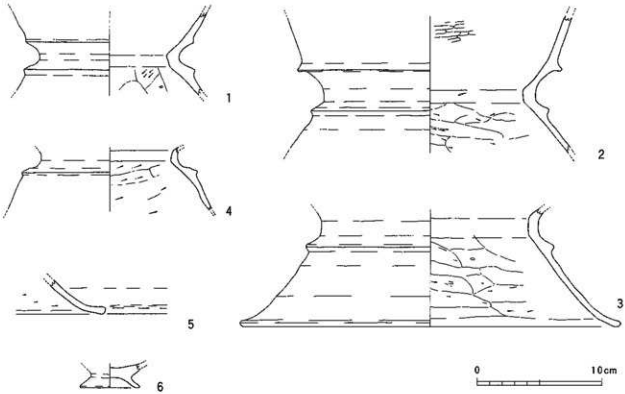


第78図　土器群12出土遺物実測図2（S=1／3）



第79図　土器群12出土遺物実測図3（S=1／4）

る。2は薄手のもので1に比してもシャープなつくりである。口縁端部はまっすぐに引きのばし突出部は斜め下にわずかに出る。77－3～8、78－1～9は複合口縁の甕である。77－3は短めの口縁部で端部は厚く丸くおさめ突出部はわずかに下に出る。口縁面には貝殻腹縁による擬凹線文が施されたのち上部に撫消しを行っている。これ以外のものは口縁部は無文である。77－4は口縁部がまだ短く器壁も徐々に薄くなる段階のもので、口縁端部は丸くおさめ突出部は斜め下にわずかに出る。77－5は頸部がかなりきつく屈折し肩部が張ったものである。また口縁端部をまっすぐに引きのばし突出部を下または横へ出すもの77－5～7。口縁端部をのばして止め突出部を斜め下または横に出すもの77－8・78－1～3。口縁端部を外に曲げて平坦面をつくり突出部を斜め下または横に出す78－4～9。特に8は突出部を意識し強く引き出している。また肩部の張りぎみのもの77－7・8、なだらかなもの77－4・6、78－5・9である。78－10は胴部最大径以下に煤が付着しているので甕の胴部であろ



第80図　土器群12出土遺物実測図4（S=1／3）

う。頸部から下にヨコハケ目調整、胴部最大径以下には斜め方向のハケ目調整を行っている。また肩部には貝殻腹縁による連続「ノ」の字状の刺突文が施されている。78－11は稜線の不明瞭な平底の痕跡を残しただけの底部で、10の胴部と同一個体の可能性もある。78－12・13は高坏である。12は口縁部と体部の境に段があったものが退化し体部に名残りの膨らみをもつだけの坏部破片である。13の脚部はかなり裾広がりで脚柱部より裾部に厚みがある。79－1は大型の複合口縁壺である。全体的に厚ぼったく胴部は球形の丸底で、体部内面はハケ目調整を行っている。外反してのびた口縁部にやや内傾させた複合部を接合した複合口縁で、端部は平坦面を有し突出部は鍔状になり斜格子文を施す。口縁面には、2本の工具をスタンプ状に用いて施文した組合せ波状文を有する。短い頸部には、口縁突出部同様の斜格子文を施す貼付突帯文がめぐる。胎土に1～4㎜大の角のない丸い砂粒子を多く含み、その中には在地の胎土では確認できない小豆色の砂粒子が含まれている。色調も橙褐色で在地のものとは違い搬入品である。79－2は大型の複合口縁甕である。口径と頸部径の差のない口の開いたもので、倒卵形を呈する。口縁端部は外に曲げしっかりした平坦面をつくり突出部は横に出す。肩部には浅く幅の広い沈線を2条施して区画し、その中に貝殻施文具による羽状文を施す。外面肩部の区画内は浅いヨコハケ目調整、以下は縦方向のハケ目調整を行い、内面にもハケ目調整を行っている。80－1～5は鼓形器台で、縮約されたタイプで器面は無文である。1は厚手で重量感があり色調もにぶい橙褐色を呈しているもので、2も少々厚手ではあるが1ほどではなく重量感はない。80－6は低脚坏で、小さくのびた脚部である。

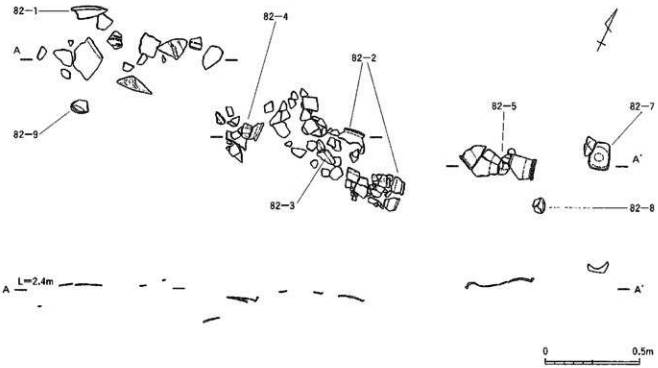
78－14・15は石製品である。一応砥石の分類に入れておくが、14は片面は全面研磨面として

使用した上で、玉類でも砥いだような幅0.3～0.5cmの溝が平行して3本つくられ、反対面では研磨痕及び敲打痕により石皿状を呈している。15は全体に研磨が及び、表裏面と側縁の稜線に丸味があることから磨製石斧の未製品であることも否めない。

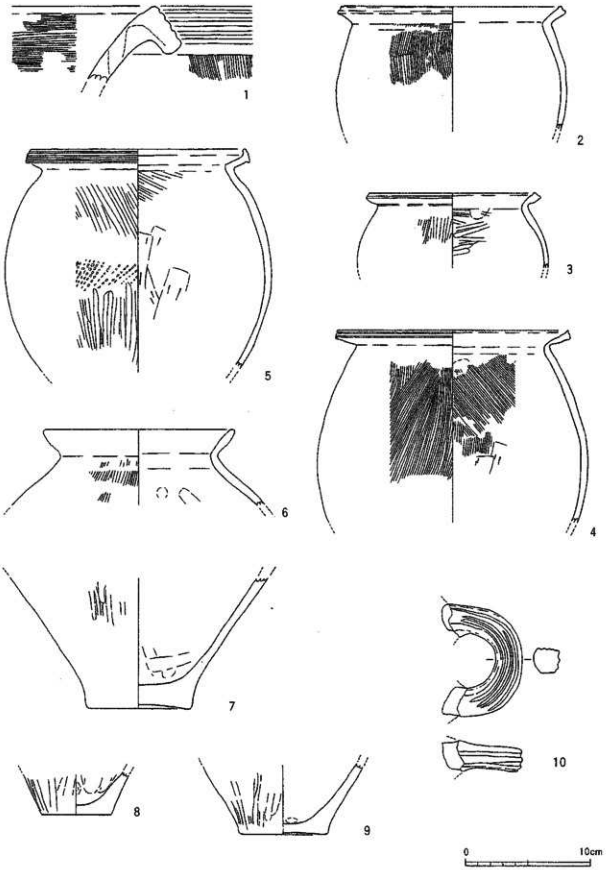
土器群13（第81・82図）

A4グリッド内、16層中で検出した。平面300×110cm、深さ30cm範囲内での出土土器を一括したものである。

1～10は弥生土器である。1は大型壺の口縁部破片で、器壁がかなり厚手で外反した頸部から断面が「く」の字状に垂下し端部は丸くおさめている。口縁面には4条の凹線文が施される。2～5は胴部のあまり張らない最大径が胴部中央にあるタイプの甕で、頸部が「く」の字状に屈折し口縁部に移行する。2は口縁部がわずかに肥厚し、口縁面は強いナデにより凹んでいる。3・4は口縁部が上に引きのばすように肥厚し、4は口縁面に2条の沈線文を施す。5は口縁部が上下に肥厚し口縁面には3条の沈線文を、胴部最大径に列点文を施している。また4から5にかけて口縁部が拡張していくにつれ内面調整のケズリが口縁部付近まで上がってきている。6は単純口縁の甕の口縁部である。他の土器と比べて胎土が緻密で粉っぽく色調も橙色であるため上層からの混入品と思われる。7～9は壺及び甕の底部でしっかりした平底である。それぞれ底面ナデ調整、外面ミガキ調整、内面ケズリ調整のけずりっぱなし、またはのちナデ調整を行っている。10は扁平で半円形の土器の把手である。表面と外側面にそれぞれ4条と2条の凹線文が施され、裏面は平坦に仕上げてあるため、この裏面が視覚に入らない位置に土器と接合していたものと思われる。



第81図　土器群13出土状況図（S=1／20）



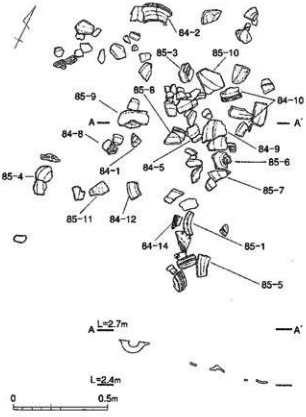
第82図　土器群13出土遺物実測図（S=1／3）

土器群14（第83～85図）

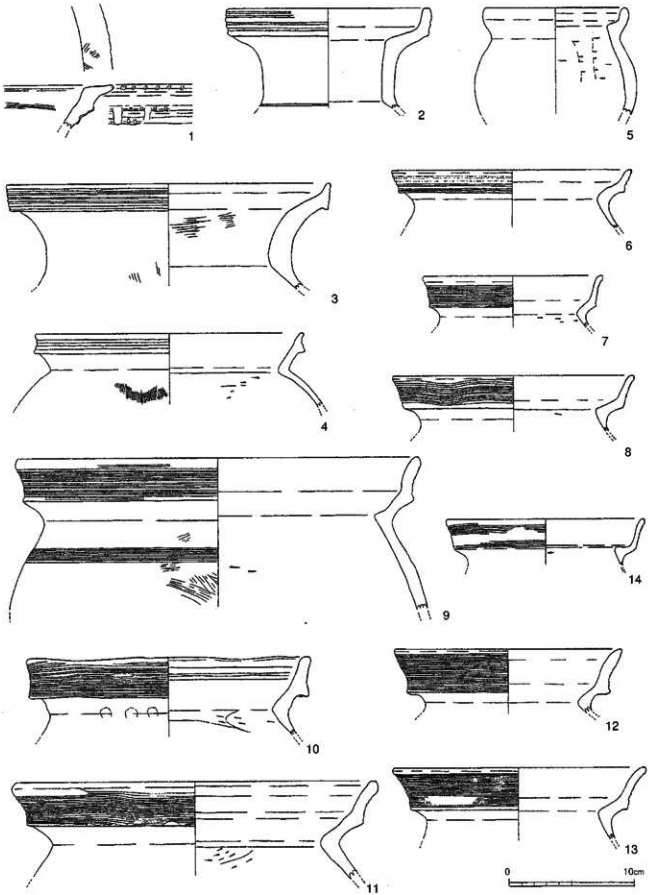
A5グリッド内、13層中で検出した。平面140×155cm、深さ25cm範囲内での出土土器を一括したものである。当時の傾斜地にあたるようで土器検出は傾斜している。84－9は12層中より検出した土器群5内出土の破片と接合しており、12層と13層はほぼ同時期に堆積した層と思われる。

84－1～14、85－1～10は弥生土器である。84－1～5は壺である。1は広口壺の口縁部で外反してのびた頸部から口縁部は水平に拡張し平坦面をつくる。口唇部には刻目を平坦面には斜格子文を施し、頸部には現状で2条の刻目貼付突帯文をめぐらし棒状浮文を貼り付ける。2～4は複合口縁を有する壺で2はまっすぐにのびた頸部から口縁部に至り複合部はやや内湾して立ち上がる。3は外反する頸部から短めの複合口縁に至るもので、4は肩の張った胴部から直線的にのびる口縁部へと移行し外面に短い複合口縁がつく。5は全体に粗雑なつくりの小型のものである。84－6～14、85－1・2は複合口縁の甕である。全体的にやや厚手で口縁端部は肥厚し丸くおさめるもの84－8～11、単に丸くおさめるもの84－6・7・12～14、85－2、口縁部を引きのばし始めるもの85－1がある。突出部は出ないで断面「L」字状のもの84－6～9・14、85－2、下に出るもの84－10・13、85－1、横に出るもの84－11・12である。また口縁面には貝殻腹縁による擬凹線文を施し（84－7～11）、のちに撫でて浅く仕上げたもの84－6・12・13、撫消しを行うもの84－14、85－1・2である。85－3・4は底部で3はしっかりした平底で、4は小さな平底で指押さえにより少々上げ底となっている。85－5・6は高坏の坏部と接合部付近である。やや粗雑なつくりで、体部は薄く口縁部は厚くしている。6は厚手のもので接合も粘土魂を充填している。85－7は鼓形器台の受部である。厚手で口縁端部は平坦面を有するが、胎土がやや緻密で内外面に朱塗りの痕跡を観察できるので、厚手のわりには精製された感がある。85－8は鉢で、あまり厚くない体部から口縁部は急に膨らんで厚みを増し端部を丸くおさめ、全体に粗雑な感じがする。85－9・10は甕形土器である。10の体部は安定感のある端部を一応下として図化した。9の把手は体部内面にケズリ調整が観察されるのでケズリ上げの方向で位置を設定した。

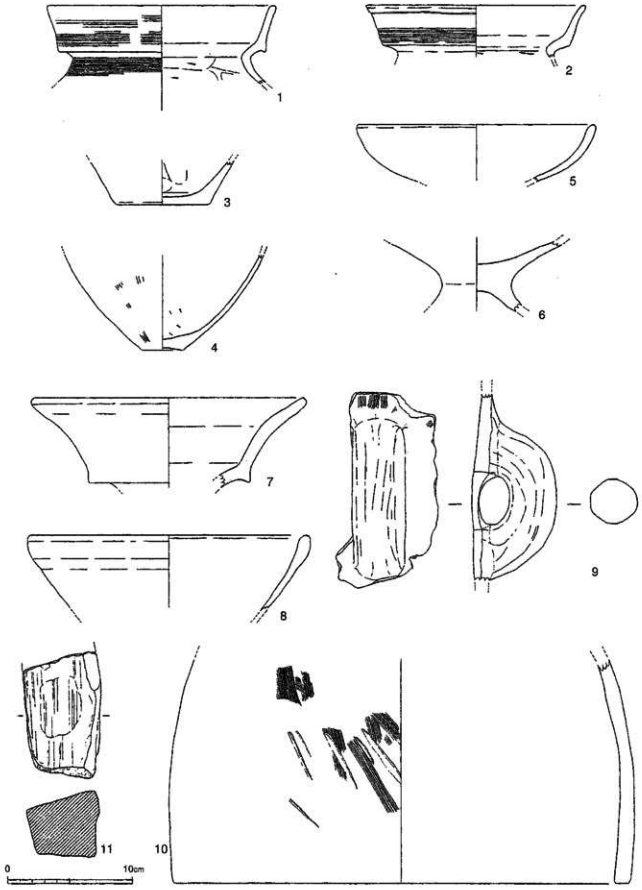
85－11は安山岩製の敲石で、下面に敲打痕が観察される。



第83図　土器群14出土状況図（S=1/20）



第84図　土器群14出土遺物実測図1（S=1/3）

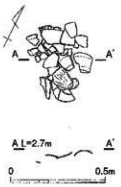


第85図　土器群14出土遺物実測図2（S=1/3）

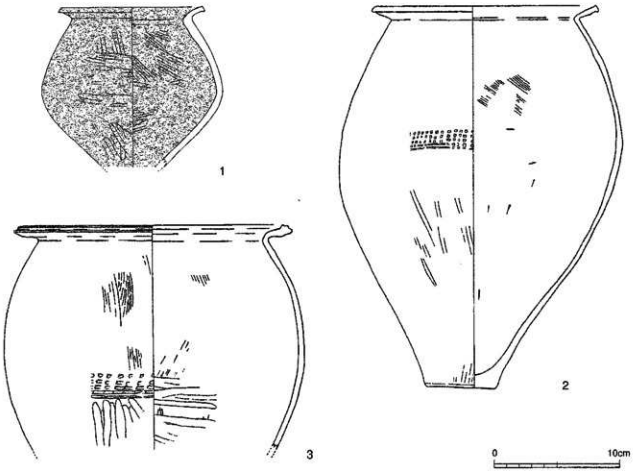
土器群15（第86・87図）

A5グリッド内、16層中で検出した。平面35×45cm、深さ8cm範囲内での出土土器を一括したもので、87－1～3の土器がひとまとまりで廃棄されたような状況である。

1～3は弥生土器である。1は内外面とも全面に漆塗りを施した短頸壺である。胴部中央が玉葱状に強く張り、頸部は「く」の字状に屈折し口縁部に至る。口縁部はわずかに下に肥厚する。2・3は甕である。2は全体が復元できるものであり、口縁部が小さく裾すぼまりのプロポーションを呈する。胴部中央よりやや上位に最大径をもち、張りのない肩部から頸部へと至り、頸部は「く」の字状に屈折して口縁部へと移行し、端部はわずかに上下に肥厚する。胴部最大径には5点単位の列点文が、定位置に連続させるために最下位の点を引きずり施文されている。3は肩の張らない球形の胴部で頸部は「く」の字状に屈折し口縁部に移行する。口縁部は上向きに上下に肥厚し2条の凹線文を施す。胴部最大径よりやや下に、下位2列は完全に引きずっているが5点単位の列点文を施している。外面胴部には列点文を挟んで上にハケ目調整、下にミガキ調整を行う。内面もほぼ同位に変化点をもち上と下とでは調整方法がやや異なっている。2も風化しているため詳細は不明であるが、おそらく3と同様に列点文を境に調整方法が異なると思われる。



第86図　土器群15出土状況図（S=1/20）



第87図　土器群15出土遺物実測図（S=1/3）

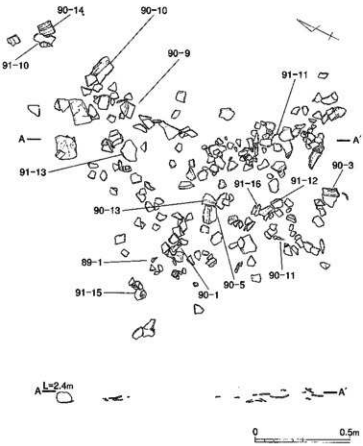
土器群16（第89～91図）

B8グリッド内、16層中で検出した。平面190×170cm、深さ10cm範囲内での出土土器を一括したものである。

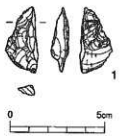
89－1は加工痕ある黒曜石の剥片で、特に裏面に小加工痕が施され、側面は加工の最中の剥離であると思われる。

90－1～15・91－1～18は弥生土器から古式土師器にかけての土器である。堆積土の違いからか、土器群16出土の土器はほとんどオリーブ褐色を呈し、堅くしまった感じのものである。

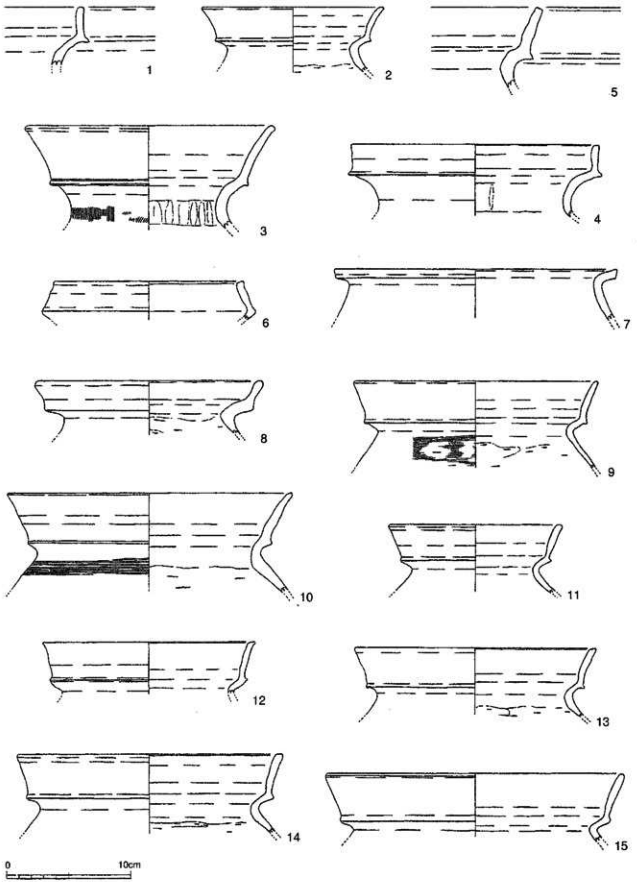
90－1～6は複合口縁の壺である。外傾した口縁部で端部は外に曲げて平坦面をつくり突出部は斜め下に引き出す2・3・5。5は厚手のものである。また口縁部がやや内傾して立ち上がり端部は丸くおさめ突出部は横に強く引き出す1・4。6は内傾したいわゆる袋状口縁を呈している。90－7～15は壺で、7は肩の張らない頸部が、「く」の字状に屈折しわずかに肥厚して面をもつ口縁部に移行するものである。8～15は無文の複合口縁を有するもので、厚手で短めの複合口縁で端部は肥厚して丸くおさめ突出部は膨らませている8以外は、口縁端部がのび、端部を引きのばす9・10、外に曲げ平坦面をつくる11～13、わずかに肥厚させて平坦面をつくる14・15がある。突出部はほとんどのものが斜め下に出しているが、11・12のように横へ出すものもある。胴部の張りはきつくなさそうである。91－1は1～3mmの砂粒子を含んだ厚手の胴部破片である。内外面ともハケ目調整を行っているが特に外面は貝殻原体のようで丁寧で鮮明なハケ目調整を行っているのと、粘土紐積上げ痕が内傾しているのが観察され、古い様相を呈しているようである。91－2～4の底部は2・3が平底で、4は底部の稜線が不鮮明で平底の痕跡をわずかに残している底部である。91－5は脚部の破片である。一応大型の高坏と報告するが、器台の可能性も否めない。裾広がりの脚裾部を肥厚させ面をもって反り上がり、面には凹線状の沈線を施している。91－6～9は高坏で、6・7ともに円盤充塡法を用いている。脚裾部の9は端部を単純に断面矩形におさめたものである。91－11～14



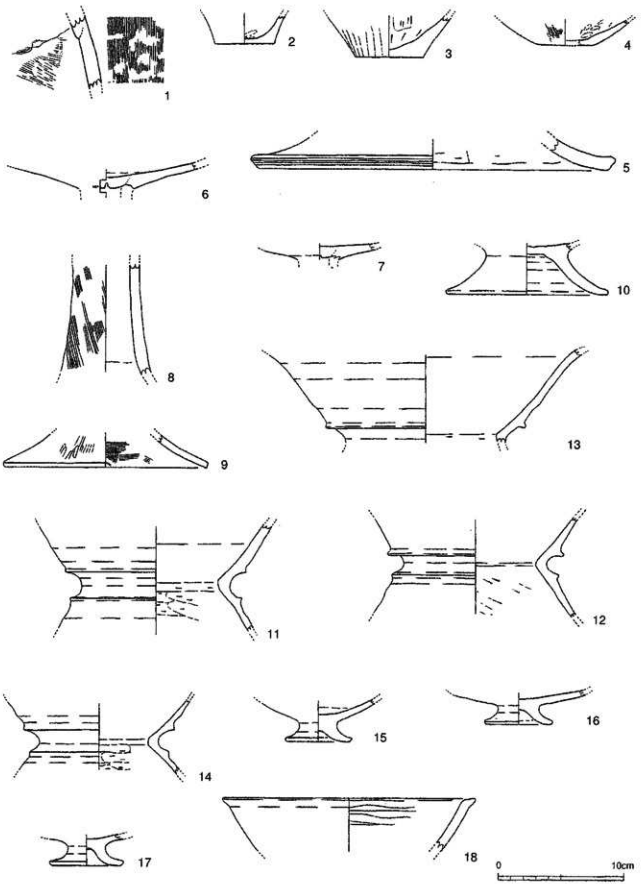
第88図　土器群16出土状況図（S=1/20）



第89図　土器群16出土黒曜石実測図（S=1/2）



第90図　土器群16出土遺物実測図1（S=1/3）



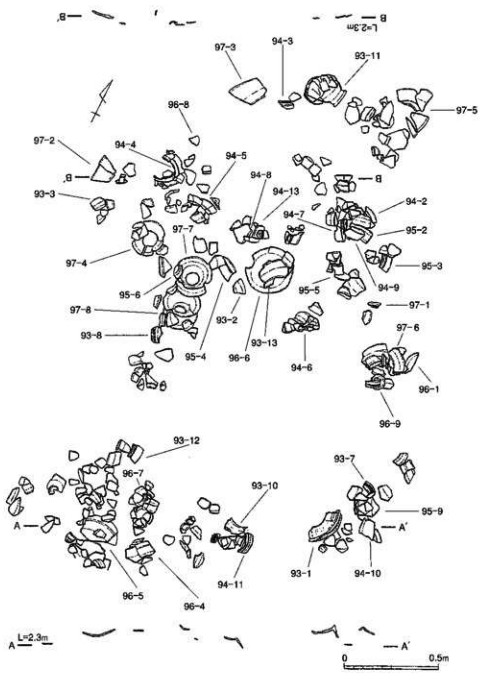
第91図　土器群16出土遺物実測図2 (S=1/3)

は鼓形器台で、器壁の傾斜のあまりきつくないものである。13は大ぶりのもの、14は小ぶりのものである。91－15～17は低脚坏で、脚柱部から外反する裾部をもち、17はやや長めの脚柱部をもち、16・17は坏部が平坦気味に立ち上がる。91－18は一応鉢としておくが高坏の可能性も否めない。深めの体部に口縁部は外に曲げ平坦面をもち、面にはわずかに凹みをつける。

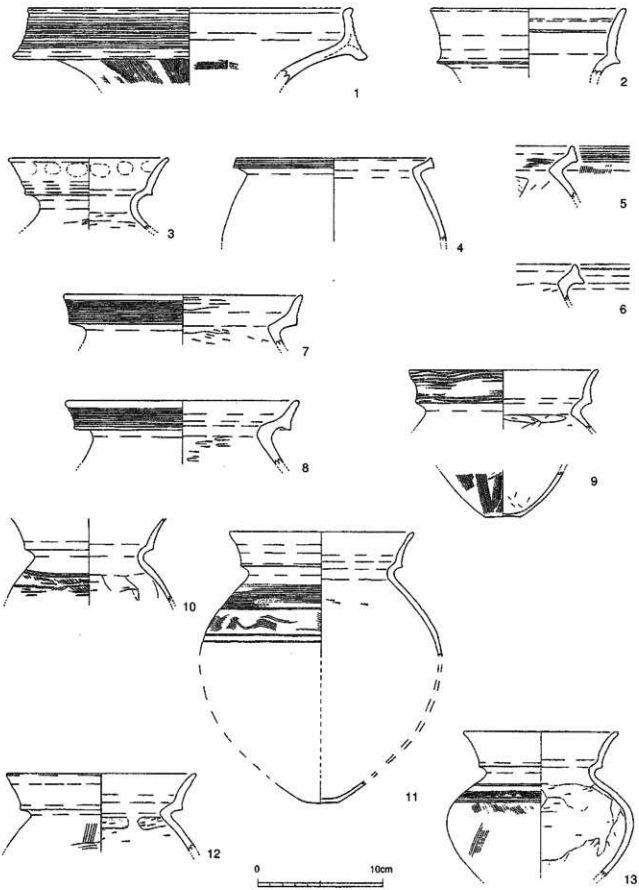
土器群17（第92～97図）

9グリッド内、17層中で検出した。平面220×260cm、深さ12cm範囲内での出土土器を一括したものである。この土器群からは甕・高坏・器台がほぼ原形をとどめて出土したものが、他の土器群と比べると多い。また吉備から搬入された特殊土器が出土している。

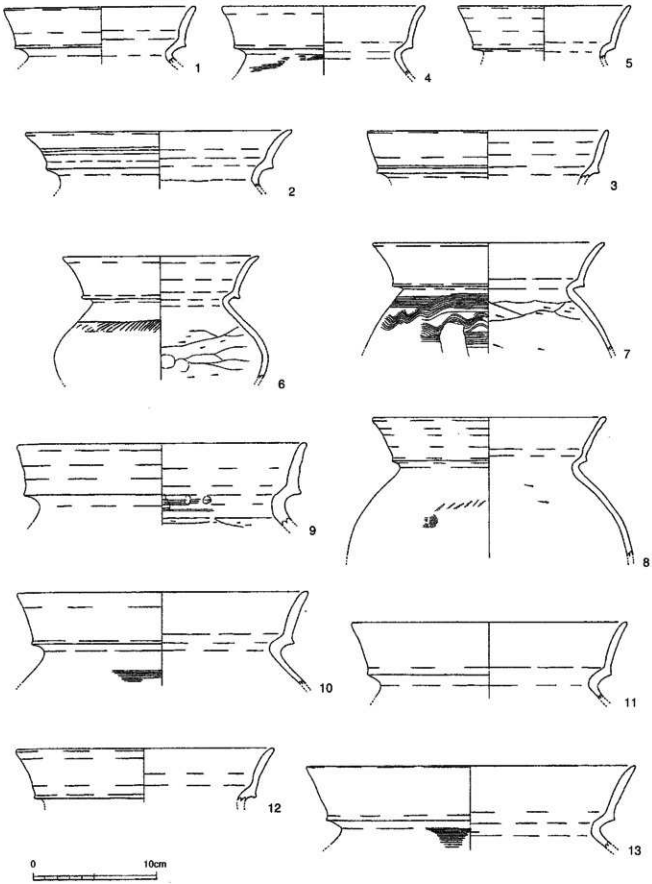
93－1は前記したように吉備地方から持ち込まれた土器である。にぶい褐色を呈し、内面には朱塗りの痕跡が残っている。胎土は在地の土器と比べると石英が少なく、金雲母の割合が多く、焼きが堅い状態である。複合口縁で断面「T」字状を呈し口縁面には8条の凹線文を施し、端部を外に曲げ平坦面をつくっている。口径の割に頸部が太めに傾斜する。93－2・3は複合口縁の壺である。2は直立気味の口縁部で端部は引きのばし突出部は斜め下に引き出す。口縁部が直立なほど頸部が太い。3は外反した口縁部で端部はわずかに外に曲げておさめ、突出部は斜め下に出る。口縁面には内外面を指で押さえた痕跡が残っている。93－4～95－5は甕である。93－



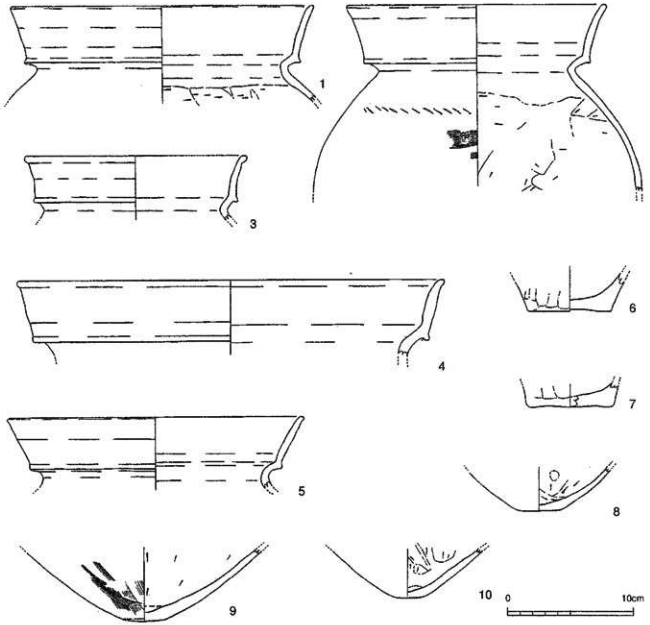
第92図　土器群17出土状況図（S=1/20）



第93図　土器群17出土遺物実測図1（S=1/3）

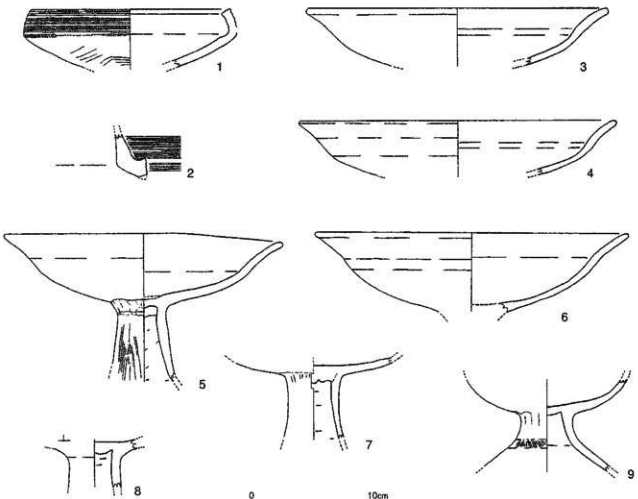


第94図　土器群17出土遺物実測図2（S=1/3）



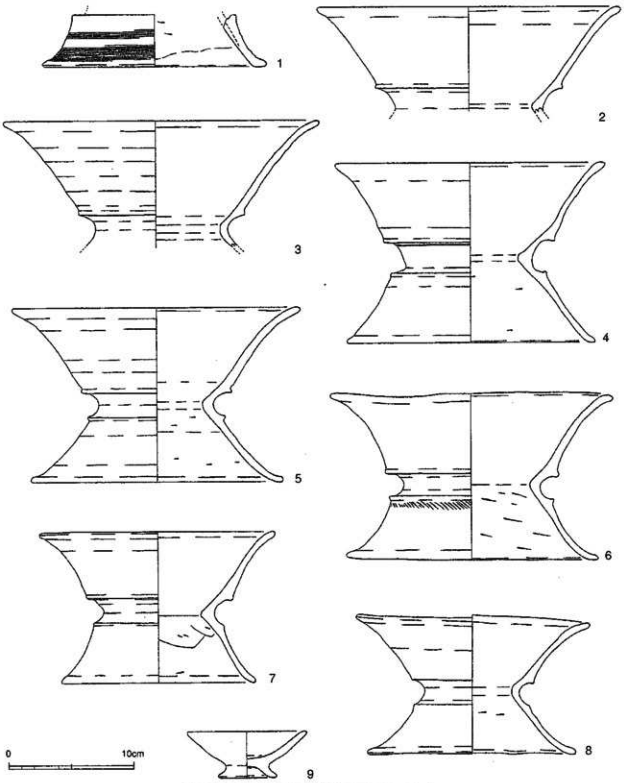
第95図　土器群17出土遺物実測図3（S=1/3）

4・5はなだらかな胴部から頸部が「く」の字状に屈曲し口縁部は上下に肥厚してそれぞれの面には2条、3条の凹線文を施すものである。また5は内面頸部以下にケズリ調整を行っている。93－6は短い口頸部で、やや複合口縁化した口縁面には強いナデにより凹みをつけている。93－7・8はやや厚手で短めの複合口縁で端部は丸くおさめ、突出部は出ない7と下に出る8とで、口縁面にはそれぞれ7～8条、5～6条の擬凹線文が施されている。93－9は底部と同一個体である。胴部の器壁が極薄で復元不可能であった。口縁部を引きのばし口縁部器壁も薄くする段階のもので、口縁面にはまだ多条の擬凹線文を施し、のちに撫消しを行っている。底部もかなり縮小されたものである。93－10～95－5は口縁部が無文の複合口縁甕である。口縁端部を引きのばし突出部を斜め下に出す93－10～95－2には、胴張りの93－13・94－6と倒卵形の93－10・11、94－7などのプロポーシ



第96図　土器群17出土遺物実測図4（S=1/3）

ョンをもち、肩部には平行沈線文、波状文、「ノ」の字または逆「ノ」の字の連続刺突文、両開きの連続刺突文などを組み合わせて施している。底部は93－11のように稜線のあまくなった小さな半底である。口縁端部を外に曲げて平坦面をもつ95－3～5は口縁部のみであるため全体の形状は不明である。95－7～10は底部で6・7はしっかりした平底であるが8～10は稜線のあまい小さな平底である。96－1～9は高坏で、1は坏体部が口縁部で屈折して立ち上がるタイプで、端部に平坦面をもち口縁部には6条の凹線文と凸部1列おきに刻目を施す。2は脚部で、肥厚して面をもつ端部及び脚部に多条の凹線文を施す。3～6は口縁部が外反して開く坏部をもつタイプのもので3・4は内面に法面をもつゆるい段を有し、外面がスムーズに立ち上がる分口縁部を厚く仕上げている。5・6は内面の段がなくなり稜線として名残りのあるもので、スマートな脚がのびている。接合方法は円盤充填法と思われるが坏底面に刺突孔が確認できない。7・8は5と同類の脚部であろう。9は坏部が球状に丸く立ち上がり、脚部も早くから裾開きとなるので、低脚高坏の範疇のものであろう。朱塗りの痕跡が確認される。97－1～8は鼓形器台である。1は小型で脚部長の短いもので、脚部面には貝殻腹縁による擬凹線文が施文、撫消しされている。2～6は口径21.3～25cm、器高13.3～14.4cmのもので口縁端部、脚裾部ともに外に引きのばし坦面をもつ。7・8はもう少し小ぶりのもので口径18.5



第97図　土器群17出土遺物実測図5（S=1/3）

～18.7cm、器高11.1～12.1cmのもので前タイプのものより口縁部の開き具合は小さい。97－9は低脚坏で、全体に小ぶりで口径に比して底径のまだ大きいものである。

3．Ⅱ区検出遺構及び出土遺物

Ⅱ区からは、低湿地から土器群として捉えた遺物集中箇所以外、大きく3層と6層を掘り込み面とした土坑、溝状遺構、柱穴跡などが検出された。

出土遺物は、図化しうるものを図化したので他にも同時期の破片が出土している。

土坑

Ⅱ区内では土坑を25基検出した。

SK02～08（第5図参照・第98図）

1層下で確認された遺構である。遺構堆積土は1層褐色粘質土であるもの、褐色粘質土ではなくとも1層から落ち込んでいるものである。出土遺物も皆無のものSK02・06、他も弥生土器の小片、土師器片、須恵器片、素焼きの土器片ぐらいで、確実な遺物としてはSK05から寛永通宝が出土しているので、遡っても近世以降の耕作にともなう何らかの遺構と思われる。

SK02はB10グリッド内より検出した。SD12を切り、規模75×55cm、深さ15.5cmの楕円形の土坑である。

SK03はA11グリッド内より検出した。規模75×72cm、深さ25cmの多角形の土坑で、堆積土は暗灰色粘土である。

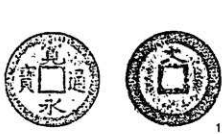
SK04はA12グリッド内より検出した。規模200×40～115cmの長方形の土坑である。

SK05はB12グリッド内より検出した。南調査区外に延び総延長450×幅75cm、深さ25cmの「L」字状の溝状を呈する土坑で、堆積土は暗褐色粘質土である。ここからは寛永通宝が1点出土している。「寛」「寶」それぞれの足の出し方が離れているのと裏面に「文」の文字があるので17世紀後半以降の文銭と呼ばれている古銭である。

SK06はA14グリッド内より検出した。規模150×125cm、深さ18cmの一応楕円形の土坑で、堆積土は暗灰褐色粘質土である。ほぼこの土坑の四隅に径10cm前後の柱穴3穴、同規模の木杭1基が検出されており、何らかの施設があったものと思われる。

SK07はA14グリッド内より検出した。規模290×130cm、深さ10cmの長方形の土坑で、堆積土は1層褐色粘質土である。

SK08はB15グリッド内より検出した。規模170×110cm以上、深さ10cmの楕円形の土坑で、堆積土は1層褐色粘質土である。

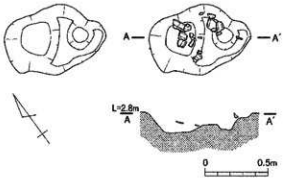


第98図　SK05出土古銭拓影（S=1/1）

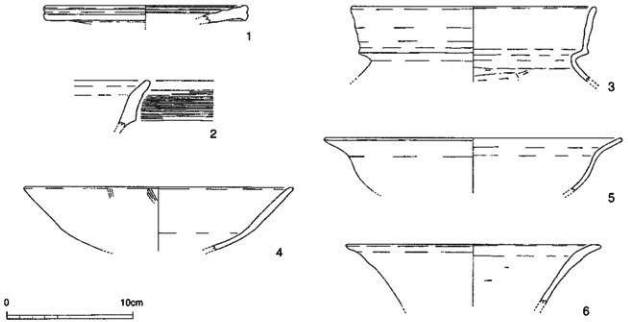
SK32（第99・100図）

A1グリッド内より検出した。径80×55cmで深さ16cmの楕円形の土坑である。

100－1～6は弥生土器である。1は広口の壺で口縁面に現状で3条の端面に1条の凹線文を施す。2は複合口縁の甕で端部は丸くおさめ突出部は出ず口縁面には9～10条の擬凹線文が施されている。内面上半から強く外反しているところが他の器種の可能性あり。3の複合口縁甕は直立気味の口縁部で端部はやや平坦気味に丸くおさめ、突出部を横に出す。4・5は高坏の坏部で体部に丸味をもち5は口縁部が強く外反するものである。6は鼓形器台の受部である。内面体部はケズリのちナデ調整を行っている。



第99図　SK32実測図及び遺物出土状況図（S=1/30）

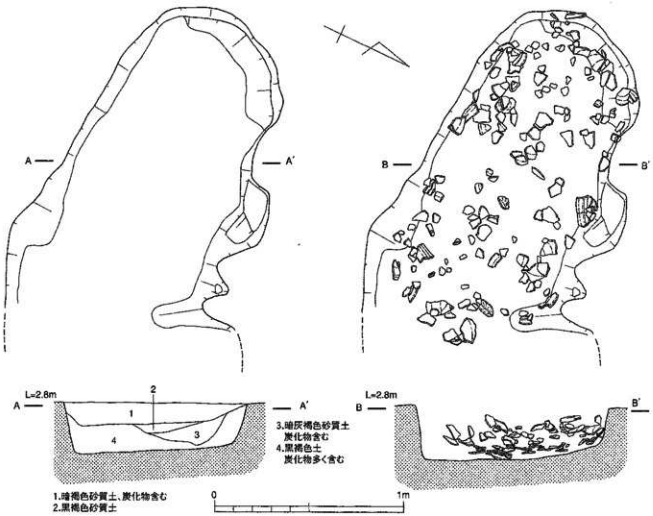


第100図　SK32出土遺物実測図（S=1/3）

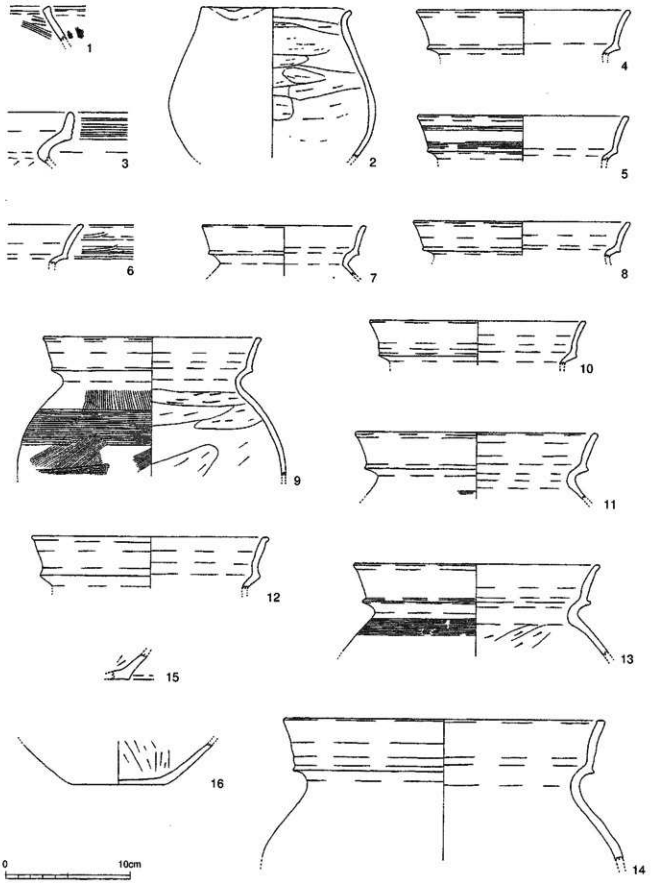
SK33（第101・102図）

B1グリッド内より検出した。現存長200cm、幅85～120cmで深さ26cmの長楕円形の土坑である。B2杭を通して南北方向にセクションベルトを設定していたため、B1グリッド側を完掘させたのちにセクションベルトをはずしながら東側立ち上がりを確認しようとしたが不明瞭で検出することはできなかった。遺物の出土状況が、土器を故意に破砕しばらまいたような状況を呈しているので、土壙墓の可能性が高い。

1～16は弥生土器から古式土師器である。1・2は無頸壺で、1は口縁端部に平坦面をもつもの、2は薄手の丸味のある体部で、口縁部は現状で2ヶ所片口状に外へ引き出している。3～14は複合口縁の甕である。3は短い口縁部に端部丸くおさめ、突出部を出さないタイプのものである。4以下は細かいバラエティはあるが、口縁端部を外に曲げ平坦面をつくり、例外的に14は口縁端部を内寄りに平坦面をつくる。突出部は斜め下、または横に引き出す。5・6は口縁面に数条の沈線が消されずに残る。9・13は肩部に数条の平行沈線文を施す。15・16は底部で、15は小さいながらしっかりした平底で、16は底面は広いが稜線のあまい薄手のタイプである。



第101図　SK33実測図及び遺物出土状況図（S=1/20）



第102図　SK33出土遺物実測図（S=1/3）

SK34（第103・106図）

B2グリッド内より検出した。径83×34cmで深さ9cmの長楕円形の土坑である。

106－1は弥生土器の複合口縁の甕で、端部は丸くおさめ突出部はわずかに出るものである。

SK35（第103・106図）

A2グリッド内より検出した。径133×50cmで深さ14cmの長楕円形の土坑である。SK34とほぼ同方向に主軸があるので同じ性格を有するものと思われる。

106－2・3は弥生土器で、2は甕の口縁部で口縁が肥厚して面をもち2条の凹線文を施す。3は鼓形器台の脚部片である。内面ケズリ調整である。

SK36（第104・106図）

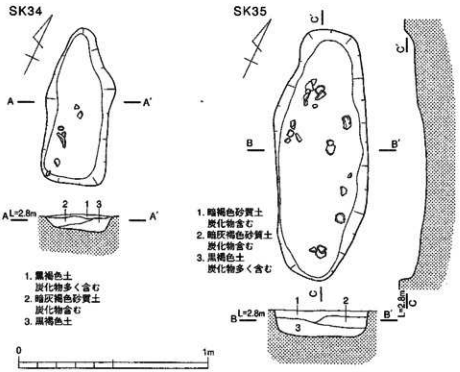
B2グリッド内より検出した。現存長315cm、幅50～140cm、深さ15cmの溝状を呈する土坑である。

106－4は弥生土器の甕である。口縁部が上下に肥厚して面をもち2条の凹線文を施す。頸部には指頭圧痕文帯をめぐらしている。

SK37（第105・106図）

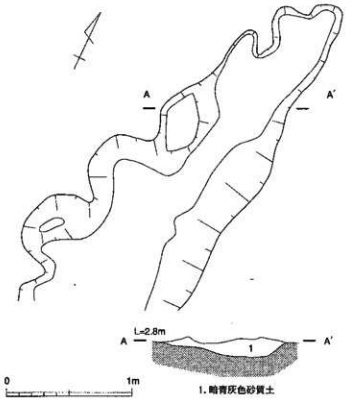
B2グリッド内より検出した。長さ213cm、幅145cm以上で深さ22cmの不定形の土坑である。

106－5～8は弥生土器である。5・6は甕で、5は口縁部が上下に肥厚して面をもち2条の沈線

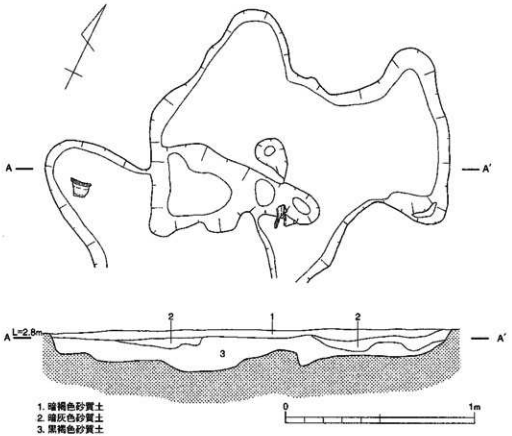


第103図　SK34・35遺物出土状況実測図（S=1/20）

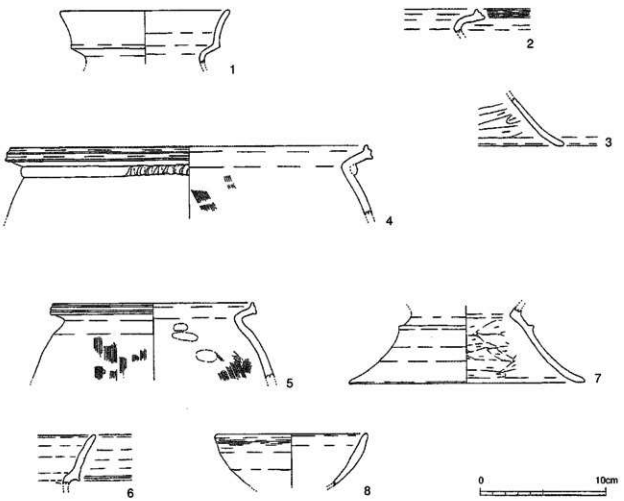
文を施している。6は複合口縁を有する甕で、端部は丸くおさめ突出部は斜め下に出る。7は鼓形器台で脚部を裾広がりにし内面には単位の明確なケズリ調整が行われている。8は小型のボール状の鉢で、口縁部には数条の沈線が観察される。



第104図　SK36実測図（S=1/30）



第105図　SK37遺物出土状況実測図（S=1/20）



第106図　SK34(1)、35(2・3)、36(4)、37(5~8)出土遺物実測図 (S=1/3)

SK38（第107～109図）

B5グリッド内より検出した。径136×128cmで深さ14cmのほぼ円形を呈する土坑である。土坑中央に床面を掘り込んだピットが2基平行して検出された。約20×15cmで深さ数センチという浅い落ち込みである。

109－1～10は弥生土器である。1～9は壺で、1は口縁部が上下に肥厚して面をつくり3条の凹線文を、また肩部には4条の平行した沈線を施している。2～9は複合口縁で、端部はやや膨らませて丸くおさめ、突出部は出ないもの2、斜め下に出るもの3～8、横にわずかに出るもの9がある。口縁面には貝殻腹縁による擬凹線文を施したもの2・4、のちに撫消しを行っているもの3・5・8・9、また貝殻腹縁とは断定できない擬凹線文を施しのち撫消しを行うもの6・7がある。胴部はあまり張らないものと思われる。5は肩部に貝殻腹縁による連続の刺突文を施す。10は2孔のあるつまみ付の蓋である。口縁部は複合口縁状で端部を丸くおさめている。

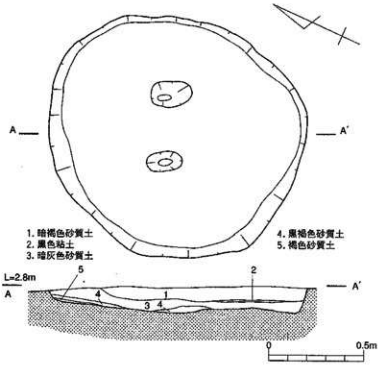
11は泥岩製の多孔石である。風化著しく所々剥落しているため、本来の形を想定することは不可能

である。表面には2つの溝状、これも本来は孔が割れ溝状となったものかもしれないが、他に大小の孔が数カ所穿ってある。

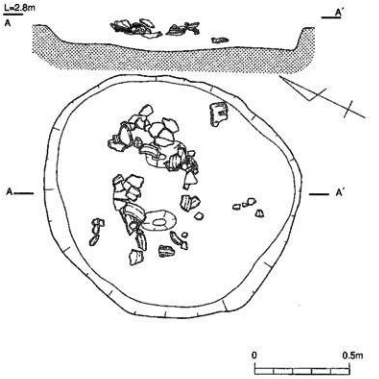
SK39（第110・112図）

B5グリッド内より検出した。径253×70cm以上で深さ23cm以上の楕円形を呈する土坑である。半分以上が調査区外へ延びているため詳細は不明である。5cm以内四方の粘土の塊が数点出土している。

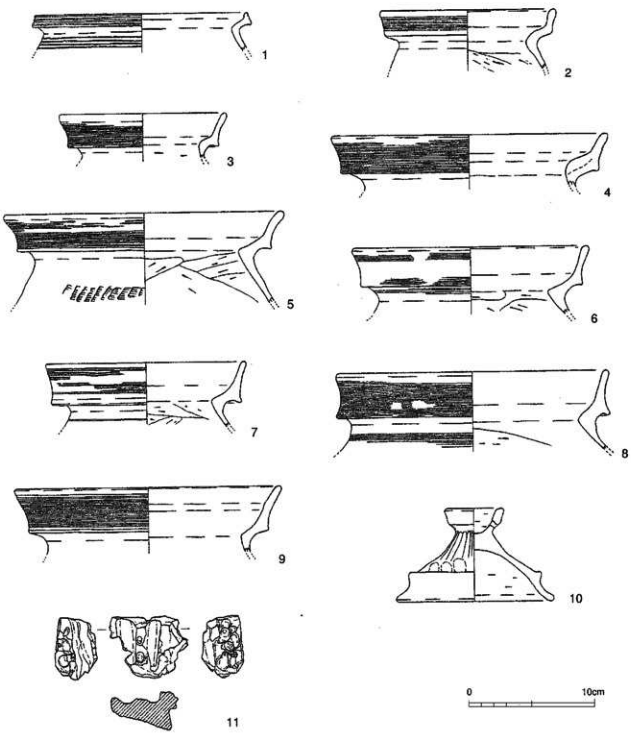
112－1～3は弥生土器である。1・2は甕で、口縁部を上下に肥厚させて面をつくり、3条の凹線文を施す。また2はその上に縦方向の刻目文を施し、1は頸部に指頭圧痕文帯をめぐらす。2の頸部には、頸部から粘土を接合しているための接合時の剥突痕がある。3は高坏で、湾曲した体部に内傾する口縁部、口縁端部は平坦面をもち、口縁面には5条の凹線文を施す。また内面調整は擂目のように荒い放射状のハケ目調整を行い、外面も放射状にミガキ調整を行う。



第107図　SK38実測図（S=1/20）



第108図　SK38遺物出土状況図（S=1/20）

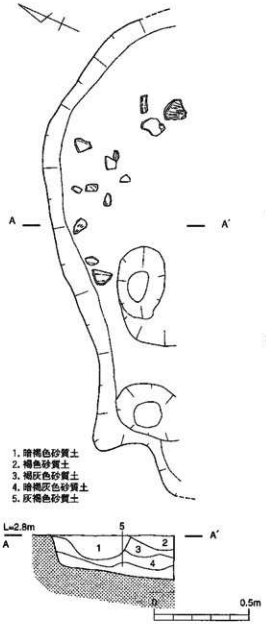


第109図　SK38出土遺物実測図（S=1/3）

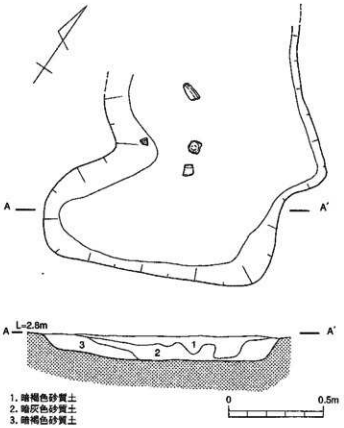
SK40（第111・112図）

B6グリッド内より検出した。径135×130cm以上で深さ13cmの楕円形を呈すると思われる土坑である。北方向はセクションベルトを設定していたため、完掘後に調査したが立ち上がりを確認することはできなかった。

112－4～10は弥生土器である。4・5は甕の口縁部で、上または上下に肥厚させて面をつくり、

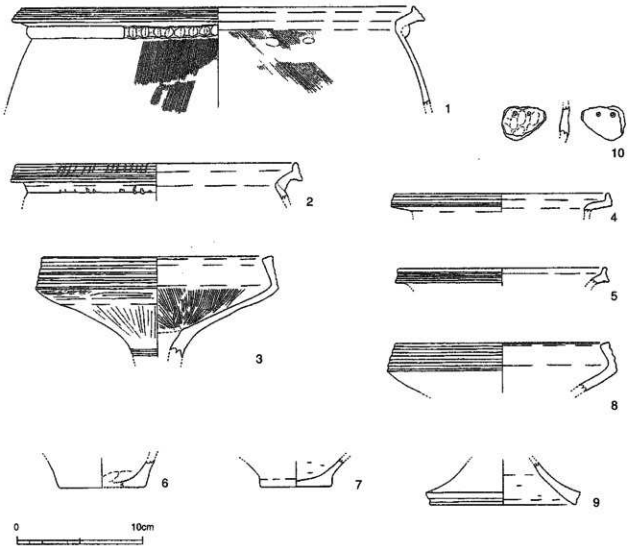


第110図　SK39遺物出土状況実測図（S=1/20）



第111図　SK40遺物出土状況実測図（S=1/20）

4は2条の凹線文、5は3条の沈線文を施す。6・7は平底の底部で、7は薄手の器壁をもち、外面に煤の付着が観察でき、また器壁も剝落しているため、甕の底部と思われる。8・9は高坏である。両者とも同形態のものと思われる。坏部は湾曲して立ち上がり内傾する口縁部へと至る。端部は平坦面をもち、口縁面は4条の凹線文を施す。脚部は端部を肥厚させて面をつくり1条の凹線文を施す。10は2穴の穿孔された土器片で、土製品として転用されたものと思われる。



第112図　SK39(1～3)、40(4～10) 出土遺物実測図 (S=1/3)

SK41 (第113・119図)

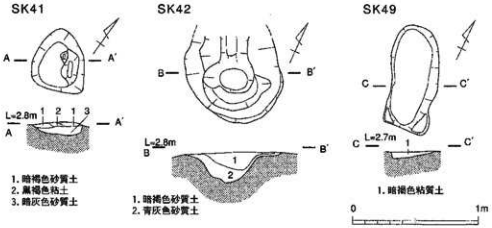
B6グリッド内より検出した。径50×42cm以上で深さ10cmのほぼ円形の土坑である。

119－1は弥生土器の高坏である。湾曲して立ち上がる体部から内傾する口縁部に至る。口縁端部は平坦面をもち、口縁面には4条の凹線文をまた上下及び2列目の凸帯に刻目を施している。

SK42 (第113・119図)

B7グリッド内より検出した。径75×70cm以上で深さ24cmの楕円形を呈すると思われる土坑である。北方向はセクションベルトを設定していたため、完掘後に調査したが立ち上がりを確認することはできなかった。

119－2は弥生土器の甕で、張りのない肩部から頸部が「く」の字状に屈折し口縁部に至る。口縁はわずかに肥厚させてある。



第113図　SK41、42、49実測図（S=1/30）

SK49（第113図）

B20グリッド内より検出した。径83×37cmで深さ5cmの楕円形の土坑である。SD16を切っておりSD16より新しい土坑である。出土遺物なし。

SK43（第114・119図）

B8グリッド内より検出した。長さ280cm、幅55～105cmで深さ8cmの不定形の土坑である。

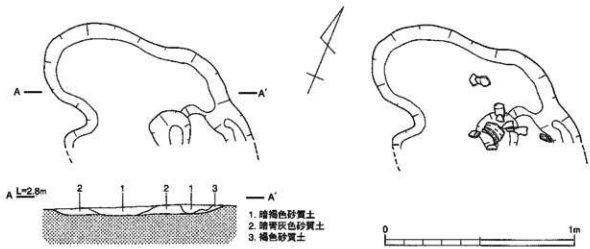
119－3・4は弥生土器である。両者とも小破片であるが、1は広口の壺の口縁部で、端部を肥厚させて面をつくり3条の凹線文を施す。2は平底の底部である。

SK44（第115・119図）

A8グリッド内より検出した。径100×65cm以上で深さ5cmの楕円形の土坑である。南方向はセクションベルトを設定していたため、完掘後に調査したが立ち上がりを確認することはできなかった。SK43と接触しているようだが、出土遺物よりSK44の方が新しいので、切り合い関係にはないようである。

119－5・6は弥生土器である。

第114図　SK43遺物出土状況実測図（S=1/20）



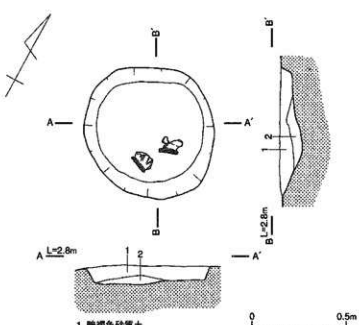
第115図　SK44実測図及び遺物出土状況図（S=1/20）

5は甕で、口縁部がかなり拡張されて面をもち、風化著しいが3条の凹線文を施してあるのが確認できる。6は複合口縁の壺である。端部は丸くおさめ、突出部は横に引き出す。肩部には貝殻原体による刺突文が観察される。

SK45（第116・119図）

B9グリッド内より検出した。径70cmで深さ12cmのほぼ正円形の土坑である。

119－7・8は弥生土器の甕である。張りのない胴部で、口縁部は上下に肥厚して面をつくり3条の7は沈線文、8は凹線文を施す。



第116図　SK45遺物出土状況実測図（S=1/20）

SK46（第117・119図）

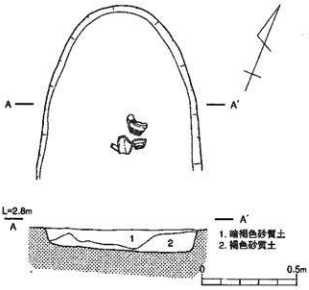
B9グリッド内より検出した。径92×87cm以上、深さ11cmの楕円形を呈すると思われる土坑である。第5図に図示したようにSK47と重なり合い先に検出した。第117図と第118図の土層断面図のラインは同じ位置である。

119－9・10は弥生土器である。9は甕で、口縁部が上に肥厚して面をもち2～3条の沈線文を施す。10は高坏の坏部で、浅く広がるもので少々厚手で端部は丸くおさめている。また図示できなかったが、9と同時期の甕の口縁部片に籾殻と思われる痕跡がひとつ残っている。

SK47（第118・119図）

B9グリッド内より検出した。長さ175cm以上、幅160cm、深さ13cmの長楕円形を呈すると思われる土坑である。前記したようにSK46に切られているが、出土遺物などより時期差はほとんどないものと思われる。

119－11・12は弥生土器の底部破片である。両者とも平底で器壁は薄手のものであろう。

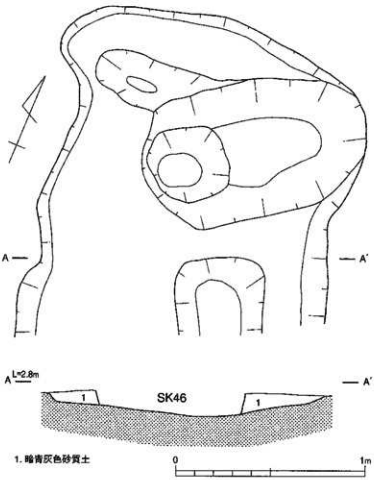


第117図　SK46遺物出土状況実測図（S=1/20）

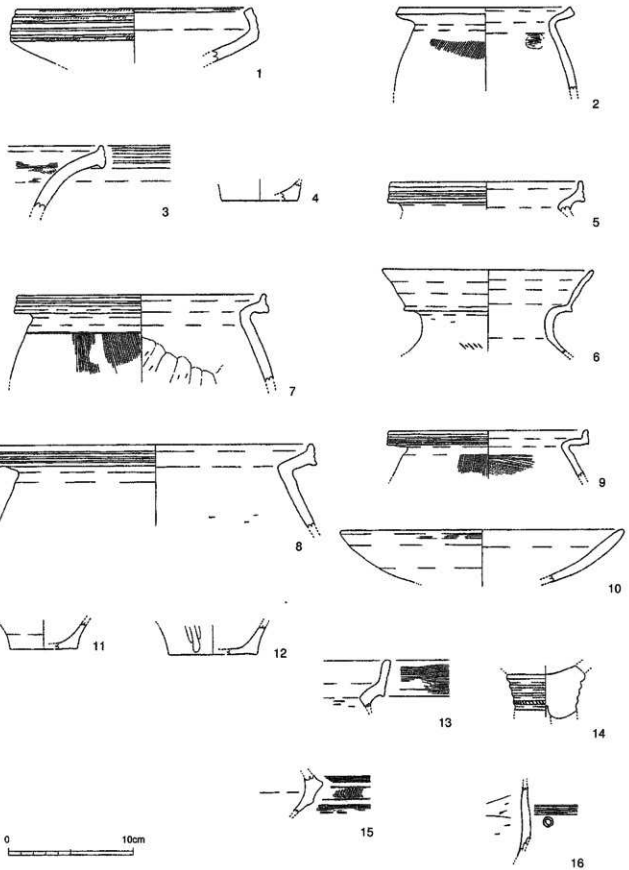
SK48（第119・120図）

AB12グリッド内より検出した。長さ427cm以上、幅75cm以上、深さ15cmの溝状を呈する土坑である。西側は底面を確認できているため、幅はこれ以上広がらないと思われる。しかし南側調査区外へは延び幅も広げつつあるため、詳細は不明である。

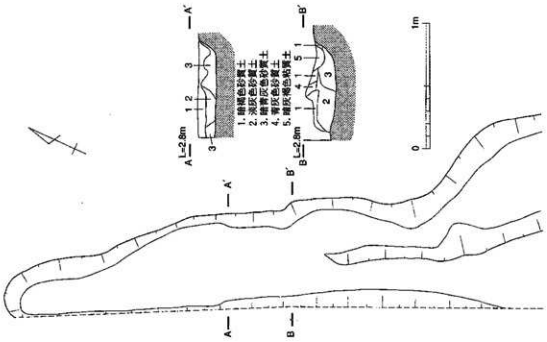
119－13～16は弥生土器である。13は複合口縁の甕で、端部は丸く厚みをもっておさまり、突出部は下に出る。口縁面には貝殻腹縁による擬凹線文を施したのち撫消しを部分的に行う。14は高坏の脚柱部である。粘土の塊のようで、付け根部分から多条の凹線文を、1条の凸帯に刻目を施す。15は装飾壺で器形は算盤状、または玉葱状と呼ばれているもので、胴部の2条の突帯の部分である。平行沈線文、逆「く」の字状の連続刺突文が施されている。16は胴部破片であるが平行沈線文の他に竹管文を捺している。



第118図　SK47実測図（S=1/20）



第119図　SK41(1)、42(2)、43(3・4)、44(5・6)、45(7・8)、46(9・10)、47(11・12)、48(13~16)出土遺物実測図 (S=1/3)



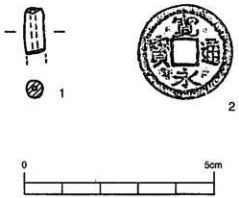
第120図　SK48実測図（S=1/30）

溝状遺構

Ⅱ区内では溝状遺構を８条検出した。

SD02・03（第５図参照・第121図）

１層下で確認された遺構である。遺構堆積土が１層褐色粘質土で、出土遺物も弥生土器の小片、土師器片、須恵器片、素焼きの土器片、また図示したがＳＤ02から碧玉製の管玉１点、寛永通宝１点が出土している。「寛」「寶」それぞれの足が同じ付け根から出ているので、17世紀前葉から中葉に普及した古寛永と呼ばれている古銭である。ＳＫ05出土の寛永通宝とは半世紀の違いはあるもののＳＫ02～08とはほぼ同時期の範疇となろう。



第121図　SD02出土遺物実測図及び拓影（S=1/1）

ＳＤ02はＡ13～15グリッド内より検出した。

長さ12.05m、幅2.5～1.0m、深さ0.2mでＮ－65°－Ｅの方向に延びている底面でこぼこ状の溝である。耕作関係の遺構と思われる。

ＳＤ03はＡ16グリッド内より検出した。長さ6.4m以上、幅0.85～0.35m、深さ7cmでＮ－25°－Ｗの方向に延びており、ＳＤ02とほぼ直交する位置関係にある。

SD11（第122・126図）

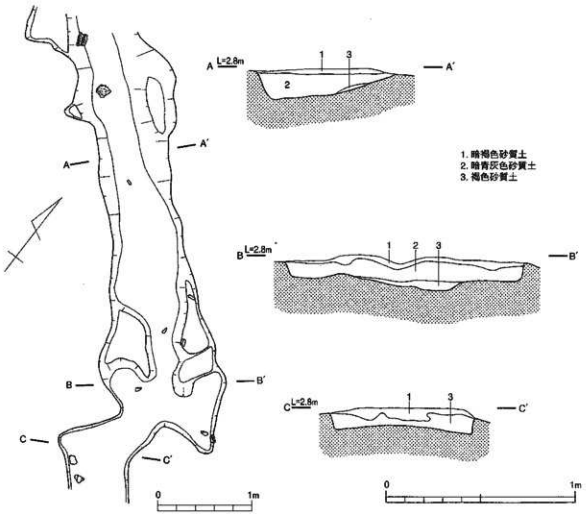
ＡＢ６グリッド内より検出した。幅70～134cm、深さ15cmでＮ－50°－Ｗの方向に延びている。

126－1～5は弥生土器である。1・2は壺で、共に口縁部が上に拡張して面をもち1は4条の沈線文、2は現状で5条の凹線文を施す。また1は口縁が内傾するもので、2は頸部にも8～10条の凹線文を施し、その下には貝殻腹縁による連続の刺突文を施している。3・4は甕で、なだらかな肩部から口縁部に至り、口縁は上に拡張して面をもち3は2条の沈線文、4は3条の凹線文を施す。また4の内面調整に胴部上位付近までケズリ調整が上がってきていることが見て取れる。5は平底の底部で、器壁は薄手のものである。

126－6は凝灰岩製の砥石である。きれいな直方体で全面使用されている。

SD12（第123図）

Ｂ10グリッド内より検出した。ＳＫ02に切られているが、長さ200cm以上、幅45cm、深さ5cmでＮ－53°－Ｗの方向に延びている。西方向はセクションベルトを設定していたため、完掘後に調



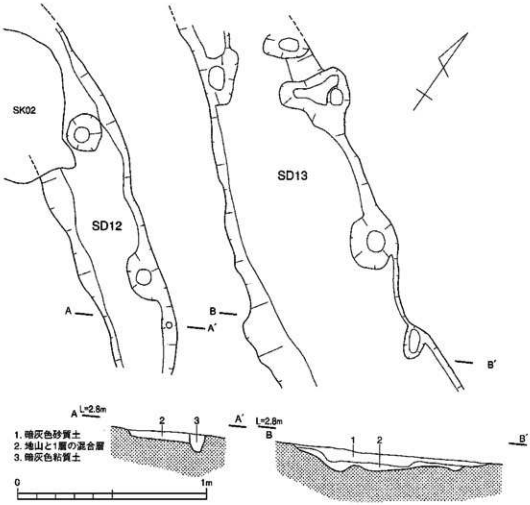
第122図　SD11遺物出土状況実測図（平面図S=1/40　土層断面図S=1/20）

査したが立ち上がりを確認することはできなかった。出土遺物は弥生土器小片のみであった。

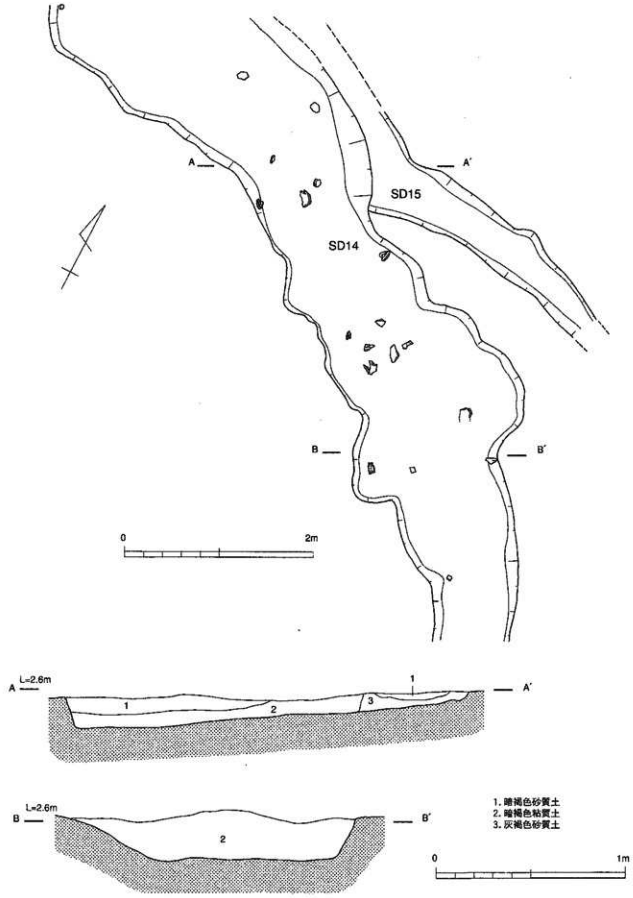
SD13（第123・126図）

B10グリッド内より検出した。長さ230cm以上、幅80cm、深さ12cmでN－53°－Wの方向に延び、SD12と並走している。西方向はセクションベルトを設定していたため、完掘後に調査したが立ち上がりを確認することはできなかった。SD12・13は西側の立ち上がりを同じところで確認できなかったので、逆に同じあたりから掘り込まれたものと判断し、並走して東方向へ延びる溝で、同時期、同性格を有すると思われる。

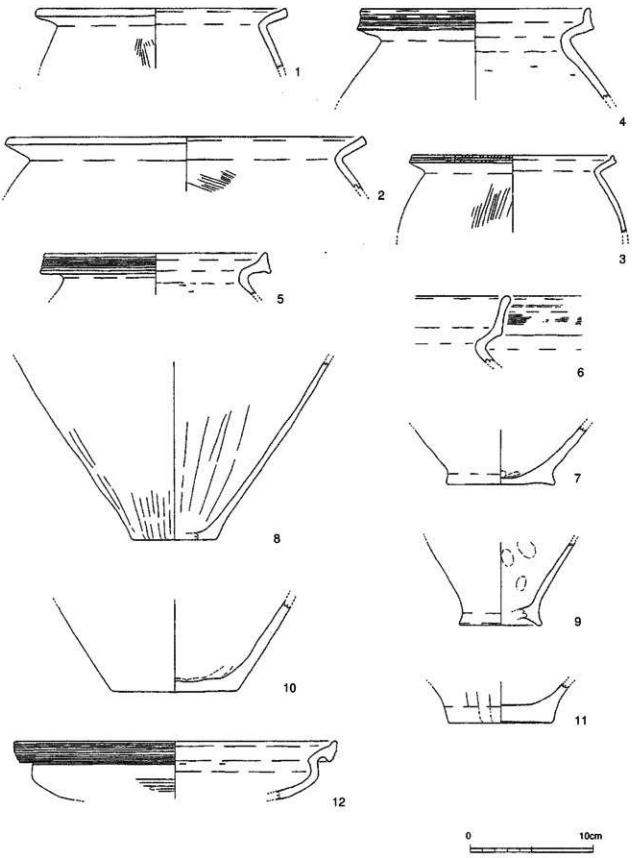
126－7～9は弥生土器である。7・8は甕で、7は口縁部が上下に拡張して面をもち3条の凹線文を施したもの、8は複合口縁で、端部をわずかに平坦気味にし、突出部を斜め下に出している。9は高坏の坏部と思われる小破片である。やや湾曲する体部から直立して口縁部がのび端部は水平に肥厚して面をつくる。口縁面には4条の沈線文が施される。



第123図　SD12・13実測図（S=1/20）



第124図　SD14・15遺物出土状況実測図（平面図S=1/40　土層断面図S=1/20）

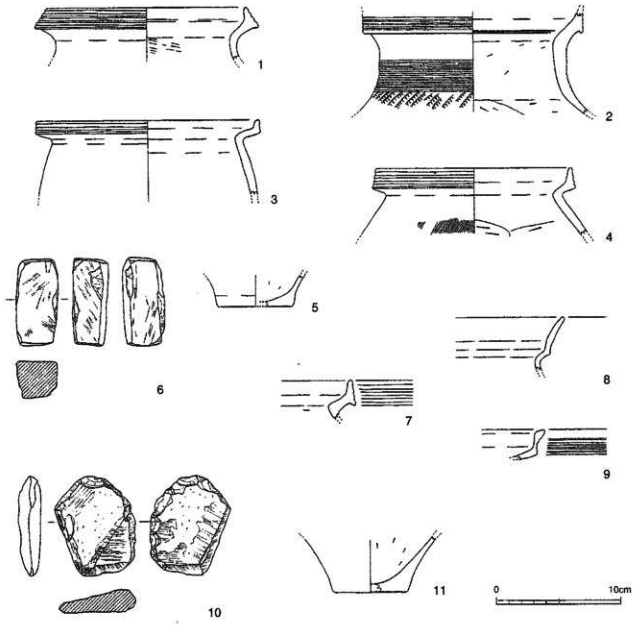


第125図　SD14出土遺物実測図（S=1/3）

SD14（第124～126図）

ＡＢ17グリッド内より検出した。幅90～180cm、深さ20cmでＮ－58°－Ｗの方向に延び、南側にやや内湾している。北側ではＳＤ15を切る。

125－1～12は弥生土器である。1～6は甕で、頸部が「L」字または「く」の字状に屈曲して口縁部に至り、口縁はわずかに肥厚をみせるだけで断面矩形を呈しているもの1・2。3はもう少し肥厚して小さな面をもち1条の凹線文と刻目文を施す。4・5は更に拡張して面をもち3条の沈線文、4条の凹線文をそれぞれ施しており、6は複合口縁化したもので端部は膨らんで丸くおさめ、突出部は下に少し出る。7～11は底部で、9は器形もすぼまったもので上げ底であるが、他は平底である。



第126図　SD11(1～6)、13(7～9)、14(10)、16(11)出土遺物実測図（S=1/3）

12は高坏の坏部で、体部が湾曲し口縁部は複合口縁状のものである。口縁面には5条の凹線文を施す。

126－10は安山岩製の磨製石器である。おそらく磨製の石斧の一種であろう。2側縁に刃部をつくり出しているが、右側縁には敲打痕が残っており、また表裏面とも全体に研磨が及んでいないので、完成品であるのか、未製品であるのか判断しがたい。

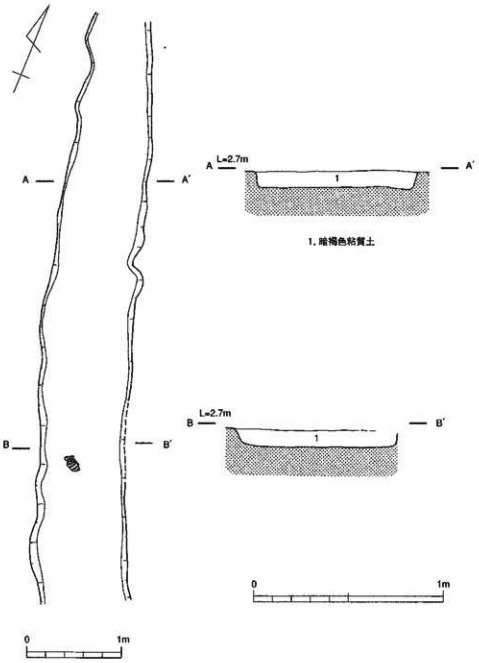
SD15（第124図）

A17グリッド内より検出した。長さ350cm以上、幅40～80cm、深さ8cmでほぼ東西方向に延び、西側ではSD14に切られ、東側は自然消滅しており明らかな立ち上がりを確認することはできなかった。出土遺物なし。

SD16（第126・127図）

AB20グリッド内より検出した。幅100cm、深さ10cmでN－20°－Wの方向に延び、SK49に切られている。

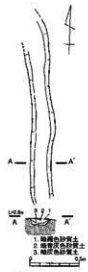
126－11は弥生土器の平底の底部である。薄手の器壁へと立ち上がっていく。



第127図　SD16遺物出土状況実測図（平面図S=1/40　土層断面図S=1/20）

SD17（第128図）

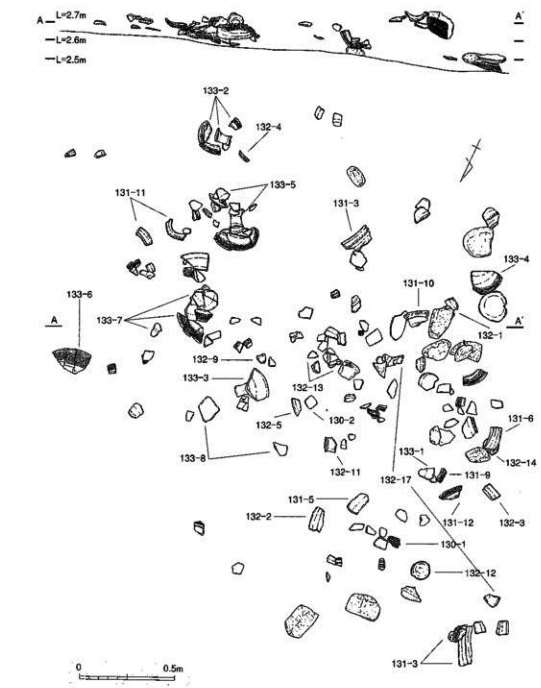
B7グリッド内より検出した。長さ180cm以上、幅22cm、深さ7cmでN−10°−Wの方向に延びている。北方向はセクションベルトを設定していたため、完掘後に調査したが立ち上がりを確認することはできなかった。出土遺物なし。



第128図
SD17実測図
(S=1/40)

土器群

Ⅱ区からは土器群18のみを土器群として捉えることができた。土器群18はⅡ区



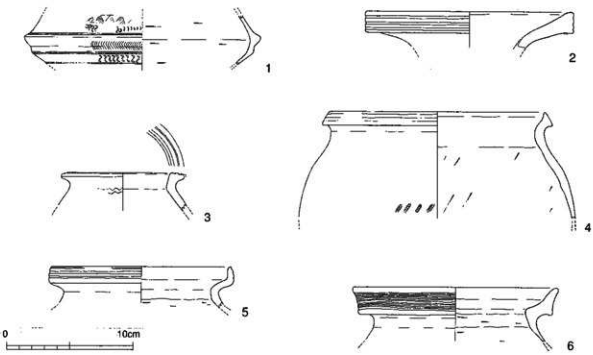
第129図　土器群18出土状況図（S=1/20）

最西部に位置しており、微高地が西側低湿地へと落ち込んでいく傾斜地である。現在は道路を挟んでいるが、Ⅰ区で土器群を多数検出した低湿地の東側の立ち上がりであろう。

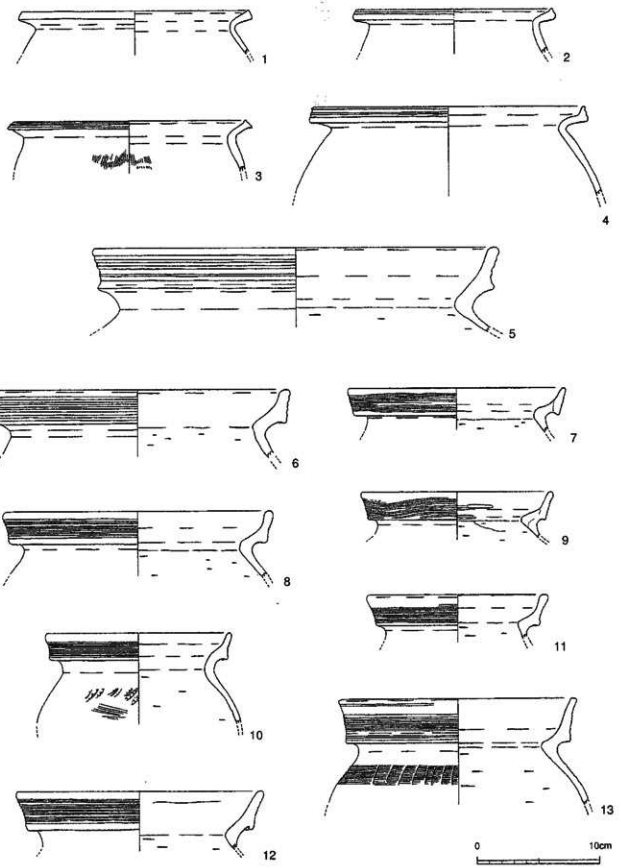
土器群18（第129～133図）

ＡＢ1グリッド内、3・4層中で検出した。平面240×300cm、深さ30cm範囲内での出土土器を一括したものである。散発的な出土状況のようであるが、131－3、132－17のようにそれぞれが1.5m、2.0m離れた地点から出土したにもかかわらず接合したので、ほぼ同時期の廃棄状況を呈していると思われる。また当土器群からは複合口縁状の初期の鼓形器台が何個体かよい状況で出土している。ただし残念なことにそれとセットとなりうる甕の完形品が皆無であったことである。口縁部、底部は出土しているが、胴部をつなぎ合わせることはできなかった。

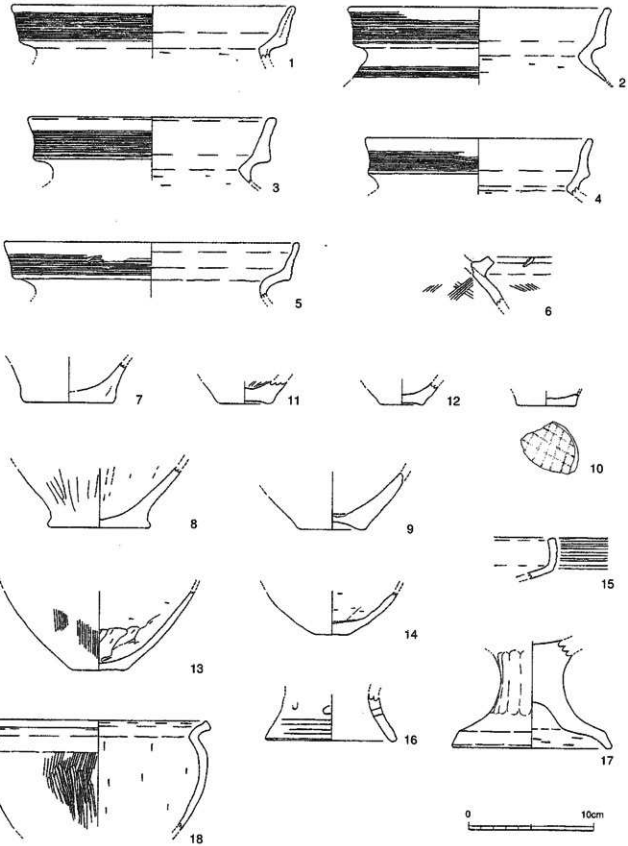
130－1～6、131－1～13、132－1～18、133－1～8は弥生土器である。130－1は胴部に2条の削り出し突帯文をもちいわゆる玉葱状、算盤状と呼ばれている装飾壺である。上位からの文様構成は、吉備系の鋸歯文、逆「S」字状のスタンプ文[注1]、突帯文間帯には「く」の字状のスタンプ文、逆「S」字状のスタンプ文、またそれぞれの文様との境には2～3条の平行沈線文を施して、文様を区画している。130－2～6は壺である。2は広口壺で口縁端部が肥厚して面をもち、3条の凹線文を施す。内面は風化のため確認できないが、外面には朱塗りの痕跡あり。3は小型のもので口縁部が水平に肥厚して面をもち、2条の凹線文を施す。肩部には連続の山形文が数条施される。4は鉢状を呈して口径の広いもので、胴部からなだらかに太い頸部をとおり口縁部に至る。口縁は上下に



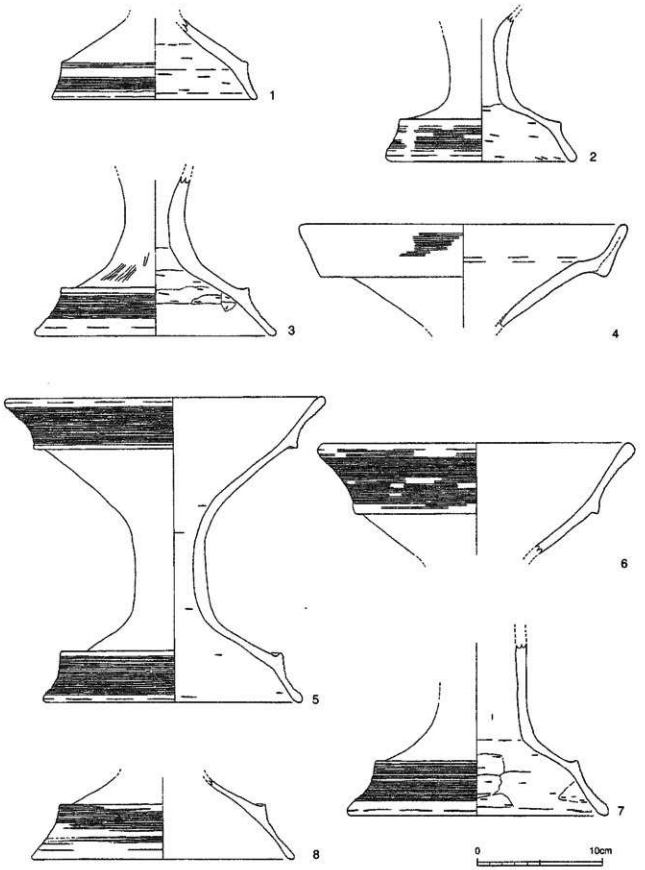
第130図　土器群18出土遺物実測図1（S=1/3）



第131図　土器群18出土遺物実測図2（S=1/3）



第132図　土器群18出土遺物実測図3 (S=1/3)



第133図　土器群18出土遺物実測図4（S=1/3）

肥厚して面をもち、3条の沈線文を施す。胴部最大径に刺突文あり。5は口縁部が上に拡張して面をもち3条の沈線文を施す。6は複合口縁のもので、端部は丸くおさめ突出部はわずかに下に出る。口縁面には貝殻腹縁による7条の擬凹線文が施される。内面頸部が上がり受け口状に平坦面をもつ。131－1～13、132－1～5は甕である。131－1～4はなだらかな肩部から頸部、口縁部へと移行し、口縁はわずかに肥厚し始める1から上へ肥厚して面をもち2条の凹線文を施す4までに順次移行し、それにともない胴部も徐々に張るようになる。131－5～132－5までは複合口縁の甕で、基本的には、口縁端部が丸くおさまり突出部が膨らみをもって横にわずかに出、口縁面には貝殻腹縁による擬凹線文を施す厚手の口縁部に、それに対してやや薄手の器壁をもつものである。口縁長が徐々に長くなるにつれ、口縁面の擬凹線文も条数を増し、そのうち施文後に撫消しを採用するようになる。131－10は肩部に刺突文を、131－13は肩部に貝殻原体による簾状文を、132－2は肩部に口縁部と同じ原体で平行沈線を施す。132－6は断面矩形鍔状の貼付突帯文を有する胴部破片である。132－7～14は底部である。しっかりした平底の底部7・8から底径及び器壁も徐々に小さく薄くなり、底部稜線があまく不明瞭な平底14となる。10は底面に網代痕が残っている。132－15～17は高坏である。15は直立する口縁部面に5条の凹線文を施す坏部破片である。16・17は脚部で、16は小破片であるが、透かしが2孔あけてあり、脚裾部では4条の凹線文の痕跡が観察できる。17は脚裾部が複合口縁状で接合部に粘土塊を詰め、器壁も厚いため重量感があり、また外面には朱塗りが施してある。胎土が緻密で、在地の胎土とは違うようである。132－18は鉢である。「く」の字状に屈曲した頸部より口縁部に至り、口縁は上下にわずかに肥厚し面をもつ。外面胴部には縦方向の、細かい原体によるミガキ調整が施されている。133－1～8は鼓形器台である。筒部がまだ長く、受部、脚部ともに複合口縁状で端部は膨らませて丸くおさめ、突出部は斜め方向に引き出す。面には多条の擬凹線文を施すもの2・4・5～7、のちに撫消しを行うもの1・3・8がある。脚部内面はほとんどがケズリ調整を行っている。あと図化していないが、内外面に漆を塗った小破片が1点出土している。

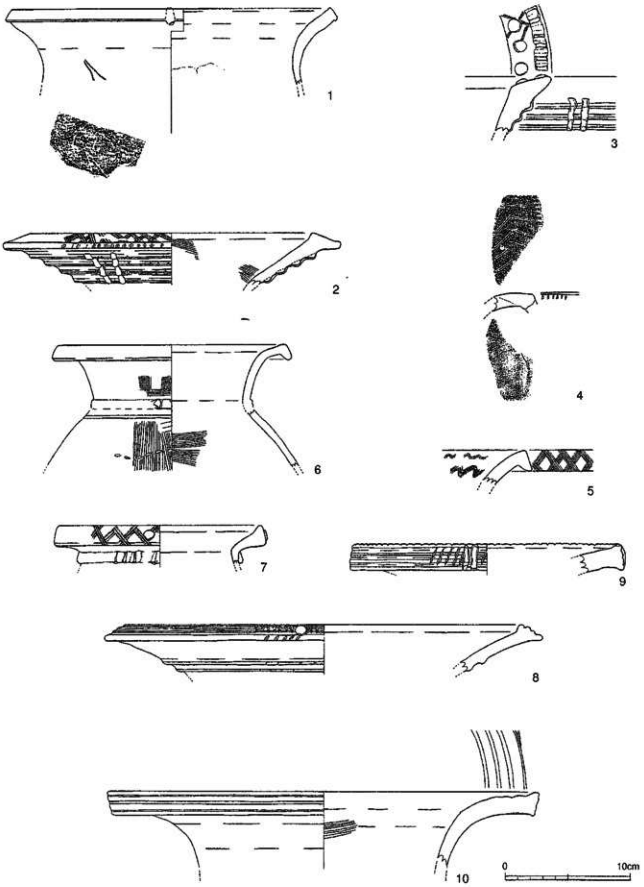
註1　正視してみると、スタンプ文に多く描かれている鳥形のようにも捉えうる。

4．Ⅰ区・Ⅱ区遺構にともなわない出土遺物（第134～161図）

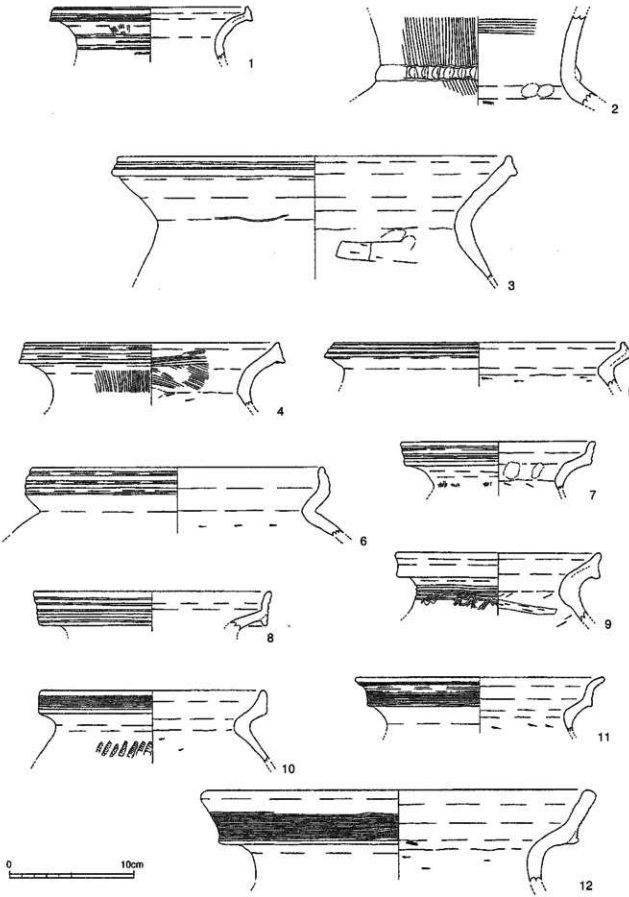
遺構にともなわない遺物は、Ⅰ区を中心に多数出土している。基本的には反転復元の可能なものを図化した。また壺・甕類は口縁部破片の量の多さと底部破片の出土量から、全体復元可能なものを期待したが、破片の磨滅と器壁の薄さのためにほとんどが復元できなかった。

土器群20・21は第3図に平面図が掲載してあるが、Aグリッド、Bグリッド間はセクションベルトを設定していたため現地で図化することができず空白となってしまった。両土器群は平面的に集中をみせてはいるが、堆積土が11層灰色砂で南北方向の溝状の落ち込み内からの出土遺物であり、この11層は一度に流されてきたような堆積状況で、土器の風化が最もひどかった。また土器も当遺跡内で時期の最も古いタイプのものから最も新しいタイプのものまで出土した。全部を考慮するとこの土器群は洪水などにより地を抉り流れてきた2次的な堆積物であろう。土器群20・21からはかなりの量の遺物が出土しているが、紙面の都合上などにより、当土器群の特徴を捉えうるものをのみ図化した。

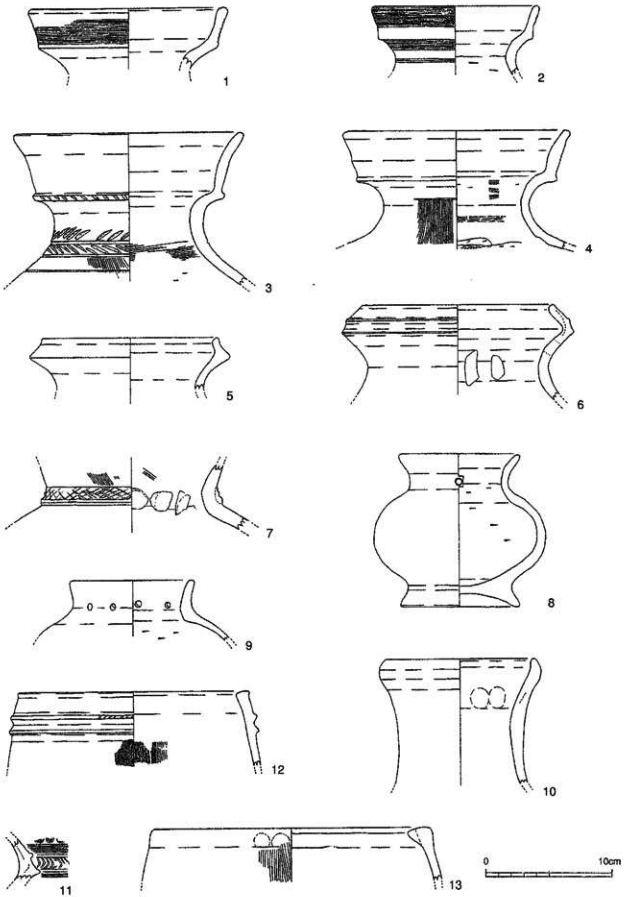
以下個々の説明は観察表にかえる。



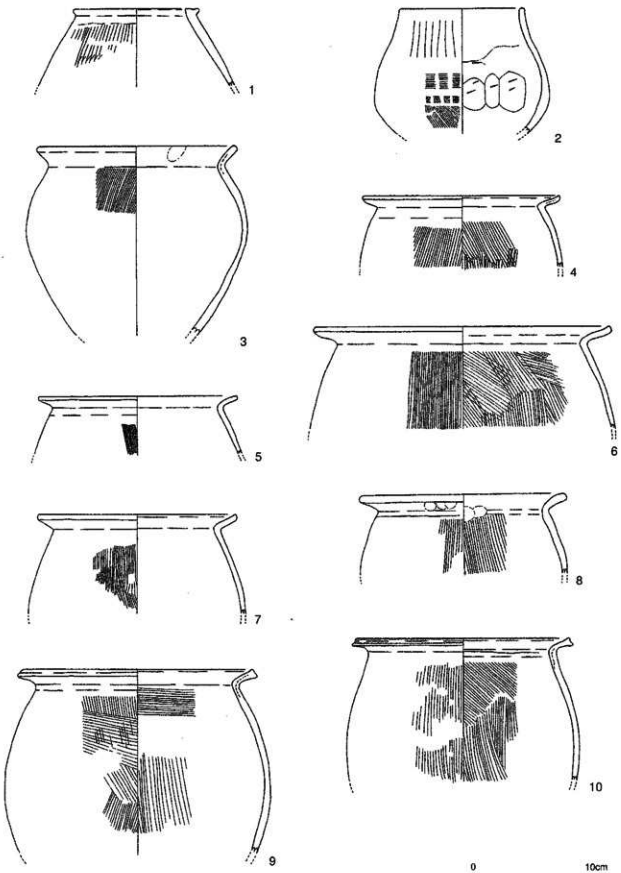
第134図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図1（S=1/3）



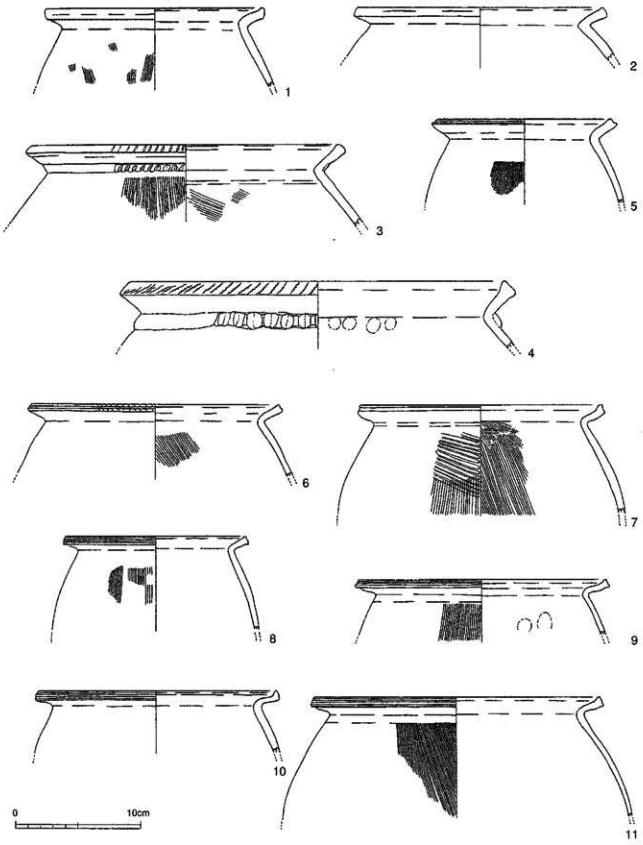
第135図　I区遺構外出土遺物実測図2（S=1/3）



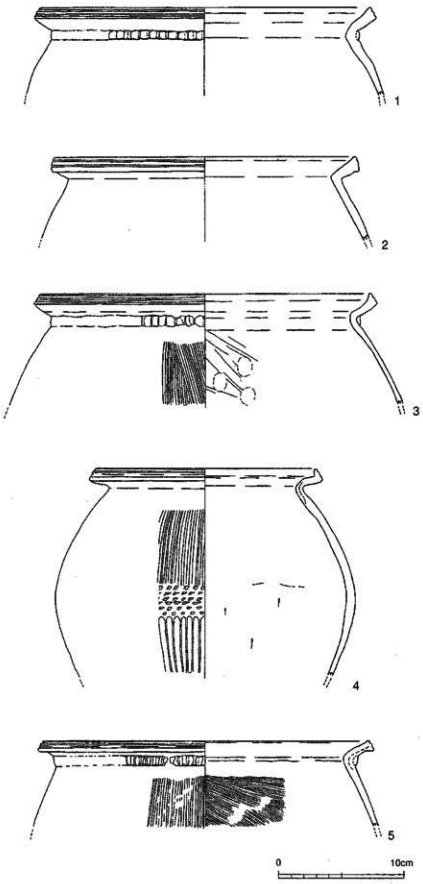
第136図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図3（S=1/3）



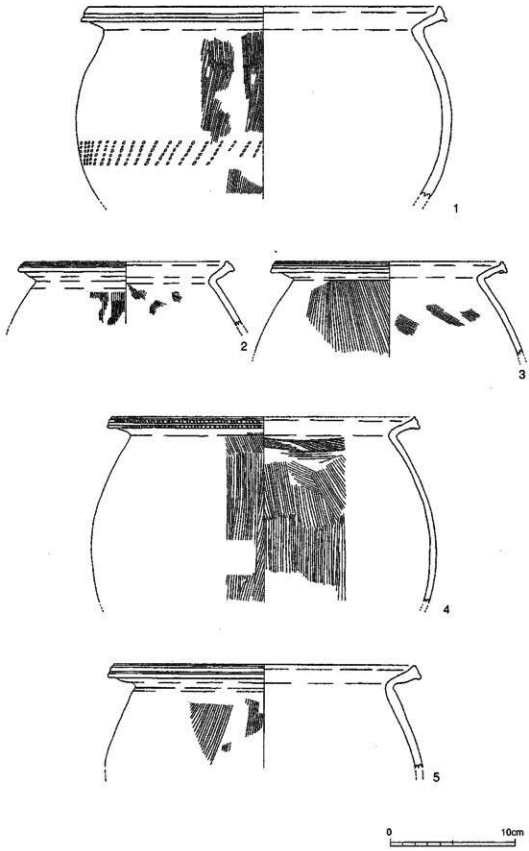
第137図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図4（S=1/3）



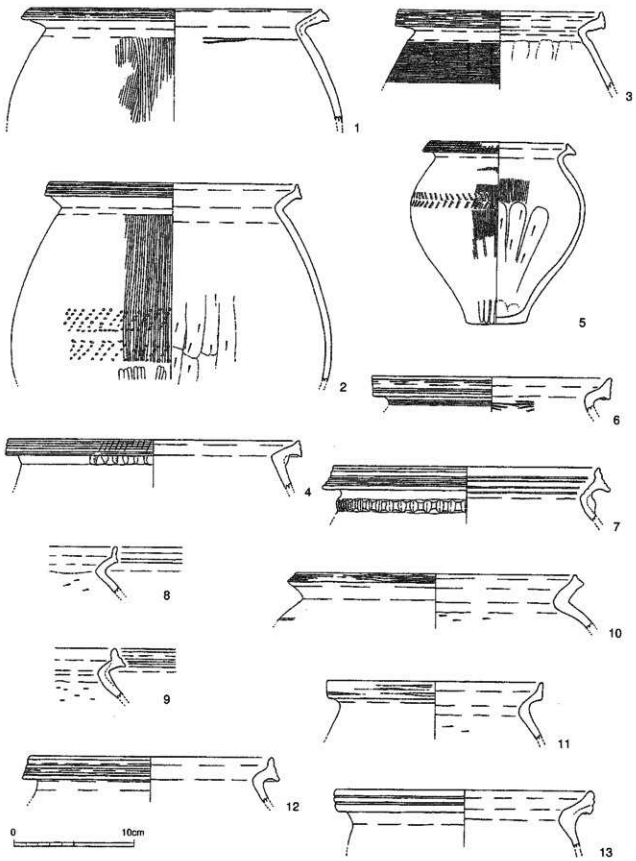
第138図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図5（S=1/3）



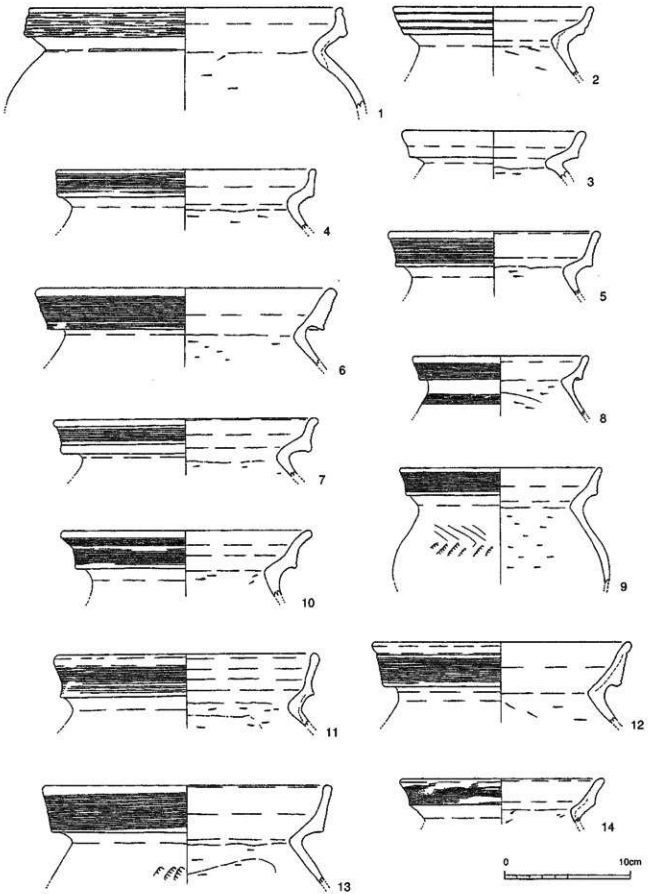
第139図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図6 (S=1/3)



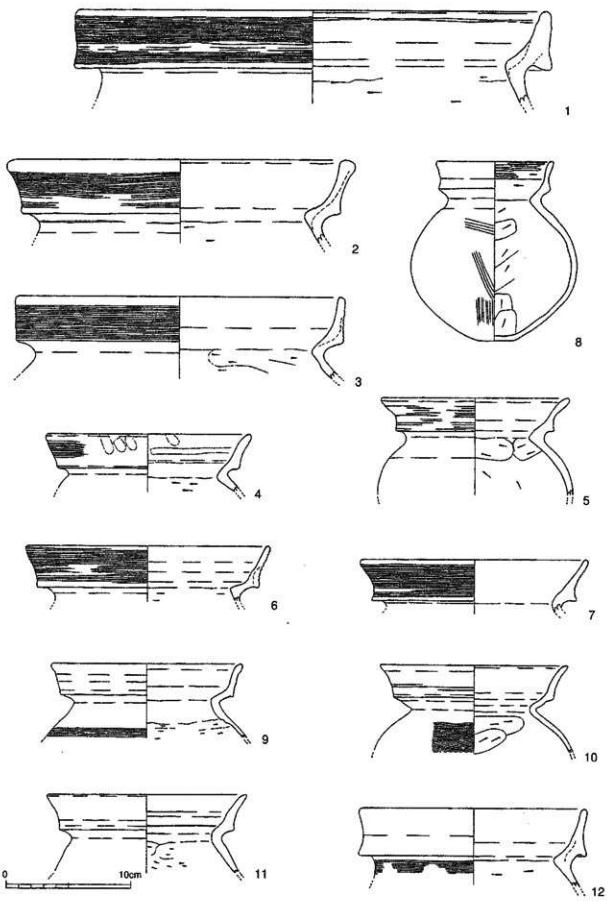
第140図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図7（S=1/3）



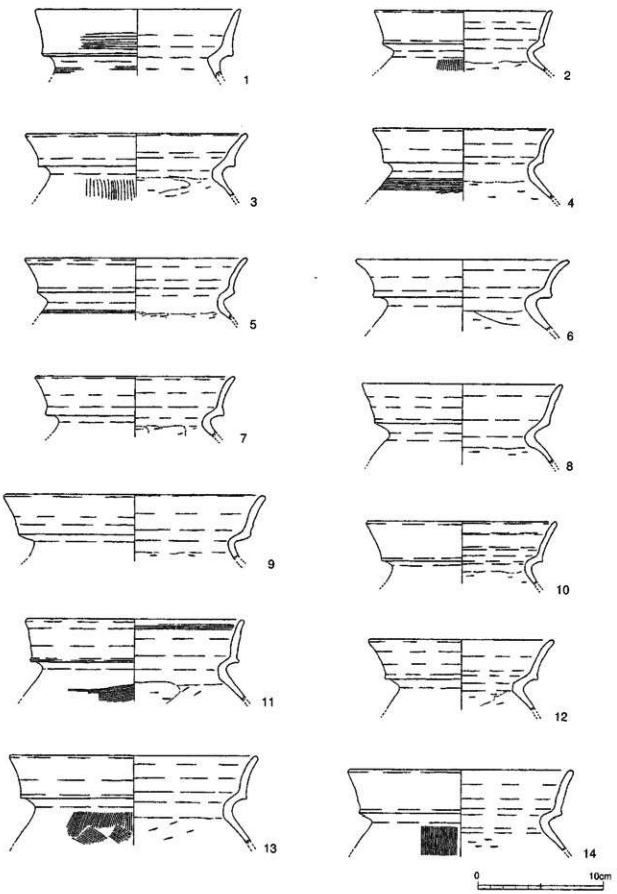
第141図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図8（S=1/3）



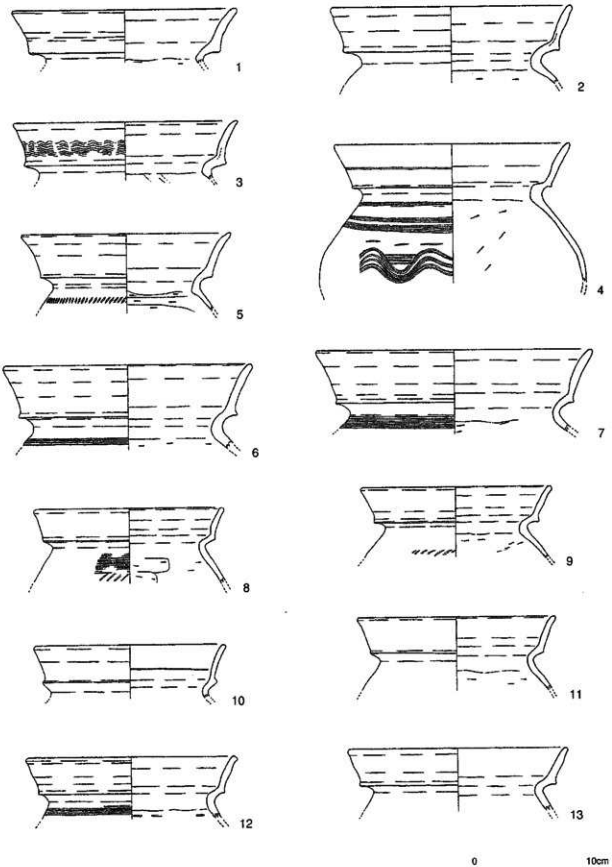
第142図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図9（S=1/3）



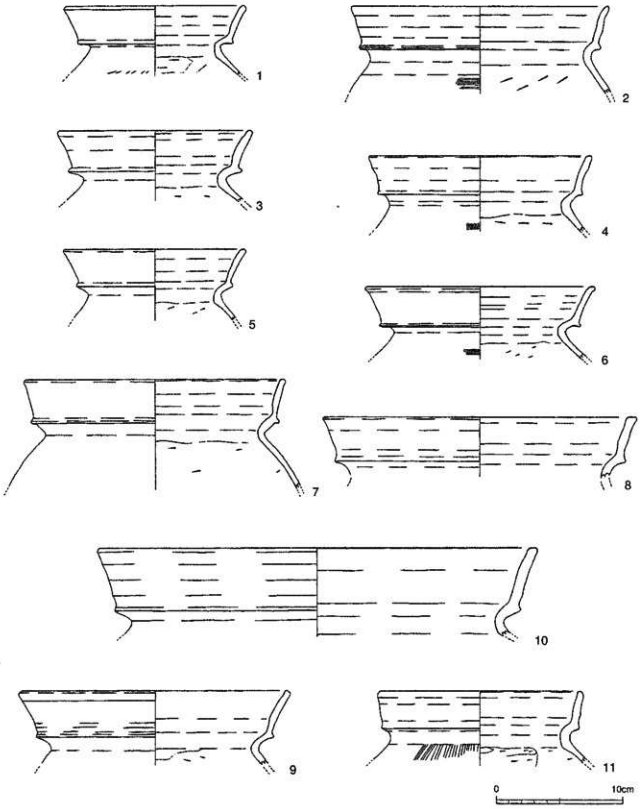
第143図　I区遺構外出土遺物実測図10 (S=1/3)



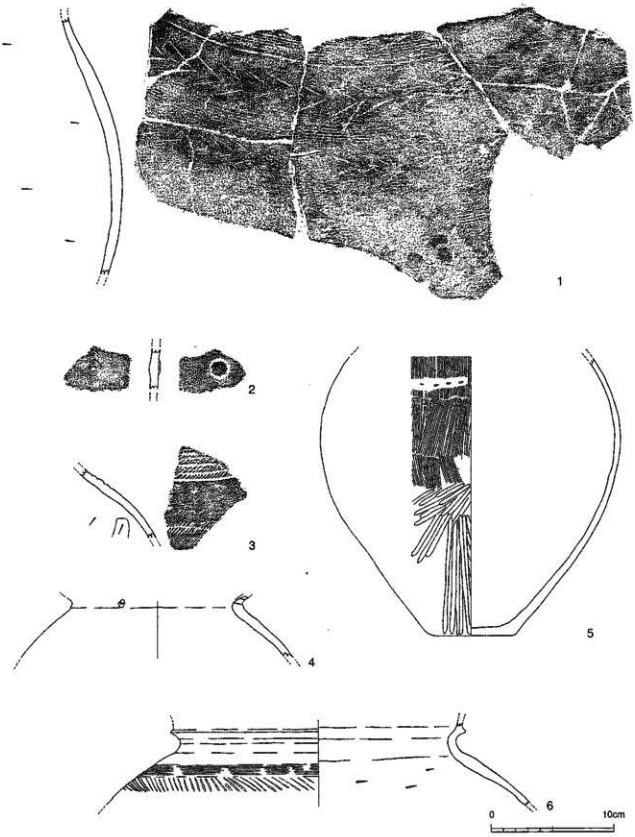
第144図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図11（S=1/3）



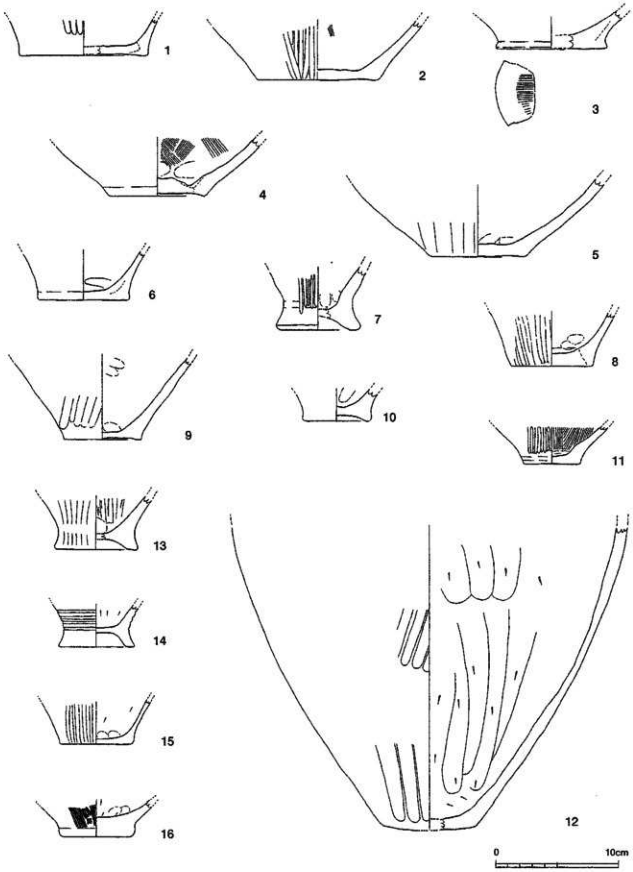
第145図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図12（S=1/3）



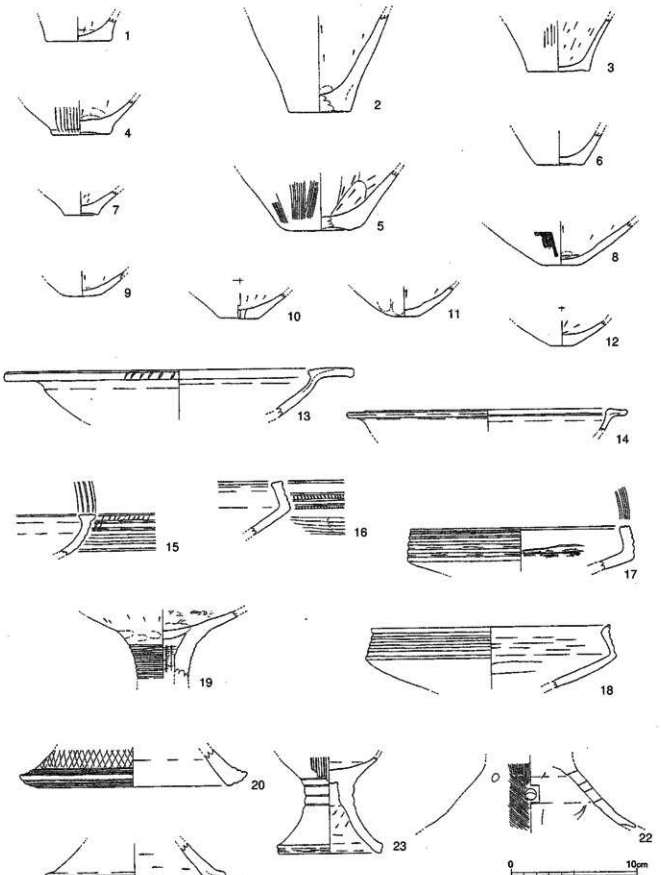
第146図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図13 (S=1/3)



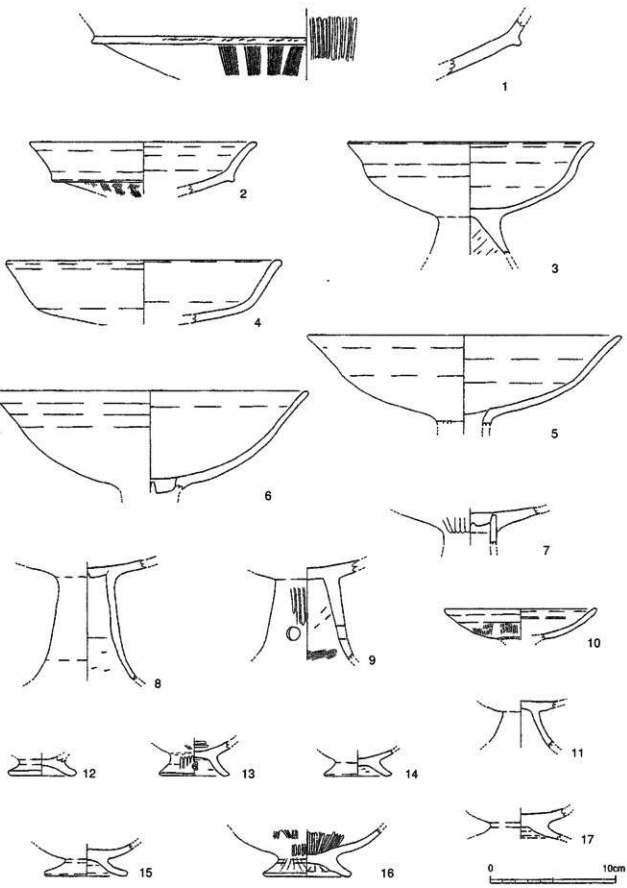
第147図　I区遺構外出土遺物実測図14（S=1/3）



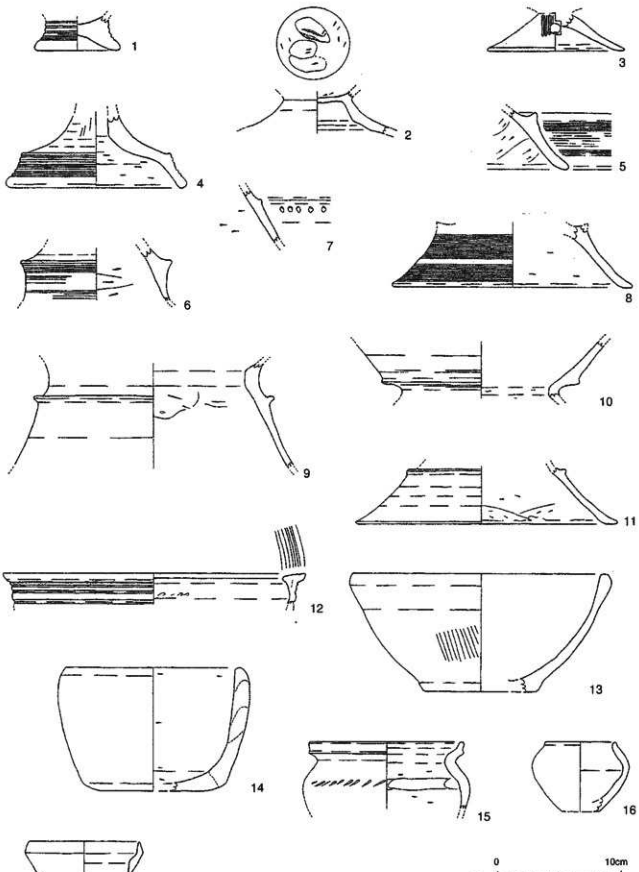
第148図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図15（S=1/3）



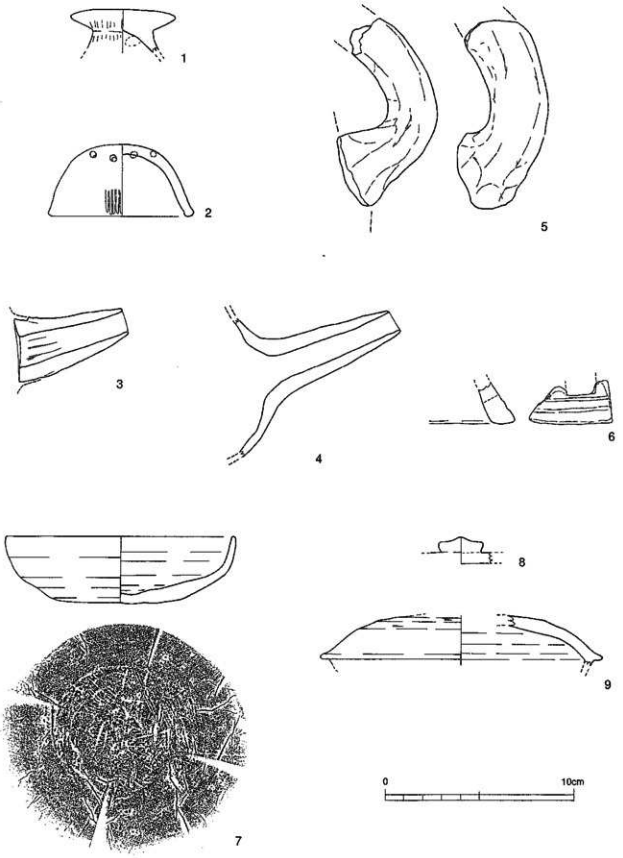
第149図　I区遺構外出土遺物実測図16（S=1/3）



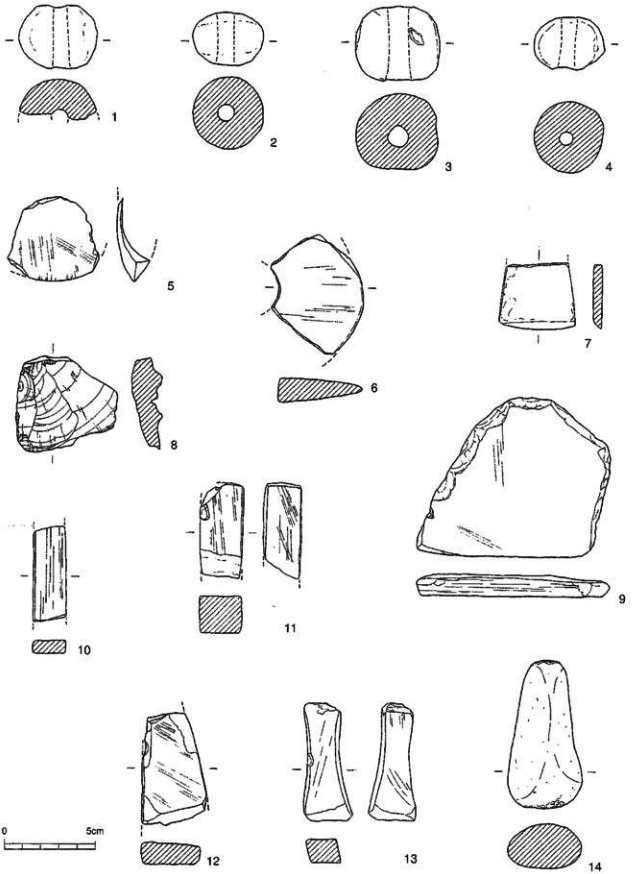
第150図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図17（S=1/3）



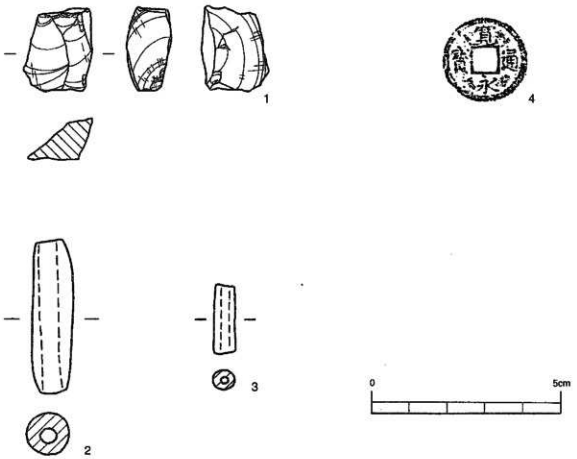
第151図 Ⅰ区遺構外出土遺物実測図18 (S=1/3)



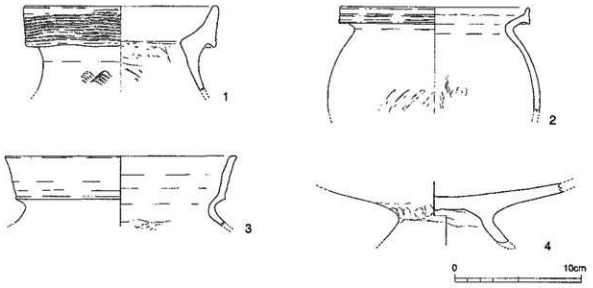
第152図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図19 (S=1/2)



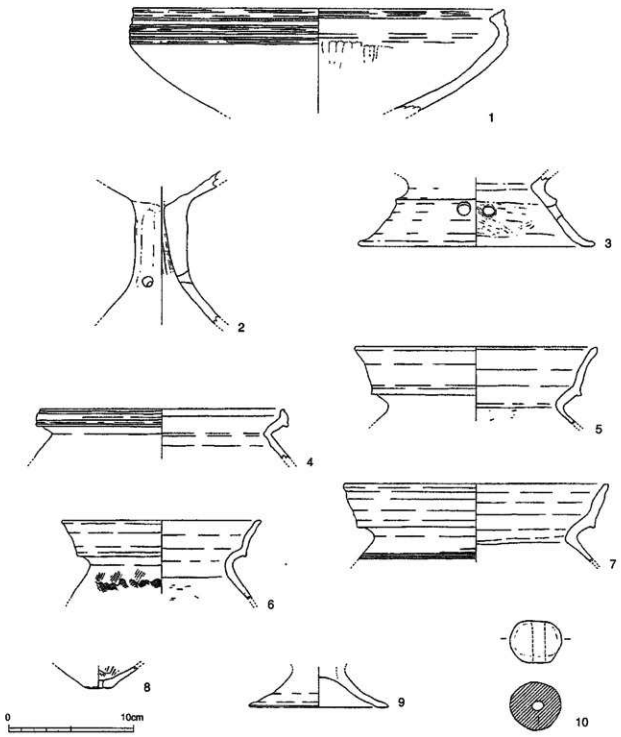
第153図 Ⅰ区遺構外出土遺物実測図20 (S=1/2)



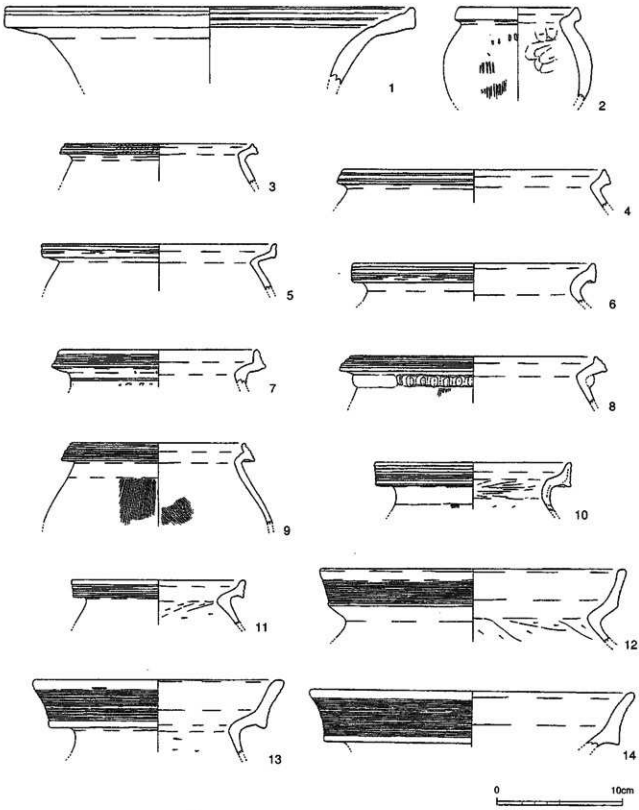
第154図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図及び拓影21（S=1/1）



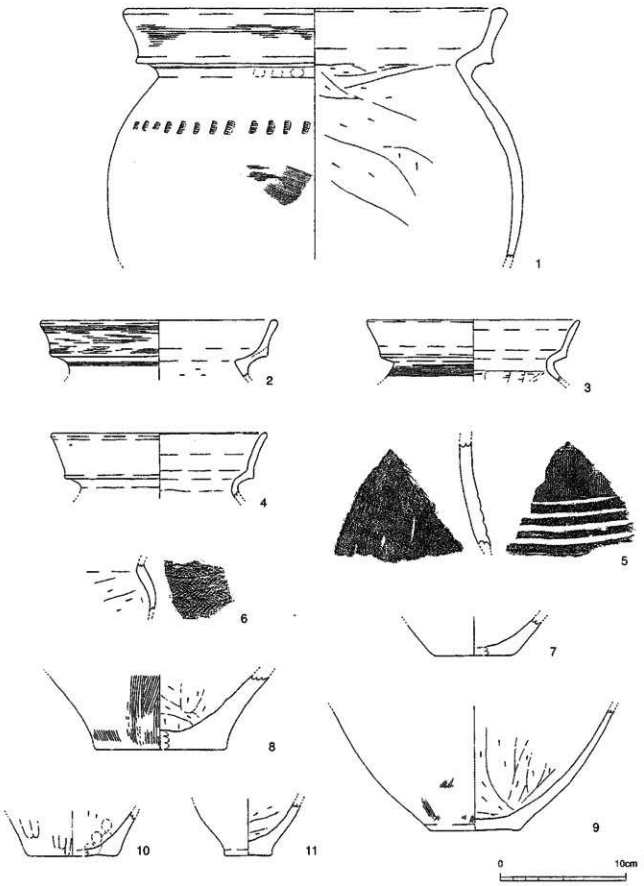
第155図　土器群20出土遺物実測図（S=1/3）



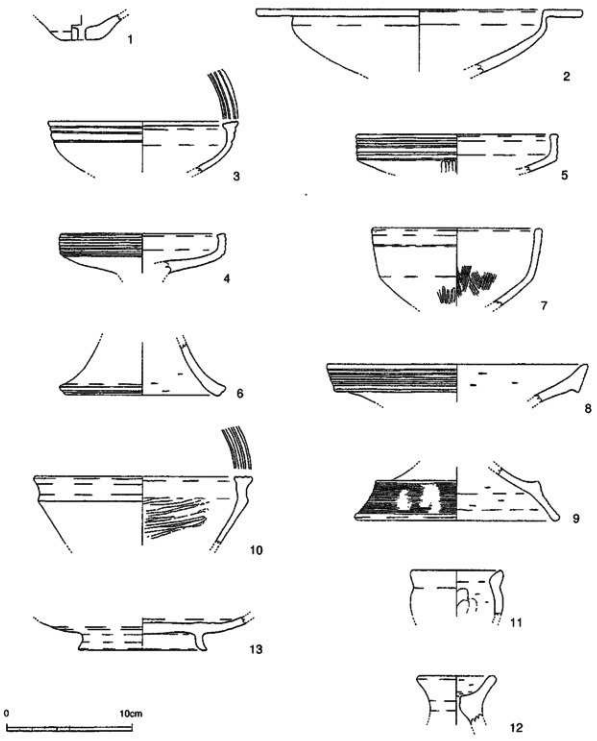
第156図　土器群20(1～3)、21(4～10)出土遺物実測図 (S=1/3)



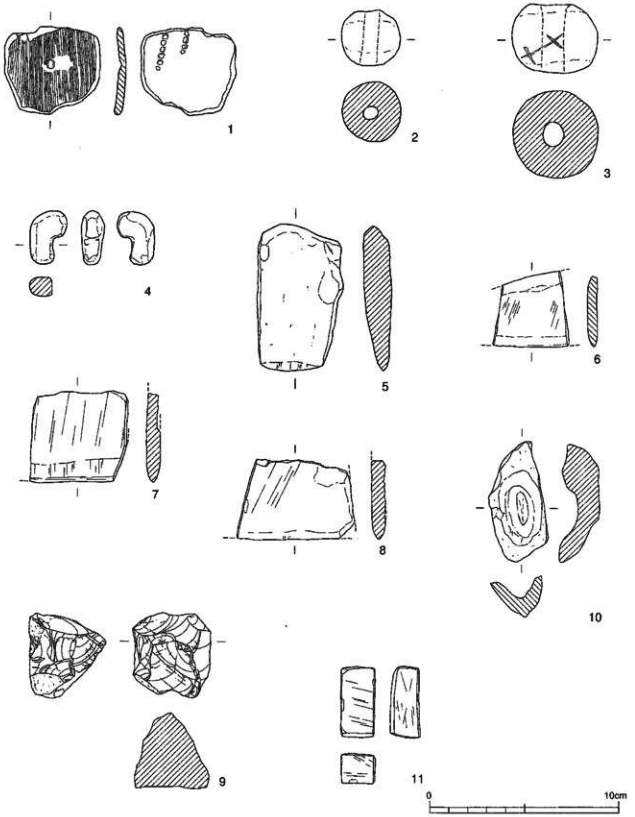
第157図　II区遺構外出土遺物実測図1（S=1/3）



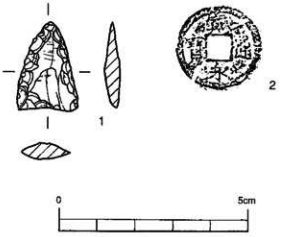
第158図　II区遺構外出土遺物実測図2（S=1/3）



第159図　II区遺構外出土遺物実測図3 (S=1/3)



第160図　II区遺構外出土遺物実測図4（S=1/2）



第161図　II区遺構外出土遺物実測図及び拓影5（S=1/1）

5．遺物観察表、その他・石器一覧表

挿図番号　図面番号ー図面内の個々の番号

器種　破片のみで器形の不明なものは、部首を示した

法量　カッコ内は残存率を示す．部所を示したものはその部所に対しての残存率、残存率の不明なものはその部所の破片と記す

胎土・色調・焼成

①胎土　砂粒の大きさと鉱物名．（　）内は視覚的に量の多いものから記した
　　特に緻密なものは明記した

②色調　褐色を標準に視覚的に捉えうる色調を示す

③焼成　焼き物全体として、良好・普通・不良と分類した

形態・手法の特徴

ほぼ全体的に記述した

計測値　ほぼ最大長、最大幅、最大厚を測定した．有孔のものは厚さに孔径を記述した

平成５年度調査土器観察表

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形態・手法の特徴	備考
11−1	SK10	甕	口径 13.5 （口縁部 1/7存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黄褐色　③普通	頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁端部は上下に肥厚し、端面には浅い3条の沈線文を施す 内外面ともナデ調整	口縁部外面に黒斑あり
11−2	SK10	甕	（口縁部破片）	①1mm前後の砂粒子(石英・長石など)含む ②淡黄褐色　③普通	頸部からわずかに外傾して複合口縁となり、端部を丸くおさめる．突出部は出ない．口縁部に8条の沈線文を施す 風化著しく調整不明	
11−3	SK10	甕	（口縁部破片）	①微砂粒子(石英・長石・金雲母など)含む ②暗橙褐色　③普通	複合口縁で端部はまっすぐに引きのばし、突出部は横にゆるく出る 内外面ともナデ調整	口縁部外面に黒斑あり
11−4	SK10	小型甕 （ミニチュア土器）	口径 8.6 最大径 9.6 器高 7.0 （ほぼ完形）	①1mm大の砂粒子（石英など）多く含む ②黄橙褐色　③普通	複合口縁で端部を引きのばし丸めて終えている．胴部ほぼ中央に最大径あり、かなりの胴張り 肩部に上から列点文、５〜６条の平行沈線文、列点文が施してある 外面及び内面口縁部ナデ調整、内面頸部以下ケズリ調整	
11−5	SK10	高坏	底径 13.5 （脚部 1/5存）	①1mm前後の砂粒子（石英など）含む ②黄褐色　③普通	脚裾部は断面矩形で平坦面をもちわずかに反る．5条の凹線文を施し、直立ぎみの脚である 外面及び内面裾部ナデ調整、脚部ケズリ調整	
13−1	SK12	甕	（頸部破片）	①1mm前後の砂粒子（石英・長石など）多く含む　②暗黄褐色　③普通	頸部に指頭圧痕文帯 内外面ともナデ調整	
13−2	SK12	底部	底径 6.7 （底部 1/4存）	①1mm前後の砂粒子(石英・長石など)多く含む　②外面黒褐色、内面黄褐色　③普通	しっかりした平底 外面ミガキ調整、内面ケズリ調整	
13−3	SK13	甕	（口縁部破片）	①1〜2mm大の砂粒子（石英・長石など）多く含む　②暗黄褐色　③普通	口縁部に4条の浅い沈線文、部分的に擦消し 外面及び内面口縁部ナデ調整、内面頸部以下ケズリ調整	
13−4	SK13	注口土器	残存長 7.3 接合部径 4.4 （注口部分）	①微砂粒子(石英・長石・赤色粒子など)含む　②淡黄褐色　③普通	上向きで、先端が薄く先細りになる．接合方法は、胴部自体にも突起をつけそこへ注口部をはさみこみ貼り付ける 胴部内面ケズリ調整、注口部風化著しく調整不明	
13−5	SK14	甕	（口縁部破片）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石など）多く含む　②暗黄褐色　③普通	複合口縁で口縁部に8条以上の平行沈線文を施す 内外面ともナデ調整	
13−6	SK14	甕	（頸部破片）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む ②暗黄褐色　③普通	薄手の甕で複合口縁となる 外面及び内面口縁部ナデ調整、内面頸部以下ケズリ調整	
13−7	SK14	甕	（口縁部破片）	①微砂粒子（石英・長石など）含む ②黄橙褐色　③普通	薄手の複合口縁で、端部は引きのばしておさめる．突出部はあまり出ない 内外面ともナデ調整	
13−8	SK14	底部	底径 5.0 （底部 1/5存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石など)含む ②外面暗橙褐色、内面黄褐色　③普通	小ぶりだけれどしっかりした平底、底面に板目が観察できる 外面ミガキ調整、内面ケズリ調整	
13−9	SK15	甕	（口縁部破片）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など）含む ②黄褐色　③普通	口縁端部上下に肥厚し3条の凹線文を施す 内外面ともナデ調整	
13−10	SK15	甕	（口縁部破片）	①微砂粒子（石英など）含む ②黄褐色　③普通	薄手の複合口縁、端部はわずかに平坦面をつくり、外方に気持ちだけ曲げている 外面及び内面口縁部ナデ調整、内面頸部以下ケズリ調整	
13−11	SK15	低脚坏	接合部径 3.5 （1/3存）	①1mm前後の砂粒子（石英など）含む ②外面黒褐色〜黄褐色、内面黄褐色 ③普通	少し長めの脚柱部から外反して裾部がでる．坏部はやや深みのある立ち上がりを呈す 外面ナデ調整、接合部付近に指押さえ痕、内面ヘラミガキ調整か	
17−1	SK17	甕	口径 16.1 （口縁部 1/9存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・金雲母など）含む　②暗黄褐色　③普通	頸部が「く」の字状に曲がり口縁端部を丸くおさめる 内外面ともナデ調整	
17−2	SK17	甕	口径 20.0 （口縁部 1/4存）	①微砂粒子（石英・長石・金雲母など）及び散点の2〜10mm大の大粒の砂粒子含む ②黄褐色　③普通	頸部が「く」の字状に曲がり口縁端部をわずかに肥厚さす 外面胴部上半以上ナデ調整、以下ハケ目調整．内面ナデ、ハケ目調整	
17−3	SK17	甕	口径 15.0 最大径 17.0 器高 20.2 （1/2存）	①微砂粒子(金雲母・石英など)多く含む ②灰黄褐色　③普通	薄手の複合口縁をもつ甕．最大径が胴部1/3上半にあり、倒卵形を呈する．口縁端部は引きのばし、突出部は横へ引き出す．肩部にハケ目原体と同様の施文具にて10条の平行沈線文、6〜7条の波状文を施す 外面波状文以上ナデ調整、平行沈線文以下ハケ目調整．内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	外面胴部に煤付着、特に最大径付近におこげがこびり付く
17−4	SK17	底部	（底部破片）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・金雲母など）含む　②暗黄褐色　③普通	しっかりした平底 外面底部まわりヨコナデ、上位タテナデ調整．底面ケズリのちナデ調整、内面ナデ調整で指頭圧痕あり	
17−5	SK17	鼓形器台	口径 19.6 筒部径 9.5 底径 18.0 器高 11.2 （2/3存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・橙色粒子など）に混ざり、2mm大の砂粒子少し含む　②黄橙褐色　③普通	かなり縮約されたタイプ．数ヶ所浅い沈線を施している．脚部内面に沈線1条観察されるため、初め受部としようとしたものを脚部に逆転したと思われる 風化著しいが、全体にナデ調整と思われる	
17−6	SK17	鼓形器台	筒部径 11.9 （筒部 1/8存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石など）を少し含む　②黄橙褐色　③普通	薄手になりつつあり無文 内外面ともナデ調整、内面筒部は風化著しく調整不明	
17−7	SK17	鼓形器台	（脚裾部破片）	①微砂粒子（石英・長石など）多く含む ②暗黄褐色　③普通	外面及び内面裾部ナデ調整、内面脚部ケズリ調整	
17−8	SK17	鼓形器台	底径 19.5 （脚裾部 1/8存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）多く含む　②黄橙褐色　③普通	外面及び内面裾部ナデ調整、内面脚部ケズリ調整	

挿図番号	出土地点	器　種	法　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形態・手法の特徴	備　考
13−12	SK18	底　部	底径 7.0 (底部 1/2存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・金雲母など) 及び数個の7〜8mm大の大粒の砂粒子を含む ②外面黄褐色、内面暗褐色 ③普通	着地部に平坦面をつくるしっかりした上げ底の底部、平底に成形したのち貼り付けて脚台部を成形している 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	
14−1	SK19	甕	(口縁部破片)	①微砂粒子（石英・角閃石など）含む ②暗黄褐色 ③普通	頸部から「く」の字状に屈曲し、口縁部は上に肥厚し面をつくり3条の凹線文を施す 内外面ともナデ調整	
14−2	SK19	甕	(口縁部破片)	①微砂粒子(石英・金雲母など)若干含む ②黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部をまっすぐに引きのばし、突出部を横へわずかに引き出す、内外面ともナデ調整	外面所々煤付着
14−3	SK19	高　坏	口径 21.7 (坏部 1/5存)	①微砂粒子（石英・長石・金雲母など）及び若干の2〜3mm大の砂粒子含む ②外面黄褐色、内面暗褐色 ③普通	浅めで直線的な立ち上がりをみせ、端部はわずかに内側へおさめている 外面ナデ調整、内面ミガキ調整と思われる	胎土は在地の弥生土である
14−4	SK19	鼓形器台	(受部破片)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）若干含む ②淡黄橙褐色 ③普通	外面ナデ調整、内面ミガキ調整	
19−1	SK20	甕	(口縁部破片)	①1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②淡黄褐色 ③普通	口縁部を上下に肥厚させ、できた面に凹線状の段をナデによりつくり出している 内外面ともナデ調整	
19−2	SK20	甕	(胴部破片)	①1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②淡黄褐色 ③普通	外面及び内面頸部ナデ調整、内面頸部以下ケズリ調整	
19−3	SK20	底　部	底径 6.7 (底部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・金雲母など）多く含む ②暗黄褐色 ③普通	底部は厚くないが、しっかりした平底 外面ナデ、ハケメ調整、底面ナデ調整、内面ケズリ調整	底面に黒斑あり
19−4	SK20	高　坏	(坏部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など) 含む ②暗黄橙色 ③普通	水平口縁部の鍔の部分である。口縁部から湾曲しわずかに垂下している。端部には刻目を施す。折曲部の上端はわずかに突出する 内外面ともナデ調整	胎土は在地のものであるが、器形は北部九州系
14−5	SK22	甕	(口縁部破片)	①1mm大の砂粒子（石英など）多く含む ②外面暗黄褐色、内面黒褐色 ③普通	頸部から「く」の字状に屈曲し、口縁端部はわずかに肥厚し平坦面をつくる 内外面ともナデ調整	
14−6	SK22	甕	(口縁部破片)	①微砂粒子（橙色粒子）若干含む ②淡黄褐色 ③不良	頸部から「く」の字状に屈曲し、口縁端部を上へ肥厚させている 内外面ともナデ調整	
14−7	SK22	甕	(口縁部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など) 含む ②外面灰黄褐色、内面黄橙褐色 ③普通	頸部から「く」の字状に屈曲し、口縁端部を上へ肥厚させた面に2条の沈線文を施す 内外面ともナデ調整	
14−8	SK22	底　部	底径 5.1 (底部 1/2存)	①1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②外面暗黄橙褐色、内面黒褐色 ③普通	薄手だがしっかりした平底 外面ミガキ調整、底面ナデ調整、内面ケズリ調整	
14−9	SK22	底　部	底径 14.2 (底部 1/4存)	①1〜2mm大の砂粒子(石英・長石など)多く含む ②外面暗黄橙褐色、内面暗灰黄褐色 ③普通	厚手の大きいしっかりした平底 外面ミガキ調整、内面風化著しく調整不明	外面に黒斑あり
14−10	SK24	甕	(口縁部破片)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・長石など）含む ②淡黄褐色 ③普通	上下に肥厚し、断面「T」の字状の面に3条の凹線文を施す 内外面ともナデ調整	
21−1	SK26	甕	(口縁部破片)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②暗黄褐色 ③普通	口縁部わずかに上下に肥厚し、平坦面に1条の沈線文を施す 内外面ともナデ調整	
21−2	SK26	甕	(口縁部破片)	①微砂粒子（石英・長石など）含む ②灰黄褐色 ③普通	頸部から膨らみをもたせて口縁部へ、口縁部は上へ肥厚させ、平坦面には凹みをつくる 内外面ともナデ調整	外面頸部に煤付着
24−1	SK27	甕	(口縁部破片)	①1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②淡黄褐色 ③不良	口縁部わずかに上下に肥厚して面をもち2条の沈線文を施す 内外面ともナデ調整	
24−2	SK27	甕	(口縁部破片)	①1mm以下の砂粒子,微砂粒子(石英・長石・金雲母など)多く含む ②暗橙褐色 ③普通	口縁部がのび、複合口縁化しつつあるタイプ、口縁面に3条の凹線文を施す 内外面ともナデ調整	
24−3	SK27	甕	口径 15.2 (口縁部 1/6存)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・長石・金雲母など）含む ②褐灰色 ③普通	複合口縁で端部を外反させ引きのばし突出部はわずかに下へ出る 外面及び内面頸部以上ナデ調整,内面頸部以下ケズリ調整	
24−4	SK27	甕	口径 17.3 (口縁部 1/4存)	①微砂粒子（石英・金雲母など）含む ②淡黄褐色 ③普通	複合口縁で端部は引きのばし、突出部はわずかに横へ引き出す。肩部に6条の平行沈線文、その下に1条の沈線文を施工後、ヘラ状工具による「ノ」の字の刺突文 外面及び内面頸部以上ナデ調整、頸部以下ケズリ調整、内面頸部に指頭圧痕あり	
24−5	SK27	甕	口径 17.6 (口縁部 1/12存)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）若下含む ②黄褐色 ③普通	複合口縁で端部は丸くおさめ、突出部は出ない 内外面ともナデ調整	
24−6	SK27	甕	口径 17.8 (口縁部 1/8存)	①微砂粒子（石英・金雲母など）含む ②黄褐色 ③普通	複合口縁で端部は外に折り平坦面をつくる。突出部はわずかに斜め下に出る 内外面ともナデ調整	口縁部に黒斑あり
24−7	SK27	甕	口径 15.7 (口縁部 1/8存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む ②黄橙褐色 ③普通	複合口縁で端部丸くおさめ、突出部はわずか斜め下方に出る。口縁面は強いナデにより浅い沈線が入る 内外面ともナデ調整	
24−8	SK27	甕	口径 22.7 (口縁部 1/7存)	①微砂粒子（石英・金雲母など）含む ②黄橙褐色 ③普通	複合口縁で端部は外へわずかに折り丸くおさめ、突出部は強く意識して横方向へつくり出している 内外面ともナデ調整	
24−9	SK27	甕	(口縁部破片)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む ②黄褐色 ③普通	複合口縁で端部わずかに肥厚して平坦面をつくり、突出部は横へ引き出す 内外面ともナデ調整	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形態・手法の特徴	備考
24−10	SK27	甕	口径　21.0 （口縁部 1/7存）	①1～2mm大の砂粒子（石英など）含む ②暗黄褐色　③普通	複合口縁で端部はわずかに肥厚し平坦面をつくり、突出部は強く意識して横へ出す．丸く張り出す肩部にヘラ状工具による「ノ」の字の連続刺突文が2条施してある 外面下段の刺突文以上及び内面頸部以上ナデ調整、外面以下ハケ目調整、内面以下ケズリ調整	
24−11	SK27	甕	頸部径　11.8 （頸部～胴部破片）	①微砂粒子（金雲母など）含む ②黄褐色　③普通	器壁が薄手で24−4～10の胴部であろう．肩部に「ノ」の字の刺突文の痕跡あり 外面頸部ナデ調整、以下ハケ目調整．内面頸部ナデ調整、以下ケズリ調整	
24−12	SK27	底部	底径　7.5 （底部 3/4存）	①1～2mm大の砂粒子（石英など）含む ②外面黄橙色、内面黒褐色　③普通	しっかりした平底 内外面ともナデ調整と思われる	
24−13	SK27	鉢	（口縁部破片）	①微砂粒子（石英・長石など）若干含む ②淡黄褐色　③普通	無頸のタイプで、端部に平坦面をもち胴部に凹線文を施す 内外面ともナデ調整	
24−14	SK27	高坏	接合部径　5.5 （1/3存）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・金雲母など）含む　②黄褐色　③普通	接合法は底からしぼり、貼り付けているため不明．脚の基部を広めにしっかりと付け、広がりぎみの脚を付ける 外面ハケ目調整．坏部内面ナデ調整．脚部内面ナデしぼり調整	
24−15	SK27	高坏	接合部径　3.7 （坏部破片）	①微砂粒子（石英・金雲母など）含む ②淡黄褐色　③普通	円盤充填法で接合してある．しっかりした坏と比べると細身の脚が直立ぎみにのびる 坏部内外面ともナデ調整.脚部外面ナデ調整､内面ケズリ調整	
24−16	SK27	高坏	接合部径　4.6 （坏底部完）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②黄橙褐色　③普通	円盤充填法で接合．しっかりした坏部 内外面ともナデ調整	
24−17	SK27	高坏	（坏部破片）	①微砂粒子(石英・金雲母など)若干含む ②淡黄橙褐色　③普通	円盤充填法の痕跡あり 内外面ともナデ調整	外面に朱塗り痕あり
24−18	SK27	鼓形器台	底径　19.0 （脚部 1/7存）	①微砂粒子（石英・角閃石・長石など）若干含む　②黄橙褐色　③普通	器壁が薄く、脚裾部は丸くおさめる 外面及び内面裾部ナデ調整．内面脚部ケズリ調整	
24−19	SK27	鼓形器台	（脚部破片）	①微砂粒子（石英・長石など）含む ②にぶい黄褐色　③普通	裾部が長くなだらかにのびている 外面及び内面裾部ナデ調整．内面脚部ケズリ調整	
22−1	SK28	胴部	（胴部破片）	①1～2mm大の砂粒子（石英など）含む ②暗黄褐色　③普通	胴部に5点単位の連続列点文がめぐる 外面ハケ目調整．内面ナデ調整	
22−2	SK28	底部	底径　6.5 （底部 1/6存）	①1～2mm大の砂粒子(石英･長石など)多く含む　②外面暗黄褐色､内面暗褐色　③普通	平底 外面ミガキ調整．底面ナデ調整．内面ハケ目調整	
22−3	SK28	高坏	（脚部破片）	①1～2mm大の砂粒子（石英・角閃石など）若干含む　②黄褐色　③普通	脚端部は肥厚して面をもち、断面角を接点にした三角形状．脚部には多条の凹線文を施す 内外面ともナデ調整	
26−1	SK29	壺	口径　24.5 （口縁部 1/12存）	①1～2mm大の砂粒子（石英など）含む ②黄褐色　③普通	厚ぼったい複合口縁で端部は丸くおさめ、突出部を下に引き出している 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
26−2	SK29	壺	（口縁部破片）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・金雲母など）含む　②暗黄褐色　③普通	短めの複合口縁で端部を丸ぼったくおさめ、突出部は下へ引き出す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
26−3	SK29	壺	（口縁部破片）	①1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②外面暗褐色、内面黄褐色　③普通	厚ぼったい複合口縁で端部は肥厚させ面をつくり丸くおさめ、突出部はわずか下に引き出す 内外面ともナデ調整	
26−4	SK29	甕	口径　15.0 （頸部 1/7存）	①微砂粒子（石英・長石など）含む ②暗黄褐色　③普通	短く「く」の字状に屈曲した頸部から口縁端部をわずかに肥厚させ2条の沈線文を施す．胴部最大径に5点単位の連続列点文を施す 内外面ともナデ調整．ただし胴部最大径以下にケズリ痕が認められる	
26−5	SK29	甕	口径　11.2 （口縁部 1/8存）	①微砂粒子（石英など）及び2～4mm大の砂粒子若干含む　②暗黄褐色　③普通	厚ぼったい複合口縁で端部はわずかに肥厚させ丸くおさめ、突出部は下に引き出す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
26−6	SK29	底部	底径　7.5 （底部 1/4存）	①1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②淡黄褐色　③普通	しっかりした平底 外面ミガキ調整､底面及び底部まわりナデ調整.内面ミガキ調整	
29−1	SK30	大型壺	口径　41.1 （口縁部 1/7存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・金雲母・角閃石など）及び若干の2～4mm大の砂粒子含む　②暗黄褐色　③やや不良	複合口縁で端部はわずかに肥厚し平坦面をつくり丸くおさめる．突出部はあまり出ない．口縁部に沈線文を施してあるが風化著しく不明．頸部にも同様な沈線文が7条以上施してある 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	29-2と酷似、胴部に黒斑あり
29−2	SK30	大型壺	頸部径　36.3 （頸部1/7存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・金雲母・角閃石など）及び若干の2～4mm大の砂粒子含む　②暗黄褐色　③やや不良	頸部に19条の沈線文を施し、その下に「ノ」の字の刺突文をめぐらす 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	29-1と酷似、胴部に黒斑あり
29−3	SK30	甕	（口縁部破片）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石など）含む　②黄褐色　③普通	口縁部が上下に肥厚し面をもち2条の沈線文を施す 内外面ともナデ調整	
29−4	SK30	甕	（口縁部破片）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②外面暗褐色、内面淡黄褐色 ③普通	「く」の字に曲がった頸部から口縁部となり上下に肥厚して口縁部が長くなってくる．口縁面に3条の沈線文が施してある． 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
29−5	SK30	甕	口径　14.6 （口縁部 1/10存）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む ②暗黄褐色　③普通	厚ぼったい複合口縁で端部をわずかに肥厚させ丸くおさめ、突出部は出ない．口縁面に7条の貝殻腹縁による沈線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
29−6	SK30	甕	口径　22.3 （口縁部 1/5存）	①微砂粒子（長石・石英など）含む ②外面黒褐色、内面暗黄褐色　③普通	複合口縁で端部をまっすぐ引きのばし止める．突出部はあまり出ない．かなり薄手 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	

挿図番号	出土地点	器　種	法　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形態・手法の特徴	備　考
29−7	SK30	甕	頸部径　10.8 (頸部 1/5存)	①1mm大の砂粒子(長石・金雲母など)含む ②暗黄褐色　③普通	器壁の薄い複合口縁の胴部であろう。肩部に平行沈線文の痕跡あり 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
29−8	SK30	底　部	底径　9.2 (底部完形)	①1〜2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②淡黄褐色　③普通	しっかりした平底 外面底部まわり及び底面ナデ調整、外面胴部ヘラミガキ調整、内面風化著しく調整不明	底部片辺に黒斑あり
29−9	SK30	底　部	(底部破片)	①1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②暗黄褐色　③普通	平底 内外面ともナデ調整、また内面指押さえ痕あり	
29−10	SK30	底　部	(底部破片)	①微砂粒子（石英・長石など）含む ②外面暗橙褐色、内面淡黄褐色　③普通	平底と思われる 外面底部まわり及び底面ナデ調整、胴部ヘラミガキ調整	
29−11	SK30	鉢	(胴部破片)	①1mm大の砂粒子(石英・金雲母など)含む ②暗黄褐色　③やや不良	厚手の直立ぎみの胴部で口縁部は欠損しているため形態は不明である 外面荒いハケ目調整、内面荒いナデ調整	胴部〜頸部付近に黒斑あり
29−12	SK30	高　坏	底径　11.5 (脚部 1/6存)	①1〜2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②黄褐色　③普通	脚裾部の端面は肥厚して面をもち上向きに反る。脚部には8条の断面三角形のしっかりした沈線文を施す 外面ナデ調整、内面縦横に施したケズリ調整	
29−13	SK30	高　坏	(坏部破片)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・金雲母など）含む　②黄褐色　③普通	接合方法は円盤充填法 外面風化著しく調整不明、内面ナデのちハケ目調整	
31−1	SD04	須恵器 坏　身	口径　12.1 (口縁部 1/10存)	①1mm大の砂粒子若干含む ②灰色　③良好	かえりは長めだが、小ぶりのタイプである 内外面ともナデ調整	
36−1	SD06	短頸壺	口径　12.2 (口縁部 1/8存)	①微砂粒子（長石など）若干含む ②暗黄褐色　③普通	わずかに肥厚して面をつくった短い口縁部をもち胴部が外へ開いていく 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
36−2	SD06	甕	(口縁部破片)	①微砂粒子（石英・長石など）若干含む ②淡黄褐色　③やや不良	「く」の字に曲がった頸部から、わずかに肥厚し面をもった口縁部に移行する 内外面ともナデ調整	
36−3	SD06	甕	(口縁部破片)	①微砂粒子（石英・長石など）含む ②黄橙褐色　③普通	頸部に指頭圧痕文帯を貼り付け、口縁部はわずかに上へ肥厚して面をつくり刻目を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下は単位の広いハケ目か当て具痕か、幅の広い沈線状の調整がなされている	
36−4	SD06	甕	(口縁部破片)	①1mm大の砂粒子（長石・石英など）若干含む　②黄褐色　③普通	口縁部は上下に肥厚して面をつくり、ナデによる浅い沈線状の沈線文を3条施す 内外面ともナデ調整	
36−5	SD06	甕	口径　17.1 (口縁部 1/10存)	①微砂粒子（石英・角閃石など）若干含む ②黄褐色　③普通	口縁部が上下に肥厚して面をもち、3条の凹線文を施す。また内面頸部に1条の沈線が入る 内外面ともナデ調整	
36−6	SD06	甕	(口縁部破片)	①微砂粒子（石英・角閃石など）若干含む ②淡黄橙褐色　③やや不良	厚手の頸部から複合口縁化した口縁部に移行する。端部は丸くおさめ、突出部は丸めに出している 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
36−7	SD06	甕	口径　15.7 (口縁部 1/9存)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・角閃石など）含む　②黄褐色　③普通	複合口縁で、端部はわずかに肥厚させ丸くおさめている。突出部はわずかに下に出、4条の凹線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
36−8	SD06	甕	(口縁部破片)	①1〜2mm大の砂粒子(長石など)多く含む ②暗褐色　③やや良好	複合口縁化したもので、突出部が今だあまく、端部は丸くおさめ、面には8条の細い沈線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
36−9	SD06	甕	(口縁部破片)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・長石など）多く含む　②暗茶褐色　③普通	複合口縁化した短い口縁部で、端部は肥厚し丸くおさめ、突出部は丸く横へ出、3条の凹線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
36−10	SD06	甕	口径　17.2 (口縁部 1/7存)	①1〜2mm大の砂粒子（石英など）含む ②暗黄褐色　③普通	湾曲した頸部から複合口縁へと続く。端部は丸くおさめ、突出部はわずかに下へ出、6条の貝殻腹縁による擬凹線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
36−11	SD06	甕	口径　13.5 (口縁部 1/8存)	①1mm以下（1粒だけ2mm大あり）の砂粒子（石英など）含む　②黄褐色　③やや不良	薄手の複合口縁で端部は引きのばしておさめ、突出部は出ない。肩部に平行沈線文らしい痕跡あり 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
36−12	SD06	甕	(口縁部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など）含む ②暗黄橙褐色　③普通	薄手の複合口縁で端部は引きのばし、突出部は横へ引き出す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
36−13	SD06	甕	口径　15.7 (口縁部 1/2存)	①微砂粒子（長石・石英など）含む ②淡黄褐色　③普通	薄手の複合口縁で端部は引きのばし、突出部は斜め下方に引き出す。肩部に平行沈線文、内面口縁部は強いナデにより3条の凹線を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	口縁部に1ヶ所煤付着
36−14	SD06	胴　部	(胴部破片)	①1mm以下の砂粒子（石英など）含む ②暗褐色　③普通	飾りつけられた胴部で、上から指頭圧痕文帯、7条の平行凹線文、縦ハケ目、波状文。 内面頸部指頭圧痕あり、頸部以上ナデ調整、以下ミガキ調整、胴部最大径にハケ目調整	
36−15	SD06	底　部	(底部破片)	①1〜2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②外面暗橙褐色、内面暗黄褐色　③普通	しっかりした平底 外面風化著しく調整不明、内面ケズリ調整	
36−16	SD06	底　部	底径　4.5 (底部 1/3存)	①1mm大の砂粒子(石英・長石など）含む ②外面暗褐色、内面暗黄褐色　③普通	平底 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	
36−17	SD06	底　部	底径　4.7 (底部 1/2存)	①1mm以下の砂粒子（石英など）含む ②外面黄橙色、内面暗褐色　③普通	平底 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	

挿図番号	出土地点	器　種	法　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形態・手法の特徴	備　考
36−18	SD06	高　坏	口径　27.0 (坏部 1/9存)	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石・橙色粒子・金雲母など)含む　②黄橙褐色　③普通	膨らみかげんの胴部からわずかに屈曲して口縁部を引きのばす 内外面ともナデ調整	
36−19	SD06	高　坏	(坏部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石・金雲母など)含む　②黄褐色　③普通	36−18に比べて、一段と屈曲がなくなり、わずかにその痕跡を留めるのみ 外面ナデ調整、内面ミガキ調整	
36−20	SD06	高　坏	(坏部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む　②黄褐色　③普通	接合方法は円盤充填法 内外面ともナデ調整	
36−21	SD06	鼓形器台	口径　23.9 (受部 1/10存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む　②黄褐色　③普通	直立ぎみの立ち上がりで、内面口縁端部直下に稜曲をつくる 内外面ともナデ調整と思われる	
36−22	SD06	鼓形器台	底径　14.4 (脚部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む　②黄褐色　③普通	外面及び内面裾部ナデ調整、内面脚部ケズリ調整	小ぶりのもの
36−23	SD06	低脚坏	(脚部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・金雲母など)含む　②黄橙褐色　③やや不良	脚部を貼り付けた痕跡が断面にみられる 内外面ともナデ調整	
37−1	SD08	甕	口径　17.4 (口縁部 1/9存)	①微砂粒子(長石・石英など)含む　②暗黄褐色　③やや良好	口縁部が長めの複合口縁で、端部は引きのばし、突出部は斜め下方へ引き出す．外面に外傾さすための強いナデによる凹凸あり．外面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整．内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整と思われる	
43−1	SD10	壺	口径　25.4 (口縁部 1/4存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・橙色粒子など)含む　②にぶい黄橙色　③普通	立ち上がりまっすぐな頸部にヘラ状工具によって魚類の絵が描かれている．口縁部は指押さえにより外反させ、厚みのある口縁端部は平坦面をつくり、貼り付け浮文を1ヶ付ける 外面ハケ目のちナデ調整、内面口縁部ヨコナデ調整、頸部指押さえ	サメ？を描いた絵画土器134−1と同一個体と思われる
43−2	SD10	壺	(口縁部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・金雲母など)含む　②にぶい黄褐色、断面黒灰色　③普通	大きく開く広口壺の口縁部で、端部はわずかに上下に拡張し、端面に3条の凹線文、内面に4条の凹線文を施す 内外面ともナデ調整	
43−3	SD10	壺	口径　14.0 (口縁部 1/8存)	①1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む　②黄褐色　③普通	頸部から強く外反し、口縁部は肥厚して面をもち2条か3条の沈線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
43−4	SD10	壺	口径　11.3 (口縁部 1/6存)	①1mm大の砂粒子(石英など)及び微砂粒子(角閃石など)含む　②口縁部黄橙褐色、以下暗褐色　③普通	頸部から外湾しつつ口縁部へ移行し、口縁部は短い複合口縁で3条の沈線文が施される．頸部には貝殻による間隔の狭い羽状文を施す 内外面ともナデ調整	
43−5	SD10	壺	頸部径　18.4 (頸部 1/5存)	①1〜2mm大の砂粒子(石英・長石など)多く含む　②黄褐色　③普通	厚手の大型品と思われる．頸部に1条の凹線文を施す 外面及び内面頸部ナデ調整、頸部より下ケズリ調整	
43−6	SD10	甕	口径　23.3 (口縁部 1/9存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)多く含む ②外面茶褐色、内面暗黄褐色　③普通	頸部をナデにより強くくびれさせ、ゆるい「L」字状に口縁部へ移行する．端部はわずかに上へ肥厚する．胴部は張らない 内面及び外面頸部以上ナデ調整、以下ハケ目調整	外面頸部に煤付着
43−7	SD10	甕	口径　14.0 (口縁部 1/6存)	①微砂粒子(石英・角閃石・橙色粒子など)若干含む　②淡黄褐色　③やや良好	器壁が薄く、頸部が「く」の字に屈曲し、端部はわずかに上へ肥厚する 風化著しく調整不明	
43−8	SD10	甕	(口縁部破片)	①微砂粒子(長石・金雲母など)含む　②黄褐色　③普通	頸部がゆるく「く」の字に屈曲し、口縁端部はわずかに上へ肥厚して1条の凹線文を施す 内外面ともナデ調整	
43−9	SD10	甕	(口縁部破片)	①1mm大の砂粒子(石英・角閃石・長石など)含む　②淡橙褐色　③普通	頸部に指頭圧痕文帯を施し、口縁部は上へ肥厚して2条の凹線文を施す 内外面ともナデ調整	
43−10	SD10	甕	口径　21.2 (口縁部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子(角閃石・石英・長石など)含む　②淡黄褐色　③普通	頸部にヘラによる圧痕文帯を施し、口縁部は上へ肥厚して2条の凹線文を施す 内外面ともナデ調整と思われる	
43−11	SD10	甕	(口縁部破片)	①微砂粒子(石英・角閃石など)若干含む　②淡黄褐色　③やや不良	口縁端部は上に肥厚し2条の沈線文を施す 内外面ともナデ調整	
43−12	SD10	甕	(口縁部破片)	①微砂粒子(石英など)含む ②にぶい黄褐色、断面灰赤色　③やや不良	頸部短く「く」の字に外反し、口縁部は上下に肥厚して、2条の沈線文を施す．胴部はやや張り出す 風化著しく調整不明	
43−13	SD10	甕	(口縁部破片)	①微砂粒子(長石・石英・金雲母など)含む　②黄褐色　③普通	口縁部がのびて複合口縁化したもの、端面に3条の沈線文を施す 内外面ともナデ調整	
43−14	SD10	甕	(口縁部破片)	①1〜2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む　②暗黄橙褐色　③普通	湾曲してのびる頸部からまだ短めの複合口縁となり4条の凹線文を施す．端部は丸くおさめる 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリのちミガキ調整か？	
43−15	SD10	甕	(口縁部破片)	①1mm大の砂粒子(石英など)含む　②黄褐色　③普通	長めに外反した頸部から複合口縁へと移行し、端部は丸くおさめ、突出部は下に丸くおさめ、面には3条の凹線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
43−16	SD10	甕	(口縁部破片)	①1〜2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む　②暗黄褐色　③普通	太く短い頸部から複合口縁に移行し、端部は丸くおさめ、突出部はわずかに出、面には貝殻腹縁による6条の擬凹線文が施される 外面ナデ調整、内面口縁部ミガキ調整．頸部以下ケズリ調整し器壁を薄くする	
43−17	SD10	甕	口径　18.6 (口縁部 1/10存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む　②外面暗黄褐色、内面にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で端部は丸くおさめ、突出部はあまり出ず、面には貝殻腹縁による浅い8条の擬凹線文を施し、部分的に擦消しを行っている 外面ナデ調整、内面口縁部丁寧なナデ調整、頸部以下ケズリ調整	

挿図番号	出土地点	器　種	法　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形態・手法の特徴	備　考
43－18	SD10	甕	(口縁部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など) 含む ②暗黄褐色 ③普通	直線的にのびる複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は出ない、面には貝殻腹縁による7条位の擬凹線文を施し撫消しを行っている 外面ナデ調整、内面口縁部丁寧なナデ調整、頸部以下ケズリ調整	外面に煤付着観察できる
43－19	SD10	甕	(口縁部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など) 含む ②外面灰褐色、内面黄灰褐色 ③やや良好	頸部から口縁部にかけてステップをもち直立ぎみの複合口縁に移行する。端部はそのままおさめ、突出部はわずかに下へ出る。口縁面はナデにより稜線が観察できるのみである 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
43－20	SD10	甕	(口縁部破片)	①1mm以下の砂粒子(長石・石英・角閃石など) 含む ②にぶい黄褐色 ③普通	薄手の複合口縁で、端部を引きのばし、突出部はあまり出ない 風化著しく調整不明	
43－21	SD10	甕	(口縁部破片)	①微砂粒子(長石・石英・角閃石など)含む ②黄褐色 ③普通	複合口縁で端部は外へ引きのばし始め、突出部は斜め下方へ少し出す 内外面ともナデ調整	
44－1	SD10	甕	口径　16.7 (口縁部 1/10存)	①微砂粒子（石英・金雲母など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で端部は外へ引きのばし、突出部はわずかに横へ出る。口縁面は強いナデにより稜線が目立つ 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
44－2	SD10	甕	口径　13.7 (口縁部 1/6存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など) 多く含む ②黄褐色 ③普通	複合口縁で端部は外へ引きのばし、突出部は斜め下方に出る。あまり張らない肩部に11条の平行沈線文、平行沈線文と同じ原体と思われる工具による刺突文、11条の平行沈線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
44－3	SD10	胴　部	(胴部破片)	①1mm大の砂粒子(石英など) 含む ②外面黄橙褐色、内面淡黄褐色 ③普通	木の葉状の線刻 風化著しく調整不明	ヘラ状工具による絵画土器?
44－4	SD10	底　部	底径　7.1 (底部 1/2存)	①1mm以下の砂粒子（長石・石英・金雲母など）多く含む ②にぶい黄褐色 ③普通	しっかりした平底 内外面とも底部まわりに指押さえ痕あり。外面及び内面底部ナデ調整、以上ケズリ調整	
44－5	SD10	底　部	底径　8.2 (底部 1/5存)	①微砂粒子（石英など）含む ②外面黒灰色、内面灰黄褐色 ③普通	しっかりした平底 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	外面の黒灰色は黒斑と思われる
44－6	SD10	底　部	(底部破片)	①1mm大の砂粒子(石英・長石など)多く含む ②暗黄褐色 ③やや不良	やや上げ底ぎみの底部 外面ナデ調整、内面ケズリ調整、底面には細いミガキ状の凹みが観察できる	
44－7	SD10	底　部	底径　3.0 (底部ほぼ完)	①1～2mm大の砂粒子(石英・角閃石など) 含む ②外面暗褐色、内面灰褐色 ③普通	底部中央に焼成前に穿った径4～5mmの孔あり 外面丁寧なナデ調整、内面ミガキ調整	
44－8	SD10	底　部	底径　2.6 (底部 1/3存)	①1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②外面暗褐色、内面にぶい黄褐色 ③普通	かなり小さな平底だが、まだ稜線はしっかりしている 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	外面一部焦げたように観察できる
44－9	SD10	高　坏	(坏部破片)	①微砂粒子（石英など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	坏体部から口縁部に「L」字状に屈曲し、端部は平坦面をもつ。口縁部に5条の凹線文を施し、上から3列めと6列めの凸帯に刻目を施し、3本の棒状浮文を体部上位に1条の沈線がありその下まで貼り付けている 風化著しく調整不明	
44－10	SD10	高　坏	脚柱部径　4.9 (脚部 1/4存)	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石など)多く含む ②外面黄褐色、内面淡灰黄褐色 ③普通	7条の2段に施した凹線文をめぐらす脚部 外面ナデ調整、内面接合部付近はしぼり痕あり、ケズリ調整	
44－11	SD10	高　坏	口径　21.6 (坏部 1/4存)	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石など)含む ②外面黄褐色、内面暗黄褐色 ③普通	厚手でしっかりしている。体部から口縁部には稜をもち外反させる 内外面ともナデ調整	内面口縁部は焦げたように思われる。2次的に蓋として使用された可能性あり
44－12	SD10	高　坏	接合部径　4.0 (坏部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石など)多く含む ②外面にぶい黄褐色、内面黒灰色 ③普通	接合方法は円盤充填法である。厚手でしっかりしている 外面ナデ調整、内面丁寧なナデ調整、接合部ケズリ調整	内面の黒灰色部分は黒斑と思われる
44－13	SD10	鼓形器台	筒部径　9.6 (筒部 1/6存)	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石など)多く含む ②外面にぶい黄褐色、内面暗黄褐色 ③普通	筒部がかなり短いもの 外面及び内面受部ナデ調整、脚部ケズリ調整	
44－14	SD10	鼓形器台	脚突出部径　13.8 (脚部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石など)多く含む ②淡黄褐色(鉄気付着) ③普通	内面脚部ケズリ調整、他はナデ調整	
44－15	SD10	低脚坏	口径　12.2 底径　4.8 (1/2存)	①微砂粒子（石英・角閃石など）含む ②外面暗黄褐色、内面灰黄褐色 ③普通	小さな脚に内湾して立ち上がる浅い坏がつく 坏部外面ハケ目調整、内面ケズリのち丁寧なナデ調整、脚部内外面ともナデ調整	
44－16	SD10	小型鉢	(胴部破片)	①微砂粒子（石英・角閃石など）含む ②外面暗灰黄色、内面黒褐色 ③普通	想定復元するとコップ型のタイプと思われる 外面ナデ及びハケ目調整、内面ミガキ調整で、黒光りしている	
44－17	SD10	小型鉢	(胴部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石など)含む ②外面にぶい黄橙褐色、内面暗黄褐色 ③やや不良	胴が張り内湾した形状 内外面ともナデ調整と思われる	外面に朱塗りの痕跡あり
44－18	SD10	鉢	口径　12.6 (口縁部 1/6存)	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石など) 含む ②暗黄橙褐色 ③やや不良	丸い胴部から頸部はくびれ、口縁は外反する 胴部内面ミガキ調整、他は風化著しく調整不明	
44－19	SD10	小型甕	(口縁部破片)	①微砂粒子（石英・角閃石など）含む ②外面白橙褐色、内面灰褐色 ③普通	丸く張りぎみの胴部から頸部を強いナデによりくびれさせ、屈曲して口縁部に移行する。端部はわずかに上下に肥厚し、2条の凹線文と2段の刻目を施す。胴部には8条以上の凹線文を施し頸部下に小さな竹管文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ミガキ調整	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	形態・手法の特徴	備考
46−1	土器群1	甕	口径 21.0 最大径 23.6 (口縁部 1/3存)	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石など)多く含む ②暗灰黄褐色 ③やや不良	複合口縁で端部わずかに平坦面をつくり、突出部は横に引き出す．頸部からなだらかに移行し、胴部は張りぎみ、肩部にヘラ状工具による連続刺突文あり 外面胴部ハケ目調整、内面頸部以下ケズリ調整、以外は風化著しく調整不明	
46−2	土器群1	甕	口径 20.8 (口縁部 1/8存)	①微砂粒子(石英・角閃石・金雲母など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で端部は外に曲げ止める．突出部は横に引き出す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
46−3	土器群1	甕	口径 19.7 最大径 25.0 (口縁部 完 肩部 1/3存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で端部は平坦面をつくり外へ曲げている．突出部は横へ引き出す 内外面口縁部ナデ調整、外面胴部ハケ目調整、内面頸部以下ケズリ調整	
48−1	土器群2	甕	口径 15.4 (口縁部 1/4存)	①微砂粒子(石英・角閃石など)含む ②暗橙褐色 ③普通	頸部が強く「く」の字に屈曲し口縁端部はわずかに肥厚して面をつくり1条の沈線文を施す．胴部は張らない 内面及び外面口縁部はナデ調整、胴部はハケ目調整	外面に煤付着
48−2	土器群2	甕	口径 17.4 (口縁部 1/7存)	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石・金雲母など)含む ②暗黄褐色 ③普通	頸部「く」の字に屈曲し、端部はわずかに肥厚して面をつくり、2条の沈線文とその間に左から施文した刻目を施す．胴部は張らない 内外面ともナデ調整	
48−3	土器群2	甕	口径 20.3 (口縁部 1/7存)	①1mm大の砂粒子(石英など)含む ②淡黄褐色 ③普通	頸部から湾曲ぎみに口縁部へ移行し、端部は肥厚して面をつくり2条の沈線文を施す 内外面ともナデ調整	
48−4	土器群2	甕	口径 20.9 (口縁部 1/8存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む ②外面暗橙褐色、内面黒灰色 ③普通	頸部「く」の字に屈曲し、端部は内傾して肥厚し3条の沈線文を施す．胴部はわずかに張る 口縁部内外面ともナデ調整、内面頸部以下ハケ目調整、外面胴部風化のため調整不明	
48−5	土器群2	甕	口径 26.0 (口縁部 1/5存)	①1mm大の砂粒子(石英・長石など)多く含む ②外面橙褐色、内面暗橙褐色 ③普通	頸部「く」の字に屈曲し、口縁端部は内傾して肥厚し、3条の沈線文を施す 口縁部内外面ともナデ調整、胴部内外面ともハケ目調整	
48−6	土器群2	胴部	(胴部破片)	①微砂粒子(石英など)含む ②外面暗灰黄色、内面黄褐色 ③普通	文様構成はヘラ描き文、4点単位の連続列点文が2段施してある 内外面ともハケ目調整	
48−7	土器群2	底部	底径 11.6 (底部 1/7存)	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石・金雲母など)少し含む ②外面暗黄褐色、内面にぶい黄褐色 ③普通	立ち上がり大きく外傾する 外面ミガキ調整と思われる．底面ナデ調整、内面ケズリのちハケ目調整	
50−1	土器群3	壺	口径 30.0 最大径 32.1 (上半 1/2存)	①1〜2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②外面暗赤褐色、内面暗茶褐色(在地の土と異なる) ③普通	なだらかな胴部から頸部は少しすぼまって立ち上がり口縁部は外へ広がる．端部は肥厚して2条の凹線文を施し、内面には6条の沈線文を施す．文様構成は上から10条の凹線文、4点単位の列点文、4条と5条の平行沈線文を軸とした綾杉文、列点文である 外面及び内面頸部ハケ目調整、以外ナデ調整、内面胴部はケズリ調整？	
50−2	土器群3	壺	口径 24.9 (口縁部 1/3存)	①1〜2mm大の砂粒子(石英・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	張りぎみの胴部から直線的に頸部が立ち上がり口縁部は外へ広がり端部は肥厚して2条の凹線文を施す．頸部に8条の凹線文を施す 口縁部内外面ナデ調整、外面胴部ハケ目調整、内面頸部指ナデ、頸部以下ケズリ調整	
50−3	土器群3	甕	口径 18.1 (口縁部 1/7存)	①微砂粒子(石英・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	頸部「く」の字に屈曲し、口縁端部は上下に肥厚し3条の沈線文を施す 内面及び外面頸部以上ナデ調整、胴部ハケ目調整	
51−1	土器群3	甕	口径 22.6 最大径 25.5 (口縁部 1/10存)	①微砂粒子(石英・角閃石など)含む ②淡黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部はわずかに外へ曲げ平坦面をつくり、突出部は横へ出る．胴部は球状に張り出す 口縁部内外面ナデ調整、外面胴部ハケ目調整、肩部に平行沈線文、波状文らしき痕跡あり．内面頸部以下ケズリ調整	
51−2	土器群3	甕	口径 23.0 (口縁部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石など)含む ②明黄橙褐色 ③普通	複合口縁で、端部を外へわずかに曲げて終え、突出部は横に出る．胴部はなだらか 口縁部内外面ともナデ調整、内面頸部以下ケズリ調整、外面胴部風化著しく調整不明	
51−3	土器群3	甕	頸部径 12.9 (頸部 1/6存)	①1mm大の砂粒子(石英・角閃石・金雲母など)含む ②淡黄褐色 ③普通	頸部上部に想定線を入れ、一応甕としたが、外面調整が頸部から幅広のタテハケ目調整が入っていることから、現状で鉢の胴部の可能性あり 内面頸部ナデ調整、以下ケズリ調整	
51−4	土器群3	胴〜底部	底径 6.0 (底部 完 胴部 1/6存)	①1〜2mm大の砂粒子(石英など)多く含む ②外面暗橙褐色、底面黒褐色、内面黒灰色 ③普通	平底である．胴部の長さからすると小さい径と思われる 外面下半ミガキ調整、上半風化著しく調整不明．底面ナデ調整、内面ケズリ調整	
53−1	土器群4	甕	口径 23.2 (口縁部 1/5存)	①1〜2mm大の砂粒子(石英・金雲母など)多く含む ②暗灰黄褐色 ③普通	かなり外傾した複合口縁で端部は外面に沈線をめぐらしわずかに外に曲げ、突出部は斜め下方にわずかに出す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	この時期のものとしては重量感あり
53−2	土器群4	甕	口径 26.6 (口縁部 1/9存)	①1〜2mm大の砂粒子(石英など)多く含む ②暗灰黄褐色 ③普通	かなり外傾した複合口縁で端部は外へ引きのばし、突出部は斜め下方にわずかに出す．口縁部に1条沈線の痕跡あり 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	この時期のものとしては重量感あり
53−3	土器群4	甕	口径 26.6 最大径 31.6 (口縁〜胴部 1/2存)	①1〜2mm大の砂粒子(石英・金雲母など)多く含む ②暗灰黄褐色 ③普通	外傾ぎみの複合口縁で、端部は外に曲げ平坦面をつくり、突出部は斜め下方に出る．胴部は球状に張り出す 内外面とも頸部以上ナデ調整、外面頸部以下ハケ目調整、内面頸部以下ケズリ調整	口縁部及び胴部の同一ライン上に黒斑あり 重量感のある土器

挿図番号	出土地点	器　種	法　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形態・手法の特徴	備　考
56−1	土器群5	大型壺	口径　46.7 (口縁部 1/5存)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・長石など）多く含み、若干の3〜6mm大の石英粒含む ②にぶい黄褐色　③普通	頸部が直立ぎみに立ち上がり口縁部は外に広がるが、あまり広がらないタイプ。端部は垂下し4条の凹線文を施し、その上から斜格子文を施す。風化著しいため部分的に確認 口縁部内外面ともナデ調整、頸部外面タテハケ目調整、内面ヨコハケ目調整	
56−2	土器群5	甕	口径　19.7 (口縁部 1/8存)	①1mm大の砂粒子（石英・角閃石など）多く含む　②にぶい黄褐色　③普通	厚手の短い複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は出ない 風化著しく調整不明	
56−3	土器群5	甕	口径　17.2 (口縁部 1/3存)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・角閃石など）多く含む　②にぶい黄橙褐色　③普通	厚手の短い複合口縁で、端部は肥厚させ丸くおさめる。突出部は下にわずかに出る。口縁面には貝殻腹縁による7条の擬凹線文を施す 外面及び内面頸部以上はミガキ調整、特に内面は丁寧に行う。頸部以下ケズリ調整	
56−4	土器群5	甕	口径　13.2 (口縁部ほぼ完)	①1〜2mm大の砂粒子(石英など)多く含む ②にぶい黄褐色　③普通	短い複合口縁で、端部丸くおさめ、突出部は下に引き出す。口縁面は貝殻腹縁による10条の擬凹線文を施し、上からナデている 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
56−5	土器群5	甕	口径　20.8 (口縁部完)	①1mm大の砂粒子（石英・角閃石など)含む ②暗黄褐色　③普通	厚手の複合口縁で、端部は肥厚させて丸くおさめ、突出部は下に出し、貝殻腹縁による4〜9条の擬凹線文を施し、上から擦消しにより消えてる部分あり 外面及び内面頸部以上ナデ調整、特に内面は丁寧、以下ケズリ調整	
56−6	土器群5	甕	口径　21.6 (口縁部 1/3存)	①1〜3mm大の砂粒子（石英・長石など）多く含む　②にぶい黄褐色　③やや不良	複合口縁で端部を丸くおさめ、突出部は出ない。口縁面には、全体に剥落しているが、13条までの幅の狭い貝殻腹縁による擬凹線文を施す 風化著しいが、外面及び内面頸部以上ナデ調整、頸部以下ケズリ調整と思われる	
56−7	土器群5	甕	口径　17.5 (口縁部 1/3存)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・角閃石・長石など）多く含む　②暗黄褐色　③普通	複合口縁で端部は丸くおさめ、突出部は出ない。口縁面には貝殻腹縁による擬凹線文が下半に5〜6条認められ、上半は擦消している 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
56−8	土器群5	甕	口径　17.3 (口縁部 1/2存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は引きのばし、突出部は出ない。口縁面には貝殻腹縁による浅い擬凹線文を施す 風化著しいが、外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
56−9	土器群5	甕	口径　15.8 (口縁部 1/7存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など）含む　②外面黄褐色、内面暗灰黄褐色 ③普通	複合口縁で端部はまっすぐのばし、突出部はわずかに下に出る。口縁面は擬凹線文を施したあとに上から擦消しているが、痕跡が残っている。肩部に連続の刺突文あり 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
56−10	土器群5	甕	口径　16.4 最大径　17.5 (口縁部 1/3存)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で端部は外に引き出して丸くおさめ、突出部はわずかに出る。肩部に波状文を施す 外面最大径以上、内面頸部以上ナデ調整、外面最大径以下ハケ目調整、内面頸部以下ケズリ調整	外面胴部最大径以下に煤付着
57−1	土器群5	甕	口径　18.0 (口縁部 1/3存)	①1mm大の砂粒子（石英・赤色粒子・角閃石など）含む　②淡黄褐色　③やや不良	複合口縁で端部は外へ引きのばし、突出部はわずかに横へ出る。頸部からゆるやかに胴部へ移行する 風化著しく調整不明	
57−2	土器群5	甕	口径　15.6 (口縁部ほぼ完)	①1mm大の砂粒子（石英など）含む ②暗黄褐色　③普通	複合口縁で端部は丸くおさめ、突出部は下に出している 内面頸部以下ケズリ調整、以外ナデ調整	
57−3	土器群5	甕	口径　22.4 (口縁部 1/3存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石など）含む ②にぶい黄褐色　③普通	口縁部中央から強く外へ屈折した複合口縁で、端部は丸くおさまり、突出部はかなり強く横へ引き出す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下風化著しく調整不明	
57−4	土器群5	甕	口径　19.0 最大径　24.6 (口縁部 1/3存)	①1mm大の砂粒子(石英・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	口縁部中央から強く外へ屈折した複合口縁で、端部丸くおさめ、突出部もかなり強く横へ引き出す。胴は下の方が張っている 頸部以上内外面ともナデ調整、外面以下ハケ目調整と思われる。内面以下ケズリ調整	
57−5	土器群5	底　部	底径　4.0 (底部完)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗茶褐色　③普通	小さな平底で薄手の器壁が立ち上がる 内外面とも風化著しく調整不明	
57−6	土器群5	高　坏	(坏部破片)	①微砂粒子（石英など）含む ②にぶい黄褐色　③普通	「L」字状に立ち上がる口縁に5条の凹線文が施され、最上段と4段めの凸帯に刻目を入れる。また端部の平坦面には2条の凹線文が施される 内外面ともナデ調整	
57−7	土器群5	高　坏	口径　13.6 (脚部 1/4存)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石・赤色粒子など）多く含む　②外面黄褐色、内面にぶい黄褐色　③普通	厚手の脚で、接合部から斜めに傾斜し裾は開く 外面風化著しく調整不明、内面脚部ケズリ調整、裾部ナデ調整	
57−8	土器群5	鼓形器台	底径　14.0 (脚部 1/4存)	①1〜2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁状の脚部で端部は丸くおさめ、面には5〜6条の沈線が確認できる 外面風化著しく調整不明、内面脚部ケズリ調整、裾部ナデ調整	外面に朱塗りの痕跡あり
59−1	土器群6	壺	口径　18.0 最大径　23.5 (口縁部 1/3存)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・長石など）含む　②にぶい黄褐色、内面胴部暗灰褐色 ③普通	複合口縁で端部は外に曲げ平坦面をもち、突出部は強く横へ出す。頸部は長く直立ぎみにのび、胴部との境に口縁突出部と対比させたような貼付突帯文がめぐる。また胴部は球状に張り出す 外面口縁部ナデ調整、頸部・胴部ハケ目調整、内面口縁部・頸部ナデ調整、特に頸部には指ナデがみえる。胴部ケズリ調整	
59−2	土器群6	甕	(口縁部破片)	①1mm大の砂粒子（石英など）含む ②にぶい黄褐色　③普通	厚手の複合口縁で、端部はまっすぐ引きのばし、突出部は下に出、4条の凹線文が施される 外面及び内面頸部以上はナデ調整で、特に内面は丁寧である。頸部以下ケズリ調整	内面に黒斑あり

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	形態・手法の特徴	備考
59－3	土器群6	甕	（口縁部破片）	①1mm大の砂粒子（石英など）含む ②黒褐色 ③普通	厚手で短めの複合口縁で、端部わずかに肥厚して丸くおさめ、突出部も離れて丸くなる 外面及び内面口縁端部ナデ調整、以下ケズリのちミガキ調整	
59－4	土器群6	甕	口径 16.3 最大径 15.9 （口縁部 1/2存）	①1mm大の砂粒子（長石・石英など）多く含む ②暗黄茶褐色 ③普通	厚手の複合口縁であるが、口縁部のつくりに不慣れな感あり．口縁面には貝殻腹縁による浅い擬凹線文を7条施し、撫消しを行う．胴部はなだらかで最大径は下位に下る．肩部に3条の平行沈線文の下に貝殻腹縁による羽状文、平行沈線文は1条増えるが同様の文様を2段行う 外面及び内面頸部以上ナデ調整、特に内面には指ナデの痕跡がみえて粗雑、頸部以下ケズリ調整	山間部からの搬入品？
59－5	土器群6	甕	口径 14.0 （口縁部 1/5存）	①1mm大の砂粒子（石英・角閃石など）含む ②黄褐色 ③普通	複合口縁で端部は引きのばし、突出部は出ない．口縁面は貝殻腹縁による浅い9条の擬凹線文のあと撫消しをする 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
59－6	土器群6	甕	（口縁部破片）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む ②にぶい黄橙褐色 ③普通	まっすぐにのびる複合口縁で端部は丸くおさめ、突出部は離れて丸くなる．口縁面は貝殻腹縁による10条の擬凹線文のあと撫消しをする 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
59－7	土器群6	甕	口径 15.4 （口縁部 1/6存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄橙色 ③普通	複合口縁で端部はまっすぐにのび、突出部はでない 風化著しいが、外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
59－8	土器群6	甕	口径 20.6 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（石英・橙色粒子・角閃石など）含む ②にぶい黄橙褐色 ③普通	かなり外傾した複合口縁で端部はのばして丸くおさめ、突出部は出ない．口縁面に数条の沈線確認できるが、風化著しく詳細不明 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下風化著しく調整不明	
59－9	土器群6	胴部	（胴部破片）	①1～2mm大の砂粒子（石英など）含む ②暗黄褐色 ③普通	厚みのある貼付突帯文で、1ケのみ刻目あり 外面ナデ調整、内面風化著しく調整不明	
59－10	土器群6	高坏	（坏部破片）	①微砂粒子（石英・角閃石など）含む ②暗黄褐色 ③普通	接合方法は円盤充填法 風化著しく調整不明	
59－11	土器群6	高坏	（坏部破片）	①微砂粒子（石英・角閃石など）含む ②淡黄褐色 ③普通	接合方法は円盤充填法 風化著しく調整不明	
59－12	土器群6	高坏	脚筒部径 4.5 （脚柱部ほぼ完）	①1～2mm大の砂粒子（石英・角閃石・長石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	脚接合部はしぼり上げている．脚裾部は内面に明確な稜を入れ外へ広げる 脚部外面タテミガキ調整、内面ケズリ調整．坏部は剥落している	
59－13	土器群6	鼓形器台	口径 17.1 （受部 1/5存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石など）少し含む ②にぶい黄褐色 ③普通	器高が高く筒部がまだ細くて長めのタイプである．口縁端部は外へのばし平坦面をつくる 内外面ともナデ調整	
59－14	土器群6	低脚坏	底径 4.9 （底部ほぼ完）	①微砂粒子（石英・角閃石など）含む ②黄褐色 ③普通	小さく外に反った脚部 外面及び坏部内面ナデ調整、特に坏部内面は丁寧．脚部内面は風化著しく調整不明	
61－1	土器群7	壺	口径 18.5 （口縁部 1/8存）	①1mm大の砂粒子（石英・金雲母など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	口縁部が内傾して立ち上がる複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は横に引き出す．頸部に貝殻腹縁による刺突文を施す 内外面ともナデ調整	
61－2	土器群7	甕	口径 16.9 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石など）含む ②暗黄褐色 ③普通	少々長めの頸部だが、複合口縁で端部は丸くおさめ、突出部はわずかに下に出る．口縁面には、下半に貝殻腹縁による8条の擬凹線文が施されている．上半は撫消しにより消されている 内面頸部以下は風化著しく調整不明だが、他は内外面ともナデ調整	
61－3	土器群7	甕	口径 18.0 （口縁部 1/3存）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石・長石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	下位の方で屈折をもつ複合口縁で、端部はまっすぐに引きのばし、突出部は丸みをもつ．頸部を少しのばしている 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
61－4	土器群7	甕	口径 23.1 （口縁部 1/3存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は外へ引きのばし、突出部は丸みをおびる 口縁部内外面ともナデ調整、外面頸部クシ状工具による調整、内面頸部以下ケズリ調整	口縁部に黒斑あり
61－5	土器群7	甕	口径 20.6 （口縁部 1/5存）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は引きのばし、突出部はわずかに出る．肩部に平行沈線文が観察される 内面頸部以下ケズリ調整、他は内外面ともナデ調整	
61－6	土器群7	甕	口径 25.1 （口縁部 1/8存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は外に折曲げ丸くおさめている．突出部はわずかに横へ出る．肩部に平行沈線文らしい痕跡あり 内面胴部ケズリ調整、他内外面ともナデ調整、特に内面は丁寧である	
61－7	土器群7	甕	口径 18.2 （口縁部 1/6存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	口縁部中程から屈曲し外傾させた複合口縁で、端部は引きのばし、突出部は丸みをおびる 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
61－8	土器群7	甕	口径 14.1 （口縁部 1/2存）	①微砂粒子（石英・角閃石など）含む ②にぶい黄橙色 ③普通	薄手の複合口縁で、端部は外に曲げ引きのばす、突出部は横へ出る．肩部は波状文を施す 口縁部内外面ともナデ調整、頸部以下外面ハケ目調整、内面ケズリ調整	
61－9	土器群7	甕	口径 18.4 （口縁部 1/4存）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部はわずかに外に曲げ平坦面をつくり、突出部はわずかに斜め下へ出る．肩部には浅い凹線による波状文が何本か観察される．その間にハケ目が施されている 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
61－10	土器群7	甕	（口縁部破片）	①1～2mm大の砂粒子（石英など）含む ②淡黄褐色 ③普通	口縁部中央が膨らみ端部はすぼまる．突出部はかなり強く斜め下に引き出す 風化著しく調整不明	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	形態・手法の特徴	備考
61-11	土器群7	甕	口径 15.8 (口縁部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石・金雲母など）含む ②黄褐色 ③普通	薄手の複合口縁で、端部はまっすぐ引きのばし、突出部は斜め下に出る。肩部には貝殻腹縁による連続の刺突文が施される 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
61-12	土器群7	甕	口径 18.1 (口縁部ほぼ完)	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石・長石など）含む ②暗黄褐色 ③普通	口縁部下半から屈曲し外傾させた複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部はかなり強く斜め下へ引き出す。突出部面に貝殻腹縁による第1段階の調整痕が残っている 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
62-1	土器群7	底部	底径 5.0 (底部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子（石英など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	平底と思われる 脚部外面ミガキ調整と思われる。底面及び底面まわりはナデ調整、内面ナデ調整と思われる	
62-2	土器群7	底部	底径 2.1 (底部完形)	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石など)多く含む ②外面黒褐色、内面暗黄褐色 ③普通	稜線の残った最小サイズのタイプの平底である 外面ナデ調整、内面風化著しく調整不明	外面全体に煤付着
62-3	土器群7	底部	底径 2.1 (底部完形)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石など）含む ②暗灰黄褐色 ③普通	稜線が不明瞭だけど、わずかに平底の痕跡を残すタイプのもの 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	
62-4	土器群7	底部	(底部破片)	①1mm大の砂粒子(石英・長石など)多く含む ②外面黄褐色、内面黒灰色 ③やや不良	ごつごつした感じの破片で、わずかに底部が残っている 外面荒いナデ調整、内面単位は大きいが、規則的なハケ目調整	何か生産に関わる土器ではないかと思われる
62-5	土器群7	鼓形器台	底径 17.5 (脚部 1/3存)	①1～3mm大の砂粒子（石英・角閃石・長石など）含む ②黄褐色 ③普通	無文であるが、脚部が短めで、筒部はすぼまって直立に立ち上がる 外面ナデ調整、内面受部風化著しく調整不明、筒部ナデ調整、脚部ケズリ調整	
62-6	土器群7	鼓形器台	筒部径 10.4 (筒部完形)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	受部、脚部ともに器壁がまっすぐにのびるので、器壁のまだ長いタイプと思われる。受部にわずかに沈線の痕跡がうかがえる 外面ナデ調整、内面受部ナデ調整、脚部ケズリ調整	
62-7	土器群7	鼓形器台	底径 24.1 (脚部 4/5存)	①1mm大の砂粒子（石英・橙色粒子・角閃石など）含む ②黄褐色 ③普通	脚部は裾広がりとなるが、器壁は直立ぎみに立ち上がる。突出部下に沈線の痕跡が観察される 外面及び内面裾部ナデ調整、脚部内面ケズリ調整	
62-8	土器群7	蓋	口径 14.1 器高 6.4 (ほぼ完形)	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石・長石など）含む ②暗橙黄褐色 ③普通	丸い体部に裾広がりのもので、2コ1対の孔を穿った大きめのつまみを付けている 外面ミガキ調整、裾部内外面及び、つまみ内面ナデ調整、体部内面放射線状の丁寧なナデ調整	外面漆塗り痕あり
64-1	土器群8	壺	口径 19.2 (口縁部 1/5存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石など）多く含む ②にぶい黄褐色 ③普通	厚手の複合口縁で、端部は丸くおさめ突出部は膨らみ横へ出る 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
64-2	土器群8	壺	口径 18.8 (口縁部 1/7存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	直立ぎみの複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に強く引き出す。頸部は締めで胴部は張るようである 頸部以上内外面ともナデ調整、以下外面ハケ目調整、内面ケズリ調整	
64-3	土器群8	甕	(口縁部破片)	①1mm以下の砂粒子（石英など）少し含む ②淡黄褐色 ③普通	厚手の短い複合口縁で端部は丸くおさめ、突出部は出ない。3条の沈線の痕跡が観察できる 内面口縁部ナデ調整、他は風化著しく調整不明	外面に黒斑あり
64-4	土器群8	甕	口径 18.6 (口縁部 1/8存)	①1mm以下の砂粒子（石英など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で厚みがあるため端部も丸くおさまり、突出部は上を押さえることによりつくり出している 内外面ともナデ調整	
64-5	土器群8	甕	口径 17.8 (口縁部 1/4存)	①1mm以下の砂粒子（石英・橙色粒子・角閃石など）多く含む ②黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部はまっすぐ引きのばし、突出部は出ない。胴部はケズリ調整により器壁がかなり薄くなっている 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	口縁部外面に黒斑あり
64-6	土器群8	甕	口径 22.9 (口縁部 1/9存)	①微砂粒子（角閃石・石英・橙色粒子など）含む ②淡黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部はまっすぐ引きのばし、突出部はほとんど出ない 風化著しく調整不明	
64-7	土器群8	甕	口径 15.0 (口縁部 1/8存)	①微砂粒子（石英・橙色粒子・角閃石など）含む ②黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさまり、突出部は出ない 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
64-8	土器群8	甕	口径 23.7 (口縁部 1/7存)	①微砂粒子（角閃石・橙色粒子・石英など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部のばしておさめ、突出部斜め下にわずかに出る 口縁部内外面ともナデ調整、他は風化著しく調整不明	
64-9	土器群8	甕	口径 13.6 (口縁部 1/8存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②暗黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は外に曲げまっすぐ引き出し、突出部はわずかに出る 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
64-10	土器群8	甕	口径 16.1 (口縁部 1/7存)	①1mm以下の砂粒子（石英・橙色粒子・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	口縁部内面が直線的な複合口縁で、端部はまっすぐに引き出し、突出部は出ない。口縁面には2～3条の沈線が観察される 口縁部内外面ナデ調整、他は風化著しく調整不明	口縁部に漆塗りの痕跡がわずかに確認できる
64-11	土器群8	甕	口径 12.7 (口縁部 1/7存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など) 含む ②黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部丸くおさめ、突出部は膨らむ。突出部上に1条の沈線が施されている 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
64-12	土器群8	甕	口径 14.8 (口縁部 1/3存)	①微砂粒子（石英・橙色粒子・長石など）含む ②黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部わずかに外に曲げのばし、突出部はわずかに横に出る 内面頸部ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
64-13	土器群8	甕	(口縁部破片)	①微砂粒子（石英・角閃石など）含む ②暗橙褐色 ③普通	複合口縁で、端部はのばしぎみで丸くおさめ、突出部は出ない 風化著しく調整不明	
64-14	土器群8	甕	口径 16.8 (口縁部 1/4存)	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石・長石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部外に曲げのばし、突出部は横に出す。口縁面にはナデによる強い沈線が3条めぐる 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	

挿図番号	出土地点	器　種	法　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形態・手法の特徴	備　考
65−1	土器群8	胴　部	(胴部破片)	①1mm大の砂粒子（石英など）含む ②にぶい黄褐色　③普通	壺または甕の胴部破片と思われる．外面にはヘラ状工具により湾曲し垂下した曲線を連続して施している 内面は上下方向の指押さえによりデコボコしている	
65−2	土器群8	底　部	底径　5.5 (底部 2/3存)	①1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②外面暗黄褐色、底面黒灰色、内面暗灰黄褐色　③普通	大きさの割に薄手の平底である 外面ナデ調整、内面風化著しく調整不明だが指押さえのような跡残る	
65−3	土器群8	高　坏	接合部径　4.4 (坏部破片)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②黄灰褐色　③普通	細めの接合部から急激な立ち上がりをみせ、深い坏になると思われる 外面ハケ目調整、内面丁寧なナデ調整	
65−4	土器群8	高　坏	接合部径　4.7 (坏部破片)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・長石など）含む　②黄茶褐色　③普通	接合方法は円盤充填法である 風化著しく調整不明	
65−5	土器群8	高　坏	筒部径　5.2 (接合部完)	①1mm大の砂粒子（石英・長石など）含む ②にぶい黄褐色　③普通	接合部は粘土を詰め込んで、かなり重量感あり 脚部外面ミガキ調整､内面ケズリ調整､坏部風化著しく調整不明	
65−6	土器群8	高　坏	接合部径　4.2 (接合部完)	①微砂粒子（石英・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色　③普通	接合方法は円盤充填法で、脚部との接合にも粘土紐で貼り付けている．筒状に開く脚部から裾へと広がる部分に、均等に3コ、円孔が穿ってある 脚部内面ケズリ調整、外面ミガキ調整と思われる	
65−7	土器群8	高　坏	口径　16.8 現存器高　7.2 (裾部欠損)	①1〜2mm大の砂粒子（橙色粒子・石英・角閃石など）多く含む　②暗灰黄褐色 ③やや良好	広くて浅い坏部である．口縁端部はわずかに肥厚し凹面をつくる、坏部中央が凹むのは、充填法による接合中に粘土塊が下に少しずり落ちて凹んだと思われる．脚部は太くしっかりと開き、短いものと思われる 脚部内面縦方向の指ナデ押さえ調整、他はナデ調整と思われる．特に坏部内面は丁寧なもの	器形が在地ではみかけないもので時期を定めにくいが、胎土は在地のもののよう
65−8	土器群8	低 脚 部	底径　12.5 (脚部 1/3存)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・長石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	上の器は不明であるが、底部はかなり薄く、まっすぐな立ち上がりから、裾部はかなり広がる 内外面とも風化著しく調整不明	
65−9	土器群8	鼓形器台	脚突出部径 10.4 (脚部 1/4存)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・長石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	小型のもので、外面に貝殻腹縁による多条の沈線文を施す 外面及び内面裾部ナデ調整、脚部内面ケズリ調整	
65−10	土器群8	鼓形器台	筒部径　6.0 (筒部 1/4存)	①1mm大の砂粒子（石英・角閃石など）少し含み、緻密　②暗橙褐色　③普通	外面に同一工具により、右下がりの連続刺突文、4条の凹線文、右上がりの連続刺突文、3条の凹線文が施してある 外面及び内面筒部以上ナデ調整、脚部広がりケズリ調整	在地の胎土と違う様相．65−11と同じ胎土で同一個体の可能性あり
65−11	土器群8	鼓形器台	脚突出部径 11.8 (脚部 1/4存)	①1mm大の砂粒子（石英・角閃石など）少し含み、緻密　②暗橙褐色　③普通	筒部に右上がりの連続刺突文、3条の凹線文を施す 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	65−10と同じ胎土で、同一個体の可能性あり
65−12	土器群8	鉢	口径　19.0 (口縁部 1/9存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石など)含む ②黄褐色　③普通	外傾した立ち上がりで、頸部を強いナデにより凹ませ、口縁部をつくる 内外面ともナデ調整	
67−1	土器群9	長 頸 壺	口径　10.7 (口縁部 3/4存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石・橙色粒子など）含む　②淡黄褐色　③普通	外反した頸部から口縁端部は丸くおさめる．胴部は丸く膨らむ．ケズリによってかなり器壁が薄くなる 外面及び内面頸部ナデ調整、頸部以下ケズリ調整	69-9と同一個体の可能性あり
67−2	土器群9	甕	口径　18.1 (口縁部 1/8存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	ゆるやかにのびた頸部から短い複合口縁となり、端部は丸くおさめ、突出部は出ない．口縁面には2条の凹線状の沈線が施される 外面頸部ハケ目の痕跡確認できる．内面口縁部ナデ調整、他は風化著しく調整不明	
67−3	土器群9	甕	口径　23.3 (口縁部 1/8存)	①1mm以下の砂粒子（石英など）含む ②にぶい黄橙褐色　③普通	厚みのある複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は下に出る．口縁面には3条の凹線文を施す 風化著しく調整不明	
67−4	土器群9	甕	口径　17.1 (口縁部 1/3存)	①1〜2mm大の砂粒子（石英．長石・角閃石など）含む　②黄橙褐色　③普通	複合口縁で、端部は肥厚して丸くなり突出部はわずかに下に出る．口縁面には貝殻腹縁による6条の擬凹線文が施される 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
67−5	土器群9	甕	口径　16.5 (口縁部 1/5存)	①2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②橙褐色　③普通	頸部が「く」の字に曲がり複合口縁へと移行する．端部は丸くおさめ、突出部はわずかに下へ出る．口縁面には5条の沈線文が施される 風化著しく調整不明	口縁面の長さに対して原体が貝殻でない点など在地のものと異なるよう
67−6	土器群9	甕	口径　16.8 (口縁部 1/6存)	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石など)含む　②外面暗橙褐色、内面黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は出ない．口縁面には貝殻腹縁による15条の擬凹線文が施される 内外面ともナデ調整	外面煤付着
67−7	土器群9	甕	口径　29.0 (口縁部 1/6存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②淡黄褐色　③普通	厚手でしまりのない複合口縁で、端部は肥厚し丸くおさめ、突出部は出ない．口縁面には4条の沈線文が施される 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
67−8	土器群9	甕	口径　14.3 (口縁部 1/7存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は引きのばし始め、突出部は出ない．口縁面には貝殻腹縁により擬凹線文を施したのちに、横消しにより4条+1条のみ残っている 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	外面煤付着
67−9	土器群9	甕	口径　15.0 (口縁部 1/5存)	①1mm大の砂粒子（石英など）含む ②黄褐色　③普通	直立した複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は出ない．内面頸部から口縁部にかけてかなり削ってある．全体的にシャープなつくり．口縁面には1条のみ沈線がめぐる 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	外面頸部に煤付着痕がわずかに観察される

挿図番号	出土地点	器　種	法　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	備　考
67−10	土器群9	甕	口径　15.7 （口縁部 1/5存）	①1mm以下の砂粒子（橙色粒子・石英・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は外に曲げて丸くおさめ、突出部は膨らみわずかに出る．口縁面には沈線が観察される 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
67−11	土器群9	甕	口径　16.8 （口縁部 1/3存）	①1mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部引きのばし止め、突出部はわずかに下に出る 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
67−12	土器群9	甕	口径　15.0 （口縁部 1/5存）	①微砂粒子（橙色粒子・石英・角閃石など）含む　②黄褐色　③普通	複合口縁で、端部はまっすぐに引きのばし、突出部は膨らみ斜め下に出る 風化著しく調整不明	
67−13	土器群9	甕	口径　14.0 （口縁部ほぼ完）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部はのばし、突出部は横へ出る．胴部はゆるやかに張る 口縁部内外面ともナデ調整、他は風化著しく調整不明	
67−14	土器群9	甕	口径　16.9 最大径　19.3 （1/3存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・橙色粒子・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	中央部が屈曲した複合口縁で、端部はのばして止め、突出部はわずかに出る．胴部はあまり張らない 外面最大径以上及び内面頸部以上ナデ調整、外面最大径以下風化著しいがハケ目が観察できる．内面頸部以下ケズリ調整	外面最大径以下に煤付着．内面下位に黒斑あり
68−1	土器群9	甕	口径　15.8 （口縁部 1/8存）	①1mm以下の砂粒子（橙色粒子・石英・角閃石など）含む　②黄褐色　③普通	複合口縁で、端部はのばして止め、突出部はわずかに出る 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
68−2	土器群9	甕	口径　16.2 （口縁部 1/6存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②外面黒色、内面暗黄褐色　③普通	複合口縁で、端部はのばして止め、突出部はわずかに斜め下方へ出る 内外面ともナデ調整	外面おこげ付着
68−3	土器群9	甕	口径　18.3 （口縁部 1/7存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②外面にぶい黄褐色、内面にぶい橙褐色　③普通	複合口縁で、端部はのばして止め、突出部はわずかに斜め下方に出る 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
68−4	土器群9	甕	口径　17.2 （口縁部ほぼ完）	①微砂粒子（石英・角閃石・橙色粒子など）含む　②淡黄褐色　③普通	複合口縁で端部は丸くおさめ、突出部は膨らんでわずかに出る 内面頸部以下ケズリ調整と思われる．他内外面ともナデ調整	
68−5	土器群9	甕	口径　17.7 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石・長石など）含む　②にぶい橙褐色　③普通	かなり外反した複合口縁で、端部は外へ引きのばし、突出部は横へ出る 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
68−6	土器群9	甕	口径　16.1 （口縁部 1/5存）	①1mm以下の砂粒子(石英・橙色粒子・角閃石・長石など）含む　②暗黄褐色　③普通	下半が削られて上半が膨れたようになった複合口縁で、端部はのばして止め突出部は斜め下に出る 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
68−7	土器群9	甕	口径　20.0 最大径　22.2 （口縁部 1/3存）	①1mm大の砂粒子（橙色粒子・石英・角閃石など）多く含む　②淡黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は引きのばし、突出部は斜め下に出る．肩部に平行沈線文と波状文が観察される 口縁部外面ナデ調整、内面頸部以下ケズリ調整、他は風化著しく調整不明	
68−8	土器群9	甕	口径　17.0 （口縁部 1/6存）	①微砂粒子（石英・角閃石・長石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は引きのばし、突出部はわずかに下に出す 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	口縁部外面に黒斑あり
68−9	土器群9	甕	口径　18.7 （口縁部 1/7存）	①1mm以下の砂粒子（石英など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は引きのばし、突出部は斜め下方へ出す 内外面ともナデ調整	口縁部外面に煤付着
68−10	土器群9	甕	口径　21.1 （口縁部 1/5存）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石・長石・橙色粒子など）含む　②にぶい黄橙褐色　③普通	かなり外反した複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は膨らませわずかに斜め下に出す 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	口縁部外面に黒斑あり
68−11	土器群9	甕	口径　22.2 （口縁部 1/6存）	①1〜2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は膨らんだのち丸くおさめ、突出部は下に出る．肩部に多条の平行沈線文が施される 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
68−12	土器群9	甕	口径　27.0 （口縁部 1/4存）	①1〜2mm大の砂粒子（石英・橙色粒子・角閃石など）含む　②黄褐色　③普通	厚手の複合口縁で、端部は丸くおさめ突出部は膨らませて横に出す．胴は張る 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整で、特に口縁部内面は丁寧	
69−1	土器群9	甕	口径　15.4 （口縁部 1/3存）	①1mm以下の砂粒子（石英・橙色粒子・角閃石など）含む　②黄褐色　③普通	複合口縁で、端部はわずかに外に曲げて終え、突出部は斜め下に引き出す．肩部には波長の短い波状文が施される 口縁部内外面ナデ調整、外面胴部ハケ目調整、内面頸部以下ケズリ調整	
69−2	土器群9	甕	口径　17.4 最大径　24.0 （口縁部 1/2存）	①1mm大の砂粒子（石英・角閃石・長石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	厚手の複合口縁で、端部は外に曲げ丸くおさめ、突出部は斜め下に引き出す．内面頸部に縦方向に指押さえをして頸部をのばしているので、壺の分類に入るかもしれない 口縁部内外面ナデ調整、外面胴部ハケ目調整、内面胴部丁寧な規則的ケズリ調整	
69−3	土器群9	甕	口径　17.5 （口縁部 1/3存）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は外に曲げてわずかに平坦面をつくり、突出部は横へ出る 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
69−4	土器群9	胴　部	（胴部破片）	①2mm大の砂粒子(石英・橙色粒子・長石など）含み、緻密　②淡橙褐色　③普通	貝殻腹縁により、間に平行沈線文を施して2段に分け、各々柳葉れ文を施す 内外面とも風化著しく調整不明	
69−5	土器群9	底　部	底径　4.3 （底部完形）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②暗黄褐色　③普通	小さいがしっかりした平底で、シャープな立ち上がりをみせる 外面ミガキ調整、底面まわりヨコナデ調整．底面には板目が残る．内面ナデ調整	
69−6	土器群9	底　部	底径　5.0 （底部完形）	①1mm以下の砂粒子（石英・橙色粒子・角閃石など）含む　②外面黒色〜にぶい黄褐色、内面黄褐色　③普通	小さいがしっかりした平底で、膨らみをもたせて立ち上がる 外面ハケ目調整、底面ナデ調整、内面風化著しく調整不明	外面に黒斑及び煤付着
69−7	土器群9	底　部	底径　3.0 （底部完形）	①1mm以下の砂粒子（石英・橙色粒子・角閃石など）含む　②暗黄褐色　③普通	最も小さい平底で、まだ稜線は明瞭に残っている．底部内面には中央に指頭圧痕が2ケ並んである 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	

挿図番号	出土地点	器　種	法　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	備　考
69−8	土器群9	底　部	底径　5.2 (底部ほぼ完)	①1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	底径の割に器壁の薄い平底で、稜線もあまい 外面ナデ調整、内面風化著しく調整不明	
69−9	土器群9	底　部	底径　5.2 (底部 1/4存)	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石・橙色粒子・長石など)含む　②淡黄褐色　③普通	薄手で稜線があまく、丸底系の底部である 外面ナデ調整、内面風化著しく調整不明	67-1と同一個体の可能性あり
69−10	土器群9	低 脚 坏	底径　7.5 (脚部完形)	①微砂粒子（角閃石・石英など）含む ②黄褐色　③普通	坏部からまっすぐに移行し、少し厚くなって裾広がりとなるが、端部は再び内側へふんばる 内外面ともナデ調整と思われる．特に坏部内面は丁寧	
69−11	土器群9	注口土器	注口径　1.8 (注口部完)	①1〜2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む　②黒褐色　③普通	小型で厚みのある湾曲した注口部 荒いナデ調整	
70−1	土器群9	高　坏	口径　19.2 (口縁部 1/3存)	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石・長石など）含む　②外面黒灰色〜淡黄橙褐色、内面橙褐色　③普通	深い立ち上がりの体部から、段をつくって口縁部に移行する坏部が2段になったものである．接合方法は充填法と思われるが刺突孔がない 風化著しく調整不明	口縁部外面に黒斑あり
70−2	土器群9	高　坏	口径　26.3 (口縁部 1/7存)	①微砂粒子（石英・角閃など）少し含む ②にぶい黄褐色　③普通	丸みのある体部からゆるやかな段をもち口縁部に移行する 内外面ともナデ調整、特に内面は丁寧	
70−3	土器群9	高　坏	口径　22.0 (口縁部 1/6存)	①1〜3mm大の砂粒子（石英・橙色粒子・角閃石・長石など）多く含み、粗　②灰白色 ③普通	接合部は粘土を詰め込んでかなり重量のあるどっしりとした脚部で、丸みのある坏部へと移行する 坏部内外面ともナデ調整．脚部内面ケズリ調整、外面風化著しく調整不明	
70−4	土器群9	高　坏	接合部径　4.7 (接合部跡ほぼ完)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・橙褐色粒子・角閃石・長石など）含み、やや緻密 ②淡橙褐色　③普通	接合方法は円盤充填法である．坏部は丸みのある立ち上がりを呈す 内面に放射状のハケ目の痕跡あり．他は風化著しく調整不明	70-5と同一個体の可能性あり
70−5	土器群9	高　坏	接合部径　4.4 (接合部ほぼ完)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	外面縦方向のミガキの痕跡あり．内面ケズリ調整	70-4と同一個体の可能性あり
70−6	土器群9	高　坏	底径　17.1 (脚部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・金雲母など)含む　②にぶい黄褐色　③普通	平べったく立ち上がる脚部 外面ミガキ調整、内面ナデのち部分的にハケ目調整	
70−7	土器群9	鼓形器台	受部突出部径 11.2 (受部 1/3存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む　②暗橙褐色　③普通	厚手の重量感あるもので、受部の立ち上がりが直線的である 外面受部ナデ調整、筒部ハケ目のちナデ調整、内面受部多方向の少々荒いナデ調整、筒部ケズリ調整	
70−8	土器群9	鼓形器台	口径　18.5 (受部 1/3存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・橙色粒子など)含む　②にぶい黄褐色　③普通	口縁端部は横へ引きのばし丸くおさめる．受部外面には貝殻腹縁による多条の沈線文が施され、部分的に擦消されている 外面ナデ調整、内面ケズリのちナデ調整	
70−9	土器群9	鼓形器台	口径　21.5 器高　14.6 底径　19.0 (3/4以上存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	口縁及び脚端部はそれぞれ横へ引きのばし丸くおさめる．受部外面にはクシ状工具による多条の沈線文が施される 外面及び口縁端部、脚端部ナデ調整．内面受部ケズリのち丁寧なナデ調整、脚部ケズリ調整	外面一側縁に黒斑あり
70−10	土器群9	鼓形器台	口径　19.0 (口縁部 1/9存)	①1mm大の砂粒子(石英など）多く含む ②にぶい黄橙褐色　③普通	厚手で少々粗雑な感じで、受部の立ち上がりは低い 風化著しく調整不明	
70−11	土器群9	鼓形器台	筒部径　9.6 (筒部 1/3存)	①1mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	厚手のもので、受部と脚部の突出部の差が著しい．脚部外面にクシ状工具による多条の沈線文が施される 外面ナデ調整．内面受部多方向のナデ調整、脚部ケズリ調整	筒部に薄い黒斑あり
70−12	土器群9	鼓形器台	口径　22.6 (口縁部 1/6存)	①1mm大の砂粒子(石英・橙色粒子・角閃石・長石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	深めの受部で、端部はまっすぐにのばして丸くおさめる 外面ナデ調整．内面端部ナデ調整、体部ハケ目のちナデ調整	
72−1	土器群10	壺	口径　15.5 (口縁部 1/3存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など）含む ②暗黄褐色　③普通	内傾した短めの複合口縁で、端部は外へ曲げ引きのばし、突出部は真横に引き出す 外面及び内面口縁部ナデ調整、頸部ナデ、指押さえ調整、胴部ケズリ調整	
72−2	土器群10	甕	(口縁部破片)	①1mm大の砂粒子(石英・角閃石など）多く含む　②淡黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部斜め下へ膨ませて出す．口縁部には貝殻腹縁による13条の擬凹線文が施されているが、擦消しにより浅くなっている 内外面ともナデ調整	
72−3	土器群10	甕	口径　15.4 (口縁部 1/7存)	①1mm大の砂粒子(石英・角閃石・長石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で端部はのばし、突出部は斜め下へわずかに出る 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
72−4	土器群10	甕	口径　15.0 (口縁部 1/7存)	①1mm大の砂粒子(石英・長石など）含む ②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で端部はのばし、突出部は横に引き出す 外面及び内面口縁部ナデ調整、頸部以下風化著しく調整不明	
72−5	土器群10	甕	口径　22.0 (口縁部 1/10存)	①1mm以下の砂粒子(石英など）含む ②淡黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は外へ曲げ平坦面をつくりかけて丸くおさめ、突出部は横へ引き出す 内外面ともナデ調整	
72−6	土器群10	甕	口径　15.2 (口縁部 1/6存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい橙褐色　③やや良好	複合口縁で、端部は外に曲げわずかに平坦面をもつ．突出部は斜め下に引き出す．肩部に多条の平行沈線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、胴部ケズリ調整	
72−7	土器群10	高　坏	脚柱部径　4.8 (脚柱部完)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい暗黄褐色 ③普通	接合方法は円盤充填法で、まっすぐにのびた脚柱部から裾は欠損しているため形状不明 坏部内外面とも丁寧なナデ調整．脚部外面ミガキ調整、内面ケズリ調整	
72−8	土器群10	高　坏	(坏部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石・橙色粒子など）含む　②外面淡黄褐色、内面にぶい黄橙褐色　③普通	接合方法は円盤充填法 内面ミガキ調整と思われる．外面風化著しく調整不明	
72−9	土器群10	低 脚 坏	接合部径　5.0 (接合部完)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など）含む　②淡黄褐色　③普通	幅のある脚部で、端部は欠損しているため形状不明 風化著しく調整不明	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	形態・手法の特徴	備考
73−1	土器群10	胴部	(胴部破片)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②黄褐色 ③普通	張り出した肩部に、上下に9条の平行沈線文により区画し、中央に同じ原体による9条の波状文を施し、それを中心に羽状文を施す．貝殻の施文具と思われる 外面風化著しいが、文様以上ナデ調整、胴部下半ハケ目が観察される．内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	出土状況及び胎土、調整方向などより73−2と同一個体の可能性あり
73−2	土器群10	胴部〜底部	底径 4.7 （底部完形）	①1〜2mm大の砂粒子（石英など）含む．ただし底部は小粒子で胴部上へかけて粒子が荒くなる ②にぶい黄褐色 ③普通	焼成後に穿孔した底部から胴部があまり張らずに立ち上がる 外面風化著しいが、所々にハケ目が観察される．内面ケズリ調整	胴部に黒斑あり．73−1と同一個体の可能性あり
73−3	土器群10	鼓形器台	筒部径 10.2 （筒部 1/4存）	①1mm大の砂粒子(石英・長石など)及び若干の3mm大の砂粒子含む ②にぶい暗黄褐色 ③普通	受部の鋭い突出部に比べ、脚部は丸みのある突出部 外面及び内面受部、筒部はナデ調整、脚部ケズリ調整	
75−1	土器群11	壺	口径 18.9 （口縁部 1/4存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	内傾する複合口縁で、端部は平坦面を有し、突出部は横に引き出す．頸部にはヘラ描きによる綾杉文を施す 外面及び内面口縁部ナデ調整、頸部風化著しいが指押さえの痕跡観察できる．胴部ケズリ調整	
75−2	土器群11	甕	口径 17.6 （口縁部 1/11存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②暗橙褐色 ③普通	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は上下に肥厚した面に2条の凹線文を施す．頸部には圧痕文帯あり 内外面ともナデ調整	
75−3	土器群11	甕	口径 18.0 （口縁部 1/12存）	①微砂粒子（石英・長石など）含む ②にぶい暗黄褐色 ③やや良好	全体にシャープなつくり．複合口縁で端部はのばし、突出部は横へ鋭く出る、張りのない肩部には、ヘラ状工具による連続「ノ」の字の刺突文を2段施す 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下外面ヨコハケ目調整、内面ケズリ調整	
75−4	土器群11	甕	口径 18.6 （口縁部 1/4存）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部はわずかに平坦面をつくり、突出部は膨らみ横へ出す．なだらかな肩部には平行沈線文、波状文がわずかながら観察できる 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下外面ハケ目調整、内面ケズリ調整	
75−5	土器群11	甕	（口縁部破片）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む ②にぶい暗黄褐色 ③普通	大型のものと思われる．複合口縁で、端部は外に曲げて平坦面をつくり、突出部は斜め下へ引き出す 内外面ともナデ調整	
75−6	土器群11	高坏	接合部径 3.8 （接合部完）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石・長石など）含む ②淡黄褐色 ③普通	接合方法は円盤充塡法．まっすぐな脚部から裾広がりとなる．欠損のため形状は不明 外面風化著しいが、ハケ目が観察される．内面しぼりケズリ調整	
75−7	土器群11	鼓形器台	口径 24.6 （口縁部 1/6存）	①1mm大の砂粒子(石英・長石・金雲母など) 含む ②外面灰黄褐色、内面黄褐色 ③普通	器壁は薄いが口縁端部は丸く厚くなる 外面風化著しく調整不明．内面端部ナデ調整、受部ケズリのち丁寧なナデ調整	
75−8	土器群11	鼓形器台	底径 18.2 （脚部 1/6存）	①1mm大の砂粒子(石英・長石など）含む ②淡黄褐色 ③普通	脚突出部下は薄くなるが、端部に向かうにつれ厚くなる 外面及び内面裾部ナデ調整、脚部ケズリ調整	
75−9	土器群11	鉢	口径 16.4 （口縁部 1/7存）	①微砂粒子(角閃石・石英・長石など)含む ②にぶい黄橙褐色 ③普通	頸部をなだらかに外反させ、水平に端部をおさめる．胴部は厚みをもたせて丸づくり 外面風化著しく調整不明、内面丁寧なナデ調整	
75−10	土器群11	鉢	口径 14.8 （口縁部 1/3存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	厚みのある土器で、口縁端部はしっかりした平坦面をもち頸部には刻目を施した鍔状の貼付突帯文がめぐり、胴部はかなり開く上下逆にすると甑形土器のようであるが、内外面ともナデ調整のため鉢とした	
77−1	土器群12	壺	口径 16.4 （口縁部 1/5存）	①1〜2mm大の砂粒子（石英・長石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	厚手の複合口縁で、端部は太めながらまっすぐにのび、突出部は丸い 内外面とも頸部以上ナデ調整、外面頸部以下ハケ目調整、内面頸部以下ケズリ調整	
77−2	土器群12	壺	口径 13.8 （口縁部 1/5存）	①微砂粒子（石英・金雲母・長石・角閃石など）含む ②淡黄褐色 ③普通	全体にシャープな感じのもの．複合口縁で端部はまっすぐひきのばし、突出部は斜め下に出す 外面及び内面口縁部ナデ調整、頸部上半ナデ調整、下半指ナデ、胴部ケズリ調整	
77−3	土器群12	甕	口径 14.8 （口縁部 1/9存）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	厚手の複合口縁で、端部はわずかに肥厚させ丸くおさめ、突出部はわずかに下に出る．口縁面は貝殻腹縁による7条の擬凹線文を施したのち上位は擦消しを行っている 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
77−4	土器群12	甕	口径 14.8 （口縁部 1/8存）	①1mm大の砂粒子（石英・橙色粒子・角閃石など）含む ②にぶい黄橙褐色 ③普通	短めの複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下にわずかに出る．口縁面に沈線の形跡があるが風化が著しく不明．肩部にも平行沈線文が観察される 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
77−5	土器群12	甕	口径 17.6 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石・橙色粒子など）含む ②にぶい黄橙褐色 ③普通	頸部がきつく屈折した複合口縁で、端部は引きのばし、突出部はわずかに横へ出る．口縁面はナデによる凸部や沈線がみられる 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
77−6	土器群12	甕	口径 13.8 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②暗黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部はまっすぐ引きのばし、突出部は横に引き出す．口縁面はナデによる凹凸あり．肩部に平行沈線らしき痕跡あるが、図化するまでに至らない 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
77−7	土器群12	甕	口径 17.2 （口縁部 1/7存）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部はのばし、突出部は下に引き出す．口縁面はナデによる凹凸あり 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	口縁端部に黒斑あり
77−8	土器群12	甕	口径 25.2 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石など）含む ②淡黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部はのばして止め、突出部は横へ出る 内外面とも風化著しく調整不明	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	形態・手法の特徴	備考
78−1	土器群12	甕	(口縁部破片)	①微砂粒子（石英・角閃石など）含む ②明黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部はのばして止め、突出部斜め下に出る 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
78−2	土器群12	甕	口径 18.6 （口縁部 1/8存）	①微砂粒子（石英・長石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下へ出てるよう 内外面ともナデ調整	
78−3	土器群12	甕	(口縁部破片)	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は横へ出る 内外面ともナデ調整	
78−4	土器群12	甕	口径 15.0 （口縁部 1/10存）	①微砂粒子（石英・角閃石・金雲母など）含む ②灰オリーブ色 ③普通	複合口縁で、端部は外に曲げて平坦面をつくり、突出部は剥落している 内外面ともナデ調整	
78−5	土器群12	甕	口径 23.0 （口縁部 1/6存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石など）含む ②灰オリーブ色 ③普通	厚手の複合口縁で、端部は平坦ぎみに丸くおさめ、突出部は斜め下に出す．肩部には貝殻腹縁による平行沈線文が施される 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
78−6	土器群12	甕	口径 16.2 （口縁部 1/7存）	①1mm大の砂粒子（長石・石英など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は外に曲げて平坦面をつくり、突出部はあまく横に出る 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
78−7	土器群12	甕	口径 23.8 （口縁部 1/7存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は外に曲げて丸みはあるが平坦面をつくり、突出部はシャープに横へ出る 内面口縁部ナデ調整、他は風化著しく調整不明	口縁部黒斑あり
78−8	土器群12	甕	口径 14.4 （口縁部 1/8存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は外に曲げて平坦面をつくり、突出部は斜め下に強く引き出す 内外面ともナデ調整	
78−9	土器群12	甕	口径 16.9 （口縁部 1/3存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は外に曲げて平坦面をわずかにつくり、突出部は横に出る．肩部に平行沈線の痕跡あり 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下外面縦方向のハケ目調整、内面ケズリ調整	
78−10	土器群12	胴部	胴部最大径 18.1 （胴部破片）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・金雲母など）含む ②灰オリーブ色 ③普通	やや薄手の胴張りスタイルである．肩部に貝殻腹縁と思われる工具により連続「ノ」の字状の刺突文が施される 外面鮮明なハケ目調整、内面ケズリ調整	外面黒斑あり．胴部最大径以下煤付着
78−11	土器群12	底部	底径 3.0 （底部完）	①1mm大の砂粒子（石英・長石など）含む ②暗黄褐色 ③普通	稜線の不明瞭な平底の痕跡を残しただけの底部 外面ナデのちハケ目調整、内面ケズリ調整、底部まわりに指頭圧痕	
78−12	土器群12	高坏	(坏部破片)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石など）含む ②外面灰黄褐色、内面にぶい黄橙色 ③普通	外面体部がわずかに膨らみを残し、あとは直線的 内外面とも丁寧なミガキ調整と思われる	
78−13	土器群12	高坏	底径 14.4 （底部 1/3存）	①1mm大の砂粒子（石英・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	裾広がりの脚部で、端部は断面矩形 外面脚柱部ハケ目調整、脚部ミガキ調整、裾部ナデ調整．内面脚柱部ケズリ調整、脚部ナデ調整	
79−1	土器群12	大型壺	口径 24.0 最大径 32.2 器高 38.5 （1/3存）	①1〜4mm大の砂粒子（石英・橙色粒子、小豆色粒子など）多く含む．砂粒子は角のとれた丸いものがほとんど ②橙褐色 ③普通	胴上半分と下半部の間をわずかな接点においてつなぎ合わせたもの．底部は完全な丸底で、張りは弱いが球形の胴部と短い頸部と短い直立した複合口縁をもつ．頸部には斜格子文を施した貼付突帯文がめぐり口縁部縁辺にも斜格子文を施す．口縁面は上下2本の工具をスタンプ的に用いた組合せ波状文を施す．全体に厚ぼったく口縁端部は平坦面をつくる 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下ハケ目（内面は荒い、外面は下半部にいくほど荒い）調整	防長地方からの搬入品
79−2	土器群12	大型甕	口径 34.5 最大径 41.9 現存器高 48.5 （2/3存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②黄褐色 ③普通	口径と頸部径の差があまりない口の開いた複合口縁の倒卵形を呈する大型のものである．口縁端部は外に曲げ、しっかりした平坦面をつくり、突出部は横に引き出す．肩部には浅く幅広の沈線を2条施して区画し、その中に貝殻による羽状文を施す 外面口縁部〜頸部ナデ調整、肩部区画内浅いヨコハケ目調整、以下縦方向のハケ目調整、内面口縁部〜頸部ナデ調整、胴部ケズリのちヨコハケ目調整、胴部下位ケズリ調整	口縁部1ヶ所のみ黒斑あり
80−1	土器群12	鼓形器台	筒部径 10.0 （筒部 1/3存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石など）含む ②にぶい黄橙褐色 ③普通	厚手で重量感あるもの 外面及び内面受部、筒部ナデ調整、脚部ケズリ調整	
80−2	土器群12	鼓形器台	筒部径 15.9 （筒部 1/5存）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石・金雲母など）含む ②淡黄橙褐色 ③普通	厚手であるが、80-1ほど重量感はない 外面ナデ調整．内面受部ミガキ調整、筒部ケズリのちナデ調整、脚部ケズリ調整	
80−3	土器群12	鼓形器台	底径 29.0 （脚部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）多く含む ②淡黄橙褐色 ③普通	脚裾部は外広がりとなる 外面ナデ調整、内面脚部ケズリ調整、裾部ナデ調整、他は風化著しく調整不明	
80−4	土器群12	鼓形器台	筒部径 10.3 （筒部 1/8存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む ②淡黄橙褐色 ③普通	外面ナデ調整．内面受部ミガキ調整、筒部ナデ調整、脚部ケズリ調整	
80−5	土器群12	鼓形器台	(脚部破片)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む ②淡黄橙褐色 ③普通	裾広がりの裾部は脚部に比して厚手となる 外面及び内面裾部ナデ調整、脚部ケズリ調整	
80−6	土器群12	低脚坏	底径 4.6 （底部ほぼ完）	①微砂粒子（石英・角閃石・金雲母など）含む ②淡黄褐色 ③普通	小さくすっとのびた脚がつく 風化著しく調整不明	
82−1	土器群13	大型壺	(口縁部破片)	①1mm大の砂粒子（石英・長石など）含む ②淡黄褐色、断面灰色 ③普通	厚手で外反してのびる頸部から口縁部は断面「く」の字状に垂下し端部は丸くおさめる．垂下した面には4条の凹線文が施される 外面縦方向のハケ目調整．頸部はのちにナデ調整を行う．内面口縁屈折部ナデ調整、以下ヨコハケ目調整	
82−2	土器群13	甕	口径 17.4 胴部最大径 18.3 （口縁部ほぼ完）	①1mm大の砂粒子（石英・長石など）含む ②外面黒褐色〜暗黄褐色、内面黄橙褐色 ③普通	肩の張らない胴部から頸部がゆるい「く」の字状に屈折し口縁部はわずかに肥厚し、強いナデにより凹みがある 口縁部内外面ともナデ調整、外面頸部以下ハケ目調整、以外は風化著しく調整不明	

掲図番号	出土地点	器種	法量(cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	形態・手法の特徴	備考
82－3	土器群15	甕	口径 13.1 (口縁部 1/3存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・金雲母など）含む ②外黒褐色～暗黄褐色、内面暗黄褐色 ③普通	82-2と比べると胴に張りがあり、頸部に膨らみをもって至る口縁部は、上に引きのばすようにに肥厚する 口縁部内外面ともナデ調整、胴部外面ハケ目調整、内面ミガキ調整	
82－4	土器群13	壺	口径 18.4 胴部最大径 21.5 (口縁部 1/4存)	①1mm大の砂粒子（石英・角閃石・長石など）含む ②外黒褐色～暗黄褐色、内面暗黄褐色 ③普通	胴部中央に最大径があり、きつめの「く」の字状に屈折した頸部から口縁部は上に引きのばすように肥厚し、面には2条の沈線文を施す 内外面ともロ縁部～頸部ナデ調整、胴部ハケ目調整、内面頸部最大径以下ケズリ調整	外面煤付着
82－5	土器群13	壺	口径 16.9 胴部最大径 21.2 (口縁部 1/6存)	①1mm大の砂粒子(石英・長石など）含む ②成黄褐色 ③普通	胴部中央に最大径あり、球状を呈している。「く」の字状に屈折した頸部から口縁部に至り、上下に肥厚した面には5条の沈線文が施される。胴部最大径には、5～7点単位の刺点文が巡る 口縁部～頸部内外面ともナデ調整、外面丹念な文以上ハケ目調整、以下ミガキ調整、内面頸部付近ハケ目調整、以下ケズリ調整	外面黒斑あり
82－6	土器群13	甕	口径 15.0 (口縁部 1/7存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②褐橙色 ③普通	肩の張った胴部から大きく「く」の字状に屈折した単純口縁に移行する。端部は丸くおさめる 口縁部～頸部内外面ともナデ調整、胴部外面ハケ目調整、内面ナデ及びハケ目調整	土師器の可能性あり
82－7	土器群13	底 部	底径 8.2 (底部完)	①1mm大の砂粒子(石英・角閃石・長石・金雲母など）含む ②にぶい黄橙色 ③普通	底面に厚みのある平底 外面胴部とナデ調整、底面及び底部まわりナデ調整、内面ケズリのちナデ調整	
82－8	土器群13	底 部	底径 5.4 (底部完)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄橙色 ③普通	しっかりした平底 底面ナデ調整、外面ミガキ調整、内面底部ナデ調整、胴部ケズリ調整	
82－9	土器群13	底 部	底径 7.1 (底部完)	①1～3mm大の砂粒子（石英・長石など）多く含む ②外面黒褐色、内面暗黄褐色 ③普通	しっかりした平底 底面ナデ調整、外面ミガキ調整、内面ナデ調整	外面及び内面底部中央に黒斑あり
82－10	土器群13	杷 手	(把手部分)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石など）含む ②成黄褐色 ③普通	偏平で半円形の把手である。表面と外側面には各々4条と2条の刺線文が施されている。裏面は平らに仕上げてあるため、この把手は裏面を被覆に入らない方向で、土器に接合してあったと思われる 全面ナデ調整	
84－1	土器群14	壺	(口縁部破片)	①1mm大の砂粒子(石英・角閃石など）含む ②にぶい黄橙色 ③普通	外反してのびる頸部から水平に拡張した口縁部がのびる。口唇部には刻目が平坦面には斜格子文が施される。外面には現状で2条の刺目駆付突帯文をめぐらし、線状浮文を貼り付ける 外面及び内面口縁部ナデ調整、頸部ヘラ目調整	
84－2	土器群14	壺	口径 15.9 (口縁部 1/3存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）多く含む ②にぶい黄橙色 ③普通	直線的に立ち上がる頸部から強く外反して口縁部へと移行し、複合口縁部をとった内傾ぎみにつくる。口縁端面は平坦面をもち突出部はわずかに膨らむ。口縁面には4条の沈線文を施す 内外面ともナデ調整、ただし内面頸部以下はケズリ調整のように観察される	
84－3	土器群14	壺	口径 25.6 (口縁部 1/9存)	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石・長石など）含む ②にぶい黄橙色 ③普通	外反する頸部に口縁部が上下に肥厚して複合口縁をつくり、口縁面には5条の沈線文が施される 外面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整、内面口縁部ナデ調整、頸部ヘラ目調整、以下ケズリ調整と思われる	
84－4	土器群14	壺	口径 21.1 (頸部 1/7存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄橙色 ③普通	筒直して頸が張り、「く」の字状に立ち上がる頸部に、内面底縁のにのび、小さな複合口縁となる。口縁面は及んで3条の沈線文を施す 内外面とも頸部以上ナデ調整、頸部以下外面ヘラ目調整、内面ケズリ調整	
84－5	土器群14	壺	口径 11.1 最大径 12.8 (口縁部 1/5存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②黄灰褐色 ③普通	全体にボテッとした粗雑なつくり。口縁部は外面はゆるやかなカーブを描くが、内面は口縁部～頸部に明瞭な段をつくる 内面口縁部ナデ調整、頸部以下ケズリ調整。外面底に著しく調整不明	
84－6	土器群14	壺	口径 18.9 (口縁部 1/5存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄橙色 ③普通	複合口縁で端部は丸くおさめ突出部は出ない。口縁面はほぼ4条の刺線文を施したのち、施すて不明瞭にしている 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリのちナデ調整	
84－7	土器群14	壺	口径 14.0 (口縁部 1/3存)	①1mm大の砂粒子（石英・角閃石・長石など）含む ②成黄橙色 ③普通	複合口縁で端部は丸くおさめ、突出部は出ない。口縁面は貝殻腹縁による3条の刺目縁文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	外面頸部上半に煤付着痕跡できる
84－8	土器群14	壺	口径 19.0 (口縁部 1/10存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄橙色 ③普通	複合口縁で端部はおおかに肥厚させ丸くおさめ、突出部は出ない。口縁面は貝殻腹縁による7条の刺目縁文を施す 外面ナデ調整、内面口縁部ミガキ調整、頸部以下ケズリ調整	
84－9	土器群14	甕	口径 31.9 (口縁部 1/4存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）多く含む ②にぶい黄橙色 ③普通	大型の甕棺のため厚手の複合口縁で、端部肥厚して丸くおさめ、突出部は出ない。口縁面は貝殻腹縁による11条の刺目縁文があり、その原体の形に波曲している。頸部には口縁と同じ原体で6条の平行沈線文を施す 外面頸部以上ヨコナデ調整、以下斜め縦方向のナデ調整、内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
84－10	土器群14	壺	口径 22.3 (口縁部 1/3存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②暗黄橙褐色 ③普通	厚手の複合口縁で、端部はわずかに肥厚して丸くおさめ、突出部は下に出る。口縁面には貝殻腹縁による10条の刺目縁文が施される 外面ナデ調整、頸部に所々指頭に成ある、内面口縁部ナデ調整で4条の沈線あり、頸部以下ケズリ調整	
84－11	土器群14	壺	口径 28.5 (口縁部 1/8存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び長石の3～4mm大の砂粒子を含む ②暗黄褐色 ③普通	口縁部内面が直線的で外反した複合口縁で、端部は肥厚して丸くおさめ、突出部はわずかに横に出る。口縁面は貝殻腹縁による10条の刺目縁文が施される 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形態・手法の特徴	備考
84−12	土器群14	甕	口径　17.8 (口縁部 1/6存)	①1〜2mm大の砂粒子(石英・角閃石など)含む　②外面黒褐色､内面にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は横へ引き出す．口縁面には貝殻腹縁による15条の浅い擬凹線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	外面煤付着
84−13	土器群14	甕	口径　20.0 (口縁部 1/6存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は下に出る．口縁面は幅の狭い貝殻腹縁による15条の擬凹線文ののちに全体を撫でて薄く仕上げている 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
84−14	土器群14	甕	口径　15.6 (口縁部 1/6存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②暗黄褐色　③普通	形骸化したような複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は不明瞭である．口縁面には幅の狭い貝殻腹縁による擬凹線文ののち撫消しを行っている．全体にスリム．内面頸部は明瞭なつくり 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
85−1	土器群14	甕	口径　17.9 (口縁部 1/4存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）、及び若干の2mm大の砂粒子を含む　②にぶい黄褐色　③普通	口縁部を引きのばし始めた複合口縁で端部はのばして止め、突出部は下に出る．口縁面には擬凹線文を施したのちに全体を撫消してるため、所々に沈線文風に観察できる．頸部に約10条の平行沈線文が施される 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
85−2	土器群14	甕	口径　17.3 (口縁部 1/4存)	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	外反した複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部はあまく出ない．口縁面には貝殻腹縁による８条以上の擬凹線文を施したのちに中央部を撫消す 外面ナデ調整．内面頸部以上ミガキ調整、以下ケズリ調整	
85−3	土器群14	底部	底径　7.3 (底部 3/4存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗黄褐色　③普通	薄手だけれど、しっかりした平底 内面胴部ケズリ調整、他は風化著しく調整不明	
85−4	土器群14	底部	底径　3.2 (底部　完)	①1〜2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む　②外面暗黄橙褐色、内面黒色　③普通	小さな平底で、指押さえにより少々上げ底となっている 外面ハケ目調整、内面ケズリ調整	内面全体に黒褐色を呈するのは黒斑か
85−5	土器群14	高坏	口径　18.8 (坏部 1/5存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②黄橙褐色　③普通	薄い体部から単純に口縁部へと移行し、口縁部は厚手となり丸くおさめる 外面ナデ調整、内面ケズリのちナデ調整？	
85−6	土器群14	高坏	接合部径　5.7 (接合部　完)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄橙褐色　③普通	坏部と脚部の接合は粘土詰めにより、厚手でどっしりとした感じ 風化著しく調整不明	坏部内面に朱塗りの痕跡あり
85−7	土器群14	鼓形器台	口径　21.5 (受部 1/4存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・橙色粒子など）多く含み、やや緻密　②にぶい黄橙褐色　③普通	厚手のもので、口縁端部は平坦面をもつ 外面受部ミガキ調整、筒部ナデ調整、内面風化著しく調整不明	内外面とも朱塗りの痕跡あり
85−8	土器群14	鉢	口径　22.0 (口縁部 1/7存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗黄褐色　③普通	あまり厚くない体部から口縁部になると急に膨らみ厚みを増し、端部は丸くおさめる．全体に粗雑な感じ 内外面とも風化著しく調整不明	
85−9	土器群14	甑形土器の把手	(把手部分)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗黄褐色　③普通	縦長に本体に接合したもの．どっしりと厚手である 把手部ナデ調整、本体部分ハケ目調整	85-10と同一個体と思われる
85−10	土器群14	甑形土器	(一応) 底径　36.2 (底部 1/4存)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗黄褐色　③普通	安定感がよいので、残存部分を下へ置いた状態．平坦な端部からゆるやかに曲線を描いて体部へと続く 外面裾部4cm幅ナデ調整、体部ハケ目調整、内面風化著しいがケズリ調整と思われる	85-9と同一個体と思われる　内外面に黒斑あり
87−1	土器群15	短頸壺	口径　11.2 最大径　14.4 (口縁部 1/9存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石など）含む　②漆部分黒色、漆剥落部分オリーブ褐色、断面淡黄褐色　③普通	胴部中央が強く張り玉葱状を呈し、頸部は「く」の字状に屈折して口縁に至る．口縁部はわずかに下に肥厚する 口縁部内外面ともナデ調整、外面胴部ミガキ調整、内面胴部ハケ目調整	内外面に漆塗りが施してある
87−2	土器群15	甕	口径　17.4 最大径　22.1 器高　30.6 底径　5.3 (2/3 存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び若干の2〜3mm大の砂粒子含む　②淡黄褐色　③普通	全体的に裾すぼまりのプロポーションで、底部は小さく胴部中央よりやや上位に最大径あり．張りのない肩から頸部は「く」の字状に屈折して口縁部に至る．口縁部はわずかに上下に肥厚する．胴部最大径に５点単位の列点文あり、列点文を定位置に連続させるため最下位の点は工具をひきずる 外面胴部下半ミガキ調整．内面胴部上半ハケ目調整、下半ケズリ調整．他は風化著しく調整不明	
87−3	土器群15	甕	口径　20.6 最大径　23.9 (口縁部 1/4存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・金雲母など）及び若干の2〜3mm大の砂粒子含む　②黄橙褐色　③普通	肩の張らない球形の胴部で、頸部は「く」の字状に屈折し、口縁部が上向きに上下に肥厚し、面には２条の凹線文を施す．胴部最大径直下に５点単位の一応列点文としておくが、下位２列は完全にひきずっている 口縁部内外面ナデ調整、外面列点文以上ハケ目調整、以下ミガキ調整、内面胴部上半ハケ目のちミガキ調整、下半ケズリのちミガキ調整	
90−1	土器群16	壺	(口縁部破片)	①微砂粒子（石英など）含む　②オリーブ褐色　③普通	やや内傾した複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は横に強く引き出す 内面頸部以下は調整不明であるが、他内外面ともナデ調整	
90−2	土器群16	壺	口径　14.4 (口縁部 1/4存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②オリーブ褐色　③やや良好	複合口縁で、端部はわずかに外に曲げて平坦面をつくり、突出部は斜め下に出る 内面頸部より下はケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
90−3	土器群16	壺	口径　20.0 (頸部 1/6存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②オリーブ褐色　③やや良好	口縁部の長い複合口縁で、端部はわずかに外に曲げて平坦面をつくり、突出部は斜め下に出る 口縁部内外面ともナデ調整、頸部外面ハケ目調整、内面指押さえ、荒いナデ調整	
90−4	土器群16	壺	口径　19.6 (口縁部 1/7存)	①微砂粒子（石英・角閃石など）及び若干2〜3mm大の砂粒子含む　②暗オリーブ褐色　③普通	やや内傾した複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は横へ強く引き出す 内面頸部より下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	外面煤付着

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	形態・手法の特徴	備考
90−5	土器群16	壺	(口縁部破片)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②暗オリーブ褐色 ③普通	厚手の複合口縁で、端部わずかに内に曲げてしっかりした平坦面をつくり、突出部は横へ引き出す 外面及び内面口縁部上位ナデ調整、下位ハケ目状のヨコナデ調整、頸部以下丁寧なナデ調整	
90−6	土器群16	壺	口径 15.0 (口縁部 1/5存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②オリーブ褐色 ③普通	内傾して立ち上がる短い口縁部を有する複合口縁で、端部は外に曲げしっかりした平坦面をつくり、突出部は斜め上方に尻上がりとなる 内外面ともナデ調整	
90−7	土器群16	甕	口径 22.5 (口縁部 1/11存)	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石など）含む ②暗灰褐色 ③普通	肩の張らない鉢状のもので、頸部は湾曲して口縁部に至る。口縁部はわずかに肥厚して面をもつ 風化著しく調整不明	
90−8	土器群16	甕	口径 17.8 (口縁部 1/11存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②オリーブ褐色 ③普通	わりと厚手で短めの複合口縁で、端部は肥厚させ丸くおさめ、突出部は出ず中央部をくびれさすことによって強調している。頸部は強く「く」の字状に屈折させる 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
90−9	土器群16	甕	口径 19.2 (口縁部 1/8存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②黄橙褐色 ③普通	薄手の複合口縁で、端部は引きのばし突出部は斜め下に出る 内外面とも頸部以上ナデ調整、外面肩部貝殻原体によるヨコハケ目調整、内面頸部以外ケズリ調整	
90−10	土器群16	甕	口径 22.6 (口縁部 1/6存)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・角閃石・橙色粒子など）含む ②黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部はのばして止め、突出部は横へ出す。突出部に1条の沈線をめぐらす。肩部には6条の平行沈線文を施す 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
90−11	土器群16	甕	口径 13.6 (口縁部 1/8存)	①微砂粒子（角閃石・石英など）含む ②外面暗褐色、内面にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は外に曲げ平坦面をつくり、突出部は横に引き出す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下風化著しく調整不明	
90−12	土器群16	甕	口径 16.9 (口縁部 1/11存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗オリーブ褐色 ③普通	複合口縁で、端部は外に曲げ平坦面つくり、突出部は横に出る 内外面ともナデ調整	
90−13	土器群16	甕	口径 19.2 (頸部 1/7存)	①微砂粒子（石英・角閃石・金雲母など）含む ②暗オリーブ褐色 ③やや良好	複合口縁で、端部はわずかに外に曲げて平坦面をつくり、突出部は斜め下方に鋭く引き出す 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
90−14	土器群16	甕	口径 21.1 (口縁部 1/7存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む ②黄橙褐色 ③普通	複合口縁で、端部はわずかに肥厚して平坦面をつくり、突出部は横へ出る 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整、特に内面頸部は丁寧なナデ調整	
90−15	土器群16	甕	口径 23.5 (口縁部 1/12存)	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石など)含む ②外面黄橙褐色、内面黄茶褐色 ③普通	複合口縁で、端部は平坦面をつくり、突出部は膨らませて横に出す 内外面ともナデ調整	
91−1	土器群16	胴部	(胴部破片)	①1〜3mm大の砂粒子（石英・長石など）含む ②外面暗黄褐色、内面にぶい橙色 ③普通	6×7cm、厚さ1〜1.5cmの破片で、内外面ともハケ目調整であるが、特に外面は貝殻原体のような工具により丁寧な鮮明なハケ目調整を行っている。 粘土紐積み上げは内傾法である	
91−2	土器群16	底部	底径 4.6 (底部 1/3存)	①1mm以下の砂粒子（長石・石英・角閃石など）含む ②暗黄褐色 ③普通	平底 内外面ともナデ調整、内面底部に指頭圧痕あり	外面黒斑のためか黒色系である
91−3	土器群16	底部	底径 5.4 (底部 1/4存)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②オリーブ褐色 ③普通	平底 外面ミガキ調整、内面ケズリ調整	
91−4	土器群16	底部	底径 4.7 (底部 1/6存)	①微砂粒子（石英・角閃石など）及び若干の1mm大の石英粒含む ②オリーブ褐色 ③普通	底部の稜線があまく、わずかに平底の痕跡を残すタイプ 外面ハケ目のちナデ調整、底面板目痕が残る。内面ケズリ調整及び指頭圧痕あり	外面煤付着
91−5	土器群16	大型高坏?	底径 27.7 (脚部 1/12存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②オリーブ褐色 ③普通	脚裾部が肥厚し面をもって反り上がる。面には2条の凹線状の沈線を施す 外面及び内面裾部ナデ調整、脚部ケズリ調整	脚端部黒斑あり 器台脚部の可能性あり
91−6	土器群16	高坏	接合部径 4.3 (接合部 完)	①微砂粒子(石英・角閃石・長石など)含む ②オリーブ褐色 ③普通	接合法は円盤充填法である 内面丁寧なミガキ調整、外面風化著しく調整不明	
91−7	土器群16	高坏	接合部径 3.3 (接合部 完)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など）含む ②オリーブ褐色 ③普通	接合法は円盤充填法、刺突痕が径0.7cmもある大きめのもの 外面ナデ調整、内面ミガキ調整	
91−8	土器群16	高坏	脚柱部径 5.3〜7.2 (脚柱部 1/3存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②オリーブ褐色 ③普通	外面鮮明なハケ目調整、内面風化著しく調整不明	
91−9	土器群16	高坏	底径 16.0 (脚部 1/10存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面黒褐色、内面オリーブ褐色 ③普通	脚端部は単純に断面矩形で終える 外面ミガキ調整、内面ハケ目調整	外面黒斑あり
91−10	土器群16	脚台部	底径 12.8 (脚台部 1/5存)	①1mm大及び微砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②黄橙褐色 ③普通	どっしりと裾広がりにふんばる脚台部である。円盤充填法であるのか、坏部底に刺突孔らしき痕跡観察できる 脚部内外面ともナデ調整、他は風化著しく調整不明	
91−11	土器群16	鼓形器台	筒部径 11.9 (1/5存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②黄橙褐色 ③普通	少々厚手で器壁の傾斜の少ない段階のものである 外面及び内面受部・筒部ナデ調整、特に受部内面は丁寧である。脚部内面ケズリ調整	外面黒斑あり
91−12	土器群16	鼓形器台	筒部径 11.4 (筒部 1/6存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②オリーブ褐色 ③普通	91−11とほぼ同じ傾斜角をしている 外面ナデ調整、内面脚部ケズリ調整、受部風化著しく調整不明	
91−13	土器群16	鼓形器台	筒部径 12.8 (筒部 1/13存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など）含む ②オリーブ褐色 ③普通	大ぶりのもの 外面ナデ調整、内面受部ミガキ調整、筒部ケズリ調整	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	形態・手法の特徴	備考
91−14	土器群16	鼓形器台	筒部径 9.6 （筒部 1/2存）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石・長石など）含む ②淡黄褐色～オリーブ褐色 ③普通	少々小ぶりで、体部が膨らみをもって立ち上がる 外面及び内面受部・筒部はナデ調整、特に受部内面は丁寧に行っている。脚部内面ケズリ調整	
91−15	土器群16	低脚坏	底径 4.8 （脚柱部 ほぼ完）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄橙褐色 ③普通	脚柱部から外反した裾部をもつもの 外面かなり細いミガキ調整、脚部内面ナデ調整、坏部内面丁寧なナデ調整	
91−16	土器群16	低脚坏	底径 5.1 （脚部 完）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石・長石・金雲母など）含む ②オリーブ褐色 ③普通	脚柱部から外反した裾部をもち坏部は平坦ぎみに立ち上がっていく 外面及び脚部内面ナデ調整、坏部内面ミガキ調整	
91−17	土器群16	低脚坏	底径 5.5 （脚部 完）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②橙褐色 ③普通	脚柱部がやや長く直立し、外反した裾部をもつ 内外面ともナデ調整	
91−18	土器群16	鉢	口径 20.2 （口縁部 1/9存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石など）含む ②暗褐色 ③やや良好	深めの体部に口縁部は外に平坦面をもち曲がる。平坦面にはわずかに凹みをつける 外面荒めのナデ調整、内面丁寧なナデ調整	高坏の坏部の可能性あり
93−1	土器群17	特殊土器	口径 25.7 （口縁部 1/3存）	①1mm以下の砂粒子（角閃石・金雲母・長石・石英など）含む ②外面にぶい褐色、内面赤褐色 ③やや良好	複合口縁で、端部は外に折り曲げて丸みのある平坦面をもち、下にのびた突出部は外へ反り上がる。口縁面は湾曲して8条の凹線文を施す。口縁部から頸部は急傾斜する 口縁部内外面ナデ調整.外面頸部放射状のハケ目調整.内面口縁部平坦面ヨコミガキ調整。頸部へ落ち込む部分ヨコハケ目調整	吉備からの搬入品 内面に朱塗り痕残る
93−2	土器群17	壺	口径 15.3 （口縁部 1/5存）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石・長石など）含む ②淡黄褐色 ③普通	直立ぎみで長めの複合口縁で、端部は引きのばし、突出部は斜め下に引き出す 内外面ともナデ調整	
93−3	土器群17	壺	口径 12.8 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石・長石など）含む ②淡黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部わずかに外に曲げおさめている。突出部は斜め下に出る。口縁面には内外から指で押さえた痕跡あり。肩部には平行沈線文がわずかに観察される 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
93−4	土器群17	甕	口径 15.6 （口縁部 1/5存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）多く含む ②にぶい黄橙褐色 ③普通	なだらかな胴部から頸部「く」の字状に屈折し、口縁部は上下に肥厚して面をもち、2条の沈線文を施す 口縁部内外面ともナデ調整、他は風化著しく調整不明	
93−5	土器群17	甕	（口縁部破片）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②淡灰黄褐色 ③普通	なだらかな胴部から頸部「く」の字状に曲げ口縁部は上下に肥厚して面をもち、3条の凹線文を施す 外面頸部にハケ目残し、他はナデ調整。内面口縁部ナデ調整だが、ハケ目痕も観察できる。頸部以下ケズリ調整	
93−6	土器群17	甕	（口縁部破片）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石など）含む ②淡黄褐色 ③普通	ゆるやかな頸部から短い複合口縁に至る。口縁は強いナデにより凹みをつけ突出部が強調される 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
93−7	土器群17	甕	口径 18.8 （口縁部 1/9存）	①1mm大の砂粒子（石英・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は出ない。口縁面には貝殻腹縁による7～8条の擬凹線文を施す 外面ナデ調整。内面頸部以上ミガキのような丁寧なナデ調整、以下ケズリ調整	
93−8	土器群17	甕	口径 18.3 （口縁部 1/8存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	少々厚手の複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は下に出る。口縁面には5～6条の凹線文が施される 外面ナデ調整。内面頸部以上丁寧なナデ調整、以下ケズリのち細かいミガキ調整	
93−9	土器群17	甕	口径 15.0 底径 2.8 （口縁部 3/4存 底部 完）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄橙褐色 ③普通	複合口縁で、端部は引きのばし、突出部は膨らみをもつ程度。口縁面は貝殻腹縁による9～10条の擬凹線文を施し中央部を擦消す。底部は小さな平底で底面を指押さえで上げ底ぎみに仕上げている 外面頸部以上ナデ調整。胴部下位ハケ目のちナデ調整。内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	口縁部と底部は同一個体。胴部は復元できなかった
93−10	土器群17	甕	頸部径 8.7 （頸部 ほぼ完）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石・長石・金雲母など）含む ②淡黄褐色 ③普通	薄手の複合口縁で、端部の形状は欠損して不明だが、突出部はわずかに斜め下に出る。肩部には2条の平行沈線文を3段に施文し、その間に「ノ」の字状の両開きの刺突文も連続して施している 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整と思われる	
93−11	土器群17	甕	口径 14.6 復元器高 21.7 底径 2.0 （口縁部 1/4存 底部 4/5存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）多く含む ②淡黄褐色 ③やや不良	薄手の複合口縁で、端部はまっすぐ引きのばし、突出部はわずかに斜め下に出る。肩部には多条の平行沈線文、その下に区画するためのはっきりした沈線、その下に10条単位の波状文、その下に区画するためのはっきりした2条の沈線が施される。底部は稜線が不明瞭な小さな平底である。 口縁部内外面ともナデ調整。内面頸部以下ケズリ調整。他風化著しく調整不明	
93−12	土器群17	甕	口径 15.0 （口縁部 1/4存）	①1mm大の砂粒子（石英・角閃石・金雲母など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は引きのばして止め突出部は斜め下に膨らませながら出す 口縁部内外面ともナデ調整。外面胴部に縦・横方向のハケ目痕が観察できる 内面頸部以下ケズリ調整	口縁部外面にわずかな黒斑観察される
93−13	土器群17	甕	口径 12.2 最大径 14.8 （口縁部 1/5存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②黄褐色 ③普通	胴張りですづまりのプロポーションを呈する複合口縁で、端部はわずかに外に曲げて引きのばし、突出部は斜め下に若干出る。肩部には、4条の凹線により区画し、その中央間帯に貝殻原体による両側きの刺突文が施される 口縁部内外面ともナデ調整。外面胴部最大径直上、部分的にハケ目調整、他はナデ調整。内面頸部以下ケズリ調整	胴部最大径以下煤付着
94−1	土器群17	甕	口径 14.8 （口縁部 1/7存）	①微砂粒子（石英・角閃石・金雲母など）含む ②淡黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部はのばして止め、突出部は斜め下に出す 内外面ともナデ調整	
94−2	土器群17	甕	口径 20.9 （口縁部 1/6存）	①1mm大の砂粒子（石英など）含む ②淡黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は引きのばし、突出部は膨らみ斜め下に出る。口縁面中央に沈線が1条入る 内外面とも風化著しく調整不明	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	形態・手法の特徴	備考
94−3	土器群17	甕	口径 19.0 （口縁部 1/8存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む ②黄橙褐色 ③普通	やや直立ぎみの複合口縁で、端部はのばし、突出部は鋭く斜め下に出る．突出部上に2条の沈線が施される 内外面ともナデ調整	
94−4	土器群17	甕	口径 15.9 （口縁部 2/3存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部はのばして止め、突出部はわずかに斜め下に出る 頸部から肩部にかけて平行沈線状のヨコハケ目が観察される．内面頸部以下ケズリ調整と思われるが、方向不明．他内外面ともナデ調整	
94−5	土器群17	甕	口径 13.6 （口縁部ほぼ完）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部はのばして止め、突出部はわずかに横へ意識している 内外面ともナデ調整	
94−6	土器群17	甕	口径 15.4 （口縁部 1/4存）	①1mm以下の微砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②灰黄褐色 ③普通	胴張りで寸づまりのプロポーションの複合口縁で、端部はまっすぐ引きのばし、突出部は斜め下に出る．肩部には1条の沈線を施し、そこから斜め下に「ノ」の字状の連続の刺突文を施す 口縁部内外面ナデ調整．内面頸部以下ケズリ調整．他は風化著しく調整不明	胴部最大径以下に煤付着
94−7	土器群17	甕	口径 18.3 （口縁部 1/4存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②暗黄橙褐色 ③普通	複合口縁で、端部若干外に曲げてのばし、突出部は斜め下に出す．肩部には同じ原体により平行沈線文、波状文、平行沈線文の順に施文する 口縁部内外面ともナデ調整．外面胴部ナデまたはハケ目調整．内面頸部以下ケズリ調整	
94−8	土器群17	甕	口径 18.5 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②灰黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は外に曲げてわずかに平坦面をもち、突出部は斜め下に出る．肩部に「ノ」の字状の連続刺突文を施す 口縁部内外面ともナデ調整．内面頸部以下ケズリ調整．外面胴部一部にハケ目が観察されるが、他は風化著しい	
94−9	土器群17	甕	口径 22.8 （口縁部 1/8存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び若干の1～2mm大の砂粒子も含む ②黄橙褐色 ③普通	やや厚手の複合口縁で、端部は外に曲げて丸くおさめ、突出部は横に出る 外面及び内面口縁部ナデ調整、頸部ハケ目のちナデ調整で指頭圧痕あり、頸部以下ケズリ調整	
94−10	土器群17	甕	口径 23.0 （口縁部 1/8存）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石・橙色粒子・金雲母など）含む ②外面黄橙褐色、内面淡黄橙褐色 ③普通	やや厚手の複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出す．肩部に貝殻腹縁による平行沈線文あり 外面頸部以上ナデ調整、以下ハケ目が観察される．内面風化著しく調整不明	
94−11	土器群17	甕	口径 21.8 （口縁部 1/6存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②淡黄橙褐色 ③普通	やや厚手の複合口縁で、端部丸くおさめ、突出部膨らませて横に出す 外面及び内面口縁部ナデ調整、他風化著しく調整不明	
94−12	土器群17	甕	口径 20.5 （口縁部 1/4存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②淡黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部をのばし、突出部は斜め下に出る 内外面ともナデ調整	
94−13	土器群17	甕	口径 26.2 （口縁部 1/8存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部はまっすぐ引きのばし、突出部は横に出す 口縁部内外面ともナデ調整．外面胴部平行沈線文状のヨコハケ目調整．内面頸部以下方向不明だがケズリ調整	
95−1	土器群17	甕	口径 24.0 （口縁部 1/13存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②黄橙褐色 ③やや良好	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に強く引き出す 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
95−2	土器群17	甕	口径 20.5 （口縁部 1/2存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄橙褐色 ③普通	複合口縁で、端部はのばして止め、突出部は斜め下に出す．肩部には貝殻による逆「ノ」の字の連続刺突文を施す 口縁部内外面ナデ調整．外面胴部上半は風化著しく調整不明だが、下半はハケ目調整．内面頸部以下ケズリ調整	
95−3	土器群17	甕	口径 17.6 （口縁部 1/5存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む ②にぶい黄橙褐色 ③普通	複合口縁で、端部は強く外に曲げ丸くおさめる．突出部は斜め下に出す 内外面ともナデ調整	口縁部煤付着
95−4	土器群17	甕	口径 33.8 （口縁部 1/10存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・橙色粒子・金雲母など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部外に曲げわずかに平坦面をつくり、突出部は斜め下に強く引き出す 内外面ともナデ調整	
95−5	土器群17	甕	口径 23.6 （口縁部 1/7存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②淡黄橙褐色 ③普通	複合口縁で、端部は外へ曲げ平坦面をつくる．突出部は斜め下に出る 内面頸部以下は風化著しく調整不明だが、他は内外面ともナデ調整	
95−6	土器群17	底部	底径 6.6 （底部 1/3存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石など）含む ②外面黒色、内面灰褐色 ③普通	上げ底ぎみの平底 底面板目残り、ナデ調整．外面指押さえのナデ調整．内面ナデ調整	外面の黒色は黒斑と思われる
95−7	土器群17	底部	底径 6.5 （底部 1/2存）	①1mm大の砂粒子（長石・石英・角閃石など）多く含む ②底面及び内面暗灰色、外面黄褐色 ③普通	平底 内外面とも指押さえのナデ調整のため凹凸あり	底面及び内面の暗灰色は黒斑と思われる
95−8	土器群17	底部	底径 3.5 （底部 完）	①微砂粒子（石英・角閃石など）含む ②暗黄橙褐色 ③普通	小さめの平底で、稜線がややあまい 外面ナデ調整．内面ケズリ調整、所々指頭圧痕あり	内外面に黒斑、外面に煤付着
95−9	土器群17	底部	底径 3.5 （底部 完）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）多く含む ②にぶい黄橙褐色 ③普通	稜線のあまい平底の痕跡をわずかにとどめている底部、内面底部は指押さえで凹ませている 底面ナデ調整、外面ハケ目調整、内面ケズリ調整	外面煤付着
95−10	土器群17	底部	底径 2.2 （底部 完）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②暗茶褐色 ③普通	稜線のあまい小さな平底、内面底部は指押さえで凹ませている 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	
96−1	土器群17	高坏	口径 15.8 （口縁部 1/4存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び若干の1mm大の砂粒子含む ②にぶい黄褐色 ③普通	坏体部が湾曲して立ち上がり、口縁部は屈折し内傾して移行し、端部は平坦面をもつ．口縁面は6条の凹線文を施し、凸部に1列おきに刻目を施す 外面ミガキ調整．内面口縁部ナデ調整、体部ミガキ調整	外面に黒斑あり

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	形態・手法の特徴	備考
96−2	土器群17	脚部	(脚裾部破片)	①1〜2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②外面にぶい黄褐色、内面灰黄褐色 ③普通	脚部から裾部にかけて屈折し、端部は肥厚して複合化し、脚部及び端部面に凹線文を施す 外面及び内面脚部ナデ調整、脚裾部ケズリ調整	内面に黒斑あり
96−3	土器群17	高坏	口径 23.9 （口縁部 1/3存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	内面にゆるい段をもつ坏部で、外面は変化なくスムーズに立ち上がるため、口縁部が厚くなる 内外面ともミガキ調整	
96−4	土器群17	高坏	口径 24.8 （口縁部 1/6存）	①微砂粒子（石英・角閃石・金雲母など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	内面にゆるい段をもつ坏部で、外面は変化なくスム‥ズに立ち上がるため、口縁部が厚くなる 内外面ともミガキ調整	
96−5	土器群17	高坏	口径 22.2 (脚柱部下半 欠損)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	坏部内面の稜線があまくなった段階のもので、段から口縁部が開きぎみに外傾する。外面も同様に変化するため厚みに変化はない。坏部底に刺突孔が確認できないが、接合方法は円盤充填法であろう 坏部内外面ともミガキ調整、脚部外面ハケ目調整、内面ケズリ調整	
96−6	土器群17	高坏	口径 24.8 （接合部欠損）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	坏部の稜線から口縁部が開きぎみに外傾する。外面も同様に変化するため厚みに変化はない 内外面とも風化著しいがミガキ調整と思われる	
96−7	土器群17	高坏	接合部径 4.4 （接合部 ほぼ完）	①微砂粒子（石英・長石・金雲母など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	接合方法は円盤充填法 坏部及び脚柱部外面ミガキ調整、内面ケズリのちナデ調整	
96−8	土器群17	高坏	脚柱部径 4.1 （接合部 完）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②黄褐色 ③普通	接合方法は円盤充填法で、坏部から直立ぎみに脚部がのびる 坏部風化著しく調整不明。脚部外面ミガキ調整、内面ケズリ調整	
96−9	土器群17	低脚高坏	脚柱部最小径 4.1	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む ②黄橙褐色 ③普通	丸く深みのある体部に脚部は早くから裾広きとなるため、脚部の長さは短めのものと思われる。接合法は円盤充填法と思われるが、刺突孔はなし。 坏部及び脚部外面細かいミガキ調整。脚柱部の屈折部分にハケ目を入れる。坏部内面丁寧なナデ調整。脚部内面ナデ調整？	朱塗りの痕跡が観察される
97−1	土器群17	鼓形器台	底径 18.0 （脚部 1/6存）	①1mm大の砂粒子(石英・長石など)少し含む ②にぶい黄褐色 ③普通	小型で、脚部長の短いものである。脚部面には貝殻腹縁による擬凹線文が施され、のち撫消しを行っている。外面及び内面裾部ナデ調整。脚部内面ケズリ調整	
97−2	土器群17	鼓形器台	口径 23.5 （受部 2/5存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石・橙色粒子など）多く含む ②黄褐色 ③普通	受部長がまだ長めで突出部はあまり強く出ず、端部は丸くおさめている 外面ナデ調整。内面は風化著しいが、口縁部はナデ調整、体部はミガキ調整と思われる	
97−3	土器群17	鼓形器台	口径 25.0 （受部 1/5存）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など）多く含む ②黄褐色 ③普通	受部長がまだ長めで端部は外に曲げ丸くおさめる 外面及び内面口縁端部・筒部ナデ調整、受部ミガキ調整、脚部ケズリ調整	
97−4	土器群17	鼓形器台	口径 21.3 器高 14.4 底径 19.6 (1/2存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・など）含む ②黄褐色 ③普通	少々長めの筒部で、下位に屈曲する部分あり。両端部は折り曲げてのばし平坦面をつくる 外面及び内面両端部・筒部ナデ調整。受部内面体部ミガキ調整。脚部内面体部ケズリ調整	脚端部に一部黒斑あり
97−5	土器群17	鼓形器台	口径 22.5 器高 14.0 底径 20.0 (1/3存)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・橙色粒子・金雲母など）多くまた若干の2mm大の砂粒子含む ②黄褐色 ③普通	やや開いた受部と脚部で、端部がそれぞれ外にのびる 外面及び内面脚裾部ナデ調整、脚部ケズリ調整。他風化著しく調整不明	
97−6	土器群17	鼓形器台	口径 22.4 器高 13.3 底径 20.0 (2/3存)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・橙色粒子・金雲母など）多く含む ②灰黄褐色 ③普通	全体の径の割に器高の低いもので、端部は外に曲げてのばし、脚部突出面にヘラ描きによる連続逆「ノ」の字状の刺突文を施す 外面及び内面脚裾部ナデ調整、脚部ケズリ調整、他風化著しく調整不明	1ヶ所両端部に黒斑あり
97−7	土器群17	鼓形器台	口径 18.7 器高 12.1 底径 15.2 (2/3存)	①微砂粒子（石英・角閃石・長石など）及び若干の1mm大の砂粒子含む ②淡黄褐色 ③普通	97−2〜6に比べて薄手で小型化したものである。直立ぎみのプロポーションで、口縁端部は外に曲げて丸くおさめている 外面ナデ調整。脚部内面ケズリ調整。他風化著しく調整不明	
97−8	土器群17	鼓形器台	口径 18.5 器高 11.1 底径 16.3 （ほぼ完形）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・橙色粒子など）多く含む ②淡黄橙褐色 ③普通	97−7同様やや小型のタイプであるが、97−7より口縁の広がったもので、端部を外に曲げてのばしている 内面口縁端部・脚裾部ナデ調整、脚部ケズリ調整。他風化著しく調整不明	黒斑なし
97−9	土器群17	低脚坏	口径 9.5 器高 3.8 底径 4.4 (2/3存)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び若干の1mm大の砂粒子含む ②灰黄褐色 ③普通	全体に小ぶりの作りで口径に対して底径は大きい 外面ナデ調整。坏部内面ミガキ調整と思われる。脚部内面風化著しく調整不明	
100−1	SK32	壺	口径 16.2 （口縁部破片）	①微砂粒子（石英・長石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	広口壺の口縁部で、口縁部に環状で3条の凹線文を施し、端面は上下に肥厚して凹線文を1条入れる 内外面ともナデ調整	
100−2	SK32	甕	（口縁部破片）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）若干含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、口縁部上半が外傾し、端部は丸くおさめ、突出部は出ない。口縁面には貝殻腹縁による9〜10条の擬凹線文が施される 内外面ともナデ調整。特に内面は丁寧にされており、上半が外傾することから、他の器種の可能性もあり	
100−3	SK32	甕	口径 19.6 （口縁部 1/5存）	①微砂粒子（石英・長石など）多く含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は平坦面をもち、突出部は横に出す 内面頸部以下ケズリ調整、他は内外面ともナデ調整	
100−4	SK32	高坏	口径 21.7 （坏部 1/9存）	①微砂粒子（石英・角閃石など）含む ②黄褐色 ③普通	体部にわずかに丸みをもち変化点あって口縁部に至る 外面ミガキ調整、内面風化著しく調整不明	

挿図番号	出土地点	器　種	法　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形態・手法の特徴	備　考
100−5	ＳＫ32	高　坏	口径　23.7 （坏部 1/12存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）若干含む　②にぶい黄褐色　③普通	体部は丸みを帯び、口縁部は変化点から強く外反する 外面丁寧な縦方向のナデ調整、内面ミガキ調整	外面口縁部黒斑あるいは煤付着
100−6	ＳＫ32	鼓形器台	口径　20.2 （受部 1/12存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面暗橙褐色、内面にぶい黄褐色 ③普通	端部が裾開きとなった受部である 外面及び内面口縁部ナデ調整、体部ケズリのちナデ調整	外面部分的に煤付着
102−1	ＳＫ33	無頸壺	（口縁部破片）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②黒褐色　③普通	端部を外に曲げ平坦面をもつ 外面口縁部付近ナデ調整、以下ハケ目調整、内面ハケ目調整	
102−2	ＳＫ33	無頸壺	口径　12.0 （1/3存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②暗黄橙褐色　③普通	薄手の丸味のある体部で、口縁部は現状で2ヶ所、片口状に端部を引き出している 外面ミガキ調整と思われる．内面口縁部ナデ調整、以下ケズリ調整	
102−3	ＳＫ33	甕	（口縁部破片）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②外面茶褐色、内面黄褐色 ③普通	短い複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は出ない．口縁面には4条の凹線文が施される．頸部が長めだが一応甕にしておく 外面ナデ調整．内面頸部以上丁寧なナデ調整、以下ケズリ調整	
102−4	ＳＫ33	甕	口径　17.0 （口縁部 1/7存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部わずかに外に曲げて丸くおさめ、突出部は斜め下にしっかり出る 内外面ともナデ調整	外面頸部煤付着
102−5	ＳＫ33	甕	口径　17.0 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②暗黄茶褐色　③普通	複合口縁で、端部に平坦面あり、突出部は斜め下に出す．口縁面には数条の沈線が消されずに残っている 内外面ともナデ調整	外面頸部煤付着
102−6	ＳＫ33	甕	（口縁部破片）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②暗黄茶褐色　③普通	複合口縁で、端部に平坦面をもち、突出部は斜め下に出る．口縁面には数条の沈線が消されずに残っている 内外面ともナデ調整	
102−7	ＳＫ33	甕	口径　13.2 （口縁部 1/5存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は平坦面をもち、突出部は斜め下に出る 外面及び内面口縁部ナデ調整、頸部以下風化著しく調整不明	口縁部外面黒斑あり
102−8	ＳＫ33	甕	口径　17.3 （口縁部 1/5存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・橙色粒子・角閃石など）含む　②黄褐色　③普通	複合口縁で、端部はわずかに平坦ぎみでおさめ、突出部は斜め下に出る 内外面ともナデ調整	
102−9	ＳＫ33	甕	口径　17.5 （口縁部 1/3存）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部はわずかに外に曲げ平坦面をつくり、突出部は横に少し出る．肩部には20～21条の平行沈線文が施される 口縁部内外面ともナデ調整、外面胴部ハケ目調整、内面頸部以下ケズリ調整	外面口縁部黒斑あり 胴部内面におこげ付着
102−10	ＳＫ33	甕	口径　17.3 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②外面にぶい黄橙色、内面黄茶褐色　③普通	複合口縁で、端部は平坦面をもち、突出部は横に出る 内外面ともナデ調整	
102−11	ＳＫ33	甕	口径　19.3 （口縁部 1/5存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部はわずかに外に曲げ平坦面をつくり、突出部は横に強く出す．肩部に平行沈線文らしきものあり 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整と思われるが方向不明	外面煤付着
102−12	ＳＫ33	甕	口径　19.0 （口縁部 1/8存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）多く含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は外に曲げて平坦面をつくり、突出部は膨らませて横へ出す．この行為により口縁面が湾曲しているようになる 内外面ともナデ調整	
102−13	ＳＫ33	甕	口径　19.6 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）多く、また若干の2～3mm大の砂粒子含む　②にぶい灰黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は外に曲げわずかに平坦面をつくり、突出部は横へ強く引き出す．肩部には12条以上の平行沈線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
102−14	ＳＫ33	甕	口径　25.5 （口縁部 1/4存）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む ②淡灰黄褐色　③普通	複合口縁で、端部はやや内寄りで平坦面をつくり、突出部は横へ引き出す 外面ナデ調整．内面口縁部上半はナデ調整確認できるが、以下は風化著しく調整不明	口縁部一部に黒斑あり
102−15	ＳＫ33	底　部	（底部破片）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②橙褐色　③普通	残存部は少ないけれど、平底である 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	
102−16	ＳＫ33	底　部	底径　7.6 （底部 1/2存）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む　②外面灰黄褐色、内面暗黄茶褐色 ③普通	薄手で、稜線はあまいが底面の広いタイプの擬平底である 外面風化著しく調整不明、内面ケズリ調整	内面のみ黒い付着物あり
106−1	ＳＫ34	甕	口径　13.5 （口縁部 1/8存）	①微砂粒子（石英・角閃石など）含む ②にぶい橙褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部はわずかに出る 内外面ともナデ調整	
106−2	ＳＫ35	甕	（口縁部破片）	①1mm以下の砂粒子(石英など)少し含む ②にぶい黄褐色　③普通	頸部から湾曲しつつ口縁部に至り、口縁は上に肥厚して面をもち2条の凹線文を施す 内外面ともナデ調整	
106−3	ＳＫ35	鼓形器台	（脚部破片）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	脚部から裾部へ器壁を厚くする 外面及び内面裾部ナデ調整、脚部ケズリ調整	
106−4	ＳＫ36	甕	口径　28.5 （口縁部 1/16存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②灰黄褐色　③普通	張りのない肩部から頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は上下に肥厚して面をもち、2条の凹線文を施す．頸部には指頭圧痕文帯をめぐらす 内外面とも口縁部ナデ調整．外面胴部ハケ目調整？内面胴部ケズリのちナデ調整	
106−5	ＳＫ37	甕	口径　16.0 （口縁部 1/4存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）やや多く含む　②橙灰褐色　③普通	張りのない肩部から、頸部はややきつく「く」の字状に屈折し、口縁部は上下に肥厚し、面をもつ．口縁面には2条の沈線文が施される 頸部以上内外面ともナデ調整．胴部外面ハケ目調整、内面ハケ目のちナデ調整	

挿図番号	出土地点	器　種	法　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形　態・手　法　の　特　徴	備　考
106−6	SK37	甕	(口縁部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る 内外面ともナデ調整	
106−7	SK37	鼓形器台	底径 18.8 (脚部 1/4存)	①1～2mm大の砂粒子(石英・角閃石など)含む ②黄褐色 ③普通	縮約され小ぶりのもので、内面裾部が明瞭に脚部のケズリ調整によって区別されている 外面風化著しいがナデ調整と思われる。内面裾部ナデ調整	
106−8	SK37	鉢	口径 12.2 (1/5存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	小さなボール状のものである。風化著しいが、口縁部に数条の沈線観察される 内外面とも風化著しく調整不明	
109−1	SK38	甕	口径 16.9 (口縁部 1/16存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい橙褐色 ③やや良好	なだらかな肩部から頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至る。口縁は上下に肥厚して面をもち、3条の凹線文を施す。肩部には4条の平行した沈線を施す 内外面ともナデ調整	
109−2	SK38	甕	口径 14.0 (口縁部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は膨らんで丸くおさめ、突出部は出ない。口縁面には貝殻腹縁による5～6条の擬凹線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
109−3	SK38	甕	口径 13.2 (口縁部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石など)やや多く含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部丸くおさめ、突出部は下に出す。口縁面には貝殻腹縁により約10条の擬凹線文を施したのち撫消しにより上部を消している 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
109−4	SK38	甕	口径 21.6 (口縁部 1/5存)	①1～2mm大の砂粒子(石英・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	厚手の複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部はわずかに下に出る。口縁面には貝殻腹縁による10～11条の擬凹線文が施される 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下風化著しく調整不明	
109−5	SK38	甕	口径 22.0 (口縁部 1/3存)	①1～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る。口縁面には貝殻腹縁による約14条の擬凹線文を施したのち撫消しを行っている。肩部には貝殻腹縁による刺突文を連続に施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
109−6	SK38	甕	口径 18.6 (口縁部 1/2存)	①1～2mm大の砂粒子(石英・橙色粒子・金雲母など)多く含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部膨らませて丸くおさめ、突出部はわずかに下に出す。口縁面には何条かの擬凹線文を施したのち撫消しを行っている。頸部には同じ原体による数条の沈線文を施している 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
109−7	SK38	甕	口径 15.8 (口縁部 1/5存)	①1～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面暗黄茶褐色、内面にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る。口縁面には浅い擬凹線文が施されたのち撫消しにより、荒いナデ調整状にみうけられる。肩部も同様である 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	所々煤付着
109−8	SK38	甕	口径 21.4 (口縁部 1/6存)	①1～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る。口縁面には単位の小さな貝殻腹縁による擬凹線文を施し、撫消しを行っている。頸部付近にも同じ原体により同じ施文を行っている 外面ナデ調整。内面頸部以下ケズリ調整、以上風化著しく調整不明	
109−9	SK38	甕	口径 21.0 (口縁部 1/10存)	①1mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	内面口縁部上位から屈折し外傾する複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部はわずかに膨らむ程度。口縁面には貝殻腹縁による約14条の擬凹線文のち上位に撫消しを行っている 外面及び内面頸部以上ナデ調整、特に上位外傾面は丁寧に行う、以下ケズリ調整	
109−10	SK38	蓋	口径 12.5 器高 7.5 (2/3存)	①1～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	2孔のあるつまみ付で、口縁端部は複合口縁状である。外面つまみ部・口縁部はナデ調整、体部指押さえ及びミガキ調整、体部裾丁寧なナデ調整。内面つまみ・体部ケズリ調整	
112−1	SK39	甕	口径 31.0 (口縁部 1/10存)	①1mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗橙褐色 ③普通	なだらかな肩部から頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部に至る。口縁は上下に肥厚して面をもち、3条の凹線文を施す。頸部にはしっかりした指頭圧痕文帯をめぐらす 口縁部内外面ともまた内面頸部ナデ調整、外面胴部ハケ目調整、内面胴部ハケ目のちナデ調整	口縁端部～内面にかけて部分的に黒斑あり
112−2	SK39	壺	口径 22.5 (口縁部 1/8存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	頸部に口縁部を接合したもので、接合部に刺突痕がめぐっているが、接合時のものか。口縁部は上下に肥厚して面をもち3条の凹線文と縦方向に刻目を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下風化著しく調整不明	
112−3	SK39	高　坏	口径 18.4 (坏部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	やや湾曲して立ち上がる体部に内傾した口縁部へと移行する。口縁端部はしっかりした平坦面をもち口縁面には5条の凹線文を施す。脚部に凹線文が観察される 口縁部内外面ともナデ調整。外面体部裾ヨコミガキのちハケ目調整、体部放射状のミガキ調整。内面体部放射状の擦目のように荒いハケ目調整	
112−4	SK40	甕	口径 17.0 (口縁部 1/8存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	頸部から口縁部までがやや長めで、口縁は上に肥厚し、2条の凹線文を施す 内外面ともナデ調整	
112−5	SK40	甕	口径 16.6 (口縁部 1/11存)	①微砂粒子(石英など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	口縁部は上下に湾曲して肥厚し、浅い3条の沈線文を施す 内外面ともナデ調整	
112−6	SK40	底　部	底径 6.8 (底部 1/5存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面にぶい黄橙褐色、内面にぶい黄褐色 ③普通	平底 外面ナデ調整。内面底部指頭圧痕あり、ナデ調整	
112−7	SK40	底　部	底径 5.6 (底部 完)	①1mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	平底、薄手の器壁をもつもの 内面ケズリ調整、外面風化著しく調整不明	外面煤付着
112−8	SK40	高　坏	口径 17.0 (口縁部 1/4存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黄橙褐色 ③普通	湾曲して立ち上がる体部から内傾した口縁部に移行する。口縁端部はしっかりした平坦面をもち1条の沈線を施す。口縁面には4条の凹線文を施す 外面丁寧なナデ調整、内面風化著しく調整不明	